

徳島県文化財調査概報

昭和 57 年度

(1982)

徳島県教育委員会

序

本書は、徳島県教育委員会が昭和57年度に実施した埋蔵文化財調査概報であります。

昭和57年度には、吉野川北岸農業水利事業に伴う調査、鳴門教育大学建設に伴う調査、徳島大学蔵本団地体育施設建設に伴う調査、県立国府養護学校増築に伴う調査、日本赤十字社徳島県支部建設に伴う調査、丈六寺庫裏建設に伴う調査も実施されましたが、いずれも膨大な資料であるため、現在整理中であります。これらの報告については次年度以降に刊行することいたします。したがって、本書には「大毛島地区(仮称)」の発掘調査の概要のみを記録することいたしました。

なお、本調査にあたって多大な御協力と御援助を賜った関係機関、特に本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所、並びに地元住民の方々に対し、厚く御礼申し上げます。

昭和60年1月10日

徳島県教育委員会

教育長 中 田 清 春

「大鳴門橋」架橋関連工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査

^{おおげ}大毛島第 8 ・ 9 ・ 10 ・ 15 ・ 21 ・ 27 ・ 28 ・

29 ・ 30 ・ 31区遺跡（仮称）

例 言

- 1 本書は大鳴門架橋に関連した国道28号線改良工事に伴う発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は、本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所の要請をうけて徳島県教育委員会文化課が実施した。
- 3 本書に収録した大毛島第8・9・10・15・21・27・28・29・30・31区遺跡（仮称）の発掘調査は、昭和57年4月1日から昭和58年3月25日までの間に行なった。
- 4 収録した資料の実測・製図は調査員が分担した。撮影は主として松永雅行が担当した。
- 5 本書で用いた絶対高は標高をあらわす。方位はすべて磁北である。
- 6 土色の判定に際しては、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1967に、陶磁器などの遺物の色調判定にあたっては、色彩企画センター編『配色色名帖』によった。
- 7 fig.1 は建設省国土地理院発行の5万分の1の地形図（鳴門海峡図幅）を転載したものである。fig.5 は同じく2万5千分の1の地形図（撫養^{もや}図幅、鳴門海峡図幅）を転載したものである。
- 8 今回の一連の調査において、徳島県文化財保護審議会の森浩一委員（同志社大学）、秋山泰委員（鳴門市史編纂室）のほか、三原昇氏（鳴門市史編纂室）、本田昇氏（鳴門市史編纂室）、鳴門市史編纂室からは御指導と御教示を受け、立花博、島巡賢二、菅原康夫（県教育委員会文化課）の各氏には調査を通じて協力をえた。また、調査全般にわたって本州四国連絡橋公団鳴門工事事務所にお世話になり、誌上をもって御礼申し上げる次第であります。
- 9 調査は以下の組織で行なった。

調査主体 徳島県教育委員会文化課

調査総括 松永住美（文化課社会教育主事）

調査事務 清水博（文化課庶務係長）、大八木芳子（文化課主事）

調査担当 松永雅行（文化課研修生）

調査員 河野雄次、高橋正則（文化課文化財調査員）、野々村拓也、高岡裕、秋山浩一、白井滋、増井進、多田寿一（文化課文化財調査員・当時）

作業員 市川栄二、大岩正幸、山本実、中長偉臣、武富雄、谷辰一、野上幸夫、浜徹、島田一夫、廣田富太郎、川口重治、南谷俊朗、山田勉、木下明、鹿島季子、中長米子、北野清子、高橋八千代、今井喜美子、豊田フミ子、新開玉枝、益井タカ子、大頭君江、福居恵美子、藤井千賀子、斎藤房子、大崎孝仔、岡本増吉、桜木宗一、美保重昭、居月隆次、泉敦、益岡秀樹

10 本書の作成にあたり，遺物整理，図面整理等については以下の組織で行なった。

整理業務担当 松永雅行（文化課研修生）

調査員 河野雄次，高橋正則，高岡裕，益岡秀樹，佐藤健，中西俊治，西谷俊則（文化課文化財調査員）

整理作業員 豊田真子，瀬川真弓，佐藤緑

また，整理にあたり，以下の方々の御協力，教示を得た。三好富士夫氏（刀剣研師），菅原康夫氏（文化課主事），福家清司氏（文化課社会教育主事），大宮恵美子氏（文化課文化財調査員）。

11 本書は下記の9名が分担執筆した。それぞれの分担は文末に記した。

松永雅行 河野雄次 高橋正則 高岡裕 益岡秀樹 佐藤健

中西俊治 西谷俊則 野々村拓也

本文目次

I 遺跡の位置と環境

1 歴史的環境	1
2 自然環境	4
3 文献からみた大毛島	8

II 調査に至る経緯と経過

1 調査に至る経緯	16
2 調査日誌抄	18

III 調査概要

1 第8・9・10・15調査区	
(1) 位置と環境	21
(2) 層序	21
(3) 遺構と遺物	25
(4) 小結	27
2 第21調査区	
(1) 位置と環境	28
(2) 層序	28
(3) 遺構	31
(4) 遺物	47
(5) 小結	122

3	第27・28調査区	
(1)	位置と環境	124
(2)	層序	125
(3)	遺構と遺物	125
(4)	小結	130
4	第29調査区	
(1)	位置と環境	131
(2)	層序	131
(3)	遺構と遺物	131
(4)	小結	136
5	第30・31調査区	
(1)	位置と環境	139
(2)	層序	139
(3)	遺構と遺物	142
(4)	小結	145
6	附 載	
	第21調査区出土の徳利刻字と文献に見える造酒屋との 関係について	146

挿 図 目 次

fig. 1	大毛島周辺の主要遺跡 5万分の1 (鳴門海峡図幅)	2
fig. 2	大毛島周辺の地質.....	5
fig. 3	大毛島低地の地形断面位置.....	6
fig. 4	大毛島低地の地形断面.....	7
fig. 5	調査区的位置 2万5千分の1 (撫養・鳴門海峡図幅)	16
fig. 6	第8・9調査区地形図.....	22
fig. 7	第10調査区地形図.....	23
fig. 8	第15調査区地形図.....	24
fig. 9	第8調査区層序柱状図.....	25
fig. 10	第9調査区層序柱状図.....	25
fig. 11	第10調査区層序柱状図.....	25
fig. 12	第15調査区層序柱状図.....	25
fig. 13	第10調査区石垣状遺構A	26
fig. 14	第10調査区石垣状遺構B	26
fig. 15	第15調査区出土陶器.....	26
fig. 16	第8調査区出土石器.....	27
fig. 17	第10調査区出土石器.....	27
fig. 18	グリット・トレンチ設定図.....	28
fig. 19	トレンチ層序.....	30
fig. 20	第1遺構面遺構配置図.....	折り込み
fig. 21	第2遺構面遺構配置図.....	折り込み
fig. 22	大山祇神社跡実測図.....	32
fig. 23	大山祇神社跡拝殿・本殿遺物出土状況実測図.....	33
fig. 24	小祠跡実測図.....	34
fig. 25	S B - 0 1・0 2実測図.....	35
fig. 26	S B - 0 1屋内石組遺構実測図.....	36
fig. 27	S B - 0 3実測図.....	36

fig. 28	上部土壘実測図	38
fig. 29	S E - 0 1 実測図	39
fig. 30	S E - 0 2 実測図	40
fig. 31	S E - 0 3 実測図	41
fig. 32	盛土状遺構・S D - 0 1 実測図	42
fig. 33	S X - 0 1 実測図	43
fig. 34	S B - 0 4 実測図	44
fig. 35	下部土壘・S X - 0 2 実測図	45
fig. 36	S D - 0 6 ・池状遺構実測図	46
fig. 37	第1層出土土器類(1)	48
fig. 38	第1層出土土器類(2)	50
fig. 39	第1層出土土器類(3)	52
fig. 40	第1層出土土器類(4)	54
fig. 41	包含層出土土器類(1)	55
fig. 42	包含層出土土器類(2)	56
fig. 43	包含層出土土器類(3)	60
fig. 44	包含層出土土器類(4)	61
fig. 45	包含層出土土器類(5)	62
fig. 46	包含層出土土器類(6)	64
fig. 47	包含層出土土器類(7)	66
fig. 48	包含層出土土器類(8)	68
fig. 49	包含層出土土器類(9)	70
fig. 50	包含層出土土器類(10)	71
fig. 51	包含層出土土器類(11)	72
fig. 52	第1トレンチ最下層出土土器類	74
fig. 53	B - 2 グリット出土土器類	76
fig. 54	各遺構出土土器類(1)	77
fig. 55	小祠跡出土土師質土器	78
fig. 56	各遺構出土土器類(2)	80
fig. 57	S B - 0 3 出土土器類	81
fig. 58	S A - 0 2 出土土器類	83
fig. 59	各遺構出土土器類(3)	85

fig. 60	各遺構出土土器類(4)……………	87
fig. 61	各遺構出土土器類(5)……………	88
fig. 62	盛土状遺構上部出土土器類(1)……………	91
fig. 63	盛土状遺構上部出土土器類(2)……………	92
fig. 64	盛土状遺構上部出土土器類(3)……………	93
fig. 65	盛土状遺構上部出土土器類(4)……………	94
fig. 66	盛土状遺構下部出土土器類……………	99
fig. 67	各遺構出土土器類(6)……………	100
fig. 68	德利刻字拓影(1)……………	102
fig. 69	德利刻字拓影(2)……………	103
fig. 70	軒丸瓦……………	104
fig. 71	管状土錘……………	105
fig. 72	管状土錘・有溝土錘……………	106
fig. 73	土製品……………	107
fig. 74	砥石……………	108
fig. 75	石鏃・剥片……………	112
fig. 76	鳥居額拓影……………	113
fig. 77	狛犬……………	114
fig. 78	水受刻字拓影……………	115
fig. 79	鉄製鍋……………	115
fig. 80	鉄製容器……………	116
fig. 81	庖丁・小柄……………	116
fig. 82	銅製品……………	118
fig. 83	銅銭拓影……………	119
fig. 84	下駄……………	122
fig. 85	曲物……………	122
fig. 86	第27調査区地形図……………	124
fig. 87	第28調査区地形図……………	125
fig. 88	第27調査区トレンチ層序……………	126
fig. 89	第28調査区トレンチ層序……………	127
fig. 90	第27調査区遺構配置図……………	128
fig. 91	第27調査区 SK-03実測図……………	129

fig. 92	第27調査区出土弥生土器	129
fig. 93	第27調査区出土石器	129
fig. 94	第28調査区出土石器	130
fig. 95	第29調査区地形図	130
fig. 96	第29調査区トレンチ層序	132
fig. 97	第29調査区地山復原図	133
fig. 98	第29調査区集石状遺構上部集石実測図	134
fig. 99	第29調査区集石状遺構最下部集石実測図	135
fig. 100	第29調査区出土弥生土器	136
fig. 101	第29調査区出土土器類	137
fig. 102	第29調査区出土石器	138
fig. 103	第30調査区地形図	139
fig. 104	第30調査区層序柱状図	139
fig. 105	第31調査区層序	140
fig. 106	第31調査区遺構配置図・岩盤復原図	141
fig. 107	第30調査区出土石器	142
fig. 108	第30調査区出土小柄	143
fig. 109	第31調査区出土土器類	144

表 目 次

Tab. 1	土佐泊浦の戸数	9
Tab. 2	土佐泊浦の農地面積・実収高	10
Tab. 3	木津村の農地面積・実収高	10
Tab. 4	土佐泊浦の神社	13
Tab. 5	土錘計測表	110
Tab. 6	砥石計測表	111
Tab. 7	銅銭貨計測表	121
Tab. 8	造酒屋一覧表(撫養地方)	147
Tab. 9	石器計測表	149
Tab. 10	第21調査区出土土器類観察表	150
Tab. 11	第29調査区出土土器類観察表	192
Tab. 12	第31調査区出土土器類観察表	194

図 版 目 次

P L . 1	第8・9調査区全景(南から)
P L . 2	第10調査区石積遺構(上1, 下2)(東から)
P L . 3	上 第15調査区調査前全景(南から) 下 第15調査区トレンチ全景(北から)
P L . 4	第21調査区全景(上・東から, 下・南から)
P L . 5	第21調査区大山祇神社跡(上・西から, 下・北から)
P L . 6	第21調査区大山祇神社跡本殿(上・下西から)
P L . 7	第21調査区大山祇神社跡(上・南から, 下・東から)
P L . 8	第21調査区小祠跡(上・南東から, 東から)

- P L . 9 上 第21調査区小祠跡（東から）
下 第21調査区小祠跡銅銭出土状況（東から）
- P L . 10 上 第21調査区S B -01（東から）
下 第21調査区S B -01出土石臼（南から）
- P L . 11 第21調査区S B -01かまど跡（上・西から，下・南から）
- P L . 12 上 第21調査区石組遺構（西から）
下 第21調査区 Pit 群（南から）
- P L . 13 上 第21調査区S D -01（北から）
下 第21調査区 S B -03（東から）
- P L . 14 上 第21調査区S E -01（西から）
下 第21調査区S E -03（南から）
- P L . 15 第21調査区S B -04（上・東から，下・西から）
- P L . 16 第21調査区第4トレンチS D -04（上・東から，下西から）
- P L . 17 上 第27調査区全景（南から）
下 第27調査区土壌（東から）
- P L . 18 上 第28調査区調査前全景（北から）
下 第28調査区全景（南から）
- P L . 19 上 第28調査区第1トレンチ土層（西から）
下 第28調査区第5トレンチ土層（南から）
- P L . 20 上 第29調査区円礫出土状況（西から）
下 第29調査区円礫除去状況（西から）
- P L . 21 上 第29調査区弥生土器出土状況
下 第30調査区調査前全景（西から）
- P L . 22 上 第30調査区全景（東から）
下 第30調査区土層（西から）
- P L . 23 上 第31調査区全景（北から）
下 第31調査区S K -01（東から）
- P L . 24 上 第31調査区土釜出土状況
下 第31調査区土層南壁（北から）
- P L . 25 第21調査区第1層出土土器類（1）
- P L . 26 第21調査区第1層出土土器類（2）
- P L . 27 第21調査区第1層出土土器類（3）

- P L . 28 第21調査区第1層出土土器類（4）
- P L . 29 第21調査区包含層出土土器類（1）
- P L . 30 第21調査区包含層出土土器類（2）
- P L . 31 第21調査区包含層出土土器類（3）
- P L . 32 第21調査区包含層出土土器類（4）
- P L . 33 第21調査区包含層出土土器類（5）
- P L . 34 第21調査区包含層出土土器類（6）
- P L . 35 第21調査区包含層出土土器類（7）
- P L . 36 第21調査区包含層出土土器類（8）
- P L . 37 第21調査区包含層出土土器類（9）
- P L . 38 第21調査区包含層出土土器類（10）
- P L . 39 第21調査区包含層出土土器類（11）
- P L . 40 第21調査区第1トレンチ最下層・B-2グリット出土土器類
- P L . 41 第21調査区各遺構出土土器類（1）
- P L . 42 第21調査区S A-02出土土器類
- P L . 43 第21調査区各遺構出土土器類（3）
- P L . 44 第21調査区各遺構出土土器類（4）
- P L . 45 第21調査区各遺構出土土器類（5）
- P L . 46 策21調査区盛土状遺構上部出土土器類（1）
- P L . 47 第21調査区盛土状遺構上部出土土器類（2）
- P L . 48 第21調査区盛土状遺構上部出土土器類（3）
- P L . 49 第21調査区盛土状遺構上部出土土器類（4）
- P L . 50 第21調査区盛土状遺構下部出土土器類（5）
- P L . 51 第21調査区各遺構出土土器類（6）
- P L . 52 第31調査区出土土器類
- P L . 53 第29調査区出土土器類
- P L . 54 第21調査区出土德利刻字（1）
- P L . 55 第21調査区出土德利刻字（2）
- P L . 56 第21調査区出土墨書土器類
- P L . 57 第21調査区出土瓦1～2
第15調査区出土土器3
- P L . 58 第21調査区出土土製品・小祠出土墨書土器

- P L . 59 第21調査区出土土製品・小祠跡出土墨書土器
- P L . 60 第21調査区出土砥石
- P L . 61 第8・10・21・27・28・29・30調査区出土石器（8区1，10区2，21区3～7，
27区10，28区11～13，29区14～24，30区25～32）
- P L . 62 第21調査区大山祇神社跡出土（鳥居額1，狛犬2・3）
- P L . 63 第21調査区出土鉄製品・銅製品
- P L . 64 第21調査区出土鉄製品・銅製品（小柄1，火箸3，飾金具，釘5，金具6）
第30調査区出土（小柄2）
- P L . 65 第21調査区出土銅銭
- P L . 66 第21調査区出土木製品（曲物1，下駄2）

I 遺跡の位置と環境

1 歴史的環境

大毛島で現在までに確認されている遺跡の数は少なく、その中には遺物散布地点も含まれるが、多くの場合十分な資料提示はなされていない。特に本州四国連絡橋公団関連工事が行われる以前に確認されていた遺跡においては、出土遺物の所在すら明確でないものもある。こういった状況が遺跡数僅少による資料蓄積の低迷と相俟って、大毛島における考古学的研究の停滞を余儀なくさせているというのが実状であろう。辛うじて後期旧石器時代に遡る可能性を示唆した小鳴門海峡海底遺跡(高橋・野々村 1983)を上限に、近世陶磁器を出土する第22・23調査区(松永・多田 1983)を通じて、不十分ではあるが各時期の遺跡を網羅することは可能である。以下で主要な遺跡のみを列挙してみたい(fig. 1)。

旧石器時代 小鳴門海峡の海底(化石木および貝殻類を含む排土中)より4点の人為物が検出された。石核1点、剥片2点、搔器1点である。石器類は化石木に伴出するもので化石木の¹⁴C年代測定値23,180±y. B.P.を上限とする遺物と考えられる。

縄文時代 縄文時代に属する資料は極めて少なく、石器以外の出土遺物は皆無である。やや確証に乏しい憾みはあるが、今回報告する第29・30調査区において検出された若干古い形態を有する石鏃、搔器等を当該期の所産とみなしておきたい。なお、隣接する兵庫県淡路島においては数多くの縄文時代遺跡が分布しており、大毛島における今後の資料増加が期待される。

弥生時代 弥生時代に属する資料は少なく、土器・石器類が鳴門公園千量敷下遺跡、第22調査区および今回報告する各調査区において確認されるにすぎない。

古墳時代 古墳時代に属する資料は少なく納言山古墳群、亀浦北山古墳群、松瀬崎古墳群が確認されているが、ほとんどが組合式石棺を伴った小規模古墳である。

歴史時代 歴史時代に属する資料は少なく、平安時代前期の土佐泊廃寺より複弁の軒丸瓦と唐草文の軒平瓦が確認されている。土佐泊は『土佐日記』等で知られるように海上交通の要所として栄えた。中世の資料としては、阿波水軍の森氏の居城として土佐泊城がある。近世の資料としては、第22・23・39調査区、今回報告する各調査区出土の近世陶磁器類、遺構としては神社跡、住居跡等がある。

以上、大毛島地域の遺跡を中心に旧石器時代から近世まで述べてみた。まだまだ考古学的資料に乏しく、十分とはいえない状態であるが、今回報告の資料を研究の一助としたい。

(松永雅行)



fig.1 大毛島周辺の主要遺跡 5万分の1（鳴門海峡図幅）

参考文献

秋山 泰・福井好行 1976 『鳴門市史』上巻

高橋正則・野々村拓也 1983 「小鳴門海峡海底下出土の石器」 『旧石器考古学26』旧石器文化
談話会

『徳島県文化財調査報告書第7集』 1963 徳島県教育委員会

『文化財分布調査概要（埋蔵文化財・史跡・名勝・天然記念物）—鳴門地区(1)—1973』 徳島県
教育委員会

松永住美・多田寿一 1982 『徳島県文化財調査概報—大毛島39区遺跡』 徳島県教育委員会

松永住美・多田寿一 1983 『徳島県文化財調査概報—大毛島22・23区遺跡』 徳島県教育委
員会

『全国遺跡地図 兵庫県』 1982 文化庁文化財保護部

- A. 小鳴門海峡海底遺跡
- B. 大毛島第22・23区遺跡
- C. 鳴門公園千畳敷下遺跡
- D. 納言山古墳群
- E. 亀浦北山古墳群
- F. 松瀬崎古墳群
- G. 土佐泊廃寺
- H. 土佐泊城跡
- I. 大毛島第39区遺跡

2 自然環境

(1) 位置

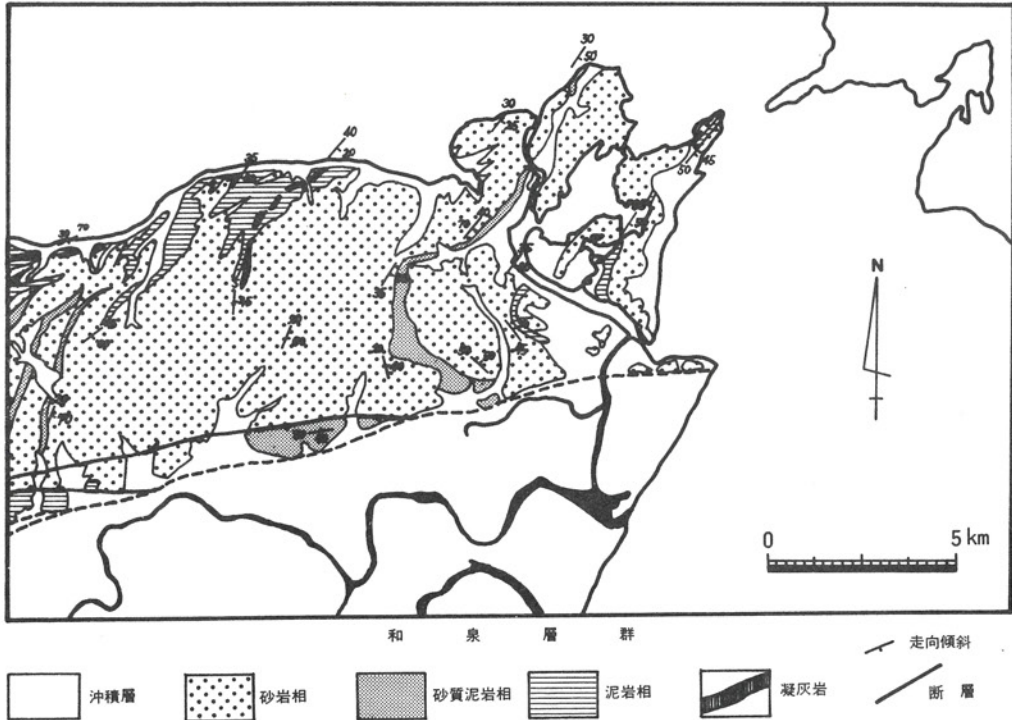
大毛島は、阿讃山脈が紀伊水道に没するところにあたり、東は鳴門海峡をはさんで、淡路島に面した位置にある (fig. 1)。島田島、高島とともに、小鳴門水道によって四国島から切り離された、面積7.06km²、周囲20kmの島である。南北6.3km、東西は最大で2.3km、中央部は狭く0.5kmと、南北に長い形をしている。海岸線は、西側が入江の多い複雑な岩石海岸であるのに対し、東側は直線的な砂浜海岸となっている。島の65%が山地で占められ、その東側に小さな平野が3地域ほど形成されており、それぞれ集落をのせている。北から大毛、黒山、野の集落で、ほかに島の西南部に三ツ石、北端に福池、南端に土佐泊の集落がある。

(2) 気候

調査地周辺は、瀬戸内気候区に属していると言えよう。晴天日数が194日で、1年の53.1%にあたり、最近まで製塩業が営まれていたことは、この地方が寡雨であることを物語っている。月平均気温は、8月が27.8℃、最低となる1月が5.6℃で、年平均すると16.1℃となる。降水量は、年間で1465mmであるが、特に9月の台風と6月の梅雨前線による雨量が多く、それぞれ245mmと205mmになる。逆に1月の降水量は42mmと少なく、夏雨冬乾の気候と言える。風の方は、季節風の影響で、夏は南東から、冬は北東ないし北西の風が吹く。風速は夏の平均で2～3 m/秒、冬は3～4 m/秒とやや速くなる。また、無風の日も年間で40日ほどある (岡田他 1976)。

(3) 山地

大毛島を含めた阿讃山脈は、中世代白亜紀末期(7億8000万年前)に、中央構造線の北側でできた細長い海域に土砂が堆積したものが、古第三紀(5000万年前)の地殻変動により、褶曲隆起してできた山脈である。和泉層群と呼ばれ、砂岩と泥岩の互層で構成されている (Fig. 2)。東西性の褶曲軸をもった向斜構造をなし、褶曲軸は東へ向って沈降している。このため、東西90 kmの山脈は東に向って次第に低くなり、大毛島での最高点は198.7mである。また、尾根と谷の平面形は、向斜構造を反映し、西方へ凸の馬蹄型をなしている (阿子島他 1976)。つまり、和泉層群中の砂岩が卓越する部分は浸食に強く尾根として残り、泥岩が卓越する部分が谷になるわけである。大毛島では、尾根がアルファベットのWを横にした形をしている。そして、外海に開いた部分に砂が堆積し、平野が形成された。



和泉層群

fig. 2 大毛島周辺の地質

(4) 低地

大毛島の東海岸に発達する平野は、最大奥行1km強の狭いもので、ほとんど砂で構成されている。微地形では、砂丘（浜堤）と堤間低地が認められる。砂丘で明瞭なものは、大毛地区で3列、黒山地区で2列、野地区で1列あり、それぞれの地区で標高10mを越えている (fig. 3, 4)。均一な砂丘砂の下には、貝殻を含む海成砂が伏在し、その頂面レベルが+2mであることや、5~6mの水準に海食痕が存在することから、かつての海進を認めることができる。その時期は、全国的な共時性から、縄文時代中期~後期と想像される（小野 1969, 井関 1975, 岡田他 1976）。いま、ボーリング柱状図やトレンチの土層観察から、大毛島低地の砂丘形成過程を推察してみる。

いわゆる縄文海進と呼ばれる高海水準期には、山稜の裾まで波が打ち寄せ、大毛地区と黒山地区では、外海から運ばれた砂が+2mの水準まで堆積した。その後の海退や気候条件の変化によって、この浜堤が離水し、その上に風成砂がのって砂丘が誕生した。しかし、野地区では砂の供給量が十分でなかったか、あるいは水深が深かったためか、山際に砂丘は発達していない。その後の海進、海退に応じて、大毛地区で2つ、黒山地区でもう1つの砂丘が形成された。

野地区に見られる砂丘は比較的新しいものと考えられる。古絵図を見てみると、正保3年(1646)の阿波国絵図では、野地区は入江として表現されている。また、安永7年(1778)の阿州撫養図

でも、野の部分は海が進入して入江となっており、そこで漁師が地引網を引いている姿が描かれている。それが文化12年(1815)の板野部分間絵図では、現在と同じような直線的な海岸線となっている。さらに、文久3年(1863)の撫養地図では、海岸

線に沿った砂丘が認められるようになる(岡田他 1976)。それぞれの絵図に精度の差があり、即断は避けなければならないが、これらの絵図から、野地区の砂丘は、18世紀の終わりから19世紀の始めにかけて形成されたと推察される。

(5) 動植物

自然植生ではこの地方は、常緑広葉樹林帯に属し、シイ・アラカシ・ウバメガシなどのドングリを産する照葉樹が優占する。しかし古くからの伐採によって、現在見られるのはアカマツを第一相とする二次材が多く、そうした場所はマツタケの産地となる。海岸部ではクロマツやウバメガシの乾性植物も多い(吉川他 1975)。また海藻類ではワカメが有名であり、清澄な海水と豊富な日光の供給がある鳴門海峡や小鳴門水道すじの岩礁は古くからの産地である。

江戸時代、大毛島では鹿狩りが行われた記録があり、サルやイノシシもいたようである。漁介類では暖海性・内湾性のものが多く、その量も豊富である(岡田他 1976)。

(野々村拓也)

参考文献

- 阿子島功, 寺戸恒夫, 岩崎正夫, 中川衷三, 須鎗和巳 1972 『徳島県の地質』 徳島県
井関弘太郎 1975 「砂丘形成期分類のためのインデックス」 『第四紀研究』 14-4



fig. 3 大毛島低地の地形断面位置

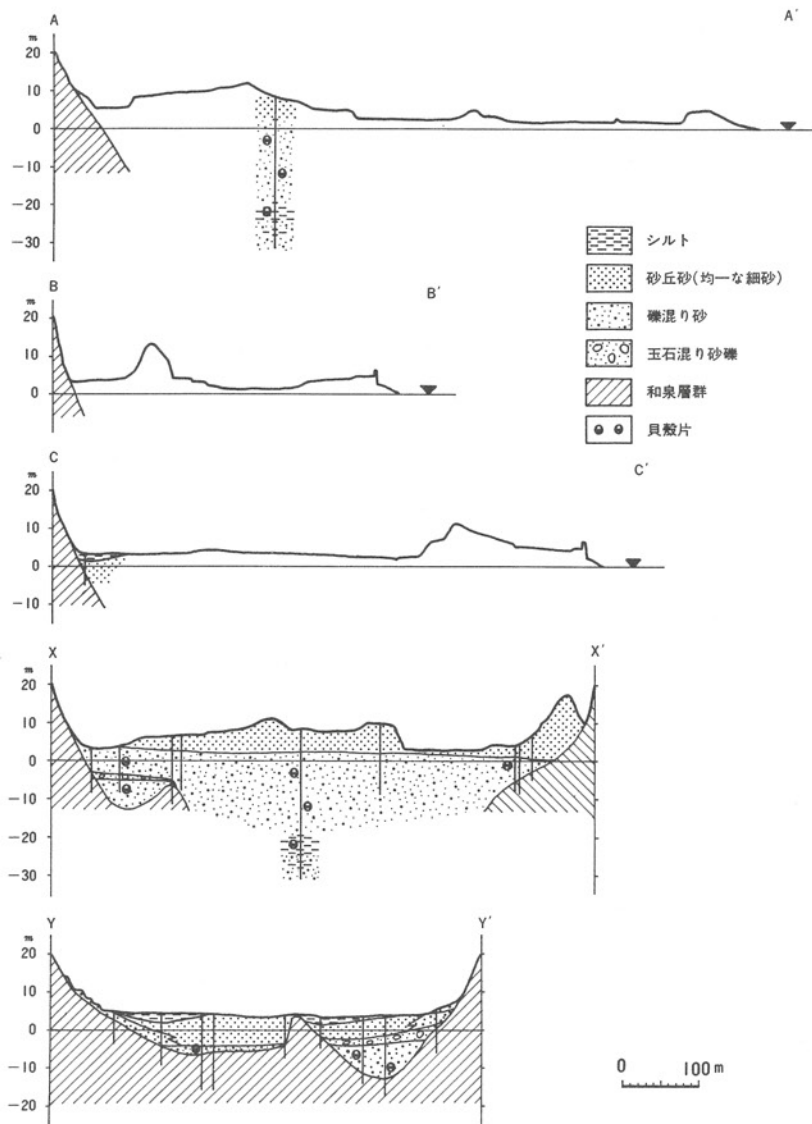


fig. 4 大毛島低地の地形断面

岡田克弘, 近藤照明, 阿子島功, 須鎗和巳, 日出武敏, 河野圭典 1976 『自然環境』『鳴門市史』 上巻 鳴門市史編纂委員会

小野忠熙 1969 「考古地理学からみた海岸砂丘の形成—西日本の場合—」 『地理学評論』 42-3

豊島吉則 1975 「山陰の海岸砂丘」 『第四紀研究』 14-4

吉川 需, 品田 穰 1975 『天然記念物緊急調査 植生図・主要動植物地図36 徳島県』 文化庁

3 文献からみた大毛島

ここでは文献からみた大毛島の歴史について述べる。土佐泊浦は紀貫之の「土佐日記」にも誌されているように、平安時代の初期、すでに人々が居住していたことがわかる。「土佐日記」の作者がそうであったように、土佐泊浦の地名の由来は、「阿波志」が「続日本紀に據る靈龜以來土佐駅路、那賀を経て此に出づ」と記す¹ことから判るように、この湊が土佐往来の経路であったことによる。

この土佐泊浦の藩政期以前の文献史料は乏しい。『鳴門市史』によれば、大永3年(1523)大代勝福寺過去帳の記載から、土佐泊浦も「泊庄」に含まれていた(福井 1976a)と述べている。その詳細は不明であるが、鳴門の潮流による豊富な海産物に恵まれ、古くから多数の漁民が活躍していたとみられる。そして、時には「土佐日記」に記すように海賊となって略奪を行い、また、争乱に際しては、阿波水軍として活躍したものと思われる。阿波水軍の総帥森氏の本拠は土佐泊である(福井 1976b)。

このように、藩政期以前の大毛島の生活、社会をうかがう文献史料はほとんどない。そこで以下、藩政期における大毛島の文献上より見た歴史を、行政区画、戸数、産業について概観し当該調査区との関わりに論を進めたい。

(1) 行政区画

藩政期、大毛島には土佐泊浦、三ツ石村の二村が存在した。「鳴門戸辺集」²によれば、土佐泊浦の成立は千年余以前とされるが、三ツ石村は「土佐泊浦之内塩浜に築立村成ル」と記されているように、もとは土佐泊浦と一村をなしたものが、慶長初年、佐右衛門ならびに淡路国三原郡高屋村、北方村などの人々が渡来し、塩田を築き、一つの村落となったものである(板野郡教育会 1926a)。

村の成立の相違は、両村の産業、地方支配の系列の相違となってあらわれる。すなわち「元禄五壬申歳(1692)正月朔日御両国高物成付知行取并御扶持人付郡在名庄屋付」³によると、土佐泊浦庄屋助五郎は、堂ノ浦、北泊浦の庄屋などと共に、林崎浦組頭庄屋三郎左衛門の組下にあり、浦方支配の系列に属している。それに対し、三ツ石村庄屋留五郎は、高島村庄屋などと共に、南浜村、黒崎村の組頭庄屋の組下にあり、いわゆる撫養塩屋十二カ村に属している。

また、『鳴門市史』では、生活舞台の観点より、現在鳴門市に属する村浦を五区に分類している。土佐泊浦は堂ノ浦、北泊浦などと共に漁村地域、三ツ石村は塩田地域に属している(福井 1976c)。

このように、同じ大毛島内にありながら土佐泊浦と三ツ石村は、村の成立・産業・地方支配の系列・生活の舞台のいずれもが異なり、両村を一概に論ずることは適切ではない。本発掘調

査地は行政区画では土佐泊浦に属している。以下、藩政期の土佐泊浦について述べたい。

(2) 戸数

史料により若干の相違はあるが、Tab. 1 から、藩政期における土佐泊浦の戸数は、200余軒であったとみて間違いあるまい。

1964年の鳴門における総合学術調査によれば、土佐泊浦は大きく南の土佐泊と北の土佐泊浦に分かれる。南の土佐泊は港に適しており、小鳴門海峡をさしはさんだ対岸の商業地にも面し、昔から民家が集中していた。これに対し、北の土佐泊浦は、遠浅のため港らしい港もなく、また、真水も乏しく田畑も少ないため、民家は防風林の間を縫って散在しているだけ(富野1965)であった。

藩政期では、その傾向は一層顕著であったと推測される。①藩政期、黒山境から孫崎にいたるところは大毛牧場であり、馬が放たれていた(福井1967 a)。②八木の鼻以北の大毛山は藩主の狩猟のための「御留山」に指定され、みだりに人が出入りできなかった(福井 1976 d)。③荒地が多く米作に不適であった(福井 1976 d)。④当時、土佐泊浦の主産業は漁業であった⁴。以上①～④の諸点を勘案すれば、港に適した南の土佐泊に人口が集中していたと思われる。

また、「鳴門戸辺集」⁵によれば、藩政期、野地区の戸数は10軒余である。野はその名が示すように、土佐泊浦では最も田畑が多かった所である。それ以北の、港もなく、田畑も少なく、まして大毛牧場があり、御留山に指定されていた地域の人口は非常に少なかったと思われる。

Tab. 1 土佐泊浦の戸数

	阿波志	鳴門戸辺集	鳴門記
戸数	211	250 余	223

〔註〕 「阿波誌」：文化12年(1815)完成

寛政5・6年(1793・4)頃の状況

「鳴門戸辺集」：寛政7年(1795)編著

「鳴門記」：享和2年(1802)か?

鳴門市史編纂室のまとめより

(3) 産業

「鳴門戸辺集」⁽⁶⁾は土佐泊浦の人々の生計について、「産業、耕作、漁業、船持、山稼ぎなど

渡世仕浦也」と記している。それでは、土佐泊浦 200 余軒がどのようにして生計をたてていたか、産業について若干の考察をしてみたい。

a. 耕作（農業）

土佐泊浦は山が多く、しかもその上に砂地の多い所であり、Tab. 2 から明らかなように、畑が多く、田が少ないのが特色である。江戸時代、米は最も重要な農作物であり、近世農業は国内のほとんどの地帯で稲作第一主義で行われた（木戸田 1972）。しかし、土佐泊浦の田畑の比率は地理的環境にも左右され、圧倒的に畑の方が多い。近世農業における米の重要性を勘案すれば、藩政期における土佐泊浦の耕作の概要が浮かびあがってくる。

それは、「阿波志」によれば、戸数201⁷とほぼ土佐泊浦と同数であり、藩政期、純然たる農村であった木津村との対比により一層明らかとなる。Tab. 3 によれば、農地面積、実収高の

Tab. 2 土佐泊浦の農地面積・実収高

種別	年度	寛文 4 (1664)	延宝 6 (1678)	文化12 (1815)
田	数			
田	高	34石 8 斗 5 升 1 合	2 町 2 反 5 畝 18 歩 19 石 4 斗 2 升 2 合	5 町 2 反 8 畝 6 歩
畠	数			
畠	高	44石 4 斗 7 升 8 合	13町 1 反 6 畝 21歩 66石 2 斗 4 升 6 合	32町 4 反 4 畝 24歩
田	畠			
高	合	79石 3 斗 2 升 9 合	15町 4 反 2 畝 9 歩 85石 6 斗 6 升 8 合	37町 7 反 3 畝 210石

Tab. 3 木津村の農地面積・実収高

種別	年度	寛文 4 (1664)	元禄 16 (1703)	文化12 (1815)
田	数			
田	高	253石 2 斗 5 合	21町 9 反 9 畝 21歩 386石 5 斗 9 升 8 合	44町 3 畝
畠	数			
畠	高	45石 4 升 9 合	6 町 2 反 4 畝 73石 6 斗 7 升 7 合	18町 8 反 7 畝
田	畠			
高	合	298石 2 斗 5 升 4 合	28町 2 反 3 畝 21歩 460石 2 斗 7 升 5 合	62町 9 反 990石

〔註〕 寛文 4 年：「阿波国十郡郷村田畠高辻帳」

延宝 6 年：「延宝六戊午歳五月十三日 板野郡土佐泊浦御検地帳」

元禄 16 年：「元禄拾六癸未年六月三日 阿波御国板野郡木津村御検地帳」

いずれも、福井好行「近年 検地と新田開発」『鳴門市史 上巻』所収より作成

文化 12 年：「文化 12 年村浦別農地面積・実収高表」（小川氏が「阿波志」より作成）

小川 耕「近世 領主と農民」『鳴門市史 上巻』所収より作成

いずれにおいても土佐泊浦は木津村より少ない。とりわけ、実収高においては木津村の21%(文化12年)しかなく、これにより、土佐泊浦が純然たる農村とは異なっていたことは明らかである。また、ここで注意を要するのは、両村の実収高の差は、田高の差によるということである。寛文4年の両村の畠高は、ほぼ同じであるが、実収高には220石もの差が生じる。これは全て田高の差によるものである。延宝と元禄の両村の実収高の対比からも同様のことがいえ、文化12年においても、恐らく同じような状況であったと推測される。稲作中心の純然たる農村であった木津村における田畠の面積比率は、田70%、畠30%(文化12年)である。実収高の比は、田85%、畠15%(寛文4年)である。そのため畑作は自給自足的なもの、あるいは、わずかの現金収入を得るためのものであったとみられる。ほぼ同じ戸数の土佐泊浦の畠高が、木津村のそれとほぼ同じであったということは、土佐泊浦における畑作も木津村と同様であったとみられる。近世農業において、本来副次的な畑作が、耕地面積で全体の86%(文化12年)、実収高で56%(寛文4年)も占めるということは、耕作が土佐泊浦の主産業ではなかったことを示している。

「鳴門戸辺集」⁸の野地区の説明によると、土佐泊浦の田畠の多くは野にあったが、そこに居住する戸数はわずか10軒余しかなく、他のほとんどは、港のある南の土佐泊に集中していた。野地区の主産物も蕎麦である。土佐泊浦最大の耕作地区の状況がこのようであるならば、土佐泊浦の耕作は、やはり主産業であったとは考えられない。

ほぼ同じ戸数でありながら、実収高が約5分の1では、土佐泊浦の住民が耕作で生計をたてていくことは不可能である。

b. 山稼ぎ(林業)

藩政期において、森林は軍需・建築資材としての材木、および生活資材としての薪・炭の源として、重要な意義を有していた。

特に、土佐泊浦は先述のように、三ツ石村と隣接しており、製塩の際、かん水を煮て塩を結晶させる熱源として、森林が利用されたものと思われる。農耕地が乏しかった事情もあり、山稼ぎも行われていたであろう⁹。

しかし、寛永6年(1629)から、明治2年(1869)に至るまでの間、黒山境から鳴門孫崎に至るところには大毛牧場があり、草木を苜取ることが禁止されていた。また、藩主の狩猟のため、大毛山は八木の鼻以北が御留山に指定され、山への立入りは、禁止、もしくはかなり制限されていたものと思われる(福井 1976 d)。さらに、文化4年(1804)ごろからは、撫養塩田の製塩燃料が、従来の薪に代わって石炭となり、山稼ぎで生業をたてていた地方の住民は困窮するようになる(福井 1976 e)。

上記のことを考えると、山稼ぎもまた、土佐泊浦の主産業であったとはいえない。

c. 漁業・船持

耕作と山稼ぎの考察から明らかなように、藩政期、土佐泊浦の主産業は漁業・船持であったとみられる。

㊤文化12年(1815)の藩撰「阿波志」¹⁰に見える「浦」は、浦人の住む純粹の漁業専門の地域と、浦百姓といわれる半農半漁の人々が漁業する地域との両方が含まれているが、土佐泊浦は、堂浦、北泊浦などと共に、浦の部に入っている(福井 1976 f)。㊦土佐泊浦は浦方支配の系列に属している¹¹。㊧「鳴門戸辺集」¹²は土佐泊浦の産物として、「鰯、鰯、鯛、鱸、生鰯、干鰯、魚類、蛤、海雲、わかめ、小ふのり、海素麵、髭のり、松露、蕎麦、能々のり、おごのり」を記しているが、そのほとんどが海産物である。以上㊤～㊧は土佐泊の主産業が漁業・船持であった事実を物語っている。それゆえに、『鳴門市史』も村浦を生活舞台の観点から、五区に分類した際、土佐泊浦を漁村地域として位置付けた(福井 1976 c)ものと思われる。

以上のことから、土佐泊浦は、藩政期において、漁業・船持を主産業とする典型的な漁業水産地域であったことがわかる。

d. まとめ

藩政期、土佐泊浦は漁業を主産業とする漁村であり、戸数200余軒のほとんどが、港に適し、商業地に面している南の土佐泊に集中し、漁業を中心に生活を営んでいた。一方、北の土佐泊浦は、港もなく、田畑も少ないうえ、大毛牧場、御留山に指定され、ほとんど居住する人もなかったと思われる。

(4) 西條氏について

a. 大毛牧場と西條氏

先述のように、黒山境から孫崎に至るところは大毛牧場であった。寛永6年(1629)、藩が馬匹改良と繁殖のため15匹をこの地に放牧したことに始まり、奥州馬の牡の優秀なものが放たれ、一時は牡馬ばかり数十頭におよんだ時もあったという(福井 1976 d)。石垣を築いた址も残っているが、この石垣は馬を閉じこめる目的ではなく、馬が家などへ突入するのを防ぐために、家とか田畑などを守るためにかこったものである(板野郡教育会 1926 b)。

西條家第26代眞太郎重明が、寛政7年(1795)、大毛牧馬制道人に仰せ付けられて以後、明治2年(1869)大毛牧場廃止まで、この管理にあたったのが西條氏である。西條氏は、先述の御留山に指定された大毛山の八木の鼻以北の取締役人も兼務(福井 1976 d)しており、この地域一帯において、大きな勢力を有していたと思われる。

西條氏は佐々木盛綱の子孫と伝えられる。第22代重秀の時、土佐泊浦に転任する。次の重貞は砲術西條流を起し、藩主の鹿狩りの時は、必ず召し連れられるようになり、数々の品を拝

領する。次の第24代重亮は藩から砲術家を申し付けられ、その後、幕末に至るまで、代々砲術家として、藩主の鹿狩りにお供するようになる。眞太郎重明は文化4年(1807)原士¹³となり、同5年には郷士格となり異国船取締りを申し付けられる(福井 1976d)。

b. 神社

第21調査区では大山祇神社の遺構が検出されている。出土した御浄用の砂岩製水受の側面には「文政4年(1821)」の銘があり、他の出土遺物の状況からみて、大山祇神社は19世紀の初め頃には創建されたとみられる。

しかし、Tab. 4からわかるように、文献史料によってはその名を見出すことはできない。明治29年(1896)測量図、昭和4年(1929)修正図、昭和24年(1949)応急修正図の「鳴門海峡・徳島」の地図には、それぞれ大山祇神社と思われる神社の記号が記されているが、昭和46年(1971)編集図では、その記号は消えている¹⁴。

また、『板野郡誌』では編纂時、鳴門村(藩政期の土佐泊浦、三ツ石村、高島村)の神社として、村社4、無格社9の計13社を記している(板野郡教育会 1926c)が、その中にも大山祇神社の名は見出せない。先述の地図によれば、『板野郡誌』編纂時には存在したものと考えられ、当時、郡誌にも記載されない程の小さな神社であったものと思われる。

西條氏の屋敷の近くでもあり、同氏の勢力との関連から、同氏に関わる神社であったとみられる。

c. 街道

現在、瓶浦神社へは大毛海岸、千鳥ヶ浜の海岸沿いに道路が走っている。しかし、明治29年の測量図¹⁵では、旧街道は野から西條へと一度、ウチノ海に出てから、大毛山の東側を通過して、瓶浦神社へと通じていた。

Tab. 4 土佐泊浦の神社

	鳴門戸辺集	阿波志	郡代所寛保御改神社帳
神社名	瓶浦大明神 新羅大明神 皇子明神	御瓶祠 新羅祠 王子祠 鍋島祠 熊野祠 天神祠	瓶大明神 新羅大明神

鳴門市史編纂室のまとめより

そして、その街道をはさんで、大毛牧場を管理する西條氏の屋敷と大山祇神社が位置していた。度重なる藩主の鹿狩りや、大毛牧場の視察にも、この街道が利用されたと思われる。そういう意味で、現在の西條地区は、藩政期、牧場と御留山指定のため、人家もほとんどなかった北の土佐泊浦にあって、その牧場と御留山の管理者として一大勢力を有した西條氏が居住する、最も中心的な生活の場であったと推測される。

この地域（第21調査区）の遺物は、他の調査区に比べて圧倒的に多く、遺物の考察により、その生活の一端をうかがい知ることができよう。

（佐藤 健）

註

- ① 郷土誌刊行会編『阿波志』「卷之五 板野郡」1932年、より引用した。『阿波志』とは文化12年（1815）に編纂された藩撰の地理誌的性格を有するものである。
- ② 『鳴門戸辺集』とは寛政7年（1795）に編纂され、地理誌的性格を有するものである。閲覧にあたり、鳴門市史編纂室の協力を得た。
- ③ 福井好行「近世 藩制の機構」『鳴門市史』上巻所収、鳴門市史編纂委員会、1976年、より引用した。
- ④ 本稿「(3) 産業」参照。
- ⑤ 註②に同じ。
- ⑥ 註②に同じ。
- ⑦ 註①に同じ。
- ⑧ 註②に同じ。
- ⑨ 土佐泊浦での山稼ぎの実状を示す史料はないが、同じように農耕地が乏しかった北灘では、漁業とともに山稼ぎが生業になっていた（福井 1976 e）。
- ⑩ 註①に同じ。
- ⑪ 本稿「(1) 行政区画」参照。
- ⑫ 註②に同じ。
- ⑬ 原士とは徳島藩特有の在郷士分の格称であり、慶安3年（1656）に成立した。他藩の郷士とは異なり、藩直属の家臣団である。主に阿波郡、板野郡、美馬郡に牢人が配され、阿讃山脈南麓の原野の開墾に従事した。その地が拝領地として与えられ、あわせて阿讃山脈方面の国境警備の任にも当たった。西條眞太郎重明は大毛山牧馬御用の功績により、原士を仰せ付けられた。原士については、佃恒夫「原士制度の成立と展開」『吉野町史』上巻、吉野町史編纂委員会、1977年、に詳述されている。

⑭ 地図は「鳴門海峡・徳島」『日本国誌大系 四国』朝倉書店，1975年を参照した。

⑮ 註⑭に同じ。

参考文献

- 板野郡教育会 1926 a 「村名由緒」『板野郡誌』
- 板野郡教育会 1926 b 「放牧」『板野郡誌』
- 板野郡教育会 1926 c 「板野郡神社概要」『板野郡誌』
- 木戸田四郎 1972 「農業 米」『近世史ハンドブック』近藤出版社
- 富野敬邦 1965 「大毛島・島田島住民の意識調査」『総合学術調査報告 鳴門』阿波学会編
- 福井好行 1976 a 「中世 鳴門市の荘園」『鳴門市史』上巻 鳴門市史編纂委員会
- 福井好行 1976 b 「中世 鳴門の海賊（水軍）」『鳴門市史』上巻 鳴門市史編纂委員会
- 福井好行 1976 c 「近世 撫養二十四か村浦とその付近」『鳴門市史』上巻 鳴門市史編纂委員会
- 福井好行 1976 d 「近世 牧畜」『鳴門市史』上巻 鳴門市史編纂委員会
- 福井好行 1976 e 「近世 林業」『鳴門市史』上巻 鳴門市史編纂委員会
- 福井好行 1976 f 「近世 土佐泊浦・堂浦・北泊浦と北泊（漁村地域）」『鳴門市史』上巻 鳴門市史編纂委員会

II 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

国道28号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、昭和52年4月28日から5月20日にかけて、徳島県教育委員会文化課が精密分布調査を行い、遺跡の存在あるいは可能性のある地区を39ヶ

所確認した。

この成果に基づいて本州四国連絡橋公団との協議により、工事着手前に発掘調査及び立会調査を行うこととし、現在に至っている。昭和52年度に1区、3区、4区の立会調査と2区、6区、昭和53年度に5区、6区、7区、昭和54年度に16区、21区の一部、昭和55年度に39区、昭和56年度に11区、12区、13区、14区、22区、24区、25区、26区の調査、16区の一部、17区、18区、19区、20区の立会調査を行った。昭和57年度においては、8区、9区、10区、15区、21区、27区、28区、29区、30区、31区の調査を行った。

(fig. 5)。

この結果、8区、9区、10区、15区、21区、27区、28区、29区、30区、31区



fig. 5 調査区の位置 2万5千分の1
(撫養・鳴門海峡図幅)

の調査報告を行ったものである。21区は全面調査を行い、他は確認調査である。

調査期間は、昭和57年4月1日から昭和58年3月25日にわたる。

8区、9区は丘陵の尾根上に微高地があり古墳の石室の側壁が露出している状態である。

15区は、丘陵と丘陵の間に平坦地がある。

21区は、西條と呼ばれる所でウチノ海の内湾の最奥の位置である。山すそに神社の祠跡があり、鳥居には明治13年建立の銘が刻まれている。須恵器片・瓦器片・陶磁器片が出土し、平坦部も遺跡の可能性はある。

27区は、丘陵の尾根の頂上に微高地があり遺跡の可能性はある。

28区、30区は、丘陵の尾根に微高地がある。

29区は山のすそに平坦地がある。

31区は、ウチノ海側に沿って平坦地がある。

調査区設定は、以上の分布調査の成果に基づき行った。

(松永雅行)

2. 調査日誌抄

1982. 4. 1 調査準備にはいる。

4. 4 15区樹木伐採開始及びベンチマーク設定。10区樹木伐採開始。

4. 7 15区地形測量開始。

4. 8 10区樹木伐採終了し、地形測量開始。15区全景写真撮影及び調査区設定。

4.13 15区は海砂が風により運ばれて堆積し、その上に石切り場の石が積みあげられている。堆積層は無遺物の砂層が続く遺構検出の可能性は無くなる。トレンチ土層写真、全景写真撮影。

4.14 10区は石積状遺構が2箇所確認された。和泉砂岩の石積であるが、時期・用途については不明である。

4.15 21区のトレンチ設定及び掘り下げ。

4.19 10区の石積状遺構平面図作成。古墳の可能性は無くなる。

4.26 10区の石積状遺構写真撮影。第1・2トレンチ掘り下げ。

5. 6 21区の大山祇神社の整地及び遺構検出にとりかかる。住居跡の検出及び平面図作成。

5.10 10区の第1・2トレンチの土層図作成。21区の住居跡の竈・石臼を検出する。8区、9区の樹木伐採開始。

5.11 8・9区の地形測量開始。

5.12 21区の第1トレンチより土師器片・有溝土錘が出土する。

5.18 10区の土層図、平板測量図作成。調査区全景写真撮影。

5.19 10区の確認調査終了。21区の第3トレンチ内より陶磁器片が出土する。

5.22 21区の第4トレンチ内より石組遺構を検出する。瓦・瓦質土器・陶磁器片が多量に出土する。

5.24 8区、9区のトレンチ設定。

5.25 8区、9区のトレンチ掘り下げ開始。

5.26 8区の表土中より石鏃が出土する。

5.27 21区の第5トレンチより石垣状遺構を検出する。

5.28 21区の第5トレンチ石垣平面図作成。神社表土中より寛永通寶が出土する。

6. 2 21区の第5トレンチ内井戸状遺構の平面図を作成する。神社平面図作成。

6.12 21区の地形測量開始。

6.24 8区、9区の確認調査終了。21区の確認調査により石垣跡・住居跡・神社跡遺構が検出されたので全面調査に切り替える。

- 6.25 21区の調査区をA・B・Cのグリット設定をする。
- 6.26 21区の石垣状遺構の平板図作成。Aグリットの住居跡下面より土坑を検出する。
- 7.12 21区A'-4グリットの住居跡と思われる所から多量の陶磁器片が検出される。石垣より古いものと思われる。
- 7.15 神社北斜面より小円礫が出土したが、用途不明である。
- 7.23 神社の写真撮影。神社鳥居に明治13年の銘が刻まれているが、創建年は不明。
- 7.27 石垣状遺構は馬垣ではないかと考えられたが、神社と屋敷とを区画する石垣の可能性が強くなってきた。
- 7.28 21区神社の平板測量。
8. 2 21区の神社の礎石を検出する。
8. 4 21区の神社北斜面より出土の円礫は石積の小祠の一部と考えられる。平面図作成。
- 8.10 21区の神社より垂木・古銭が出土する。神社・小祠・屋敷・石垣の相互の関係を検討するが、不明な点が多い。
- 8.28 21区のA-4グリットより鉄製品、大谷焼、伊万里焼等が出土する。
- 8.30 21区の小祠より墨書土器が出土する。
9. 3 21区のA-3グリットより煙管、寛永通寶が出土する。
9. 6 21区のA'-4～A-4グリットの遺物とりあげ。全景写真撮影。
9. 7 21区のB-2グリット集石中より土師器皿が出土する。
9. 8 21区のA'-4～A-4グリットのSD-01の検出をする。
- 9.14 21区のA'-4～A-4グリットより池状遺構を検出する。曲物、下駄、釘等が出土する。
- 9.16 21区の石垣平面図作成。A-5グリットトレンチ土層図作成及び写真撮影。
- 9.21 21区のB-3グリット石垣のエレベーション。
- 9.27 21区のA'-4～A-4グリットの池状遺構及び石垣検出状況写真撮影。
- 9.28 21区の石垣撤去。
10. 4 21区の全景写真撮影。
10. 6 21区の調査終了。
10. 7 27区の樹木伐採開始。
- 10.14 28区の樹木伐採開始。
- 10.18 27区の調査区設定及び地形測量開始。
- 10.22 27区で弥生土器片が出土する。
- 10.23 28区の調査区設定及び地形測量開始。

- 11. 5 27区の遺構検出をする。28区で石鏃が出土する。
- 11.11 27区、土壌の掘り下げ。29区、調査区設定及び掘り下げ。30区の樹木伐採開始。
- 11.12 27区の土壌写真撮影。29区で石鏃・陶磁器片が出土する。
- 11.18 30区の地形測量開始。調査区設定。
- 11.19 27区の遺構平面図・土層図作成。
- 11.20 29区で円礫が多量に出土する。
- 11.22 29区で砂層中より弥生土器片が出土する。
- 11.24 27区の調査終了。29区の土層図作成。
- 11.25 28区で石鏃が出土する。
- 11.28 30区で石鏃が出土する。
- 12. 6 28区の土層図作成。焼土が検出された。27区は山の頂部にあたり表土はかなり流出しておりあまり条件は良くない。遺構の検出は難しい。
- 12.10 28区は山の斜面にあたり、土砂の流出入がはげしく、遺構の検出は難しい。
- 12.13 29区の円礫出土遺構の平面図作成。
- 12.20 30区で石鏃、サヌカイト剥片が出土するが、遺構の検出は難しい。
- 12.27 29区の円礫撤去。
- 1983. 1. 6 31区の調査区設定。
 - 1. 7 29区の平板図作成。30区の調査区全景写真撮影。
 - 1.12 30区の土層図作成。
 - 1.20 29区の円礫の集石は人工的なものか自然的なものか不明。
 - 1.27 29区の土層図作成及び写真撮影。31区で土師質の土釜片が出土する。
 - 2. 3 31区で焼土遺構検出及び写真撮影。
 - 2.10 31区の出土遺物の写真撮影。
 - 2.14 31区のトレンチ掘り下げ。
 - 3. 1 31区の土層図作成。
 - 3. 7 31区の地形測量。
 - 3.12 現場プレハブにて現地説明会を開く。
 - 3.23 29, 30, 31区の確認調査終了する。
 - 3.24 道具の整理・運搬をする。
 - 3.25 57年度の調査終了し、関係各機関へあいさつに行く。

(松永雅行)

III 調査概要

1 第8・9・10・15調査区

(1) 位置と環境 (fig. 5~8)

(PL. 1, 3)

第8・9・10・15調査区は、鳴門市鳴門町土佐泊浦字大毛に所在する。第8・9区は大毛島山系の北部標高約74mの尾根に、第10区は標高約50mの東傾斜面に、第15区は標高約14mの南傾斜面に位置する。第8・9区からは北に鳴門海峡、東に紀井水道・淡路島、西に亀浦港・島田島が望める。第10区からは北に鳴門海峡、東に紀井水道・淡路島が望める。第15区からは北に大毛島山系、南に臨海低地、大毛島山系が望める。いずれも地目は山林である。(松永雅行)

(2) 層序

第8・9調査区の基本層序は、(1)表土層、(2)黄褐色粘質土、(3)地



fig. 5 調査区の位置 2万5千分の1
(撫養・鳴門海峡図幅)

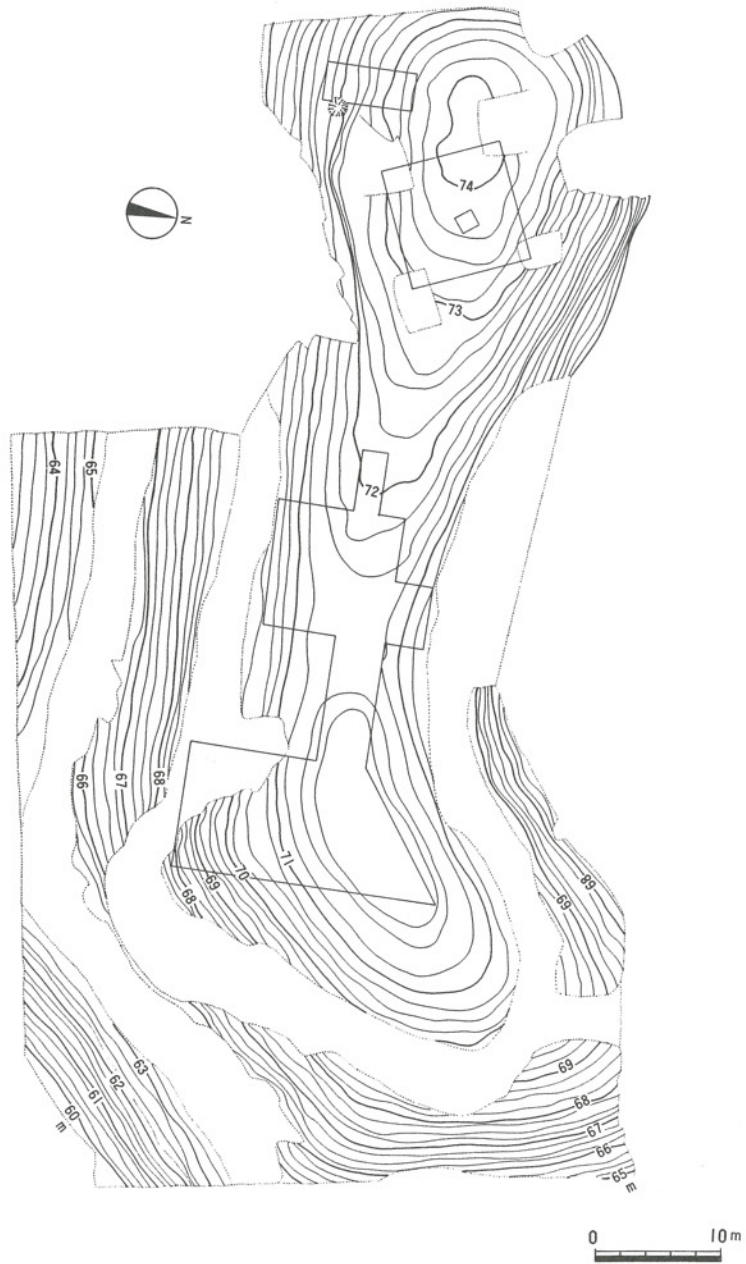


fig. 6 第8・9調査区地形図

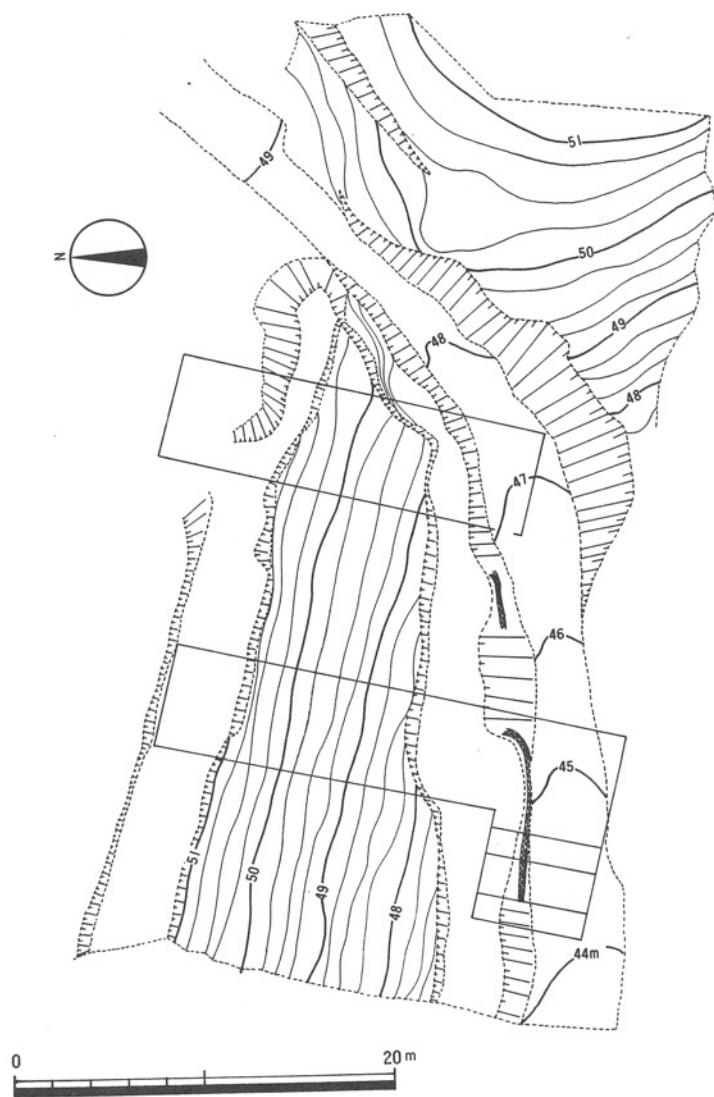


fig. 7 第10調査区地形図

山（和泉層群）となり (fig. 9, 10), 第8調査区第2層にはサヌカイト製石鏝が包含されていた。第10調査区は, (1)表土層, (2)黄褐色粘質土, (3)地山（和泉層群）となる(fig. 11)。 第2層

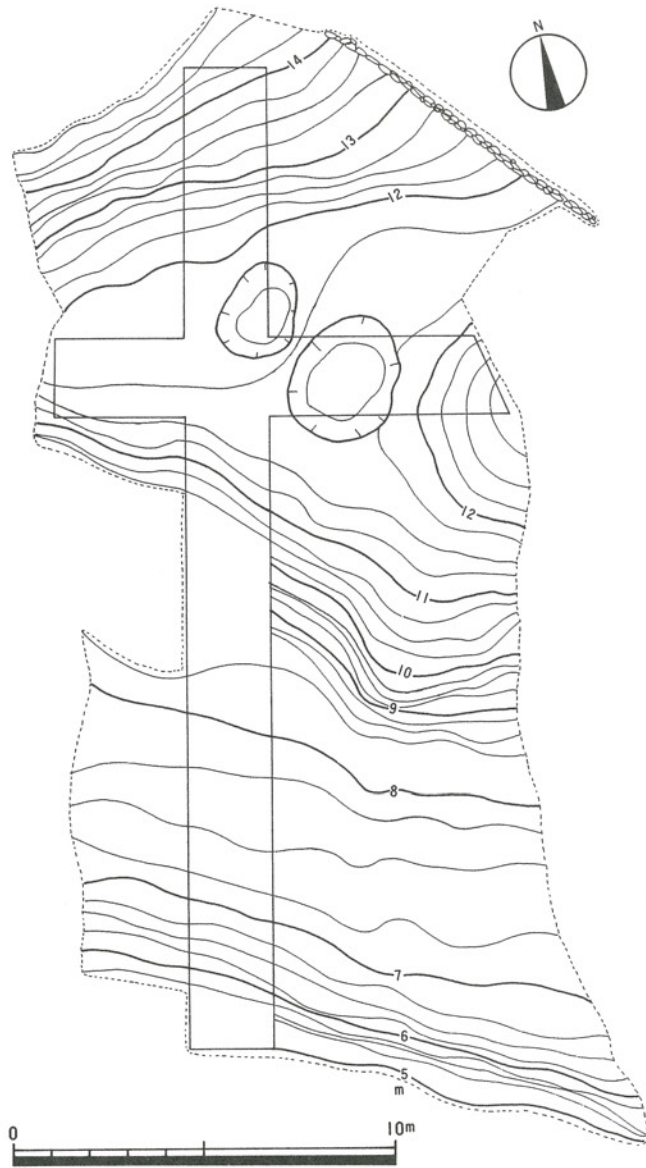


fig. 8 第15調査区地形図

には、サヌカイト製剥片・火熱をうけた自然礫多数が包含されていた。第15調査区も基本層序は単純で、(1)表土層、(2)砂層となる (fig. 12)。第1層に近世陶磁器が包含されていた。

(高橋正則)

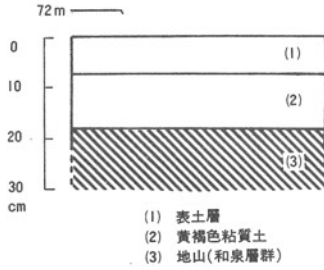


fig. 9 第8調査区層序柱状図

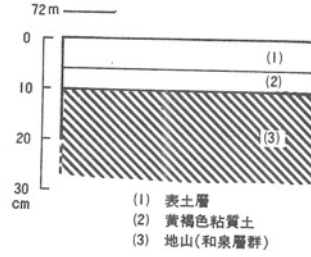


fig. 10 第9調査区層序柱状図

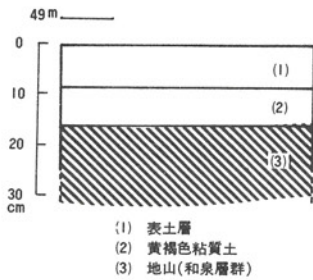


fig. 11 第10調査区層序柱状図

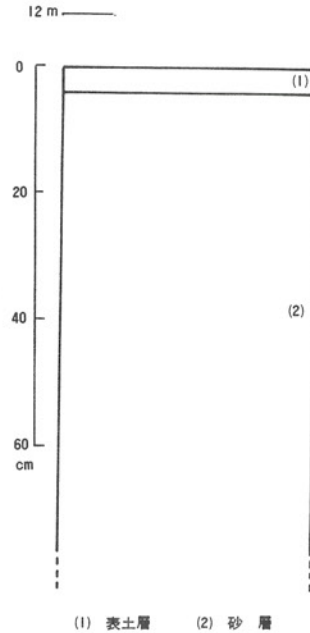


fig. 12 第15調査区層序柱状図

(3) 遺構と遺物

① 遺構 (fig. 13, 14), (P.L. 2)

第8・9・15調査区では、安定した遺物包含層・遺構面の拡がりは確認されなかった。第10調査区では、石垣状遺構2、ピット3、土壌2が検出された。ピット・土壌は、第2層上面からの掘り込みである。出土遺物は皆無であり、所属時期は不明である。

(高橋正則)

② 遺物

土瓶 (fig. 15)

第15調査区第1層中出土の施釉陶器の土瓶である。型物とみられ、体部に亀甲形の文様を浮出し、底部に布目を残す。底部は上げ底である。口縁部は直立し、内側に広い段をつくり出し

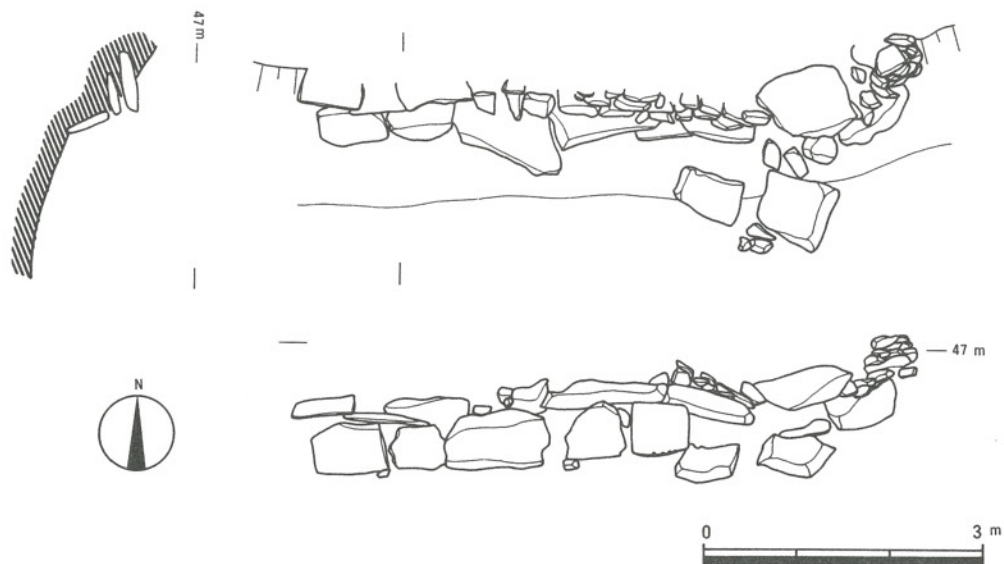


fig. 13 第10調査区石垣状遺構A

て蓋の受部とする。蓋は欠失している。体部の最大径部分に注口部を貼り付ける。体部と注口の接点には、直径0.3~0.4cmの孔を10外から穿つが、穿孔後の調整はみられない。注口の上位には紐状の取手を貼り付ける。内面に素地をみせる。体部と底部に煤の付着がみられるため、湯をさして茶をせんじ出す急須ではなく、直火にかけて茶をせんじ出す機能を有していたとみられる。(河野雄次)

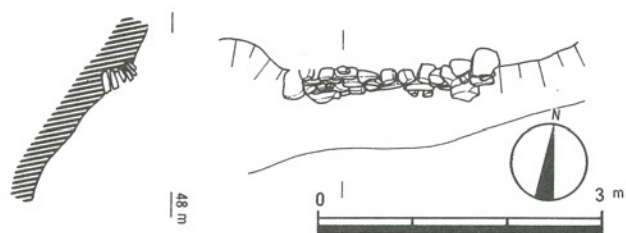


fig. 14 第10調査区石垣状遺構B

石器 (fig. 16, 17)

(1)はサヌカイト製の有茎石鏃である。整形剥離は入

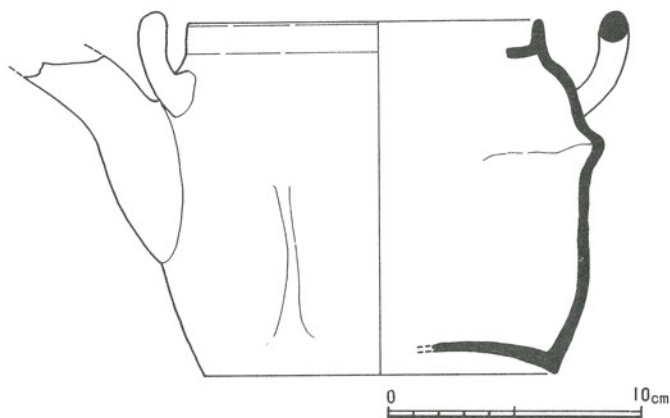


fig. 15 第15調査区出土陶器

念に施され、縁辺の一部に潰れが認められる。風化しており、転摩の痕跡が認められる。第8調査区出土。

(2)はサヌカイト製の剥片である。右面左端には石器長軸に平行する剥離痕が認められる。若干の転摩痕を器面に残す。第10調査区出土。(高橋正則)

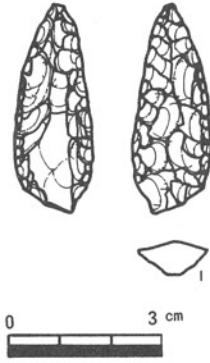


fig. 16 第8調査区出土石器

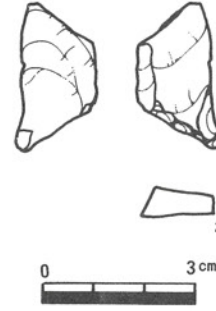


fig. 17 第10調査区出土石器

(4) 小 結

第8・9・10調査区では、表土層直下に薄い遺物包含層の存在が指摘された。しかし、近世以降削平および雑木の根跡が随所に認められ、良好な遺構面の確認はなされていない。また、第10調査区より検出された石垣状遺構については近世以降の所産であると推測される。

(高橋正則)

2 第21調査区

(1) 位置と環境 (fig. 5) (P L. 4)

本調査区は鳴門市鳴門町土佐泊浦西條に所在する。徳島県北東端にある大毛島の中央部であり、西海岸が大きく入り込んで入江状となった最奥に位置する。東はこの地区の後背地であって、南北に連なる大毛島山系がやや低くなっている。西の前面には内海のウチノ海が広がり、島田島、高島および古くから漁港として栄えた堂浦を望める。地目は山林と畑であり、海岸に沿ってやや平坦な地形となっている。(松永雅行)

(2) 層序

当該調査区では、地形に合わせてグリッドを設定し、南東から西へA', A, B, C, 南東から北へ0, 1, 2, 3, 4, 5, 6とした (fig. 18)。このグリッドに合わせて、6本のトレンチを設定した。トレンチによる試掘で遺構を検出し、全面調査を行った。

地形的には大山祇神社跡が海拔8.9mと高く、石垣S X-02が海拔0.4mと低くて8.5mの比高差があり、南東から北西あるいは西に向かって下降して海岸に到る。

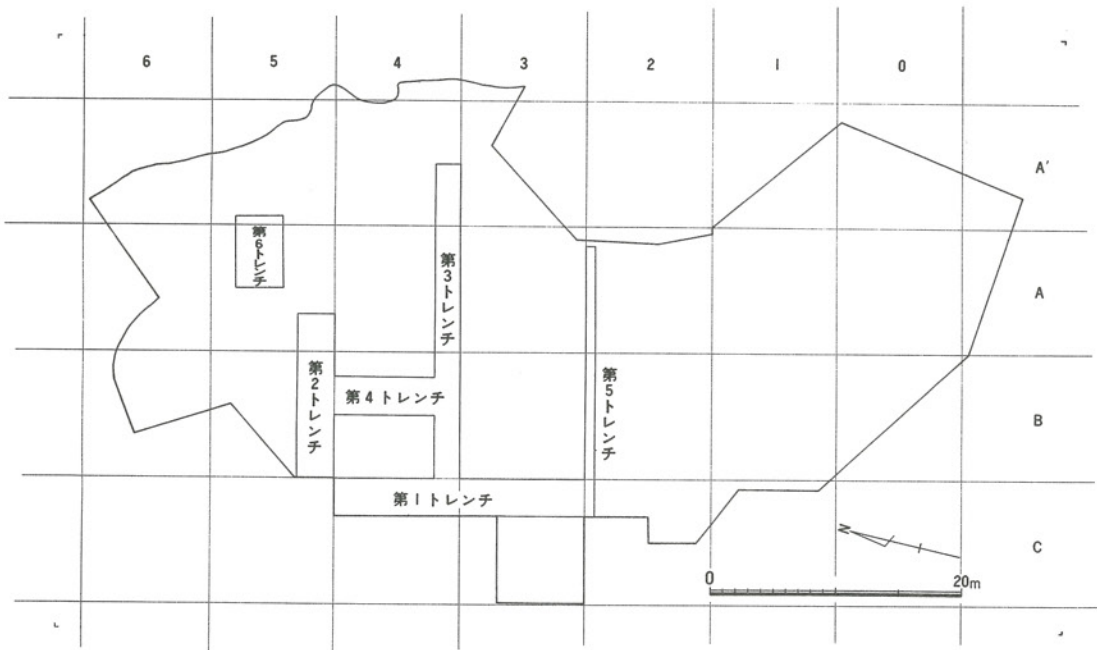


fig. 18 グリッド・トレンチ設定図

基本的には明黄褐色粘質土の無遺物自然堆積層を地山（基盤）として、大山祇神社跡の拝殿・本殿部および石段、小祠跡、溝状遺溝SD-05の一部、溝状遺構SD-06、池状遺構などが構築されている。他の遺構は概むね自然堆積層あるいは整地層に設けられている。このように遺構によって異なった様相が展開されるため、遺構相互の先後関係は把握しがたい。以下、各トレンチの層序を概観する（fig.19）。

第1トレンチはC-3, C-4グリッドに南北に設定した。粘質土と砂質土が互層となり、下部に石利層が広がる。山裾から離れているため、地山面にまでは到っていない。第1層から第6層に第1遺構面の溝状遺構などが検出され、第4層以下に磨滅した須恵器、土師質土器が散在するが、遺構を伴わない。

第2トレンチはA-5, B-5グリッドに東西に設定した。上層に砂質土、下層に粘質土の緩やかな堆積がみられるが、地山面までには到っていない。第1層から第3層に第1遺構面の礎石建物跡SB-01が検出され、第7, 8層に第2遺構面のSB-04が検出されている。

第3トレンチはA'-4, A-4, B-4グリッドに東西に設定した。上層に砂質土、下層に粘質土、砂質土、砂利層が互層となって緩やかな堆積がみられるが、地山面にまでは到っていない。第1層から第7層に第1遺構面の溝状遺構が検出され、第7層以下に磨滅した須恵器を含むが、遺構を伴わない。

第4トレンチはB-4グリッドの第2・3トレンチの間に南北に設定した。砂質土の緩やかな堆積であり、地山面にまでは到らない。溝状遺構SD-03は第2層からの切り込みであり、埋積土は第3・4・5層である。溝状遺構SD-04は第8層からの切り込みであり、第6, 7層が埋積土である。

第5トレンチはA-2, B-2, C-2グリッドに東西に設定した。上層は砂質土と粘質土の緩やかな互層であり、下層は砂礫土であり、西の海岸に向けてその厚さを増す。第13層は地山であり、その上層の第11層に弥生時代後期に比定される土器が出土したが、遺構を伴わない。

第6トレンチはA'-5, A-5グリッドに東西に設定した。第2遺構面のピット群検出後の設定であるため、上半の層序は図示していない。ピット群は第1・3層に検出され、以下の層は無遺物自然堆積層であり、第5層が地山とみられる。第9層は黒褐色粘土層であり、この地域に水の淀みのみられた時期に形成されたと考える。

このように各トレンチにより、遺構の検出層序が異なる。便宜上、第1遺構面と第2遺構面としたが、そこには大きな年代差はみられない。そこで、遺物の層序別分類にあたり、第1層遺物、遺物包含層遺物（包含層遺物とする）、地山直上遺物、第2遺構面下層遺物、遺構出土遺物と5つに分類した。第1層遺物は第1～5トレンチの第1層にあたる遺物であり、第1遺構面の遺物として把握する。包含層遺物は第1・2遺構面の遺物が混在する。包含層とは第2遺

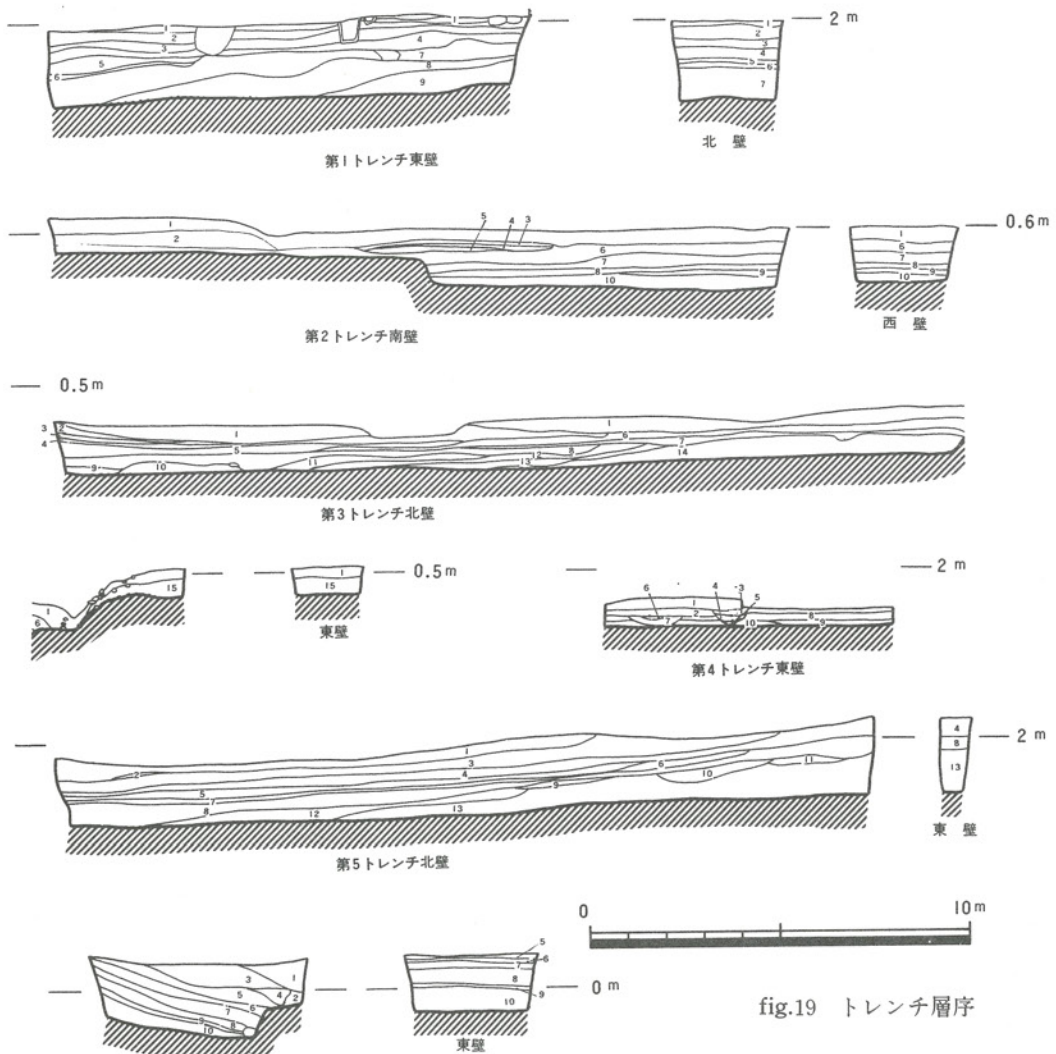


fig.19 トレンチ層序

第1トレンチ

- 1 褐 色 10YR4/4 粘質土
- 2 黄 褐色 10YR5/6 砂質土
- 3 明 褐色 10YR3/3 粘質土
- 4 明 黄褐色 10YR6/8 粘質土
- 5 褐 色 10YR4/6 粘質土
- 6 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 7 黒 褐色 10YR3/2 砂礫土
- 8 黒 褐色 10YR3/2 砂 利
- 9 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂 利

第2トレンチ

- 1 灰 黄 褐色 10YR4/4 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土
- 3 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土
- 4 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土
- 5 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 6 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 7 明 黄 褐色 10YR6/8 粘質土
- 8 褐 色 10YR4/4 粘質土
- 9 褐 色 10YR4/6 粘質土
- 10 にぶい黄褐色 10YR6/3 粘質土

第3トレンチ

- 1 灰 黄 褐色 10YR2/4 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土
- 3 黄 褐色 10YR4/2 砂質土
- 4 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土
- 5 黄 褐色 10YR4/2 砂質土
- 6 黄 褐色 10YR4/3 砂質土
- 7 にぶい黄褐色 10YR4/3 砂質土
- 8 明 黄 褐色 10YR6/8 粘質土
- 9 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土
- 10 褐 色 10YR4/6 粘質土
- 11 褐 色 10YR4/6 砂質土
- 12 にぶい黄褐色 10YR7/3 砂質土
- 13 褐 色 10YR5/1 砂 利
- 14 にぶい黄褐色 10YR6/3 砂 利
- 15 明 黄 褐色 10YR6/8 粘質土

第4トレンチ

- 1 褐 灰 色 10YR4/1 砂質土
- 2 にぶい黄褐色 10YR7/3 砂質土
- 3 褐 灰 色 10YR5/1 砂質土
- 4 褐 灰 色 10YR6/1 砂質土
- 5 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂質土
- 6 にぶい黄褐色 10YR7/2 粘質土
- 7 にぶい黄褐色 10YR7/4 砂質土
- 8 黄 褐色 10YR5/6 砂質土
- 9 黄 褐色 10YR5/8 砂質土
- 10 黄 褐色 10YR5/6 砂質土

第5トレンチ

- 1 黄 褐色 10YR5/6 砂質土
- 2 黄 褐色 10YR5/8 粘質土
- 3 オリーブ褐色 2.5YR4/4 砂質土
- 4 褐 色 10YR4/6 砂質土
- 5 黄 褐色 10YR5/6 粘質土
- 6 黄 褐色 10YR5/4 砂礫土
- 7 黄 褐色 10YR5/4 砂礫土
- 8 にぶい黄褐色 10YR6/4 砂礫土
- 9 にぶい黄褐色 10YR7/2 砂礫土
- 10 にぶい黄色 2.5YR6/4 砂礫土
- 11 灰 黄色 2.5YR6/2 粘質土
- 12 明 黄 褐色 10YR6/8 粘質土
- 13 明 黄 褐色 10YR7/6 粘質土

第6トレンチ

- 1 にぶい黄褐色 10YR6/3 砂質土
- 2 褐 灰 色 10YR6/1 砂質土
- 3 褐 灰 色 10YR6/1 砂質土
- 4 明 黄 褐色 10YR6/8 砂質土
- 5 明 黄 褐色 10YR6/6 砂質土
- 6 明 褐 色 7.5YR6/8 砂質土
- 7 橙 褐色 7.5YR6/8 砂質土
- 8 灰 黄 褐色 10YR6/2 粘質土
- 9 黒 褐色 10YR2/2 粘質土
- 10 灰 白 色 5 Y 粘質土

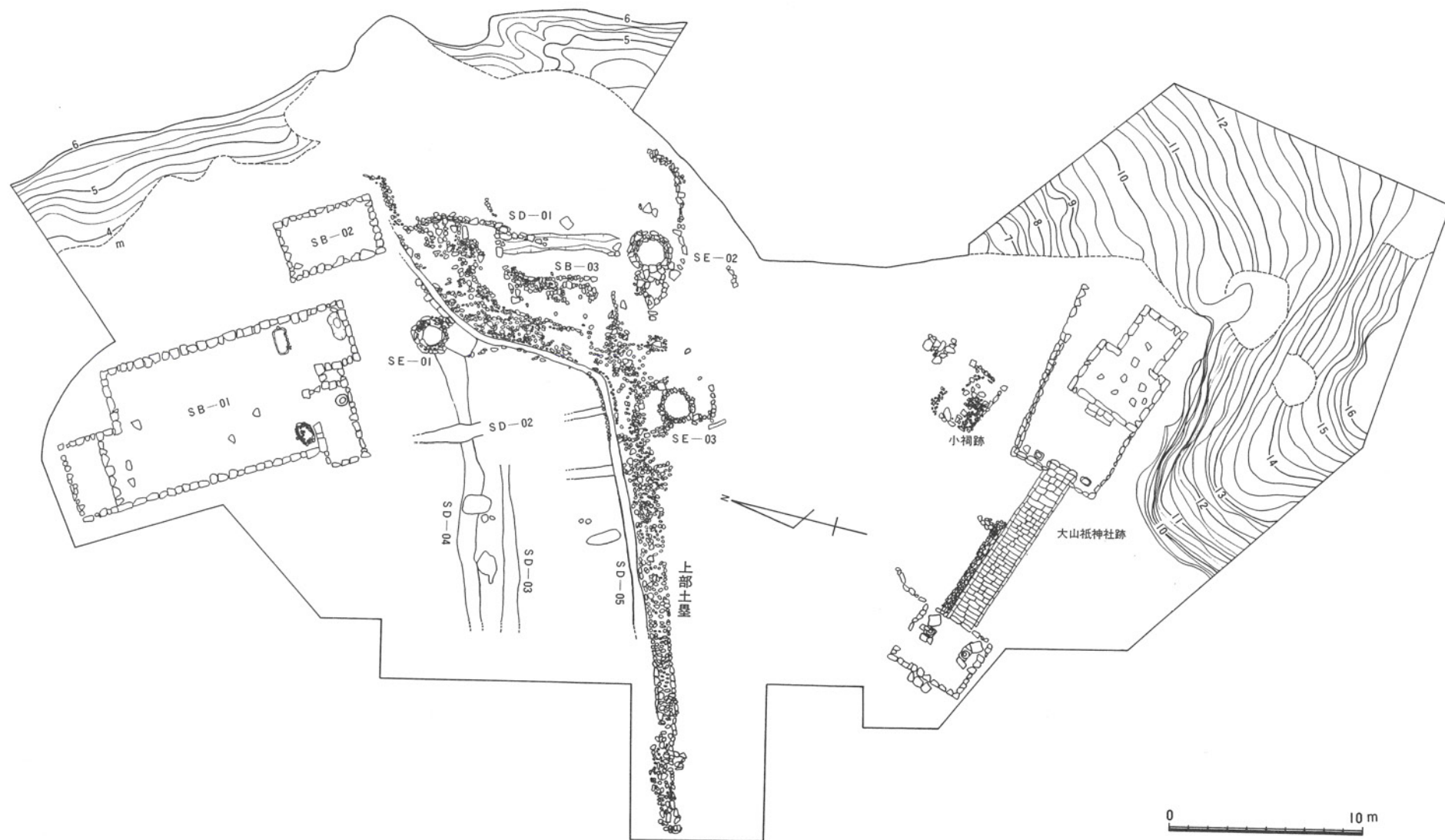


fig. 20 第1遺構面遺構配置図

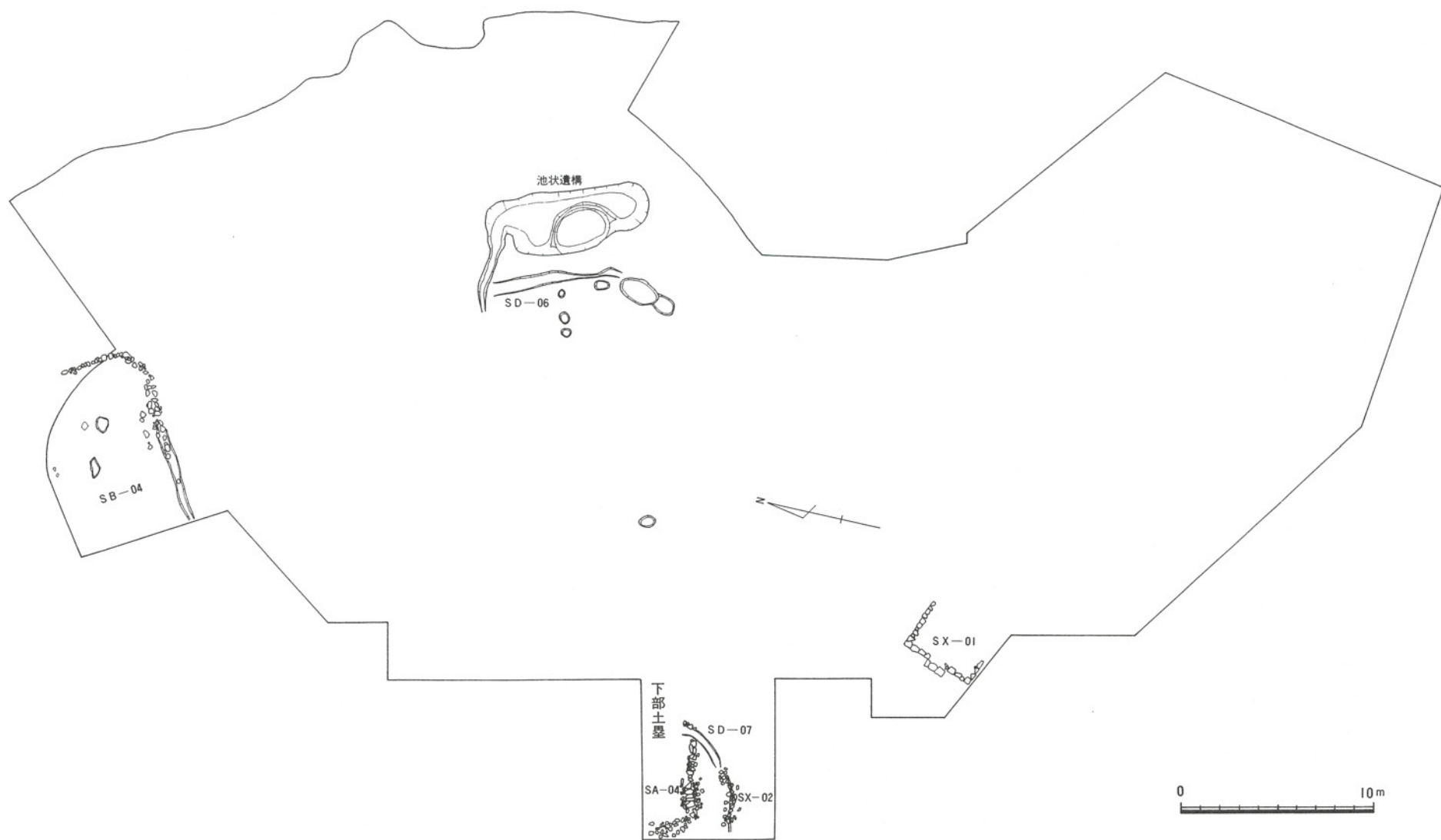


fig. 21 第2遺構面遺構配置図

構面直上までを指し、第1トレンチでは第2～5層、第2トレンチでは第2～7層、第3トレンチでは第2～6層、第4トレンチでは第2～10層、第5トレンチでは第2～4層にあたる。

(河野雄次)

(3) 遺構

第21調査区の層序は一定していなく、遺構相互の関連は把握しがたいが、便宜上、遺構面を2面に分けた。調査前から周知されていた遺構および表土(第1層)下の遺構を第1遺構面の遺構とし、第1遺構面の下層で検出された遺構を第2遺構面の遺構とした(fig.20, 21)。

第1遺構面は江戸時代末から現代、第2遺構面は江戸時代の中頃から末頃として捉えられる。そのため、調査区内における土地利用の開始は、江戸時代中頃とみられる。第1遺構面では、神社跡1、小祠跡1、礎石建物跡3、土塁3、井戸3、盛土状遺構1、溝状遺構5が検出された。第2遺構面では、神社に関連するとみられる配石遺構1、礎石建物跡1、土塁1、溝状遺構2、池状遺構1、石列状遺構1、土坑2、ピット5が検出された。

(河野雄次)

① 第1遺構面の遺構

a. 祭祀遺構

大山祇神社跡 (P.L. 5. 6. 7)

調査区の南端に位置する神社跡である。地元では大山祇神社と呼称し、出土した鳥居額にも大山祇神社と記されているので大山祇神社跡として把握した。

比高差約7.4mの山裾から山腹に築かれており、鳥居、石段、拝殿・本殿部分の3つに分けられる。全長約22.6m、長軸方向N70°Wであり、西面する(fig. 22)。

鳥居部分は山裾に築かれ、下層の配石遺構SX-01の約0.4m上に位置する。北、南、西の3方に0.2～0.5m大の砂岩角礫を1列に1段配し、方形区画を呈する。西を正面とし、東に鳥居を築く。配石は西約4.10m、北約3.35m、南約3.25m、配石のない東は幅約4.15mであり、ややいびつな長方形である。東には山裾をめぐるように配石がみられる。鳥居には0.7m大の御影石角礫を基礎として地中に埋め込む。直径約0.29m、深さ約0.13mの穴を穿ち、ここに鳥居脚の円柱を収める。円柱は直径約0.28mの御影石製であり、内側に傾くように構築され、上に向うに従い、直径を減じている。鳥居脚には、明治13年庚申(1880)春建立、水受には文政4年(1821)と陰刻されている。鳥居の他の部分および砂岩製の額がこのまわりに散乱した状況で検出された。

石段は全長約9.7m、傾斜角35°、段数38である。石段幅は1.35～1.6mであり、上段を広くと

1. 明褐色土
2. 黄褐色砂
3. にくい黄橙色土
4. 暗オリーブ色砂
5. にくい黄褐色土
6. 黄褐色土
7. 灰黄褐色砂
8. にくい黄褐色土

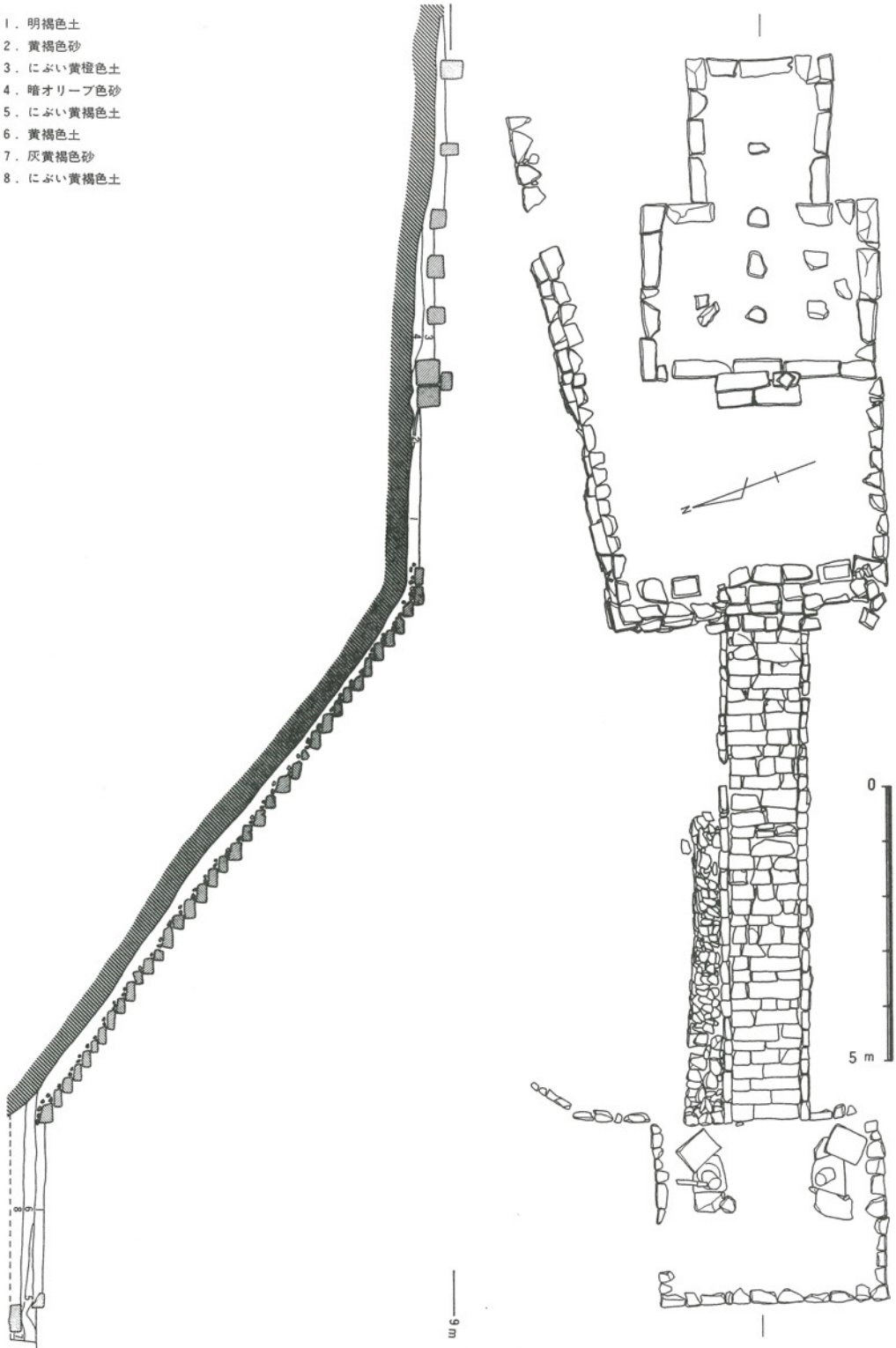


fig. 22 大山祇神社跡実測図

る。その両側に側石を設ける。北側には側石の外側に砂岩角礫を配し、土砂の流失を防いでいる。構築の順序は地山を整地し、0.1m以下の砂岩角礫を裏込めとするところから始める。その上に奥行0.3m、長さ0.15~0.8mの砂岩割石を配し、下から上へと積み上げる。上下の石のかりは約0.03~0.05mとわずかである。その後、両側に幅約0.15m、長さ0.2~0.6mの側石を傾斜角35°として1列に並べる。

拝殿・本殿部分には、方形区画の石垣を築き、整地後、拝殿・本殿の礎石を配している。石垣は西、北、南の3方に築かれ、東にはみられない。西の幅約5m、拝殿手前の中央部幅約5.5mであり、北の石垣が長軸方向からやや北に寄り、東を広くとっている。北と西の石垣には、0.3~0.6m大の砂岩割石を5~6段積み上げる。南には1段である。拝殿と本殿の礎石は、両者が接合して「凸」字形を呈している。拝殿の礎石の規模は、西約4.26m、東約4.28m、北約3.20m、南約3.30mである。この外周の礎石の内側に、南北3、東西2の礎石が認められることから南北2間(柱間4)、東西1間半(柱間3)の横長拝殿とみられる。西の正面に奥行約0.6m、長さ約1.52mで砂岩割石を2段積み上げて昇段とする。本殿の礎石は、拝殿の礎石より約0.3m上げて配されている。西約2.50m、東約2.67m、北約2.67m、南約2.70mのややいびつな方形である。外周の礎石の中央に1つの礎石が認められることから、1間四方(柱間2)の建物であったとみられる。南東隅に礎石がなく、浅い溝状の落ち込みが認められることから、排水機能をここにもたせていたとみられる。

拝殿・本殿の出土遺物に古銭、瓦、炭化物がみられる(fig.23)。拝殿・本殿は一度火災に遇ったものとみられ、礎石および拝殿

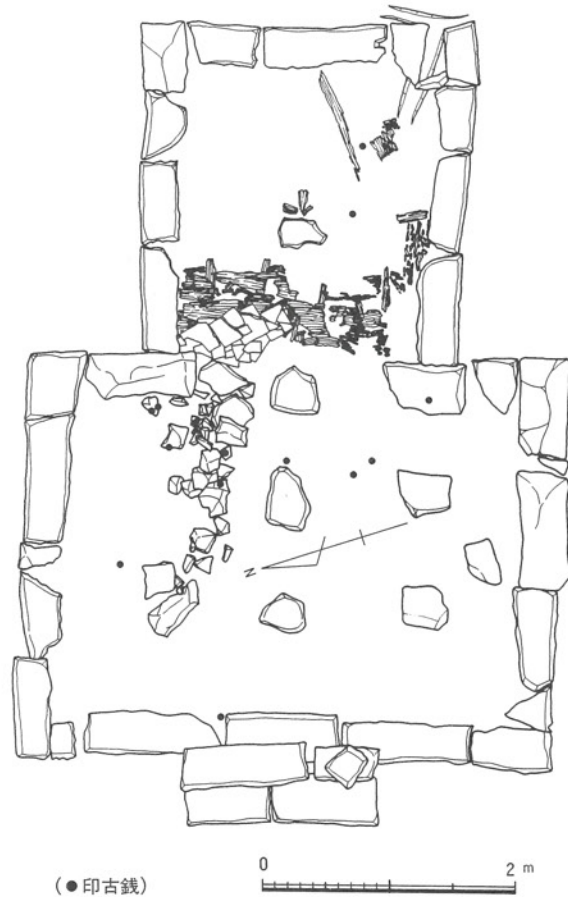


fig. 23 大山祇神社跡拝殿・本殿遺物出土状況実測図

北東部に散乱する砂岩角礫は火熱を受けている。また、本殿には、焼失した軒先が落下したそのままの状態で検出された。本殿の長軸方向に沿って炭化した垂木が4本平行に並び、その上に炭化した板材が長軸方向に直交する形で乗り、さらにその上に平瓦がのっている。その様子から、焼失した本殿の屋根は切妻形式に属するとみられる。古銭は寛永通寶が19枚出土し、拝殿および本殿の炭化物の下などに集中している。他に明治時代以降の銭貨もみられる。

小祠跡 (P L. 8. 9)

大山祇神社跡の拝殿・本殿部分の北斜面に位置する配石遺構であり、小祠跡とみられる。海拔5m前後の緩やかな斜面に築かれ、北に向けて下降する (fig. 24)。

0.15~0.50m大の砂岩角礫により、東西約3.35m、南北約2.30mの方形区画とする。長軸方向はN74.5°Eである。北部の配石は欠失しているため、南北幅は現存長である。そのため、東西1間半、南北は少なくとも1間の建物跡とみられる。この配石の内側から、平瓦、土師質土器(268, 269)が出土している。

この配石遺構の南西隅に、東西約2.10m、南北約1.20mの方形区画の配石がみられる。内側には0.10m前後の砂岩小円礫が敷き詰められている。礫中および礫上から、寛永通寶が10枚出土している。

(河野雄次)

b. 礎石建物跡

SB-01, SB-02,

(P L. 10. 11)

調査区の北寄りに位置する2棟の礎石建物跡である。調査前に家

屋が取り壊されたので上屋構造は不明であるが、南北15.2m (約8間)、東西8.2m (約4.5間)の母屋 (S B-01)と南北5.1m (約2.5間)、東西3.2m (約1.5間)の附属建物 (S B-02)とみられる。長軸方向はS32°Eであり、正面を南西に向けた建物跡である (fig. 25)。

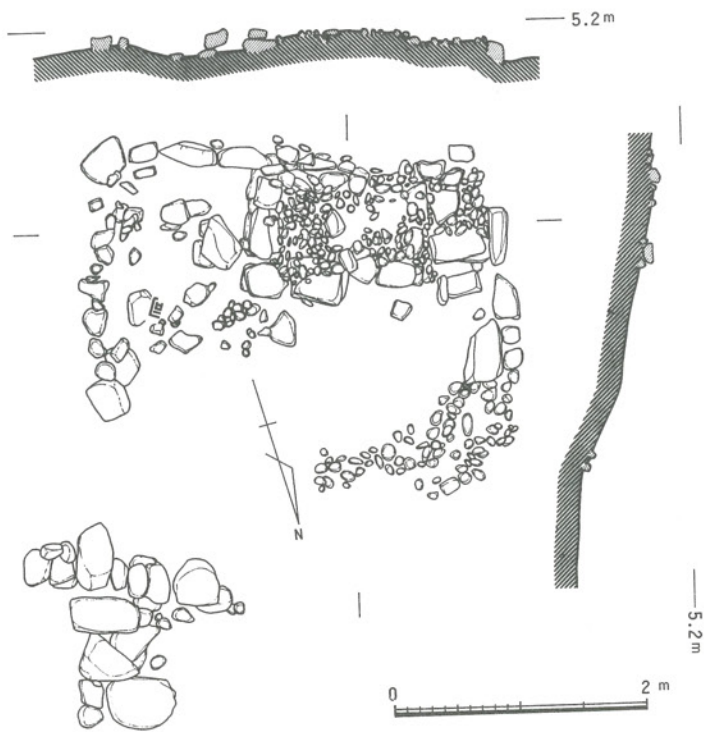


fig. 24 小祠跡実則図

母屋の主要部分には、25~75cm大の砂岩割石が外側に面をそろえて隙間なくならべられ、礎石列を形成している。北西と南西の張り出し部は、礎石が20~50cm大と小さく、しかも不ぞろいであり、後に増築されたものとみられる。南西の張り出し部には、直径約60cmの砂岩製石臼が埋め込まれている。

母屋の内部施設としては、カマド跡、土坑、石組遺構があり、外には直径約60cmの便所用埋甕がある。カマド跡は南東部隅に位置し、長径約150cm、短径約80cm、深さ約10cmの不整楕円形の浅いおちこみがあり、底面には焼土、炭化物がみられる。土坑は母屋の南東、石組遺構は南西に位置する。両者とも攪乱のため、上部を欠失している。土坑は、検出面では縦130cm、横70cmの隅丸方形であり、現存する深さは約10cmであるが、復元推定の深さは約30cmとみられる。長軸方向はS65°Wである。南辺に10cm大の砂岩礫がみられるが、素掘りとみられる。石組遺構は、検出面で縦115cm、横85cmの隅丸方形であり、現存する深さは約55cmであるが、復元推定の深さは約90cmとみられる(fig. 26)。長軸方向は土坑と同じく、S65°Wである。内部には、黄褐色粘土が敷きつめられ、その上に10~30cm大の砂岩割石が積み上げられて、竪穴式小石室に類似した様相を呈している。石の間隙には黄褐色粘土が充填され、石の前面すなわち4面の側壁は、黄褐色粘土で塗り込められている。また、側壁構築材として、砂岩の他に平瓦も転用されている。床面とした黄褐色粘土の上には、青灰色砂が堆積し、その上に黄褐色粘土が敷きつめられ、再び青灰色砂が堆積してい

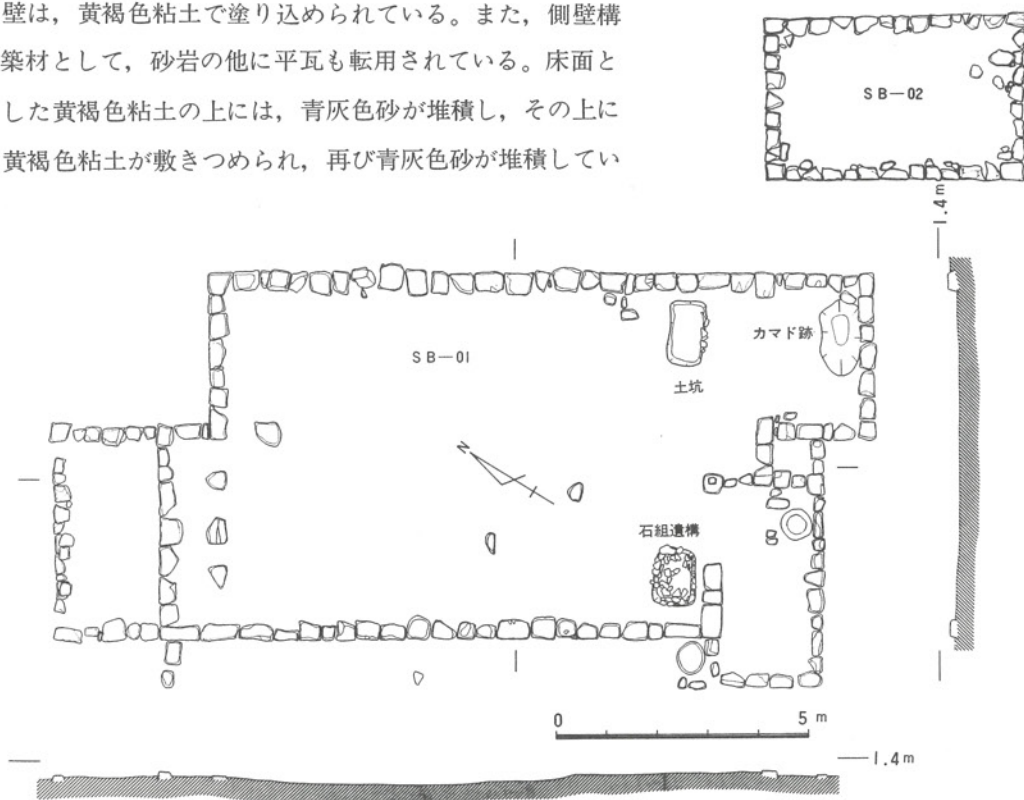


fig. 25 SB-01・02実測図

る。そのため、再度、床面を作り直して使用し、その後放棄されたものとみられる。

土坑、石組遺構とも母屋の内部にあり、その礎石列にほぼ平行あるいは直交していることから、この建物に付属し、しかも、日常生活に密着したものとみられる。そのため、その構造上から、イモアナなどの貯蔵穴としての用途が考えられる。

付属建物(SB-02)は母屋(SB-01)の南東に位置し、内部施設も認められないことから、納屋的性格を有する建物であったとみられる。

SB-03 (PL. 13)

東西にはしる土塁SA-01の北東に位置し、土塁SA-02によって西部が破壊された礎石建物跡である。現存する規模は、南北5.1m(約2間半)、東西3.2m(約1間半)であり、長軸方向はS14°Eである(fig. 27)。

礎石は内外に面をとった石列である。現存するのは、東と南および北の一部であり、西側の石列は欠失している。東側の石列は、20~50cm大の砂岩角礫が約60cm幅で内外に面をとって2列に並べられ、南端の一部が欠失している。北と南の石列はほとんど欠失しているが、東側と同じく2列に並べられていたとみられる。床面には、全面に炭化物・焼土が認められ、火災後、放棄されたとみられる。

磁器、陶器、瓦質土器の碗、瓶、香炉、徳利、鉢、燈明皿、皿、釜など日常生活に密着した遺物と瓦が出土している。規模は納屋的要素をもつSB-02に類似するが、出土

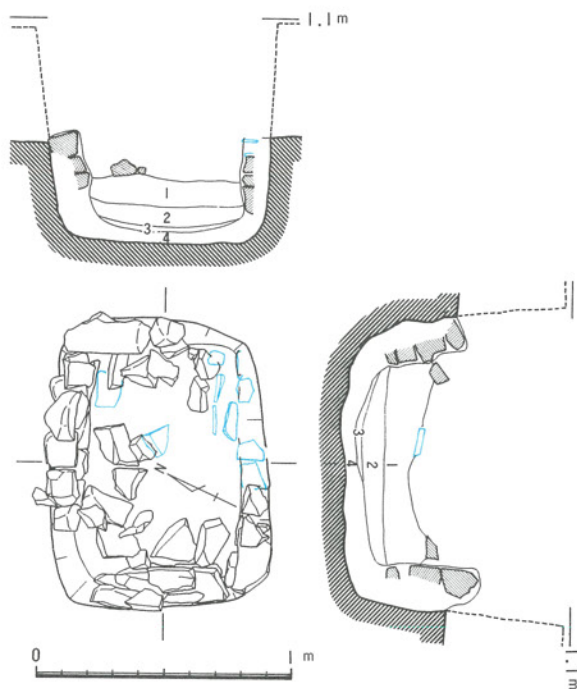


fig. 26 SB-01屋内石組遺構実測図

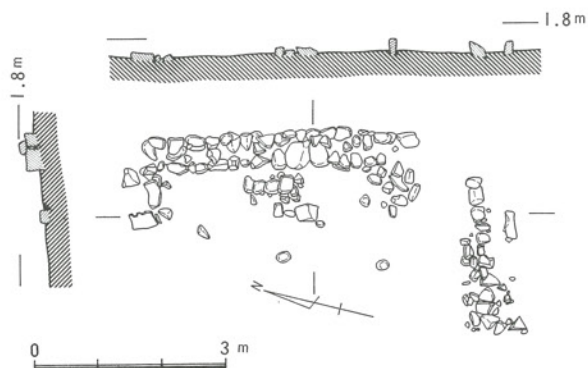


fig. 27 SB-03実測図

遺物の検討から、住居であったとみられる。

(河野雄次)

c. 土 塁

土塁は大山祇神社跡の北に位置し、東西に走る。SA-01とそれに接続するSA-02, 03, そしてSA-03の下層のSA-04の4本を検出した(fig. 28)。調査時には石垣としたが、構築状況から、土塁として扱う。

SA-01

試掘の折、一部欠失したが、全長約20mの土塁である。基底部幅は東部で約0.5m、西部では1~1.05m、残存高は0.5~0.6mである。断面は梯形を呈する。0.2~0.4m大の砂岩礫を両側に3~4段積み上げ、その間に0.1m内外の破岩角礫およびふい黄褐色粘質土を充填する。走行方向はN69°Eである。出土遺物は少なく、瓦がみられる。

SA-02

SA-01東端の北辺から北に伸びて、円弧を描きながら東の山裾に伸びる全長約11.7mの土塁である。北に伸びる部分は全長約6.7m、走行方向N5°E、円弧状の部分は全長約5m、走行方向N71°Eである。基底部幅0.7~1m、残存高0.3~0.5mであり、断面梯形を呈している。0.2~0.3m大の砂岩角礫を両側にほぼ垂直に3~4段積み上げ、その間に0.1m以下の砂岩角礫および黄褐色粘質土を充填する。出土遺物は陶器、磁器および土錘である。

SA-03

SA-01の西に、暗渠状構造をもって接続する全長約5.2mの土塁である。基底部幅0.9~1m、残存高0.55~0.70m、断面梯形を呈する。走行方向N72°Eであり、SA-01とはやや方向を異にする。0.2~0.4m大の砂岩角礫を両側にほぼ垂直に3~4段積み上げ、その間に0.1m内外の砂岩角礫およびふい黄褐色粘質土を充填する。出土遺物は磁器、陶器である。

(河野雄次)

d. 井 戸 (PL. 14)

井戸は3基検出された。すべて石組井側の井戸である。

SE-01 (fig. 29)

SE-01はSB-01の南側に検出された。上端の内法は直径90~100cmであり、平面的には不整形を呈している。完掘していないため、深さは不明であるが、3mを超えるとみられる。また、掘り肩も不明である。井側は20~40cm大の整えられた砂岩割石をほぼ垂直に積み上げられている。井側上部では、黄褐色粘土を石と石との間隙に充填する。井側外周には30~60cm大の砂岩自然石をめぐらしている。SE-01の南には、25~100cm大の結晶片岩板石を敷きつめ、溝状遺

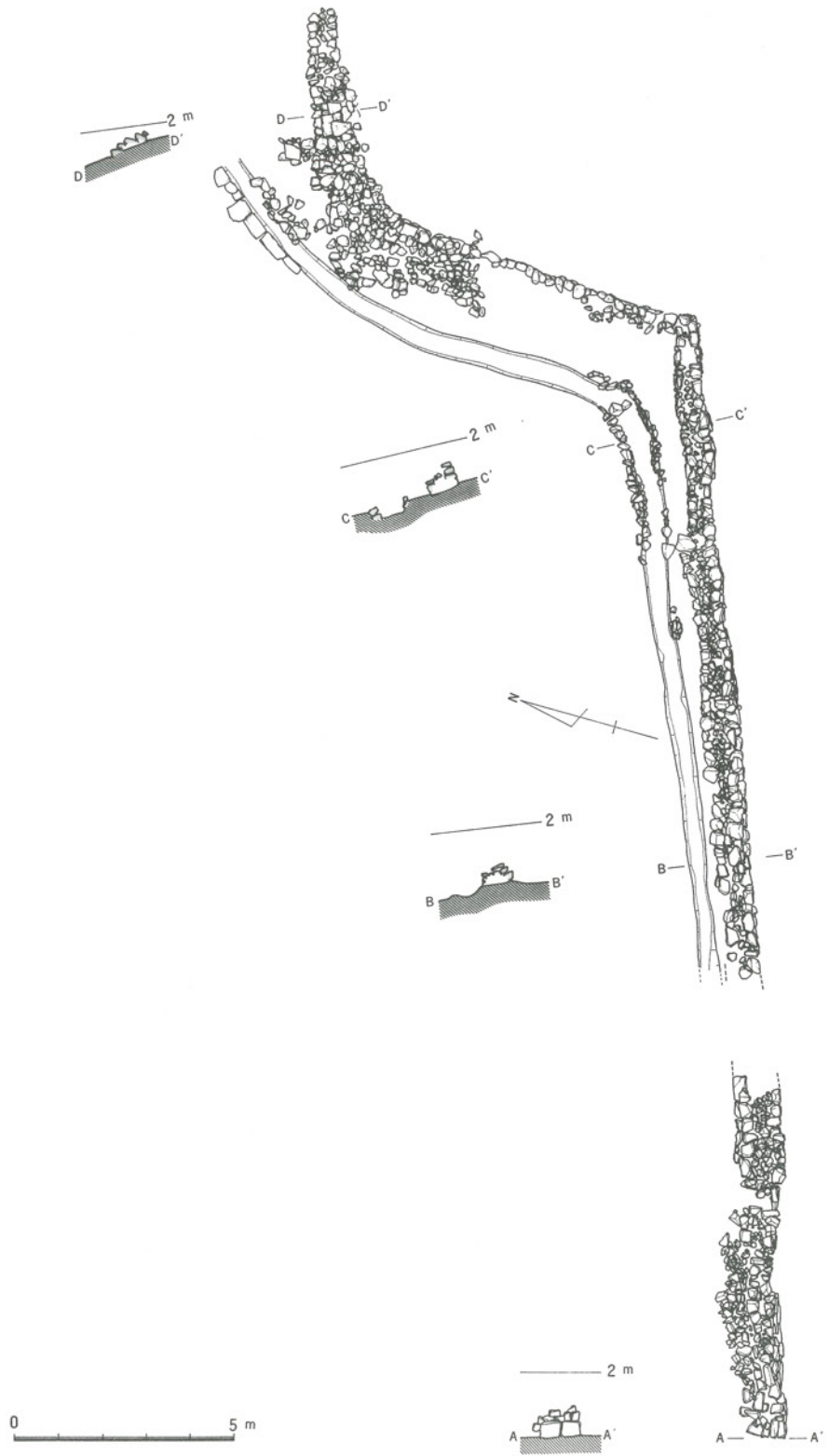


fig. 28 上部土壘実測図

構SD-05に排水できるようになっている。SE-01は礎石建物跡SB-01に伴い、最近まで使用されていたものとみられ、土砂などの埋積はみられない。未掘のため、下部構造および出土遺物は不明である。

SE-02 (fig. 30)

SE-02はSB-03の南側に検出された。上端の内法は直径135~145cmであり、平面的には不整形を呈している。完掘していないため、深さは不明であるが、5mを超えるものとみられる。また、掘り肩も不明である。井側は15~35cm大の砂岩割石が積み上げられている。断面梯形を呈し、下部を広くつくり出す。部分的に25~35cm大の整った割石がみられるが、全体と

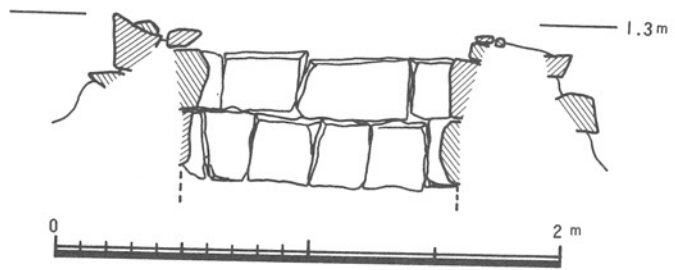
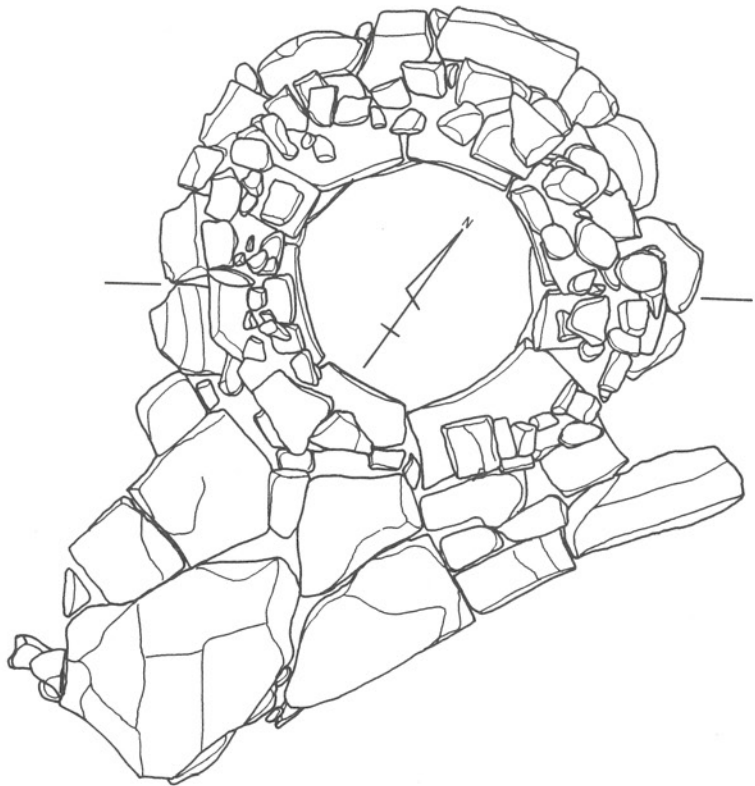


fig. 29 SE-01実測図

して、SE-01に比べ、やや粗雑なつくりである。井戸内には、SE-01と同じく、土砂などの埋積はみられない。未掘のため、下部構造および出土遺物は不明であるが、西側で軒丸瓦が出土している。

SE-03 (fig. 31)

SE-03は土塁SA-01の南、SE-02の西側で検出された。上端の内法は直径140~150cmであり、平面的には不整形を呈している。深さは約170cmである。掘り肩プランは不明である。井側は10~20cm大の不揃いの砂岩割石が雑然と積み上げられている。ほぼ垂直であるが、部分

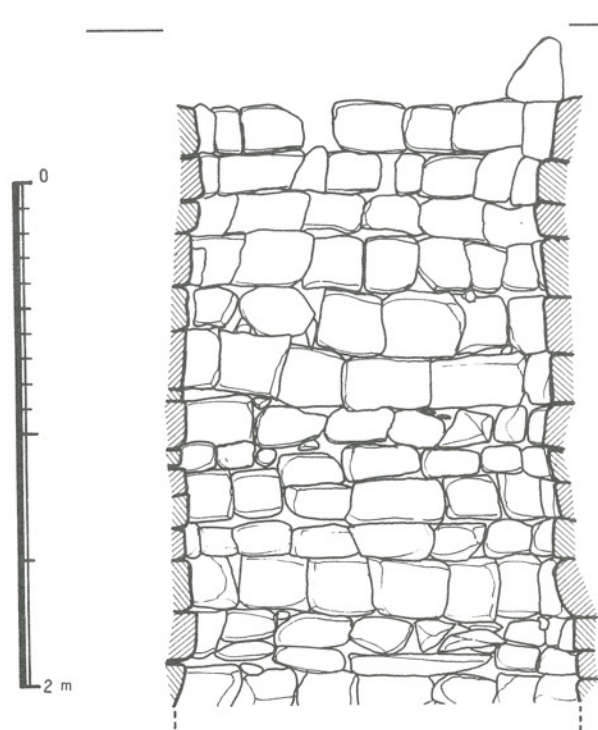
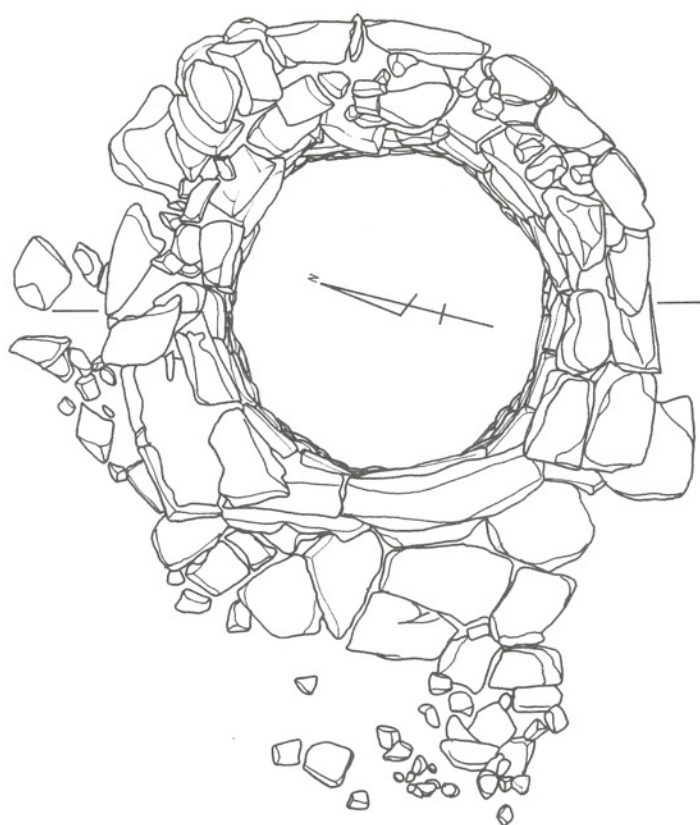


fig. 30 S E -02実測図

的には内側に膨みをみせ、直径115cmと狭くなっている。これは土圧により内側にせり出したものとみられる。他の2基に比べ、全体として粗雑なつくりである。井側上端の下70cmのところから土砂が約100cm埋積していた。にぶい黄褐色土と暗褐色砂の互層である。基底部に井筒あるいは水神祭祀などに関わる遺物はみられない。掘り肩中より陶器鉢(263)が出土している。

(河野雄次)

e. 盛土状遺構

土壘S A-02の南東で検出された盛土層であり、明瞭な遺構としての性格を有していない。短径約4.3m、長径約7.9mのいびつな長楕円形を呈する深さ約0.3mの浅いおちこみである(fig. 32)。磁器・陶器・土師質土器・瓦質土器などの土器類、土錘、砥石、鉄製品、銅製品、古銭など日常生活に関わる多量の遺物が出土している。そのため、廃物の投棄場所とみられる。

(河野雄次)

f. 溝状遺構

第1遺構面では溝状遺構を5条検出した。いずれも途中で途切れる。S D-01は北、S D-02は南、S D-03, 04, 05は西に流れる。

S D-01 (fig. 32) (P L. 13)

S D-01は土壘S A-02の南東にあたり、盛土状遺構の下層に位置する。井戸S E-02の北から北に向かって流れる。長さ約6m、幅0.7~1.0m、深さ約0.4mであり、断面U字形を呈する。磁器、陶器、瓦質土器などが多量に出土し、砥石もみられる。

S D-02

S D-02は土壘S A-02の西にあたり、礎石建物跡S B-01の南からS D-05に流れ込む。そのため、S B-01との関連が指摘される。中央部で途切れるが、長さ約9.5m、幅0.4~0.9m

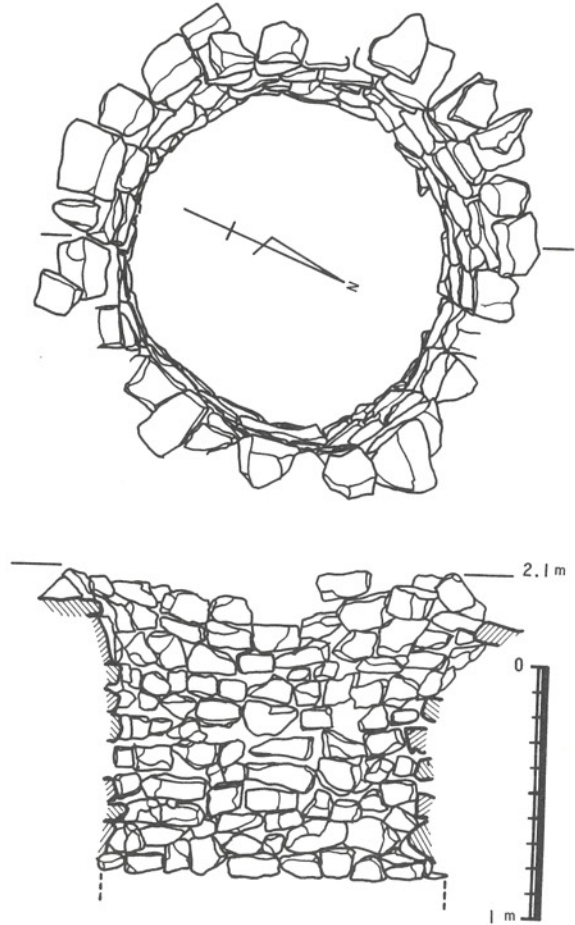


fig. 31 S E-03実測図

であり、深さは0.1m前後ときわめて浅い。磁器、陶器、土師質土器などが多量に出土している。

SD-03

SD-03はSD-02の途中で途切れる部分から西への海岸方向へ流れる。長さ約8m、幅0.3~1.0m、深さは0.1m前後ときわめて浅い。磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦などの小破片が48点出土している。

SD-04 (P.L. 16)

SD-04は井戸SE-01の西から西の海岸方向へ流れ、SD-02の下層に位置する。SE-01の排水溝とみられる。長さ約14m、幅0.6~1.4mであり、深さ0.1m前後ときわめて浅い。磁器、陶器、瓦質土器などの小破片が出土している。

SD-05 (fig. 28)

SD-05は土塁SA-01・02の北に位置し、土塁に沿って西の海岸方向に流れる。部分的に0.1~0.2m大の砂岩角礫を2段積み上げて護岸とするが、他の部分は素掘りである。基本的には東の山裾に集まる水を流す役割があり、同時に、SD-04と同じく井戸SE-01

の排水溝的な機能を有していたとみられる。長さ約27m、幅0.3~0.6m、深さ0.2m前後であり、断面U字形を呈する。出土遺物は少なく、磁器の菊鉢(258)、瓦などがみられる。

(河野雄次)

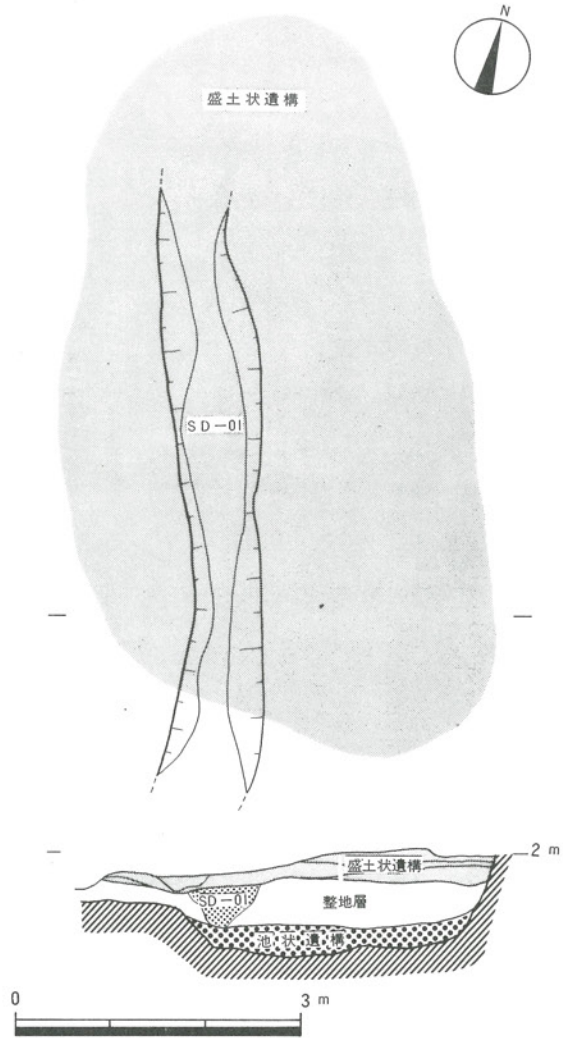


fig. 32 盛土状遺構・SD-01実測図

② 第2遺構面の遺構

a. 祭祀遺構

S X-01 (fig. 33)

大山祇神社跡の鳥居を構成する配石遺構の下層で検出した配石遺構である。上部配石遺構の直下約40cmに位置し、両遺構は平面的にはほぼ重複する。南北約4.35m、東西約2.85mの長方形プランを示す。

外側に面を取って1列に並べられているが、東側の山裾には配石はみられなく、南側は南東部が欠失している。西側のほぼ中央は配石が途切れ、その外側に張り出し部状に配石される。張り出し部には、40~55cm大の比較的大きい砂岩角礫であるが、他の部分には、20~50cm大の砂岩角礫が用いられている。また、張り出し部の高さは、他の配石部に比べて約5cm高くなっている。出土遺物はない。

大山祇神社跡の下層にあたり、大山祇神社に先行する祭祀跡、すなわち、社殿跡ともみられる。
(河野雄次)

b. 礎石建物跡

S B-04 (fig. 34) (P L. 15)

調査区の北端、S B-01の下層から検出された礎石建物跡である。東側に南北、南側に東西

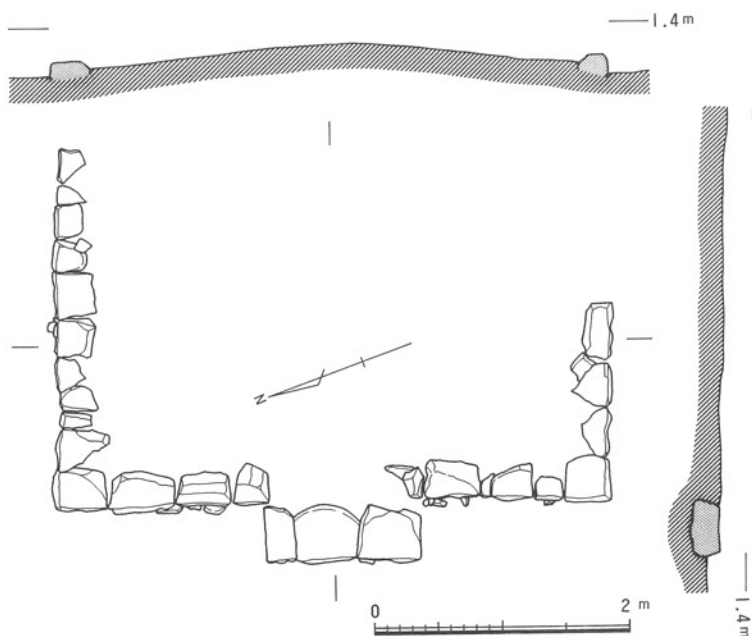


fig. 33 S X-01実測図

に伸びる石列を有するが、北と西側の石列の有無については、調査区外にかかるため、不明である。現存する規模は、東西約8.5m、南北約4mである。長軸方向はS 63°Wである。

石列には、20~40cm大の砂岩角礫が用いられている。東側の石列は外に面をとって一列に並べられているが、南側では雑然としている。

石列の内側の床面には、土坑が2箇所検出され、ともに炭化物と焼土がみられる。東の土坑は、長径約95cm、短径約45cmの不整楕円形であり、深さは約10cmである。西の土坑は、長径約90cm、短径約65cmの不整円形であり、深さは約15cmである。坑底の焼土の上には、10cm以下の砂岩小角礫が散乱し、すべて火熱を受けている。両者とも火を焚く施設が考えられるが、カマド跡であるかどうか不明である。

S B-04は遺存状況が悪く、住居とも納屋ともその性格を付与できない。出土遺物には、瓦と鉄釘がみられる。

(河野雄次)

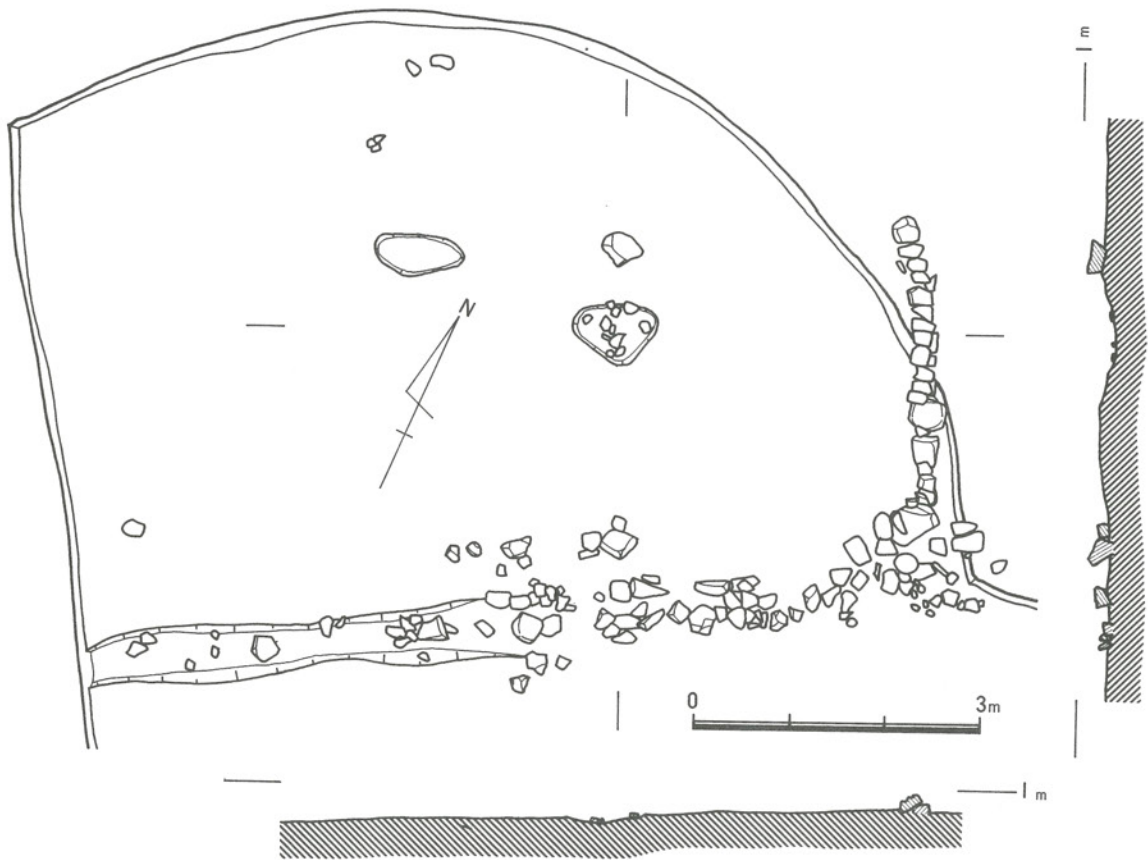


fig. 34 S B-04実測図

C. 土 壘

SA-04 (fig. 35)

SA-03の下層に位置し、東西方向から北に方向を転ずる土壘である。北部は調査区外であるため未確認であるが、検出した全長は約6.3mである。東西部分は全長約4.2m、走向方向N79°E、北に転ずる部分は全長約2.1m、走向方向N20°Wである。SA-03の直下であるため、上部は欠失しているとみられる。基底部幅30~100cm、残存高20~40cm、断面梯形を呈する。20~40cm大の砂岩角礫を両側に2~3段積み上げている。その間には40cm以下の砂岩角礫を無雑作に置き、にぶい黄褐色粘質土を充填している。出土遺物はない。

(河野雄次)

d. 石列遺構

SX-02 (fig. 35)

SA-04の南の東西に走る石列である。西は調査区外であるため未確認であるが、現認長約3mである。南に面を取り、15~35cm大の砂岩角礫を1~2段積み上げて、石積護岸的な様相を呈している。地形的にみて、南西に下降しているため、北東から南西に走るSD-07に関連がある施設ともみられる。出土遺物はない。(河野雄次)

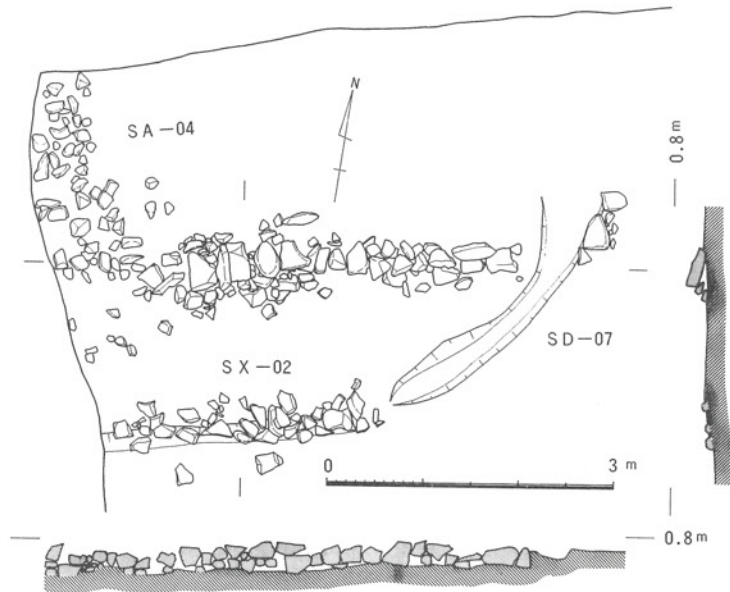


fig. 35 下部土壘・SX-02実測図

e. 溝状遺構

第2遺構面では溝状遺構を2条検出した。いずれも途中で途切れ、SD-06は北、SD-07は南西に流れる。

SD-06 (fig. 36)

SD-06はSD-05と池状遺構の間に位置し、南から北に流れる。長さ約7m、幅0.15~0.80m、深さは0.05m前後と浅く、自然の流れとみられる。出土遺物はみられない。

SD-07 (fig. 35)

土塁SA-01とSA-03の間の暗渠状遺構の下層から検出した溝状遺構である。北東から南西に伸びて、石列SX-02の手前で途切れる。長さ約3m、幅0.27~0.65m、深さは0.10m前後と浅い。出土遺物はみられない。
(河野雄次)

f. 池状遺構 (fig. 36)

盛土状遺構、溝状遺構SD-01の下層で検出した池状遺構である。南北に細長い長楕円形であり、北に排水機能をもつ小溝を付属する。池状遺構の中は3つに分けられる。南部の底は高く、段をもって北部へ流れる。西部はまわりに堤をめぐらし、深く掘り込んで北部の底と同レベルとする。長径約8.1m、短径約3.4m、深さ約0.4mである。埋積土は4層に分けられるが、第3層を除いてグライ化したオリブ灰色粘質土である。西部から下駄、曲物、板材、竹などの木製品と磁器(313)、東岸から磁器(308, 320~322, 325)が出土している。
(河野雄次)

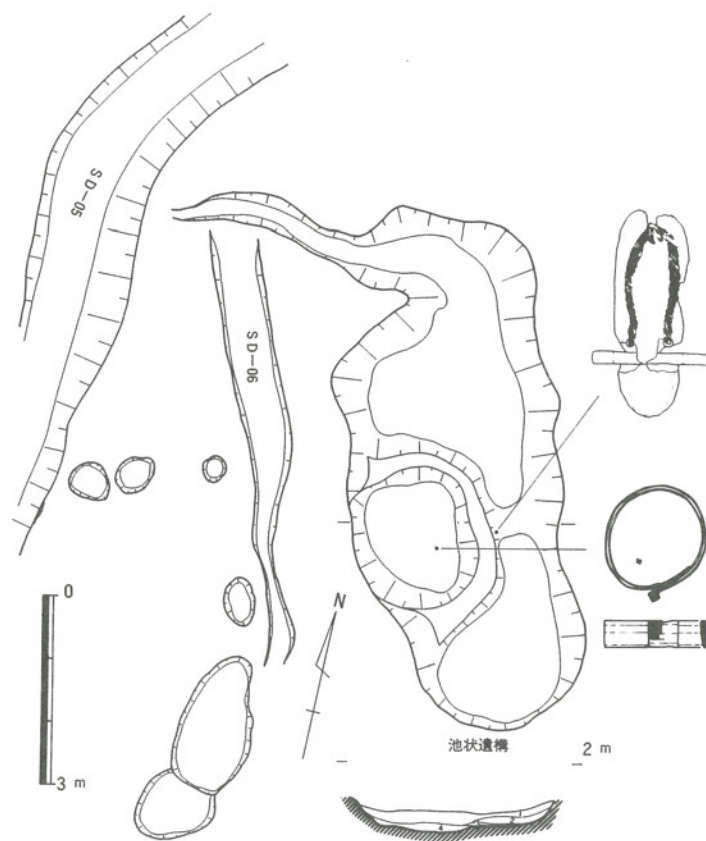


fig. 36 SD-06・池状遺構実測図

1. オリブ灰 2.5GY6/1粘質土
2. オリブ灰 5GY5/1粘質土
3. 黄 灰 2.5YR4/1粘質土
4. オリブ灰 2.5GY5/1粘質土

(4) 遺物

① 土器類

a. 第1層 (fig. 37~40 PL. 25~28)

第1層からは、磁器、陶器、瓦質土器が多数出土している。器形別には、碗9、猪口4、皿8、燭台3、鉢6、仏餉具1、壺4、徳利3、蓋9、甕2の49個体を図示した。

碗

碗9個体のうち、(1)の1個体が陶器であり、他は磁器である。形状から、口縁部が内わんするもの(2, 7, 8)、口縁部が外反するもの(3~6)、口縁部が大きく外反するもの(1, 29)の3つに分けられる。

(2)、(7)、(8)は胴部が内わんして立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。(8)は口径9.1cmと小型の碗である。胴部に赤の釉による松葉図を描く。呉須により、(7)には胴部に二葉図、(2)には胴部に遠山図を描く。

(3)~(6)は胴部が内わんして立ち上がり、口縁部が外反する。(5)、(6)は口径がそれぞれ9.1cm、8.7cmと小形の碗である。呉須により、(6)の胴部、見込に蔦図、見込中央に渦文、(5)の胴部に「寿」の文字文を描く。(4)は口縁部から胴部を遺存する。胴部に押印鋸歯連続文を配し、その直下に灰色の釉による1条の圏線をめぐらす。(3)は口縁部が大きく外反する。呉須により、口縁部内側に連続する格子文、見込中央に扇文を描く。見込底面にトチ痕を認める。

(1)は口縁部が内わん気味に大きく外反して立ち上がる大形の施釉陶器碗である。暗赤色の素地に乳黄色の釉をかけ、高台畳付に素地をみせる。(29)は口縁部が外に拡張してほぼ垂直に立ち上がる大形の碗である。呉須により胴部に八卦文、口縁部内側に逆卍文、見込中央に太極図、赤・黄・紫の釉により胴部に梅花図を描く。高台内に渦福の銘款を認める。

猪口

猪口4個体のうち、(30)が陶器であり、他は磁器である。形状から、盃形で口縁部が内わんするもの(9)、碗形で口縁部が外反するもの(10)、筒形(31)、筒形で口縁部が外反するもの(30)の4つに分けられる。

(9)は撥高台から胴部が内わん気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。見込には赤の釉による日の丸の旗と「凱旋」「露」の文字がみられ、日露戦争の凱旋記念に作られたものであろう。高台内に「原」の銘款。

(10)は碗形で口縁部が外反し、端部を丸くおさめる。胴部の口縁部直下に、呉須により「口間是四」の文字を描く。

(31)は筒形で口縁部がそのまま開き、蛇の目底につくる。呉須により胴部に山水図、口縁部

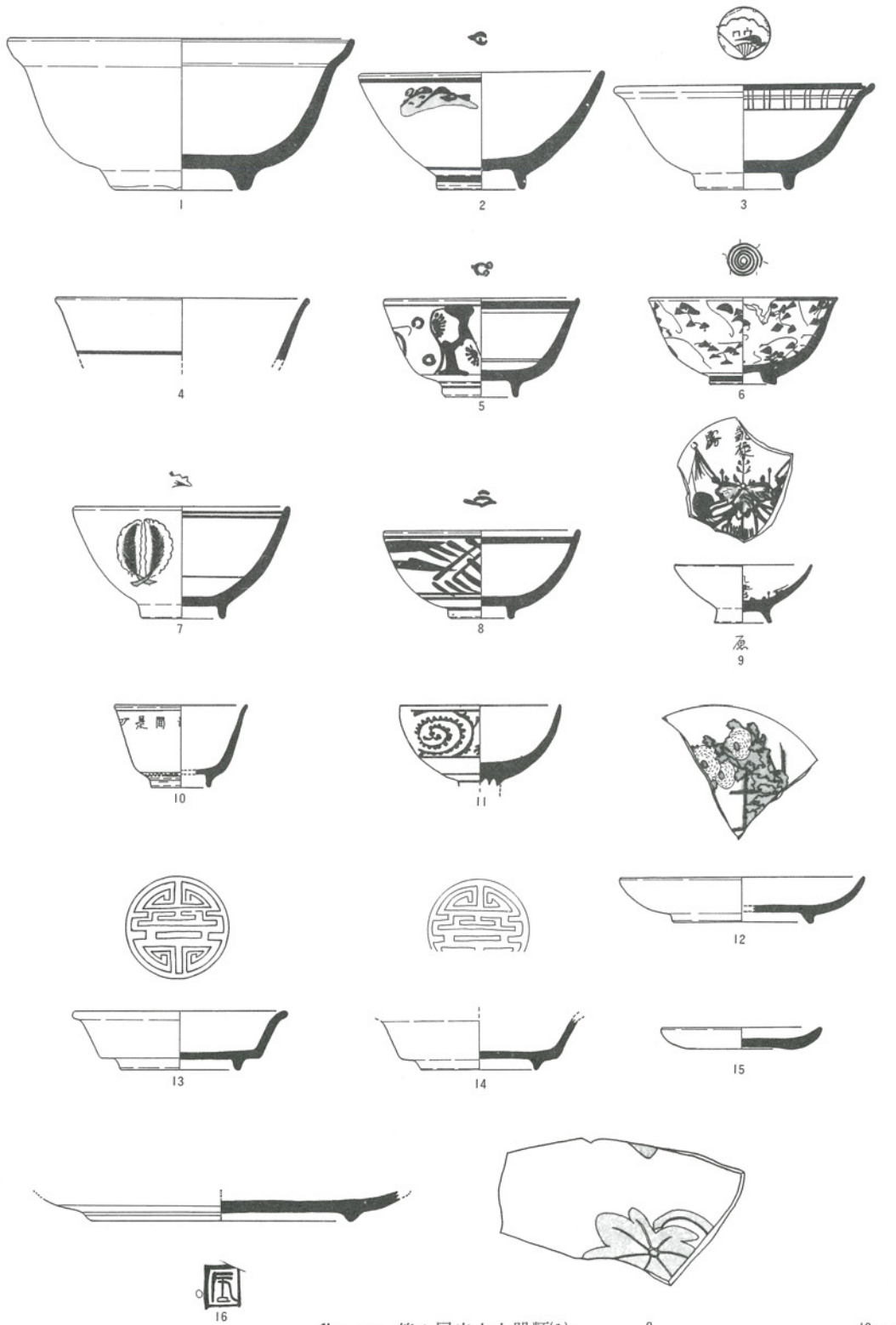


fig. 37 第1層出土土器類(1)

0 10 cm

内側に雷文を施す。

(30)は竹節状につくる筒形で口縁部がやや反外する大形の施釉陶器猪口である。

皿

皿 8 個体のうち、(15)が陶器であり、他は磁器である。平面形が円形のもの(12~16, 37)、多角形のもの(25, 26)に分けられるが、それぞれを形状別に分類した。

(15)は口縁端部を丸くおさめ、やや上げ底につくる施釉陶器の小皿である。糸切り底。内面に淡赤褐色の釉をかける。

(12)は口縁端部を丸くおさめ、撥高台を有する。内面には呉須で印判手法による朝顔図を施す。

(13), (14), (37)は口縁部が外反する。(13), (14)は腰部に明瞭な稜を形成する。内面には「寿」の文字文を押印する。(37)は口縁部を外に折り返して玉縁状につくり、高台内を蛇の目底につくる。内面には草文を呉須で描く。

(16)は低い高台をもつ底部の破片である。内面には八ツ手図を呉須で描く。高台内に「尻」の銘款。

(25)は方形の角切皿である。四方高台を有し、内面に印花文を施す。

(26)は八角形の皿である。内面に呉須で花図を描く。

燭台

燈明皿と台の機能を兼ね備えており、(178)に類似している。施釉陶器であり、大谷焼とみられる。

(38), (39)は筒状の脚部に皿状の杯部がつく。杯部の口縁部内側には、断面三角形の突帯がめぐり、燈明皿の受部とする。燈明皿は(130)に類似し、受部に接合されている。脚部は裾が広がって受皿的機能を付属させる。底部はやや上げ底である。

(40)は(38), (39)に類似するが、杯部の口縁部を外に拡張してひさし状とする。燈明皿の部分は欠失している。

鉢

鉢 6 個体のうち、(47)が陶器であり、他は磁器である。形状から、菊鉢(32~35)、口縁部が外反するもの(36)、播鉢(47)の3つに分けられる。

(32)~(35)は口縁部が菊花の形状を呈し、蛇の目高台を有する。(33)~(35)には、口縁端部に鉄釉による縁取り、内面に呉須で山水図を描く。(32)には呉須による唐草文を描く。内面には呉須で印判手法による松図と内底面に松竹梅図を配している。

(36)は口縁部が外に拡張して端部を平坦につくり出す大きな鉢である。呉須により、体部に梅図、口縁端部に雲文、内面に草花図を描く。

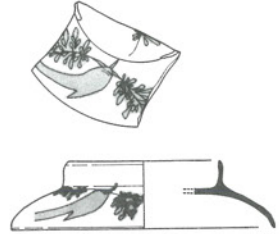
(47)は施釉陶器の片口の播鉢である。口縁部を外に肥厚して玉縁状につくり出す。口縁部直下に2条の凹線をめぐらす。高台はやや上げ底である。内面には7条/cmを単位とする播目を施す。



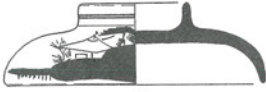
17



18



19



20



21



22



24



23



25



26



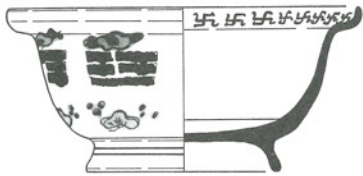
27



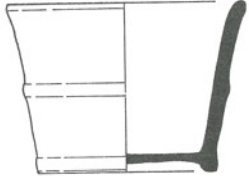
28



29



29



30



31

fig. 38 第1層出土土器類(2)



仏餉具

(11)は脚部を欠失する磁器の仏餉具である。碗部は内わんして立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。胴部に呉須で蛸唐草図を描く。

壺

4個体とも施釉陶器の壺であり、(43)、(44)は大谷焼である。

(43)は底部を欠失している。体部は内傾し、口頸部はほぼ垂直に立ち上がって短く、端部を丸くおさめる。

(44)は体部下半が欠失している。口縁部は外反して外に拡がり、丸い端面をつくり出す。

(45)は体部下半を欠失する耳付壺である。耳は欠失しているため、その形状は不明である。口縁部は外反気味に内傾して、端部を丸くおさめる。灰色の素地に淡緑色の釉をかける。貫入を認める。

(42)は体部下半を遺存する高台を有する壺である。体部に貫入を認める。

徳利

徳利3個体のうち、(28)が磁器であり、他は施釉陶器である。神酒徳利(27、28)、大形の徳利(46)の2つに分けられる。

(28)の体部には、呉須で梅花図を描く。(27)の体部は方形に成形され、その一面に「大神宮」と刻字されている。底部に接合痕があり、型物とみられる。

(46)は高い高台を有し、高台脇に1条の凹線をめぐらす大谷焼の徳利である。胴部最大径部分に刻字を認める。

蓋

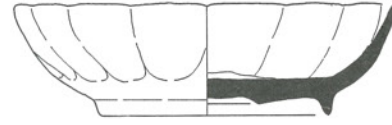
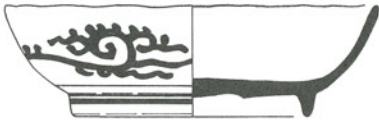
蓋9個体のうち、(20)、(24)、(41)が陶器、(22)が瓦質土器であり、他は磁器である。形状から、高台状のつまみを有する山蓋(17~19)、山蓋で天井部と口縁部がほぼ直交するもの(21)、つまみがなくて口縁部内側にかえりをもつ山蓋(23)、つまみをもつとみられる山蓋(41)、宝珠つまみをもつ山蓋(24)、擬宝珠状つまみをもつ落蓋(20、22)の6つに分けられる。

(17)~(19)は高台状のつまみをもち、口縁部が内わんして端部を丸くおさめる磁器の蓋である。(17)には天井部に黒色の釉で山間庵図を描く。(18)には天井部に月に薊図、つまみ内に「竹泉」の銘款、(19)には天井部に花鳥図を呉須で描く。

(21)は方形で口縁部内側にかえりをもち、印合蓋とみられる。天井部に呉須で松に折鶴図を描く。

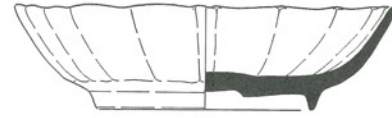
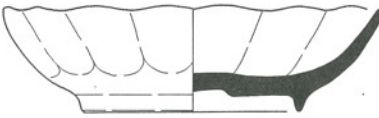
(23)は天井部がほぼ平坦で、稜を形成して口縁部が外に拡がり、内側にかえりをもつ。天井部および稜と口縁部との間に、暗緑色の釉で丸文を描く。貫入を認める。

(41)はつまみを有する山蓋とみられる。内わんして下がる天井部に大きく拡がるひさしがつく。施釉陶器。



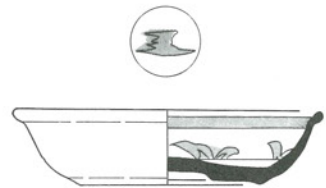
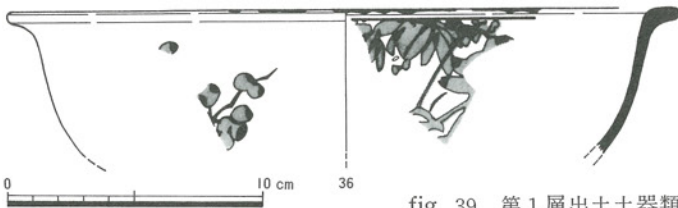
32

33



34

35



0 10 cm

36

37

fig. 39 第1層出土土器類(3)

(24)は宝珠つまみをもつ施釉陶器であり、天井部に直径2mmの穿孔が認められることから、急須の蓋とみられる。天井部には5方に押印文を施す。

(20)、(22)は擬宝珠状つまみをもつ落蓋である。(22)は砂粒を多く含み、胎土の粗い瓦質土器である。つまみは退化して、ほとんどその用途を有しない。(20)は灰黄色の素地に黄濁色の釉をかけるやや軟質の陶器である。ひさしに呉須で連結文を描く。

甕

2個体とも無釉陶器である。

(272)は体部下半を欠失している。体部は内わん気味に立ち上がり、広いくぼみを形成して口縁部に至る。口縁部は内外に拡張して、広い端面をつくる。

(414)は体部上半を欠失している。体部は広い平底からほぼ垂直に立ち上がって大きく外反する。
(益岡 秀樹)

b. 包含層(fig. 41~51 P.L. 29~39)

包含層では、磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器が多数出土している。ここでは、器形別に碗42、猪口8、皿39、燈明皿7、燭台3、鉢16、茶入4、壺2、甕4、香炉2、火舎2、土釜2、仏餉具2、花生9、土瓶2、徳利32、蓋19を図示した。

碗

碗42個体の内訳は磁器40、陶器2である。磁器のうち、(61)は赤絵であり、他は呉須による絵付けがなされている。形状から、胴部が内わんして立ち上がるもの、胴部が直線的に立ち上がるもの、口縁部が外反するもの、鉢に近い形のものなどに分類される。

(48)~(52)、(56)、(61)、(64)、(66)、(69)は胴部が内わんして立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。(48)~(50)はくらわんか手である。(48)には胴部に丸文、口縁部内側に四ッ割花卉連続文、(49)には胴部に氷裂菊花文、(50)には胴部に網目文を描く。(51)は大谷焼の陶器である。高い高台を有し、高台脇と高台に素地をみせる。(52)と(64)には見込に2条の圈線、見込中央に五弁花を描く。(64)は見込に素地をみせる。(56)は撥高台を有する。胴部に蔦図、口縁部内側に四ッ割花卉連続文を描く。(61)には胴部と口縁部内側に赤絵松葉文を描く。(66)には胴部に桃図、口縁部内側に四ッ割花卉連続文を描く。(69)には胴部に竜・花図、口縁部内側に雷文を描く。

(67)、(73)、(78)~(81)、(83)、(88)、(94)は胴部が外方に直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。(67)には胴部に山水遠山図を描く。(73)は口縁端部をやや鋭角的におさめる。胴部に松図を描く。(78)は高い高台を有し、高台内に兜巾をみせる。胴部によるけ縞文、見込中央に芝文を描く。(79)も高い高台を有する。胴部に撫子文を描く。(80)は小さくて低い高台

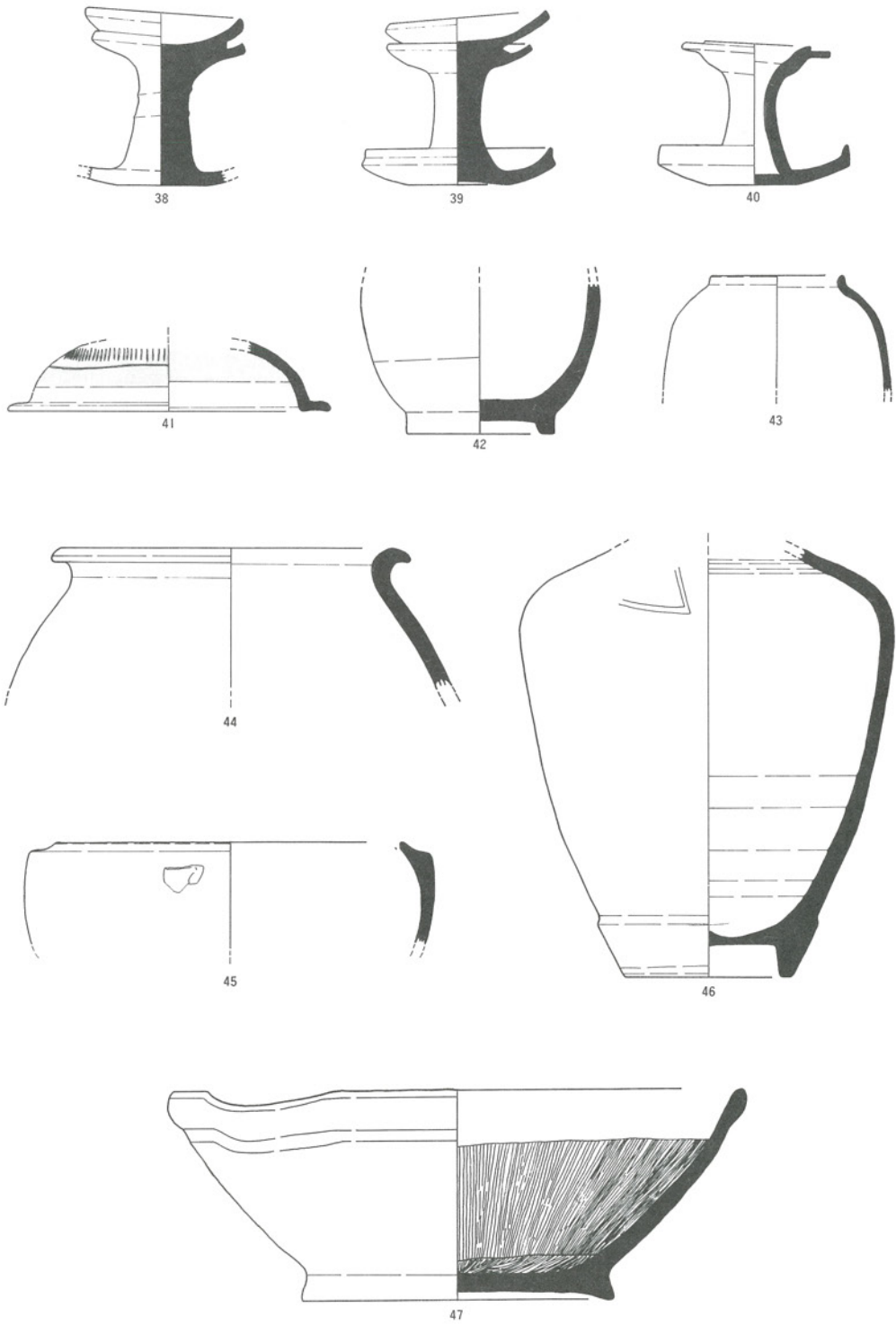


fig. 40 第1層出土土器類(4)



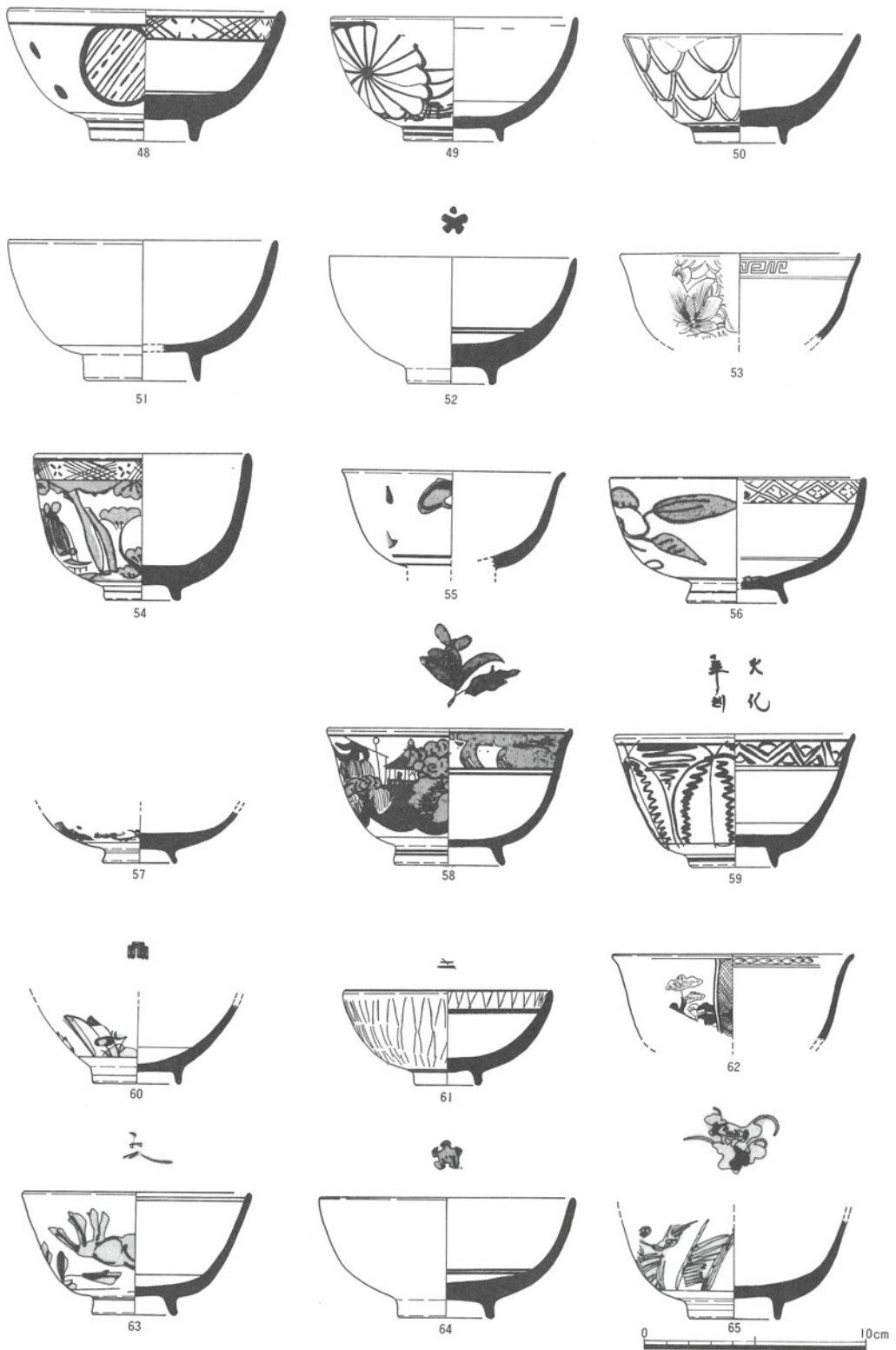


fig. 41 包含層出土土器類(1)

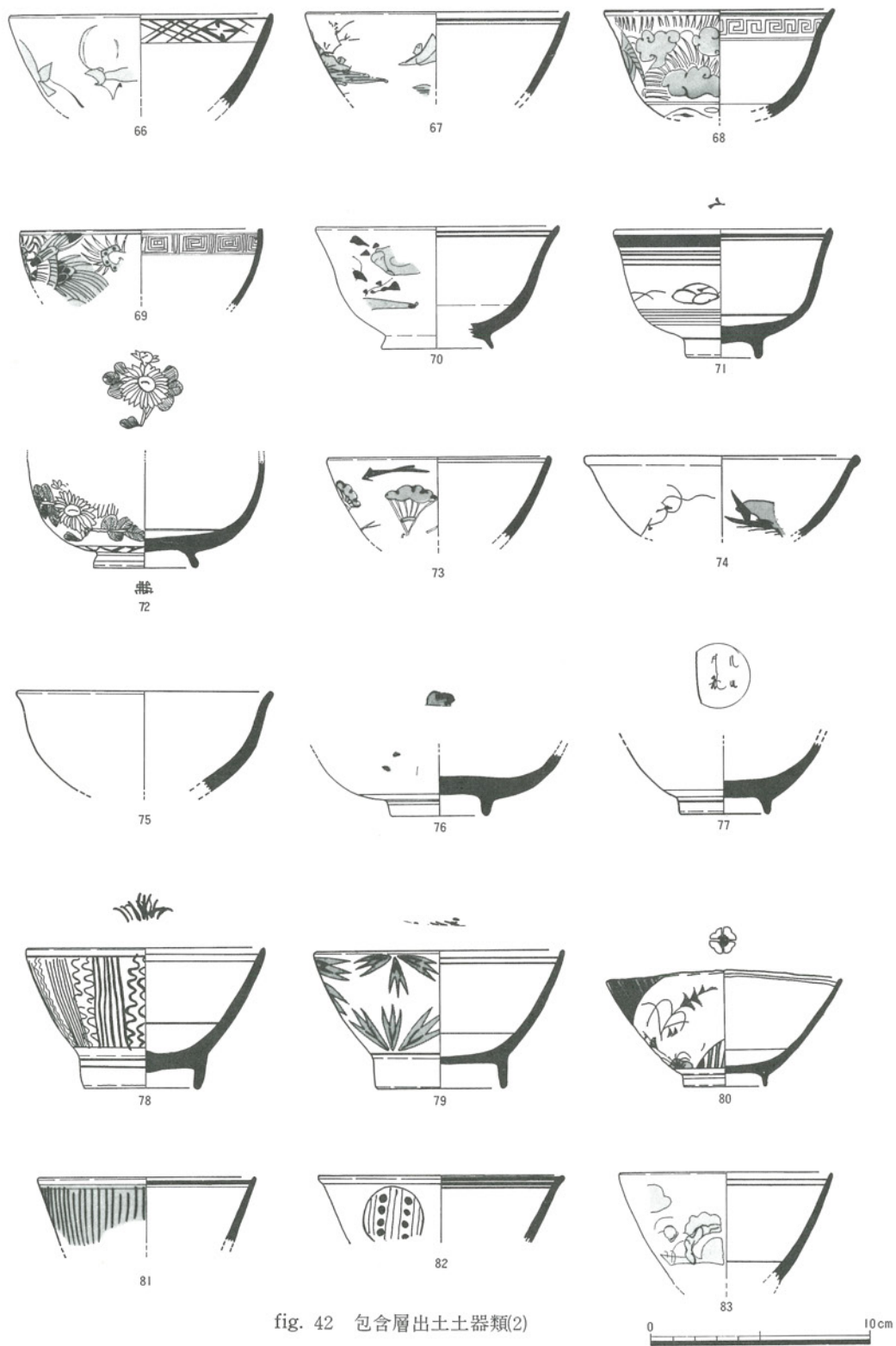


fig. 42 包含層出土土器類(2)

を有する。胴部に粹絵羊歯図，見込中央に花文を描く。(81)には胴部に縞文を描く。(83)は口縁部がわずかに外方に肥厚する。胴部に草花図を描く。(94)は口縁部が外方にわずかに肥厚する。胴部に山水図，口縁内側に雷文を描く。

(54)は胴部が腰部分からほぼ直立し，口縁部を丸くおさめる。見込にトチ痕を認める。胴部に風景図，口縁部外側に四ッ割花卉連続文を描く。

(53)，(55)，(58)，(59)，(62)，(63)，(68)，(70)，(71)，(74)，(75)，(82)，(91)～(93)，(96)は口縁部が外反する所謂「端反り」の形状を示す。(53)には胴部に花図，口縁部内側に雷文を描く。(55)には胴部に松図を描く。(58)の高台は撥高台である。胴部に花・楼閣図，口縁部内側に帆船図，見込中央に花文を描く。(59)には胴部に瓔珞文，口縁部内側に山形の連続文，見込中央に「大化年制」の銘を描く。(62)には胴部に松図，口縁部内側に葉形の連続文を描く。(63)には胴部に草花図，見込中央に「文」の文字銘を描く。(68)には胴部に鳥・雲図，口縁部内側に雷文を描く。(70)には胴部に花図を描く。(71)は高台内に兜巾をみせる。胴部に圏線と秋草図を描く。(74)は口縁端部を外に折り返し，口縁部を玉縁状につくる。胴部に蔦図，見込に葉図を描く。(82)には胴部に丸文を描く。(91)は印判手であり，猪口に近い形状を有する。(92)は陶器であり，瀬戸焼とみられる。口径9cmと小さく，猪口に近い形状を有する。全面に貫入がみられる。(93)には胴部によろけ縞文を描く。(96)は口径8.8cmと小さく，猪口に近い形状を有する。胴部と見込中央に紐文を描く。口縁端部に鉄釉を施す。愛知県かみた窯製とみられる。

(57)，(60)，(65)，(72)，(76)，(77)は底部の破片であり，口縁部の形状は不明である。(57)は撥高台を有し，見込にトチ痕を認める。胴部に菊花図を描く。(60)には胴部に草花図，見込中央に源氏香を描く。(65)は腰部を形成する。胴部に草花図，見込中央に花図を描く。(72)は撥高台を有し，腰部を形成する。高台内に兜巾をみせる。高台脇に葉繋ぎ文，胴部に菊花図，見込中央に菊花図を描く。(76)は高台内に兜巾をみせる。見込にはトチ痕を認める。見込中央に五弁花を描く。(77)には見込にトチ痕を認める。高台内に銘あり。

猪口

猪口は盃としての機能をもつ8個体を図示した。磁器5，陶器3であり，明瞭な腰部を形成しないもの(99，100)，腰部を形成するもの(101～103)，口縁部が外反するもの(97，98)，筒形のもの(104)の4つに分類される。

(99)，(100)は低い高台を有し，口縁端部を丸くおさめる。(100)は高台内に兜巾をみせる。(99)には胴部に呉須で花文を描く。

(101)～(103)は陶器である。低い高台から腰部を形成し，胴部は内わん気味に内傾し，口縁端部を丸くおさめる。高台内に弱い兜巾をみせる。腰部と高台に素地をみせる。

(97)，(98)は低い高台と腰部を有し，口縁部が外反する。(97)は胴部に低い突帯をめぐらし，

竹節状とする。見込に「合」の屋号をコバルトブルー色の釉で入れる。(98)には見込に山水図を呉須で描く。

(104)は下が細く、上に開く筒形である。底部は上げ底気味の筒底である。胴部に赤絵で花に稲束図を描く。

皿

皿39個体の内訳は、磁器17、陶器21、土師質土器1である。磁器には、呉須による絵付けが施されている。器種、形状から6つに分類される。腰部を形成し、口縁端部を丸くおさめるもの。腰部を形成せずに、体部が直線的に立ち上がるもの。口縁部が外反するもの。紅皿。陶器の丸底に近い小皿。陶器の高台を有する大皿。土師質の小皿。

(108)、(109)、(113)、(114)、(117)~(119)は磁器で、高台を有する。腰部を形成して、胴部が内わん気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。(109)には体部に蛸唐草文、口縁部内側に四ッ割花卉連続文、見込中央に松竹梅を描く。(119)は高台がやや外に開く撥高台を有する。体部に秋草・文字文、口縁部内側に四ッ割花卉連続文を描く。(108)は撥高台を有し、口縁部内側に弱い段をみせる。体部に磯馴松図、口縁部内側に四ッ割花卉連続文を描く。(113)は撥高台を有する。口縁部内側に四ッ割花卉連続文、見込中央に花文、高台内に「董」銘を描く。(114)は口径に較べて、大きい高台を有する。体部に松に八ッ手図、見込中央に「寿」の文字文を描く。(117)も口径に較べて、大きい高台を有する。わずかに外に開く撥高台である。体部に暦手文、見込中央に「寿」の文字文を描く。(118)の高台内は深く切り込まれている。見込に松、帆船図を描き、見込中央に瓢箪、花生、「寿」、「寶」の文字などを押印する。

(121)~(123)は腰部を形成せず、高台から体部がわずかに内わん気味に立ち上がり、口縁部を丸くおさめる。高台は低く、体部に絵付けはみられない。見込にドーナツ形に素地をみせる。口縁部内側に斜格子文を描くが、(121)には簡略化した斜格子文を暗緑色の釉で描く。(121)、(122)の高台畳付けに素地をみせる。(121)は高台脇に段を形成する。

(106)、(110)~(112)、(115)、(116)、(120)は口縁部が外反する磁器皿である。(106)は口縁端部が波状となり、菊皿とみられる。断面三角形の低い高台を有し、素地をみせる。内面に花図を描く。(110)~(112)は高い高台を有し、口縁部がわずかに外反する。(110)には体部に鶴飛翔図、口縁部内側に雷文、(111)には体部に遠山図、(112)には体部に網目文、口縁部内側に格子連続文、見込中央に柳文を描く。(115)、(116)は口縁部が大きく外反し、見込に「寿」字文を押印する。両者とも高台脇から体部にかけて明瞭な稜を形成する。(115)の高台は低く、高台内にわずかに兜巾をみせる。(116)の高台は高い。

(105)は浅い紅皿である。体部は内わんして外方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。高台は低い、深く削り出され、高台内に兜巾をみせる。

(130)～(134), (136)～(150)は口径6.3～10.8cmの施釉陶器の小皿である。煤が付着していることから、燈明皿として用いられたとみられる。(131)～(134), (138), (143), (147), (148)は丸底に近い。口縁部外側から内面に暗赤褐色の釉をかける。(137), (139), (142), (146)は丸底に近い平底である。口縁部外側から内面に暗茶褐色の釉をかける。(139)と(142)は特徴がほぼ類似しているため、同一個体とみられる。(130), (136), (145)は平底である。(130)は口縁端部を鋭くおさめ、全面に暗茶褐色の釉, (136)は全面に黒褐色の釉, (145)は体部下半を除いてにぶい褐色の釉をかける。(140), (141), (144), (149)は碁笥底である。口縁部外側から内面に淡黄灰色の釉をかけ、施釉面には細貫入を認める。内底面にトチ痕がみられる。(141)の口縁端部を打ち欠き、芯出しとする。(149)の内底面には、3条を単位とする平行沈線を3帯施す。(107)は陶器の大皿である。高台を有し、口縁部を肥厚させ、端部を丸くおさめる。内底面に鼠浮出図を象り、暗灰褐色の釉をかける。

(135)は土師質土器の小皿である。体部は直線的に外方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部に1条の凹線をめぐらす。底部は欠失しているが、穿孔されていたとみられる。胎土は密であり、焼成は良好で堅緻である。色調は淡褐色を呈する。

燈明皿

皿の項に示した燈明皿としての用途をもつ施釉陶器の小皿の他に、ここでは燈明皿としての機能を明確にしているものを7個体図示した。すべて施釉陶器であり、皿の口縁部内側に断面三角形の突帯をめぐらし、その1～3箇所半に半月形あるいは三角形の切り込みを入れ、芯出しとしている。

(151), (154), (155)は突帯が口縁端部より低く、丸底に近い平底である。口縁部外側から内面に暗赤褐色の釉をかける。(151)は突帯の半分が欠失している。鋭い工具で三角形の切り込みを1箇所入れる。(154)は半分欠失し、半月形の切り込みが2箇所であるが、(155)と同じく、3箇所であったとみられる。

(157)は突帯が口縁部より低く、突帯の断面は蒲鉾形である。3分の1が欠失している。半月形の切り込みを1箇所入れる。丸底に近い平底であり、口縁部内側から内面に暗赤褐色の釉をかける。

(152)の突帯は口縁端部よりわずかに高い。3分の2を欠失している。半月形の切り込みを1箇所入れる。やや上げ底気味の平底である。全面に暗茶褐色の釉をかける。

(153), (156)には淡黄色の素地に淡黄色の釉がかけられ、施釉部分に細貫入を認める。(156)は小さい平底を有し、突帯は口縁端部より低い。半月形の切り込みを1箇所入れる。(153)はやや上げ底気味の平底を有し、突帯は口縁端部よりわずかに高い。半分を欠失しているため、突帯の切り込みは不明であるが、(156)と同じく1箇所とみられる。

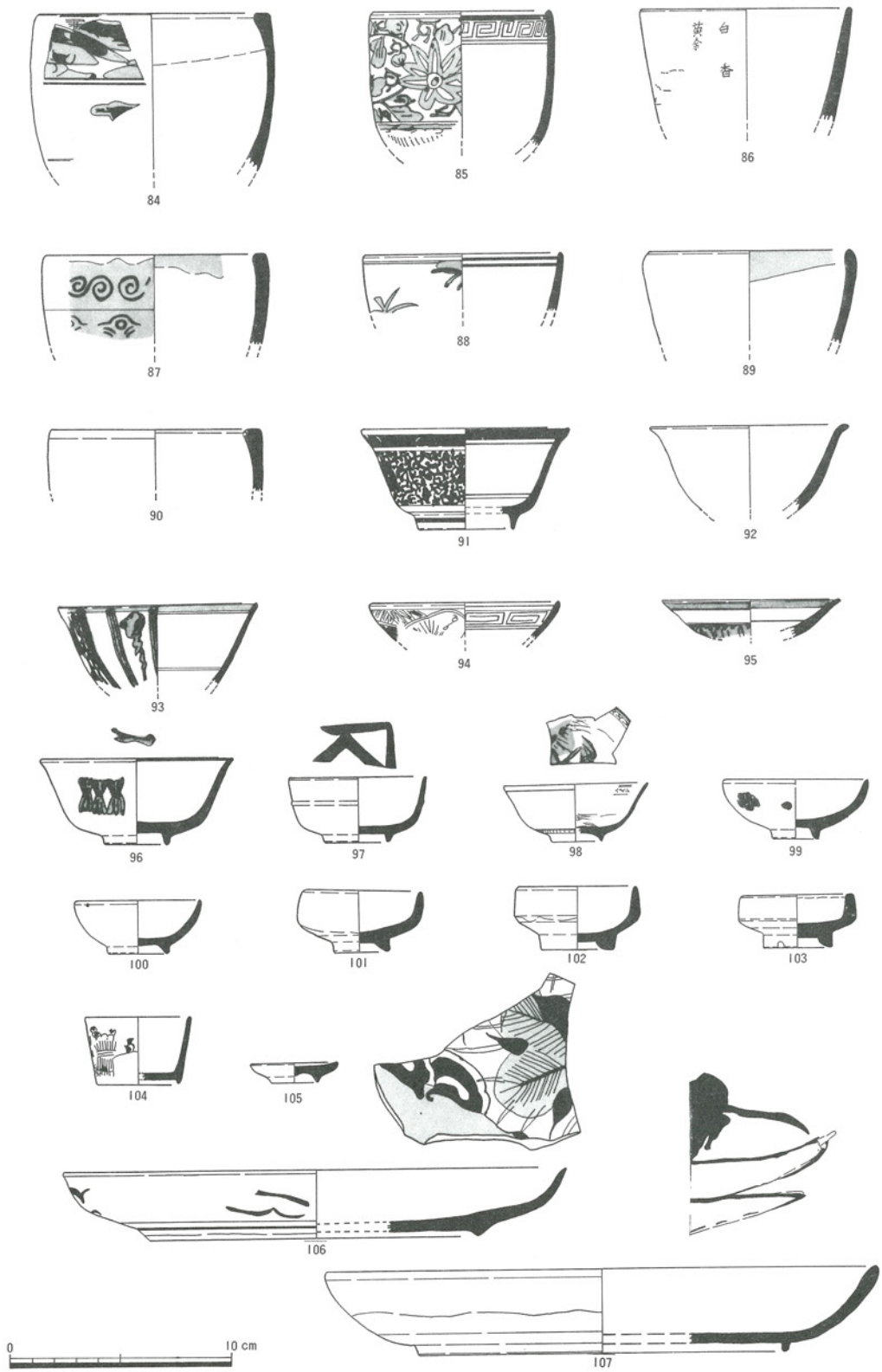


fig. 43 包含層土土器類(3)

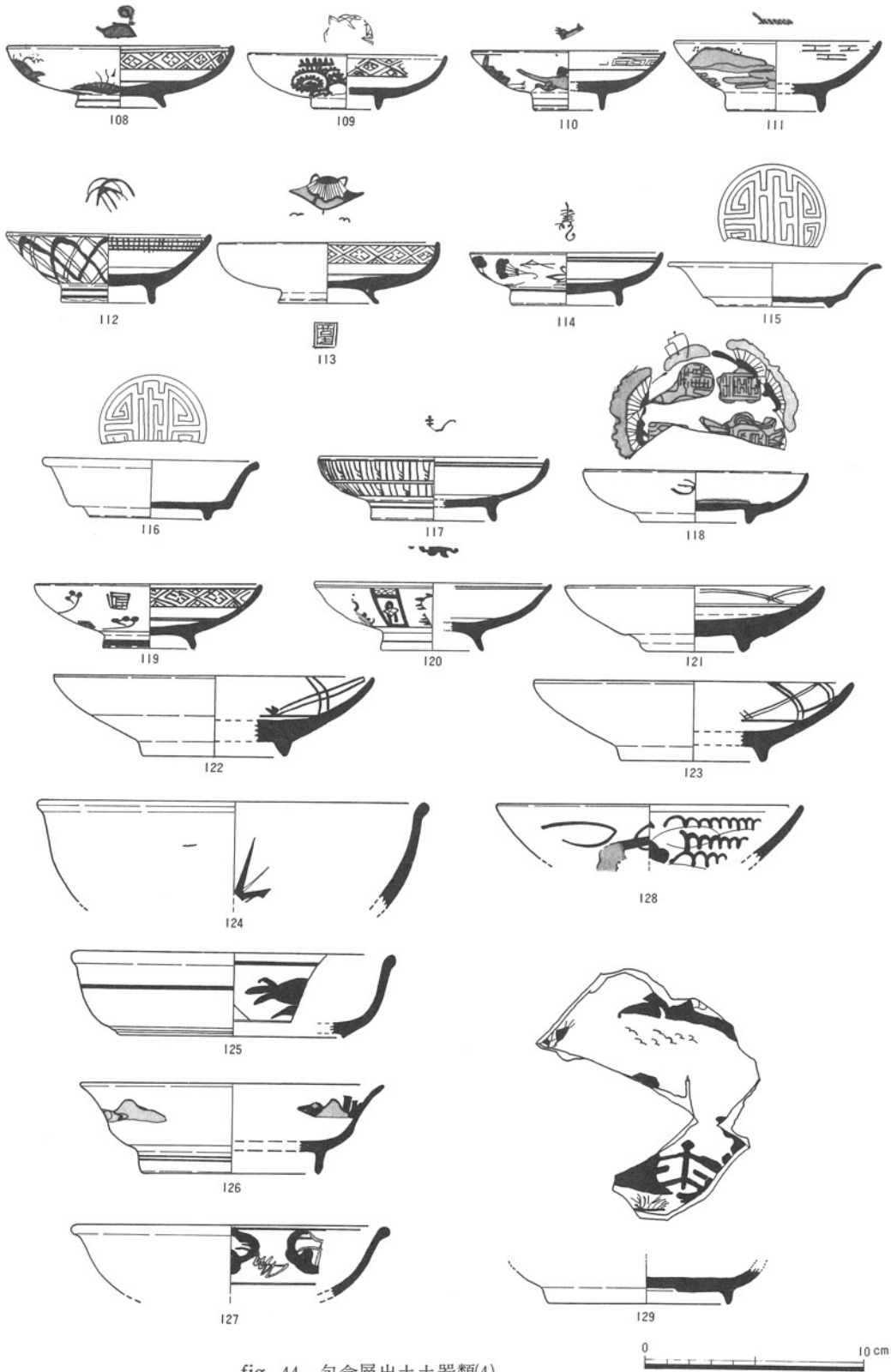


fig. 44 包含層出土土器類(4)

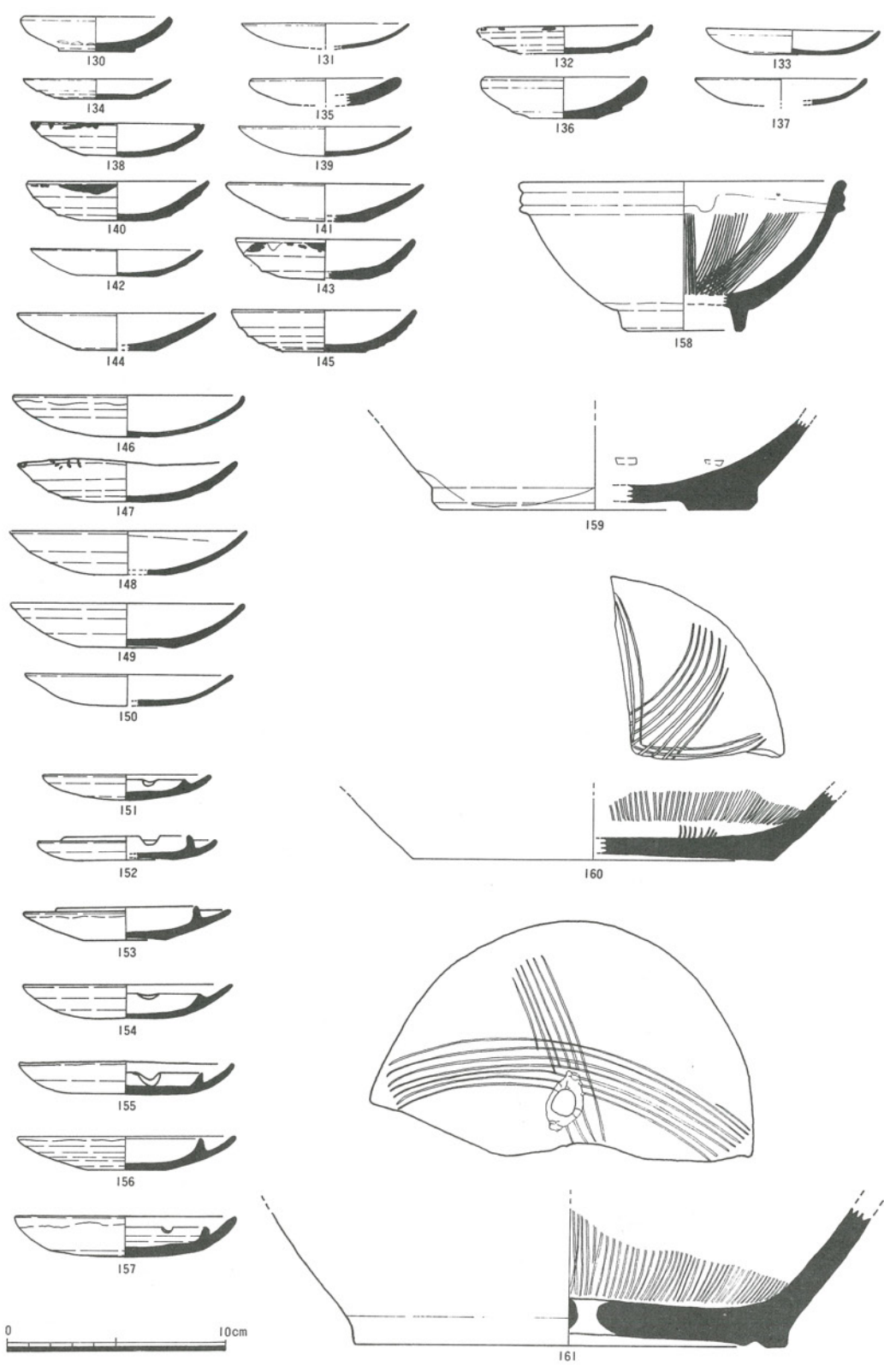


fig. 45 包含層出土土器類(5)

燭台

燈明皿を上のにせる台の機能をもつもの(178)、両者の機能を兼ね備えるもの(176, 179)の3個体を図示した。すべて施釉陶器であり、大谷焼とみられる。

(178)は筒状の脚部に皿状の杯部がつき、口縁端部を鋭くおさめる。脚部を中空とし、底部を平底につくる。脚部裾は欠失しているが、外に広がって受皿的機能をもたせていたとみられる。杯部には(130)に類する施釉陶器小皿をのせて、セットとして用いられていたとみられる。

(179)は筒状の脚部に皿状の杯部がつき、口縁端部を鋭くおさめる。杯部には(151)～(157)にみられる断面三角形の突帯を口縁部内側にめぐらし、1箇所半に半月形の切り込みを入れる。脚部は中空であり、ここに油を容れ、切り込み部を芯出しとしたとみられる。糸切りの平底であり、脚部裾を切り取り、小さい底をつくり出す。(176)も同様の形状であったとみられる。

鉢

鉢は磁器7、陶器9の16個体を図示した。その形状、用途から8つに分類される。碗、皿状であって、胴部が内わん気味に外方に立ち上がるもの(128, 177)。口縁部が外反して、端部を丸くおさめるもの(126)。口縁部が外反して、端部を玉縁状につくり出すもの(124, 125, 127)。円筒形の浅鉢(85)。円筒形で平底の浅鉢(174, 175)。捏鉢(159, 212)。片口鉢(185)。播鉢(158, 160, 161)。

(128), (177)は胴部が内わん気味に外方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる鉢であるが、前者は皿の可能性もある。(128)は磁器である。呉須で胴部と見込に文様を描く。(177)は陶器である。口縁部外側から内面に暗褐色の釉をかけるが、その上に灰白色の釉が斑に認められる。

(126)は高い高台を有し、腰部に稜を形成する磁器の浅鉢である。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。呉須で胴部と見込に遠山図を描く。

(124), (125), (127)は口縁部が外反し、外に折り返して玉縁状の口縁部をつくり出す磁器の浅鉢である。呉須による絵付けを施す。(124)には見込に笹図を描く。(125)は低い高台を有する。口縁部内側に花図を描く。(127)には口縁部内側に瓔珞文を描く。

(85)は筒形であり、口縁端部を丸くおさめる磁器の浅鉢である。呉須により、胴部に鉄線花図、口縁部内側に雷文を描く。

(129)は底部を遺存する蛇の目高台の磁器浅鉢である。見込には呉須で築山図を描くが、型紙による摺絵付の手法によるとみられる。高台内に素地をみせる。

(174), (175)は円筒形で平底の浅鉢である。陶器であり、大谷焼とみられる。胎土は粗く、0.2cm以下の砂粒を多く含む。粗製品であり、家禽類の水入れ用の容器とも考えられる。

(159), (212)は施釉陶器の捏鉢である。(159)の高台は低く畳付の部分は幅広い。内底面にトチ痕を認める。高台際から高台内に素地をみせる。(212)の高台は高い。内底面にトチ痕を認め

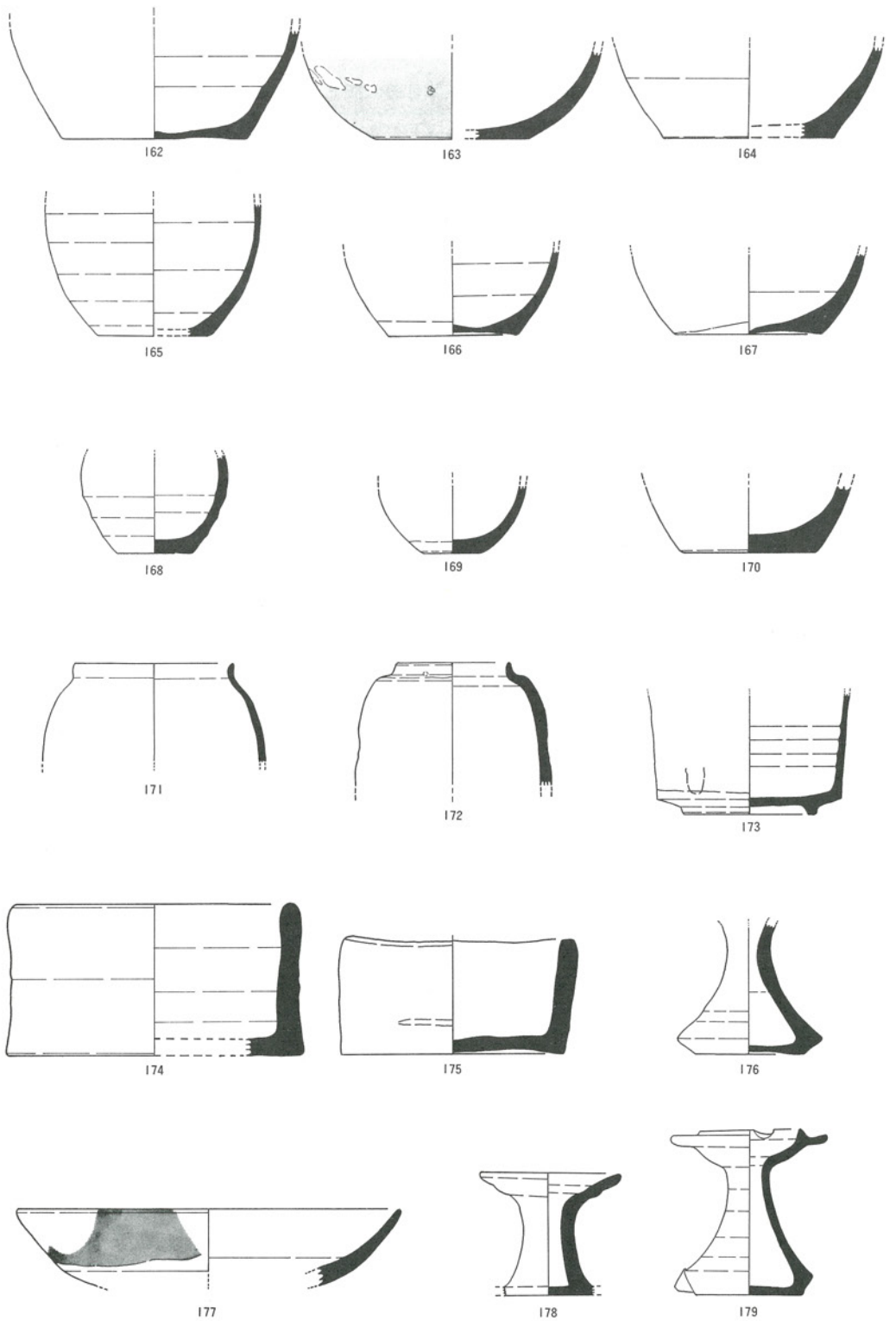


fig. 46 包含層出土土器類(6)

る。高台際から高台内に素地をみせる。

(185)は施釉陶器の片口鉢であり、瀬戸焼とみられる。体部にはロクロ目が残り、内わん気味に外方に立ち上がり、最大径部分で内傾する。口縁部は外に折り返されて、玉縁状を呈する。玉縁直下は穿孔されて、貼り付け痕を残しているため、穿孔後、短い注口部を取り付けていたとみられる。

(158)、(160)、(161)は施釉陶器の播鉢である。(160)、(161)は底部を遺存する。(158)は高い高台を有する片口の播鉢である。口縁部は外方に肥厚し、2条の深い凹線をめぐらす。内面に15条を単位とする櫛描きの播目を施す。口縁部内側から高台脇にかけて赤黒色の釉をかける。(160)はやや上げ底気味の平底を有する。内面に3条/cmの櫛描きの粗い播目、内底面に8条を単位とする櫛描きの播目を入れる。内面および内底面に暗赤褐色の釉をかける。(161)は低い高台を有し、やや上げ底である。内面に3条/cmの櫛描きの粗い播目を内底面の接点から上に施す。内底面に7条を単位とする櫛描きの播目を2帯「×」字状に入れる。内底面に長径2.5cm、短径1.6cmの楕円形に穿孔する。主に底部からであり、従的に内底面から施す。焼成後の穿孔であり、植木鉢などに転用されたものとみられる。暗赤灰色の釉をかけ、高台内に素地をみせる。

茶入

茶入は施釉陶器4個体を図示した。体部半上を遺存するもの(171、172)は肩衝茶入とみられるが、体部下半を遺存するもの(168、169)は不明である。

(171)は皆口茶入に近い形状であるが、緩やかなカーブの肩部をもつ。わずかに口頸部を形成し、端部を丸くおさめる。(172)はやや肩の張る肩部から裾の広がる体部を形成する。わずかに内傾する口頸部をつくり出し、端部を丸くおさめる。口頸部外側から内面に素地をみせる。

(168)、(169)は糸切りの平底であり、底部の脇から底部に素地をみせる。

壺

壺は陶器を2個体図示した。底部を遺存する。

(170)は糸切りの平底の無釉陶器である。外底面に「三」の文字の墨書が認められる。

(173)は低い高台を有する筒形の施釉陶器である。高台際から外方に張り出して稜を形成し、体部は直立する。内面にロクロ目を残す。稜部分から高台にかけて素地をみせる。

甕

甕は陶器4個体を図示した。無釉陶器(180、183)、と施釉陶器(181、182)がみられ、いずれも口縁部を遺存する。

(180)は口縁部を外に折り返して肥厚させ、端部を平坦につくり出す。(183)は口縁部を外にわずかに肥厚させ、直下に弱い凹線をめぐらす。端部を平坦につくり出す。

(181)は口縁部を外に折り返して玉縁状の口縁部をつくり出す。端部を丸くおさめる。全面に

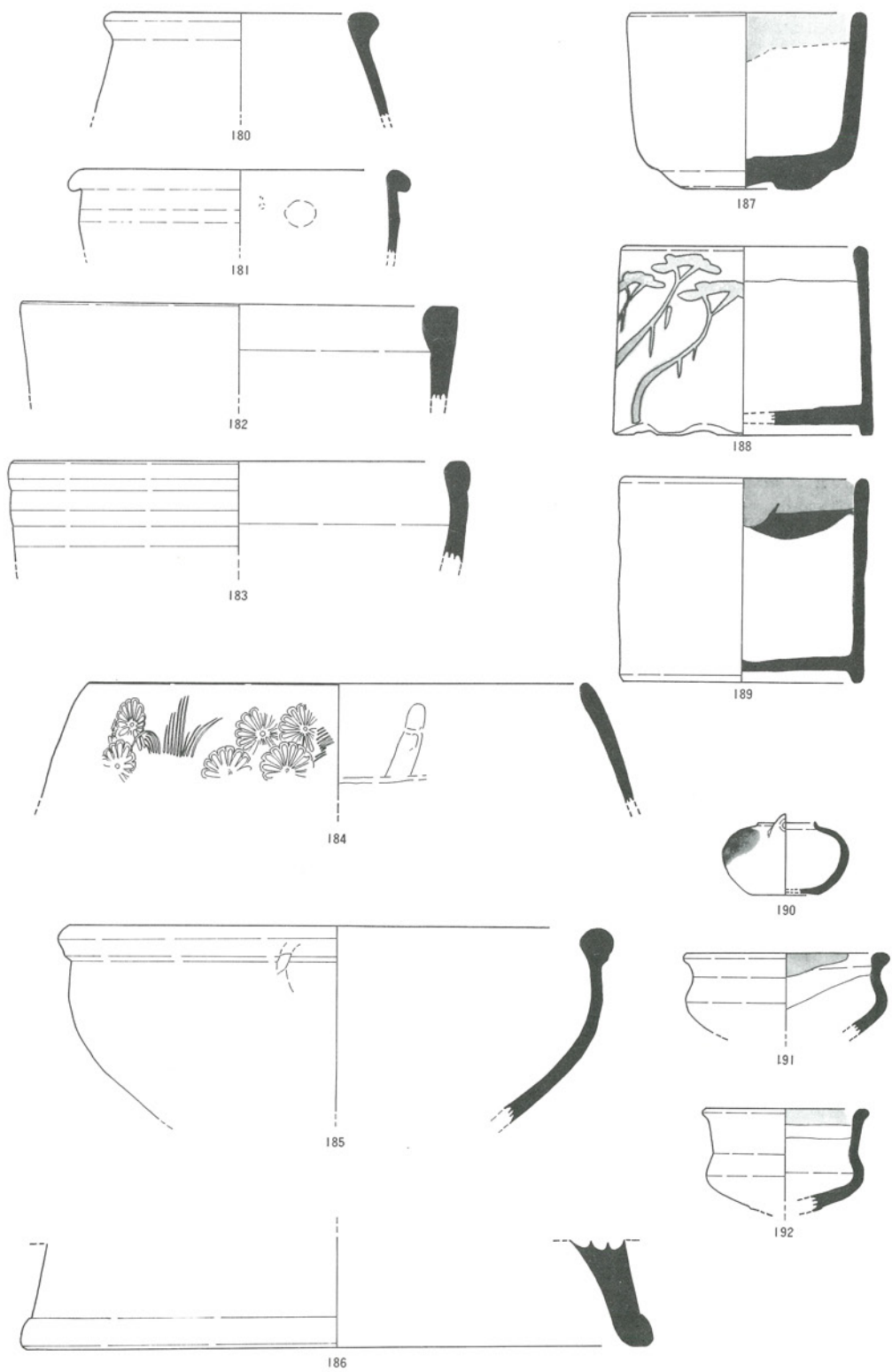


fig. 47 包含層出土土器類(7)

0 10 cm

貫入を認める。(182)は口縁部を内側に肥厚させ、直下に段を形成する。端部を平坦につくり出し、そこに素地をみせる。大谷焼とみられる。

香炉

香炉は磁器2個体を図示した。ともに下半を欠失している。

(191)は体部最大径部分から内傾して立ち上がり、口縁部を外に折り返して玉縁状とする。端部をやや平坦につくり出す。貫入を認める。(192)の形状も(191)に類似するが、(191)に較べて体部最大径部分から口縁部との間を長くつくり出す。口縁部はわずかに外に折り返す。両者とも内面に素地をみせる。釉掛けは厚く、複数次にわたっているとみられる。

火舎

火舎は2個体を図示した。口縁部を遺存する瓦質土器である。

(184)には体部に菊花文を押印する。体部は内傾し、口縁端部は内側に肥厚して端部を丸くおさめる。(334)には体部に3条の凹線をめぐらす。体部は内わんし、口縁部は内側に肥厚して端部を丸くおさめる。

土釜

土釜は2個体を図示した。瓦質土器である。

(267)には体部最大径部分に幅広い鏝を貼りつける。鏝から体部は内傾して立ち上がるが、口縁部との間に3条の凹線をめぐらす。ナデ調整であるが、内面にハケ目調整がみられる。(411)は体部上半を遺存する。体部は内傾して立ち上がり、口縁部を内側に肥厚させ、端部を丸くおさめる。体部に2条の弱い凹線が認められる。ヨコナデ調整を施す。

仏飴具

仏飴具は2個体を図示した。ともに磁器であり、碗と脚部とからなる。

(204)は低い脚部に碗が取り付けられている。脚部はわずかに上げ底とする平底であり、裾際を斜めに削り出す。碗部は腰を形成しなく、口縁端部を丸くおさめる。碗部の胴部に呉須による半截の氷裂菊花文を描く。

(205)は脚部を欠失する。碗部は(204)に類似した形状をもつ。碗部の胴部に赤・緑の釉による花文を描く。

花生

花生は、磁器2、青磁1、陶器6の9個体を図示した。その形状から次の5つに分けられる。筒形で筒底のもの(188, 189)。筒形で高台を有するもの(187)。筒形で口縁部が開くもの(86, 87, 89)。筒形で口縁部が内傾するもの(84, 90)。体部が球形であるもの(208)。

(188), (189)は筒形で筒底の施釉陶器である。(188)は口径より底径が大きく、口縁部が内側に肥厚する。底部に半月形の切り込みを入れる。体部に赤紫・薄緑色の釉による松図を描く。



fig. 48 包含層出土土器類(8)

0 10 cm

底部と内面に素地をみせる。施釉部分に貫入を認める。(189)は底部と内面に素地をみせる。施釉部分に貫入を認める。煙草盆用の火舎としての用途も考えられる。

(187)は筒形で低い高台を有する。施釉陶器である。腰部を形成し、口縁部を内側に肥厚して端部を丸くおさめる。高台畳付は広く、高台内に兜巾をみせる。畳付と内面に素地をみせる。

(86)、(87)、(89)は筒形で口縁部が開く施釉陶器である。(86)の体部には呉須で「白□□香□…」、「黄金□…」などの銘を細字で入れる。(87)の体部には渦文、花文を押印し、その上に釉をかける。施釉部分に貫入を認める。内面に素地をみせる。(89)は内面に素地をみせる。施釉部分に貫入を認める。

(84)、(90)は筒形で口縁部が内傾する。口縁部は内側に肥厚し、端部を平坦につくり出す。(84)は磁器である。体部に呉須で遠山図を描く。内面に素地をみせる。(90)は青磁である。釉掛は薄いのが、複数次にわたって釉をかけたとみられる。

(208)は球形の体部に高台をつける磁器である。体部に呉須で草花図を描き、内面に素地をみせる。

土瓶

土瓶は2個体を図示した。ともに体部下半を欠失する。

(207)は瓦質土器である。体部最大径の上位に注口部を貼り付ける。体部と注口の接点には、直径0.7~1.0cmの3つの孔を外から穿つが、穿孔後の調整はみられない。注口の上位には三角形の取手を貼り付ける。取手には直径0.9cmの孔を穿つ。体部には3条の突帯と1つの段がめぐり、その間に直径0.2~0.3cmの円形浮文を施す。

(206)は施釉陶器である。体部最大径部分に注口部を貼り付ける。体部と注口の接点には、直径0.6~0.8cmの孔を4つ外から穿つが、穿孔後の調整はみられない。注口の上位には紐状の取手を貼り付ける。内面に素地をみせる。体部に赤褐色の釉で菊花図を描き、貫入を認める。

徳利

徳利は32個体を図示した。(193)~(199)、(201)、(202)の9個体が磁器であり、他は陶器である。

(193)、(195)~(199)、(201)は磁器の神酒徳利であり、呉須による絵付けが施されている。(196)は印判手である。

(194)、(202)は磁器の徳利である。(194)には呉須により草花図を描く。

(200)、(203)、(214)は施釉陶器の小形徳利である。(200)、(214)は上げ底である。(214)には筒形の体部に細い口頸部がつく。体部の上位に「大」、「柳」、「酒」の文字を刻む。内面と外底面に素地をみせる。(203)は平底である。体部は指押えによる3箇所大きな凹みがみられ、肩部の横断面は三角形である。

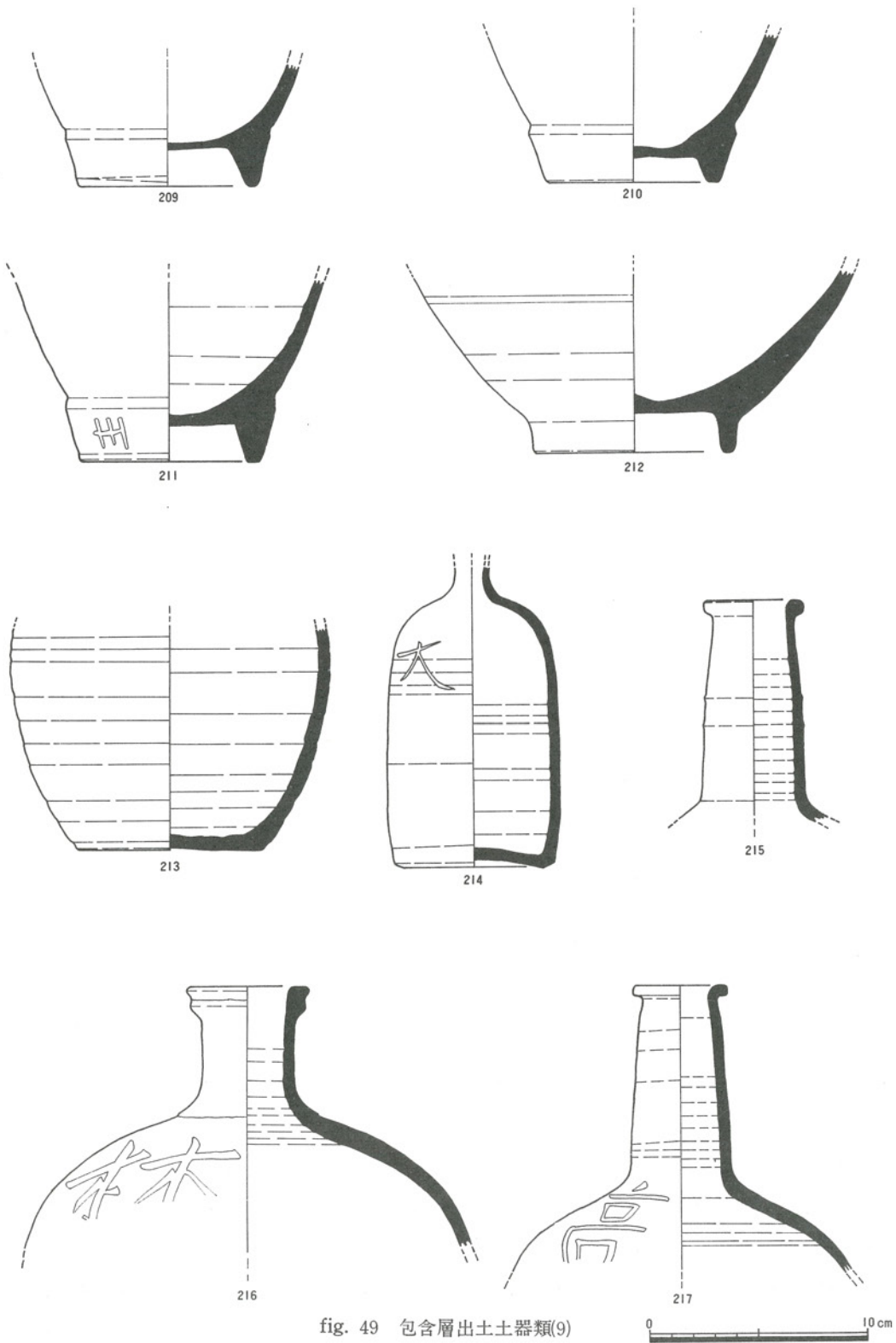


fig. 49 包含層出土土器類(9)

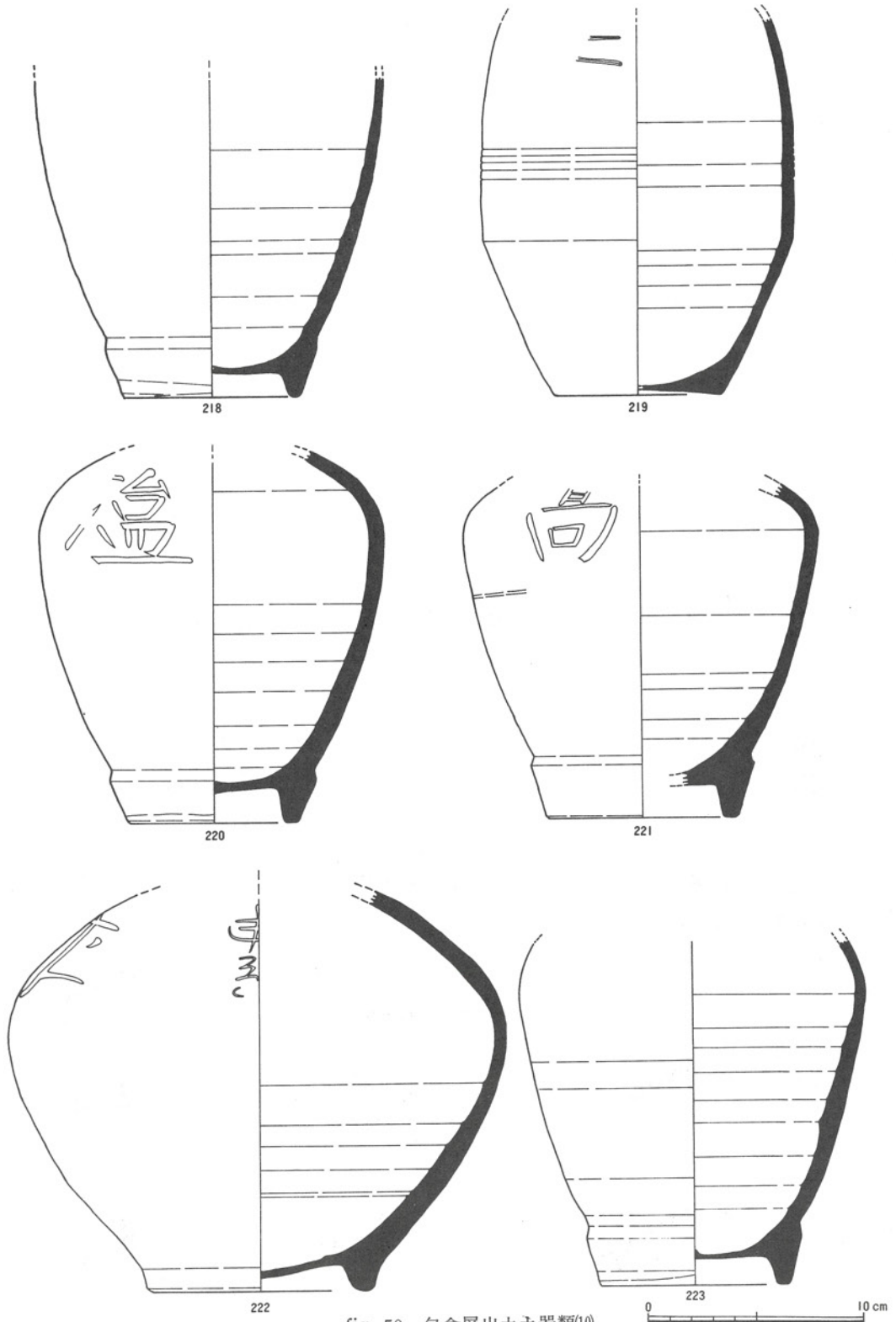


fig. 50 包含層出土器類(10)

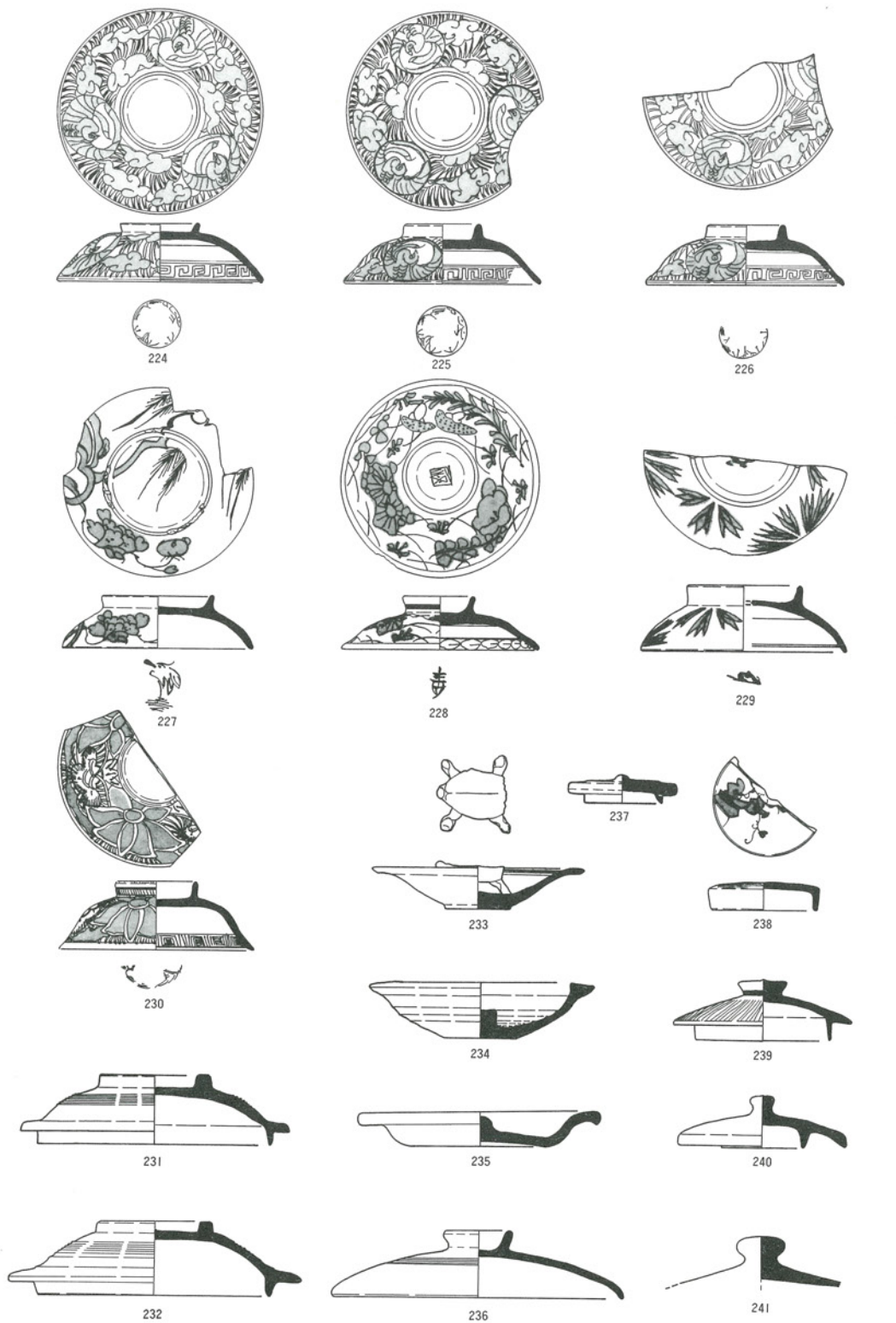


fig. 51 包含層出土土器類(11)

(215)～(217)は口頸部から肩部を遺存する施釉陶器である。筒状の頸部に緩やかなカーブの肩部が続く。(217)の口縁部は外に拡張して平坦な端部をつくり出す。肩部に「酒」, 「高」, 「□」の文字を刻む。(216)の口縁部は外に折り返されて肥厚し, 1条の凹線がめぐり。肩部に「堂」, 「□」, 「林」の文字を刻む。

(209)～(211), (218), (220), (221), (223)は高い高台を有して高台脇に1条の凹線をめぐらし, 体部径が小さい施釉陶器である。口頸部を欠失しているが, (215), (217)に類似する口頸部をもつとみられる。内面と高台畳付から内側に素地をみせる。刻字のあるものもみられ, (220)は体部最大径部分に「塩」, 「□」, 「□」, (221)は体部最大径部分に「高」, (211)は高台外側に「州」を認める。

(222)は低い高台を有し, 体部径の大きい施釉陶器である。肩部に「申□」, 「玉」の文字を刻む。

(162), (166), (167), (213), (219)は底部を遺存するやや上げ底の施釉陶器である。内面と底部に素地をみせる。(219)の体部最大径部分に5条の凹線を累鉢形にめぐらす。

(163)～(165)は平底の施釉陶器である。内面と底部に素地をみせる。

蓋

蓋は19個体を図示した。磁器(95, 224～230, 238), 陶器(231～234, 236, 237, 239, 241), 瓦質土器(235)であり, 形状から次の7つに分類される。口縁部が内わんして高台状のつまみをもつもの(227, 229)。口縁部が外反して高台状のつまみをもつもの(95, 224～226, 228, 230)。山蓋で天井部と口縁部がほぼ直交するもの(238)。小さい高台状のつまみをもち, 口縁部内側に段を形成するもの(236)。高台状のつまみ, 疵, かえりをもつもの(231, 232)。擬宝珠状のつまみをもつもの(237, 239～241)。落蓋(233～235)。

(227), (229)は磁器であり, 大きい高台状のつまみをもち, 口縁部が内わんして端部を丸くおさめる。呉須により, (227)には天井部に花・柳図, 内面に白鷺図, (229)には天井部に撫子文を描く。

(95), (224)～(226), (228), (230)は磁器であり, 高台状のつまみをもち, 口縁部が外反する。呉須による絵付けを施す。(224)～(226)は同一文様であり, 天井部に鳥・雲図, 口縁部内側に雷文を描く。(230)には天井部に花文, 口縁部内側に雷文を描く。(228)には天井部に秋草図, つまみ内に角福銘, 口縁部内側に葉文, 内面中央に「寿」の文字文様を描く。

(238)は磁器であり, 口縁部と天井部が直交する。印盒の蓋とみられる。呉須により, 天井部に朝顔図を描く。

(236)は施釉陶器であり, 小さい高台状のつまみをもち, 口縁部内側に段を形成する。天井部に3～4条の凹線を累鉢形にめぐらす。全面に細貫入を認める。

(231), (232)は施釉陶器である。低くて大きい高台状のつまみをもち、口縁部は外に拡張して疵を形成し、内側にかえりをつける。天井部に6～7条の凹線を累鋸形にめぐらす。内側に素地をみせる。

(237), (239)～(241)は施釉陶器である。山蓋であり、擬宝珠状のつまみをもち、(241)は不明であるが、内側にかえりをつける。内面に素地をみせる。(239)～(241)は急須や土瓶類の蓋とみられる。(239)の天井部にトチ痕を認める。(237)は茶入の蓋とみられる。つまみとしての機能をもたない小さなつまみをもつ。

(233)～(235)はつまみをもつ落蓋である。(235)は瓦質土器であり、擬宝珠状のつまみをもつ。(234)は施釉陶器であり、擬宝珠状のつまみをもつ。(233)は施釉陶器であり、亀形のつまみをもつ。細貫入を認める。(233), (234)は内面に素地をみせ、ともに糸切り底とする。

(西谷俊則, 河野雄次)

C. 第1トレンチ最下層(fig. 52) (P L. 40)

第1トレンチ最下層からは、陶器、土師質土器などが出土している。ここでは、鉢1, 甕1, 土鍋1を図示した。

鉢(242)

陶器であり、口径15.4cmの黄瀬戸大平鉢とみられる。体部は内わん気味に外に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。体部外面にロクロ目を残す。淡黄色の素地に灰黄色の釉をかける。全面に貫入を認める。胎土はやや粗い。焼成はあまい。

甕(243)

土師質土器の甕である。口径14.4cm。口縁部は外に大きく開いて立ち上がり、直立して丸い端部をつくる。胎土は粗く、0.3cm以下の小礫を多く含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

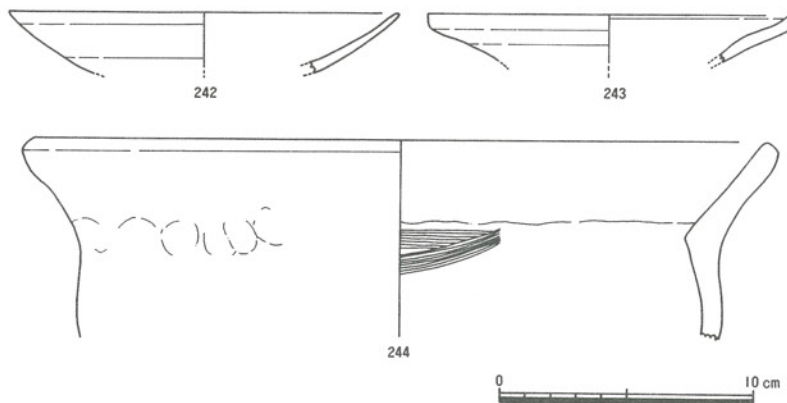


fig. 52 第1トレンチ最下層出土土器類

土鍋 (244)

土師質土器の土鍋である。口径29.1cm。内わん気味に外方に立ち上がる体部から、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁部はやや外方に肥厚し、端部を丸くおさめる。内面の屈曲部に稜を形成し、稜の下位に8条を単位とするハケ調整を水平方向に施す。体部外面屈曲部に指頭圧痕を認める。胎土は粗く、0.2cm以下の砂粒を多く含む。焼成は堅緻であり、色調は淡褐色を呈する。

(河野雄次)

d. B-2 グリッド礫層 (fig.53) (P.L. 40)

B-2 グリッド礫層には、瓦器、土師質土器の小破片が多くみられる。器形別に、碗2、杯8、土鍋3の13個体を図示した。

碗 (245, 246)

底部を欠失する瓦器碗である。(245)は口径11.6cm。体部は内わん気味に外方に立ち上がる。口縁部の内外を肥厚させ、端部を丸くおさめる。体部はへら削りの後、ナデ調整を加える。体部下位に指頭圧痕を認める。内面に暗文調整。胎土はやや粗く、0.1cm以下の砂粒を含む。焼成はややあまく、色調は淡黒褐色を呈する。(246)は口径9.4cm。体部は内わん気味に外方に立ち上がり、口縁部直下に浅い段を形成する。口縁端部を丸くおさめる。体部に指頭圧痕を認める。口縁部にヨコナデ調整。胎土は密である。焼成はややあまい。色調は外面淡黒色、内面灰黄色を呈する。

杯 (247~254)

土師質土器の杯である。高台脇を欠失するもの(249)、口縁部を遺存するもの(247, 248)底部を遺存するもの(250~254)の8個体を図示した。

(249)は口径12.2cm、高台径4.5cm、器高3.6cmで、器高指数は29.6とみられる。断面三角形の低い高台を貼り付ける。体部は内わんして外方に立ち上がる。口縁部を内側にわずかに肥厚させ、端部を丸くおさめる。体部外面には、へら削りの後、ナデ調整を加える。胎土はやや粗く0.2cm以下の砂粒を含む。焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。

(247)は口径10.5cm。口縁部を内外にわずかに肥厚させ、端部を丸くおさめる。内外面ともヨコナデ調整で仕上げる。胎土は密である。焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈する。

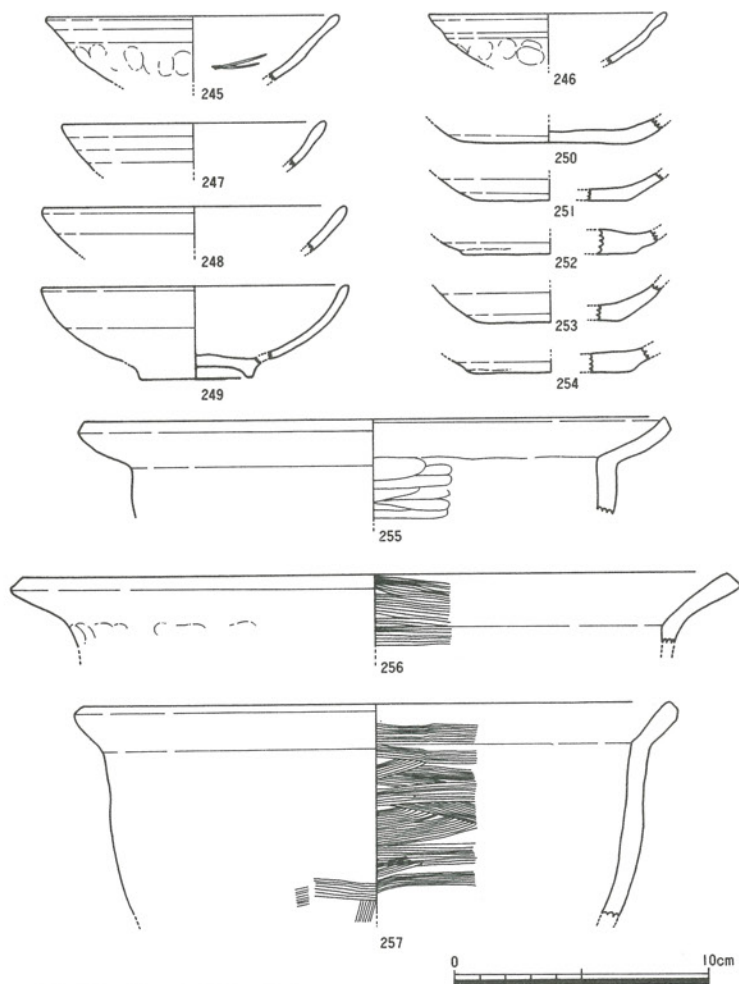
(248)は口径12.0cm。口縁端部を丸くおさめる。器壁剥落のため調整は不明。胎土は密である。焼成はあまい。色調は淡黄褐色を呈する。

(250)は底径6.8cm。底部外面に放射状の7~8条/cm単位のハケ調整を認める。胎土は密である。焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈する。(251)は底径6.1cm。平底から体部は内わん気味に外に立ち上がる。胎土は密である。焼成は良好、色調は淡黄褐色を呈する。

(252)は底径6.9cm。底部と体部の境に段をつけ、高台状とする。内底面が肥厚する。胎土は密である。焼成は良好、色調は淡赤褐色を呈する。(253)底径5.4cm。体部に粘土紐マキアゲ痕を認める。胎土は密である。焼成はあまい。色調は淡黄褐色を呈する。(254)は底径6.5cm。底部と体部との境にわずかに段をつけ、高台状とする。胎土は密である。焼成は良好、色調は赤褐色を呈する。

土鍋 (255~257)

土師質土器の土鍋である。(255)は口径23.0cm。口縁部は体部から「く」の字状に外に立ち上がり、稜を形成して、端部を丸くおさめる。体部内面へラミガキ調整。口縁部ヨコナデ調整。外面に煤の付着を認める。胎土はやや粗く、0.2cm以下の砂粒を含む。焼成は堅緻である。色調は淡赤褐色を呈する。(256)は口径27.9cm。口縁部は「く」の字状に外反し、端部直下に稜を形成して端部を丸くおさめる。口縁部内側に8条/cm単位のハケ目調整を水平方向に施す。口縁部外面と端部にヨコナデ調整。胎土はやや粗く、0.2cm以下の砂粒を含む。焼成は良好で堅緻である。色調は赤褐色を呈する。(257)は口径23.2cm。内わん気味に外方に立ち上がる体部から、口縁部は緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。体部下半と内面に7条/cm単位のハケ調整を水平方向に施す。口縁端部にナデ調整。内外面に煤の付着を認める。胎土はやや粗く、0.1cm以下の砂粒を含む。焼成は堅緻である。色調は淡黄褐色を呈する。



(河野雄次)

fig. 53 B-2 グリット出土土器類

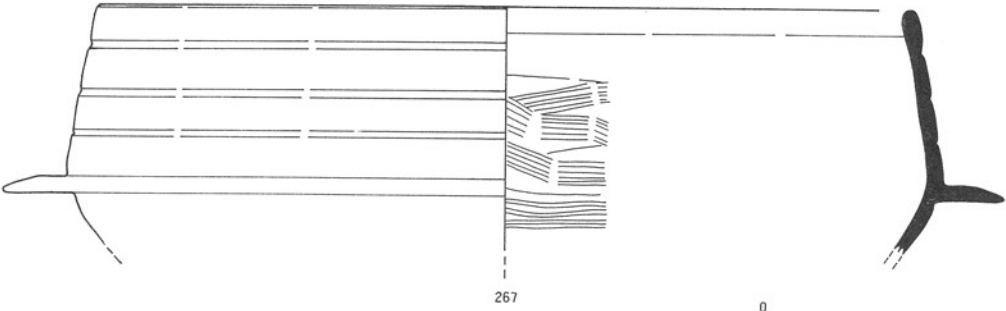
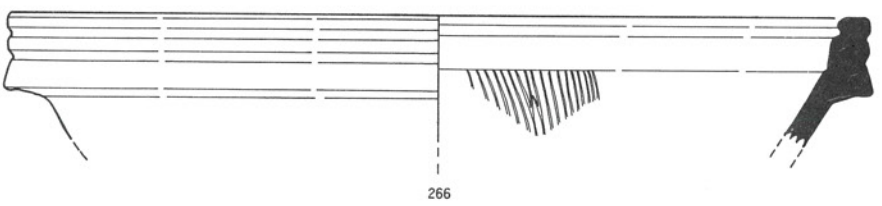
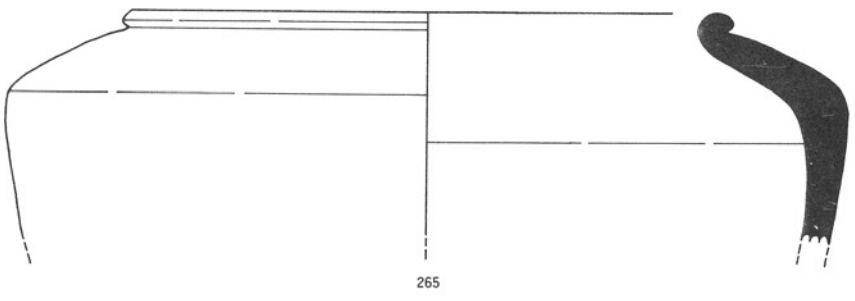
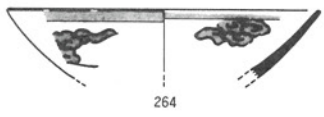
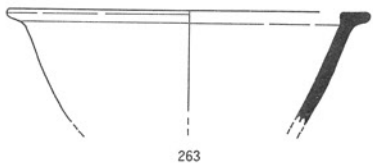
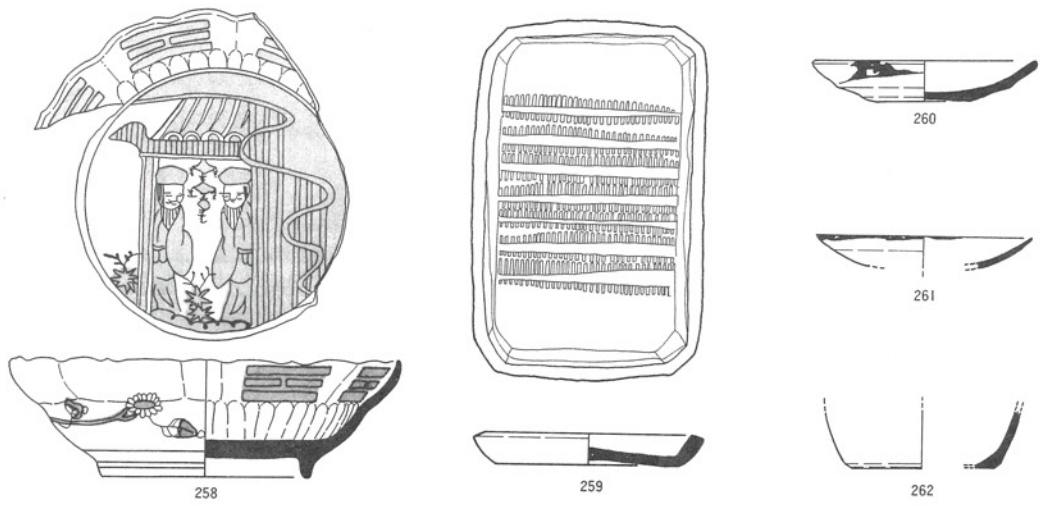


fig. 54 各遺構出土土器類(1)

e. 祭祀遺構

大山祇神社跡 (fig. 54-260)

大山祇神社跡の社殿から施釉陶器の皿が1個体出土している。やや上げ底気味の底部から、体部が内わん気味に立ち上がる。口縁端部を丸くおさめる。体部下半に素地をみせ、内底面にトチ痕を認める。口縁部内側から体部にかけて煤の付着がみられ、燈明皿として用いられていたとみられる。

小祠跡 (fig.55-268, 269)

小祠跡礎石の外、北東部から土師質土器の小皿が2個体出土している。口径8.1cm, 器高1.0cm。器壁の厚さ0.2cm前後ときわめて薄い。やや上げ底であり、体部が外方に大きく拡がり、口縁端部をそのまま丸くおさめる。内底面に墨書を認める。胎土は密、焼成良好。色調は淡黄褐色を呈する。

(河野雄次)

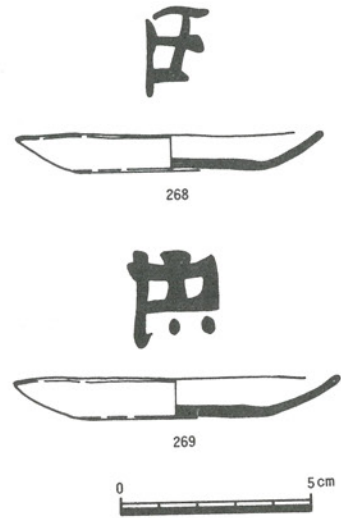


fig. 55 小祠跡出土土師質土器

f. 礎石建物跡

SB-01 (fig. 56)

礎石建物跡SB-01からは、磁器、陶器、瓦質土器など多数が出土している。ここでは陶器2, 瓦質土器1の3個体を図示した。(259)と(266)はかまどからの出土である。

(259)は施釉陶器の下皿である。型物であり、四方の側面と底面に布目がみられる。隅切りの形の長方形であり、底面をやや上げ底気味につくる。内底面には、5条/cm単位の櫛状工具による下目を8段施す。(266)は施釉陶器の播鉢である。口縁部を外に肥厚させ、2条の凹線をめぐらす。播り目は4条/cm単位とする。(270)は瓦質土器の山蓋である。口縁部は外に拡張してひさし部を形成し、上端をつまみ上げる。

SB-03 (fig. 57)

礎石建物跡SB-03からの出土遺物は、土壘SA-02の裏込めに転用されたものを含めるとかなりの数にのぼるが、ここでは、磁器10, 陶器6, 瓦質土器1の17個体を図示した。器形別には、碗5, 猪口1, 皿1, 燈明皿1, 鉢1, 香炉1, 花生2, 德利4, 土釜1である。

碗 (273~276, 278) (PL-41)

碗は磁器であり、口縁部が内わん気味に立ち上がるもの(275, 276)、口縁部がわずかに外反するもの(273, 274)の2つに分類されるが、(278)は口縁部を欠失しているため不明であるすべて呉須による絵付を施す。

(276)は腰部をほとんど形成しなく、小さい高台をもつ。口縁部内側に四ツ割花卉連続文を

描く。(275)は張りのある腰部を形成する。胴部に蝶図、口縁部内側に四つ割花卉連続文を描く。

(273)は口縁端部に平坦面を形成し、鉢的要素を有する。胴部に楼閣図、口縁部内側に花文を描く。(274)は口縁端部を丸くおさめる。胴部に遠景図、口縁部内側に連続孤状文を描く。

(278)は高台がわずかに外に開く。胴部に笹図、見込中央に笹文を描く。

猪口 (277)

猪口は小碗形の施釉陶器であり、高台がやや外に開く。無施文であり、全面に貫入を認める。

皿 (287)

施釉陶器の上げ底気味の皿である。口縁部内側に菊花文を押印した円形浮文を貼り付ける。無施文であり、貫入を認める。

燈明皿 (286)

施釉陶器である。平底であり、口縁部内側に断面三角形の突起がめぐり、2箇所に半円形の切り込みを入れる。

鉢 (284)

施釉陶器である。小さい高台を有し、体部は内わんして立ち上がる。口縁部は外に拡張して、端部は広い平坦面を形成する。口縁部内側に段をめぐらす。高台脇と高台に素地をみせる。無施文である。

香炉 (280)

施釉陶器であり、体部上半を遺存する。体部は内わんして後、外方に立ち上がる。口縁部は外に拡張して、端部は広い平坦面を形成する。内面に素地をみせる。無施文である。

花生 (279, 285)

磁器の花生であり、底部を遺存する。碁笥底に近い形状を有し、内面に素地をみせる。

徳利 (281～283, 288)

(281)～(283)は磁器の神酒徳利である。(281),(282)は筒状の細い頸部を有し、前者の口縁部はやや外に開く。呉須により、ともに頸部に蛸唐草図、前者の体部に草花図を描く。(283)は体部下半を遺存し、低い高台を有する。胴部に草花図を呉須により描く。(288)は施釉陶器であり、胴部下半を遺存する。高い高台を有し、高台脇に1条の凹線をめぐらす。無施文である。

土釜 (289)

瓦質土器の土釜である。大きく内わんして立ち上がる体部の最大径より上位に広い鐳を貼り付ける。口縁端部は丸くおさめる。外面にナデ、内面に水平方向のハケ調整を施す。口縁部内側に指頭圧痕を残す。

(河野雄次)

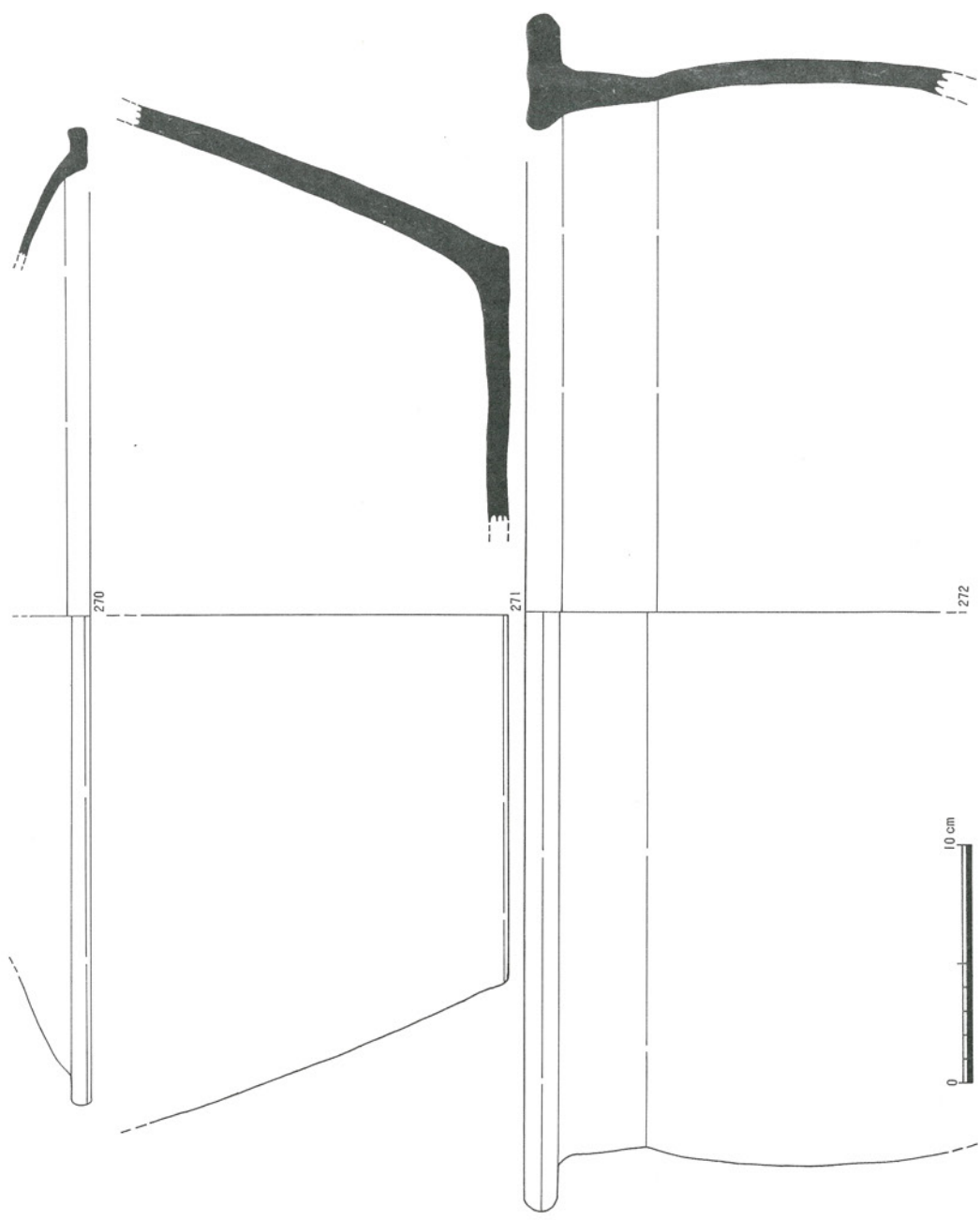


fig. 56 各遺構出土土器類(2)

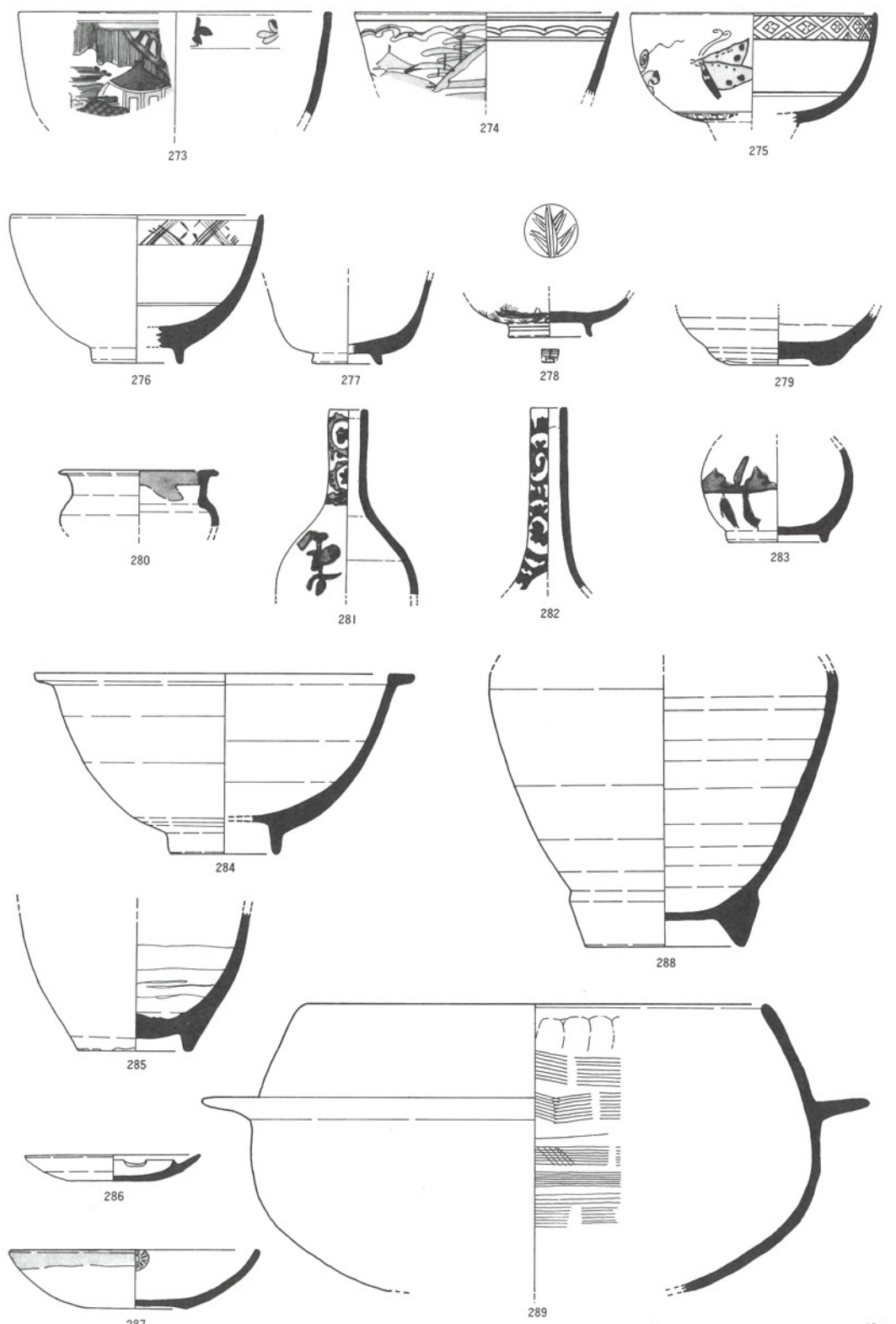


fig. 57 S B-03出土土器類

g. 土 壘

土壘からの出土遺物は、S A-02に集中し、S A-03は少く、S A-01からは出土していない。細片も含めると多量にのぼるが、ここでは、磁器20、陶器6、瓦質土器1の27個体を図示した。磁器のうち、(298)、(299)以外にはすべて呉須による絵付けが施される。

S A-02 (fig. 58)

磁器16、陶器5、瓦質土器1の22個体を図示した。器形別には、碗8、猪口3、鉢4、皿2、蓋1、壺2、徳利1、火舎1である。この大部分が土壘基底部からの出土であり、礎石建物跡S B-03廃棄後の遺物が裏込めとして転用されたものとみられる。

碗 (290~297)

碗はすべて磁器であり、腰部をほとんど形成せずに口縁部を丸くおさめるもの(290、295~297)、腰部を形成して胴部がわずかに外傾して立ち上がるもの(292、293)、口縁部が外反するもの(291)の3つに分類される。

(290)には口縁部内側に四ツ割花卉連続文、見込中央に五弁花、高台内に渦福を描く。(295)には胴部に氷裂菊花文、見込中央に「寿」の文字文を描く。(296)、(297)はくらわんか手である。胴部に草花図を描く。

(292)には胴部に笹図と丸文、口縁部内側に四ツ割花卉連続文、見込中央に葉文を描く。(293)には口縁部外側に四ツ割花卉連続文、胴部に松・柳図を描く。

(291)には胴部に朝顔図、見込中央に花文を描く。

猪口 (299, 300, 314)

猪口は磁器であり、小形碗の形状であって、口縁部を丸くおさめるもの(300)、口縁部が外反するもの(299)、筒形のもの(314)の3つに分類される。

(300)には胴部に笹図を描く。(299)は無施文である。(314)には胴部に氷裂菊花文、見込中央に五弁花を描く。

鉢 (298, 309, 311, 315)

鉢は磁器(298、315)と陶器(311、315)があり、口縁部が外反するもの(298)、蛇の目高台を有するもの(309)、高台内を深く切り込むもの(311)、上げ底で盤状のもの(315)の4つに分けられる。

(298)は無施文であり、口縁部は外に拡張し、丸い端面をもつ。(309)の見込には山水図を描く。(311)は無施文であり、高台脇と高台に素地をみせる。見込にトチ痕を認める。(315)は(174)、(175)に類似し、家禽類の水入れ用容器ともみられる。

皿 (302, 303)

皿は磁器であり、低い高台を有し、口縁端部を丸くおさめる。

(302)には体部に唐草文、口縁部内側に丸文と網目文、見込中央に五弁花を描く。(303)には

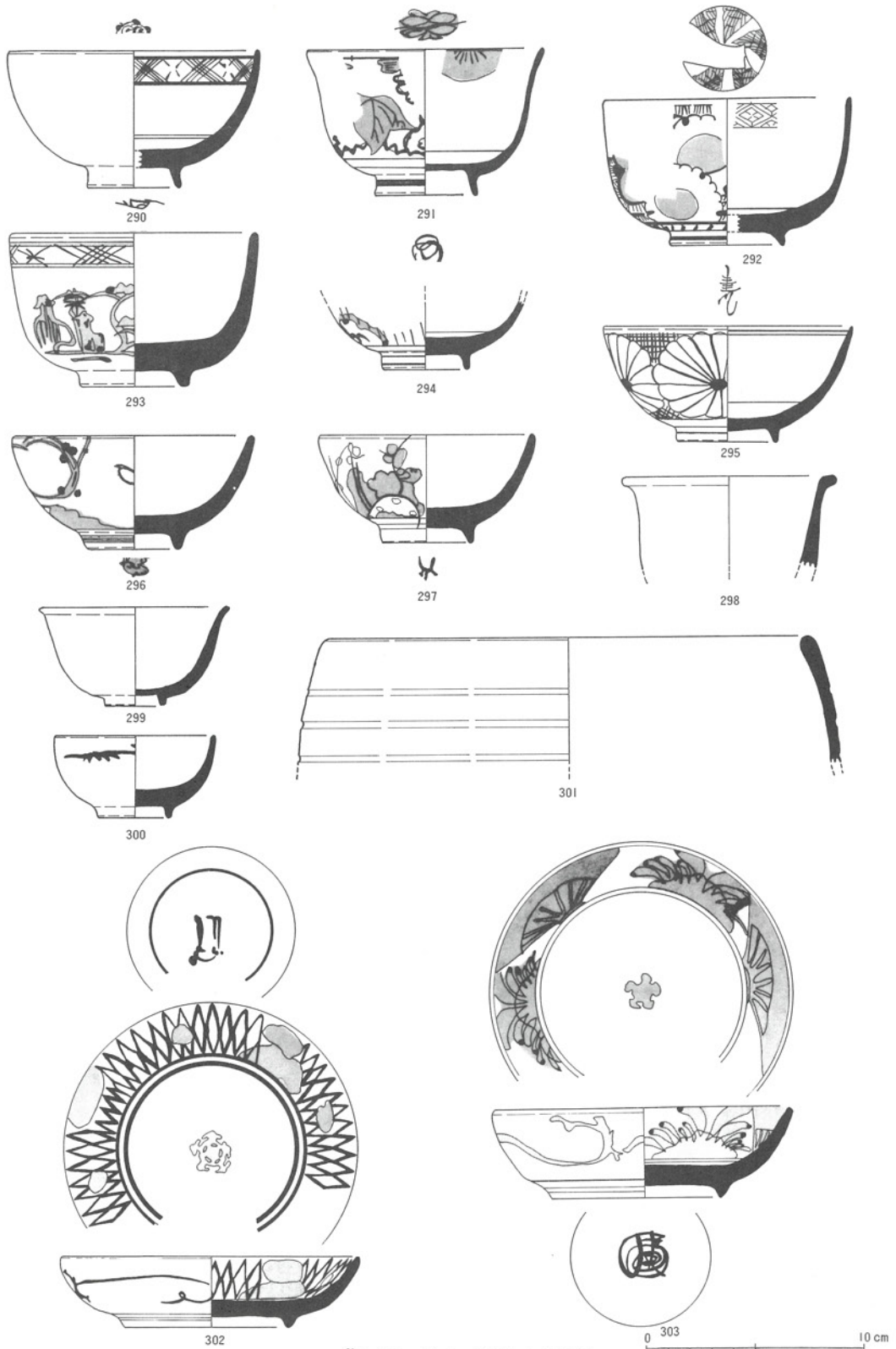


fig. 58 S A -02出土土器類

体部に唐草文、口縁部内側に扉図、見込中央に五弁花を描く。

蓋 (304)

(304)は口縁部がわずかに外反し、高台状のつまみを有する磁器の蓋である。天井部に椿図内面に「寿」の文字文を描く。

壺 (312, 316)

壺は施釉陶器である。(312)は低い高台を有する筒形であり、高台際と高台に素地をみせる。(316)は筒形であり、体部に著しい凹をみせる。その形状から、花生ともみられる。

徳利 (317)

(317)は体部下半を遺存する大谷焼の徳利である。わずかに上げ底であり、底面に素地をみせる。

火舎 (301)

(301)は体部上半を遺存する瓦質土器の火舎である。体部は内傾し、口縁部を内側に肥厚させて端部を丸くおさめる。体部に3条の凹線をめぐらす。

SA-03 (fig. 59)

磁器4、陶器1の5個体を図示した。器形別には、鉢1、皿2、蓋1、鍋1である。土塁基底部からの出土であり、裏込めとして使用されたものとみられる。

鉢 (310)

(310)は磁器であり、低い高台を有し、口縁端部を丸くおさめる。体部に呉須で唐草文を描く。

皿 (306, 307)

皿は磁器であり、低い高台を有し、口縁部は外反する。

(306)は明瞭な稜として腰部を形成する。内底面に「寿」の文字文を押印する。口縁端部に鉄釉を用い、口縁部内側に呉須に上る波図を描く。(307)には内底面に葉・波図を描く。

蓋 (305)

(305)は口縁部がわずかに外反し、高台状のつまみを有する磁器の蓋である。天井部に柳・格子図、口縁部内側に波状文を描く。

鍋 (319)

(319)は陶器であり、片口の片手鍋である。やや上げ底であり、体部最大径部分で内傾する。口縁部は内外に肥厚して、内側に段を形成する。口縁部直下を穿孔して、片口を貼り付ける。取手を体部最大径部分と口縁部との間に貼り付ける。取手は型物であり、中空とする。断面六角形であり、上面に唐人図を浮出する。体部最大径部分と口縁部との間には、6本/cmの単位で右上りの櫛目が4段施される。体部下半には煤付着が認められる。

(河野雄次, 高岡 裕)

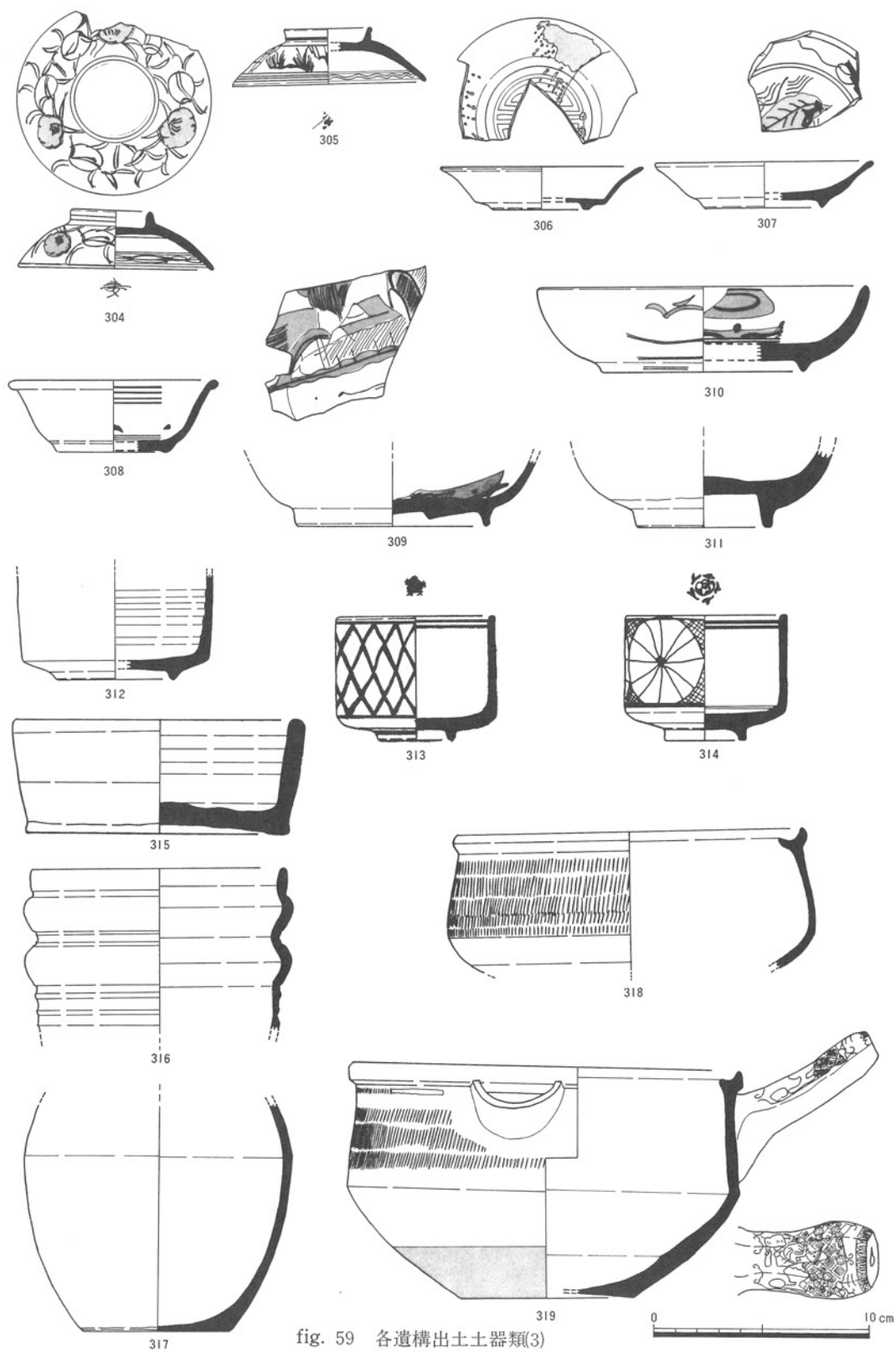


fig. 59 各遺構出土土器類(3)

h. 井 戸

SE-03 (fig. 54)

SE-03は未完掘であるため、出土遺物は少いが、掘り方出土の鉢を1個体図示した。(263)は施釉陶器であり、底部が欠失している。胴部は内わん気味に外方に立ち上がり、口縁部は外に拡張して、端部を平坦につくる。口縁部内側に段を形成する。赤褐色の素地に暗赤褐色の釉をかける。

(西谷俊則)

i. 溝状遺構

SD-01 (fig. 60)

溝状遺構SD-01からの出土遺物は細片も含めると多いが、磁器2, 陶器7, 瓦質土器1の10個体を図示した。器形別には、碗1, 鉢1, 皿2, 蓋2, 燭台1, 油壺1, 徳利1, 火舎1である。

碗 (323)

口縁部がわずかに外に肥厚する施釉陶器の碗である。高台脇に素地をみせ、無施文である。

鉢 (324)

筒形の磁器小鉢である。体部に暗緑色の釉で笹図を描く。

皿 (326, 332)

施釉陶器の皿であり、(332)は瀬戸焼とみられる。(326)はやや上げ底である。体部は内わん気味に外方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめるが、ややいびつな作りである。内底面にトチ痕を認める。(332)はやや外に開く高台を有する大皿である。畳付けを除いて貫入がみられ、内底面にはトチ痕を認める。

蓋 (329, 330)

(329)は磁器であり、高台状のつまみを有する。口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。呉須により天井部に水仙に雲雀図、口縁部内側に雲文、内面に雲雀図を描く。(330)は擬宝珠状のつまみを有する施釉陶器の蓋である。高いかえりを付ける。内面に素地をみせる。天井部に鉄釉による文様を描く。

燭台 (328)

施釉陶器の高杯形燭台である。末広がりの高い脚部を有し、中空とする。底部は糸切りの平底である。杯部の口縁部内側には断面三角形の突起をめぐらし、半月形の切り込みを1箇所入れる。脚部内面と底部に素地をみせる。

油壺 (327)

施釉陶器の小形油壺である。算盤形の体部に外に開く口頸部を有する。底部は糸切りで、や

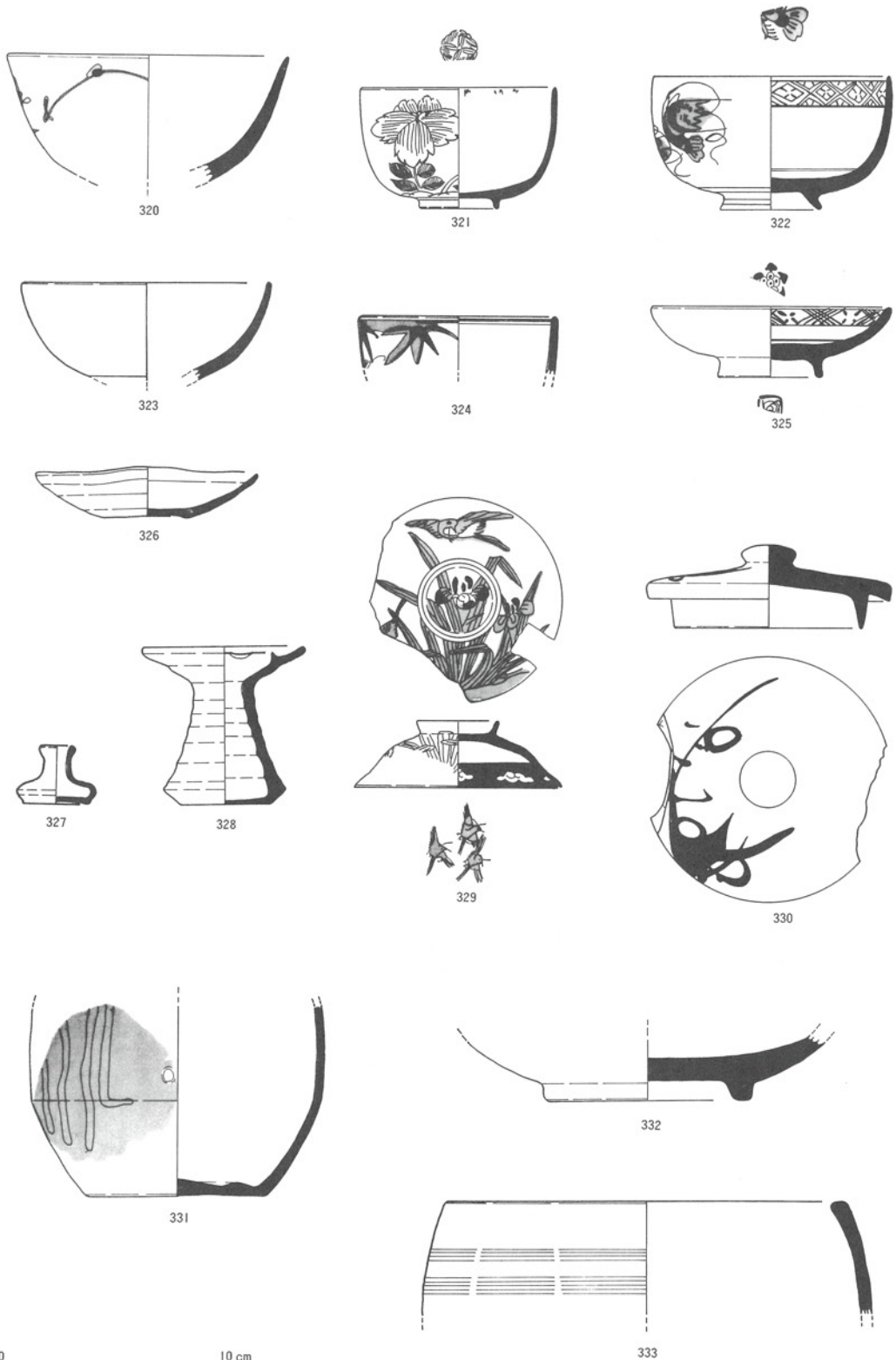


fig. 60 各遺構出土土器類(4)

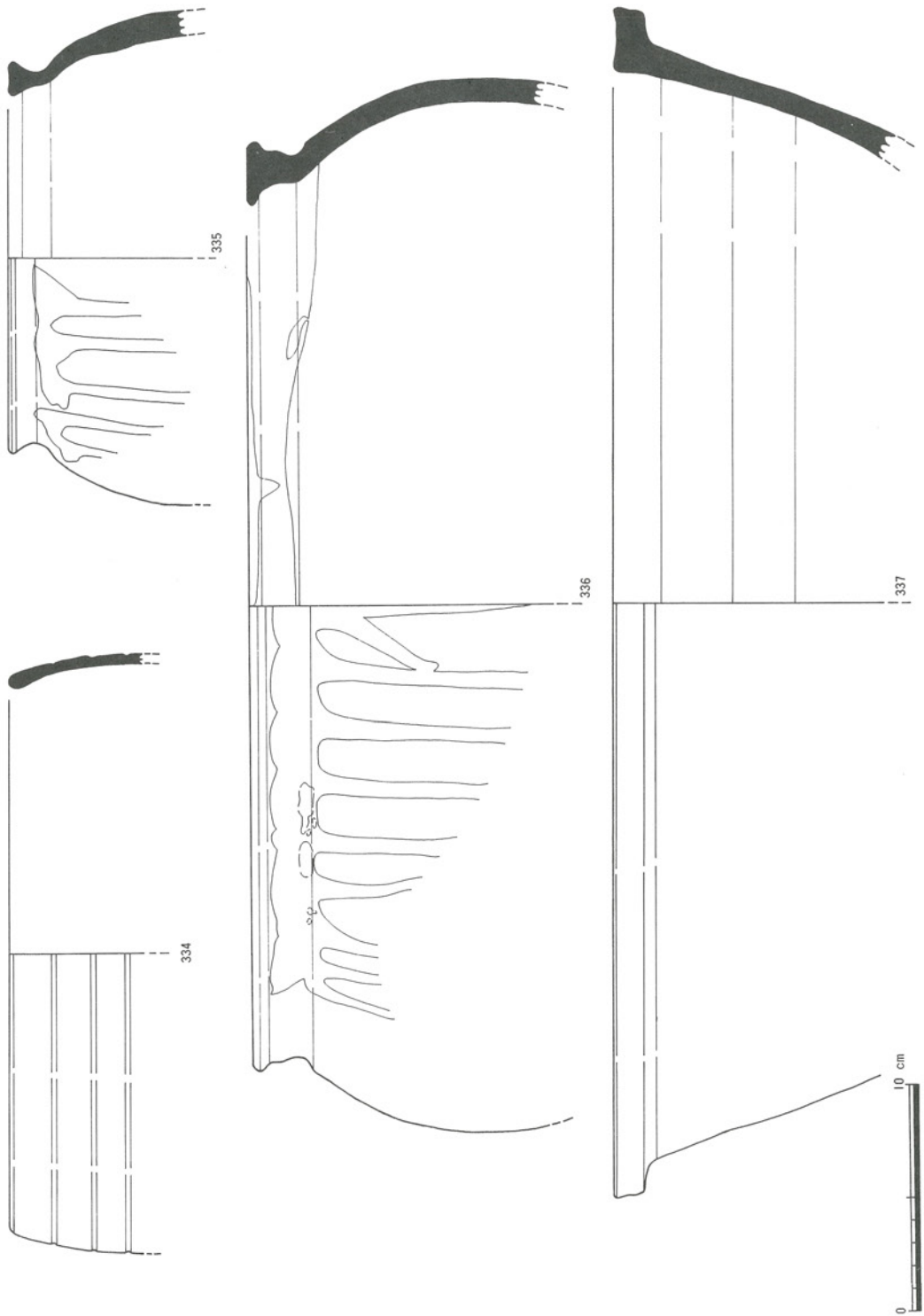


fig. 61 各遺構出土土器類(5)

やや上げ底である。体部最大径部分の3箇所緑釉を斑点状に施す。体部下半、底部、内面に素地をみせる。

徳利 (331)

やや上げ底の陶器の徳利である。体部に流し釉を認める。

火舎 (333)

瓦質土器の火舎である。体部は内傾して口縁端部にいたる。口縁部は内側にやや肥厚し、端部を平坦につくる。体部に5条を単位とする櫛目を2帯めぐらす。外面にナデ、内面にへら磨き調整を施す。胎土は密で焼成良好。色調は灰黒色を呈する。

(河野雄次)

SD-02

SD-02では、磁器、陶器、土師質土器が多数出土している。ここでは、碗1、壺1、鍋1を図示した。

碗 (264)

口縁部を遺存する磁器である。胴部は内わん気味に外上方に立ち上り、口縁端部を丸くおさめる。胴部および見込には、呉須による雲図を描く。

壺 (262)

底部を遺存する土師質土器である。底部はやや上げ底であり、体部は内わん気味に外上方に立ち上る。小形壺とみられる。

鍋 (318)

体部から口縁部を遺存する施釉陶器である。体部下半に最大径部分をつくり出す。口縁部は外反して端部を丸くおさめ、内側に受け部をつくる。体部上半に、5～6本/cm単位の櫛描文を5帯めぐらす。体部内側には暗黄緑色の釉をかける。

(佐藤 健)

SD-03

SD-03からは、磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器、瓦など48点が出土した。小破片が多いため、実測可能な陶器4点を図示した。

皿 (261)

(261)は丸底に近い平底の施釉陶器である。体部は内わん気味に外方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。外面に素地をみせる。口縁部内外に煤が付着しており、燈明皿として使用されたとみられる。

甕 (335, 336, 271)

(335)、(336)は施釉陶器の甕である。口縁部を肥厚させて断面逆三角形とし、広い端面を形

成する。淡赤褐色の素地に暗赤褐色の釉をかけ、その上に、口縁部直下から淡灰黄色の釉による流れごまの手法がみられる。

(271)は施釉陶器の甕である。やや上げ底である。灰黄色の素地に暗灰色の釉をかける。

(益岡秀樹)

SD-05 (fig. 54)

SD-05の出土遺物は少なく、磁器の菊鉢1個体がみられる。(258)は広い高台を有し、体部中央には段が付き、口縁部は内わんする。口縁端部に鉄釉を施す。呉須により体部に菊花文、口縁部内側に八卦文、内底面に唐人図を描く。高台内に銘款を認める。

(河野雄次)

j. 盛土状遺構

盛土状遺構上部 (fig. 62~65)

盛土状遺構上部では、磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器が多数出土している。器形別には、碗70、猪口7、皿28、鉢18、蓋12、燭台2、徳利27、土鍋3、壺7、甕4などがみられる。

碗

碗70個体のうち17個体を図示した。(354)は陶器であり、他は磁器である。絵付は呉須であるが、(351)には暗緑色の釉を用いる。形状から次の3つに分類される。ほとんど腰部を形成せずに、口縁部が内わんするもの(338~346, 378)。腰部を形成して、口縁部が内わんするもの(352)。口縁部が外反するもの(347, 354)。

(338)~(346)、(378)は腰部を形成しなく、胴部が内わんして立ち上がり、口縁部をそのまま丸くおさめる。(338)、(340)、(341)はくらわんか手である。(338)、(340)には胴部に網目文を描き、法量などにも類似性が認められるが、(338)の筆致の方が鋭い。(341)は口径13.0cm、器高6.5cmと大きい。胴部に丸文、見込中央に五弁花を描く。(345)、(346)には見込中央に五弁花を描く。見込底面に素地をみせ、形状にも類似性がみられる。(343)、(344)には口縁部内側に四ッ割花卉連続文を描く。(342)には胴部に氷裂菊花文、見込中央に「寿」の文字文を描く。(339)の胴部には丸文を描く。(378)は口径12.3cm、器高4.3cmと口径に較べて器高が低く、皿に近い形状を呈する。見込中央にトチ痕を認める。胴部に笹図を描く。

(352)は小さくて低い高台を有し、腰部を形成し、胴部を内わん気味に内傾させる。胴部に竹葉図、見込中央に五弁花を描く。摺絵付の手法によるとみられる。

(348)、(349)、(351)、(358)は口縁部を欠失する。(348)、(349)は(343)、(344)に類似するものとみられる。見込中央に五弁花を描き、高台内に渦福の銘款を入れる。(348)に貫入を認める。(358)は高い高台を有し、胴部は直線的に立ち上がる。胴部に草花図を描く。(351)は(352)と形状に類似性がみられる。胴部に暗緑色の釉で笹竹・荀図を描く。

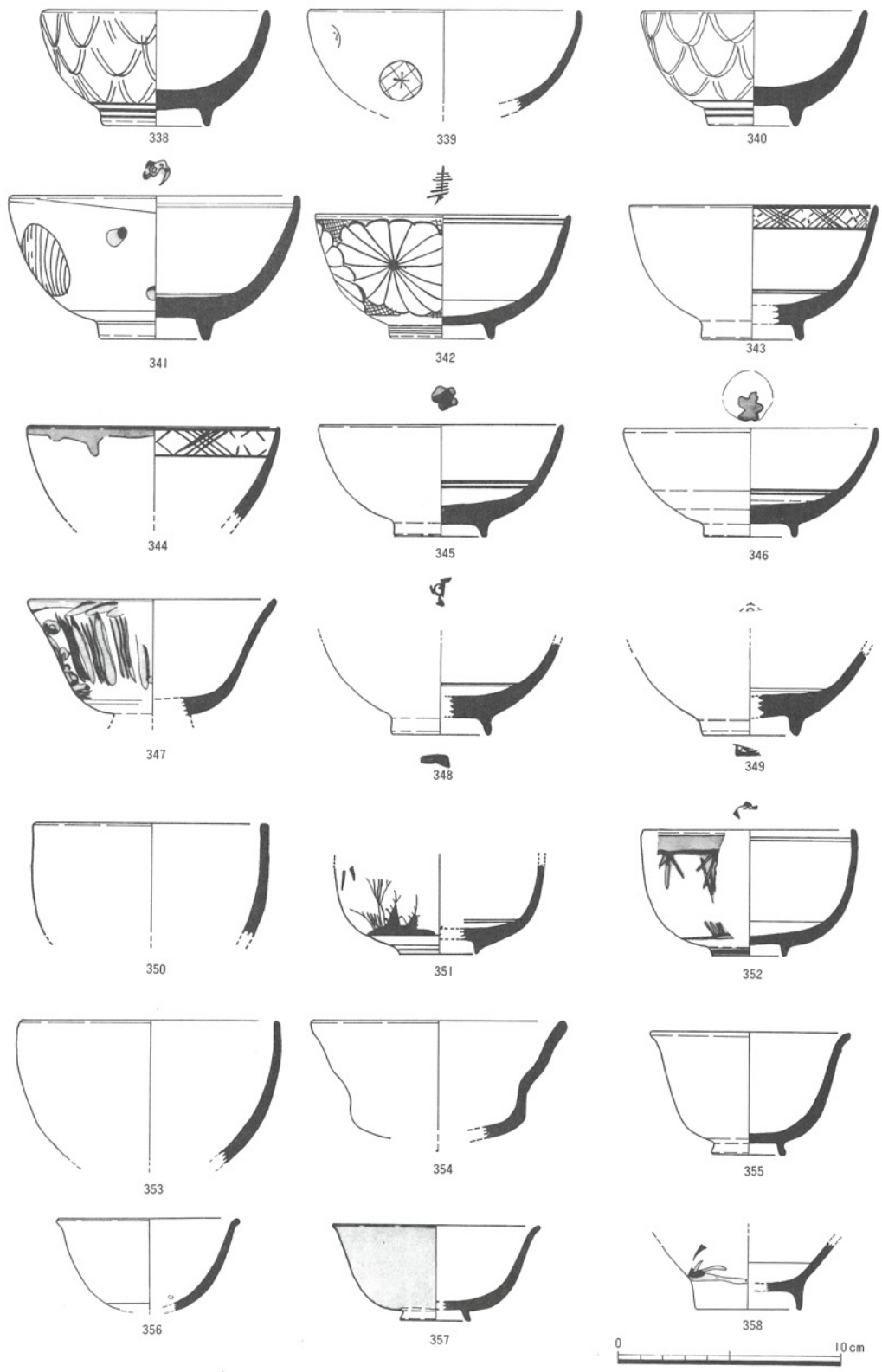


fig. 62 盛土状遺構上部出土土器類(1)

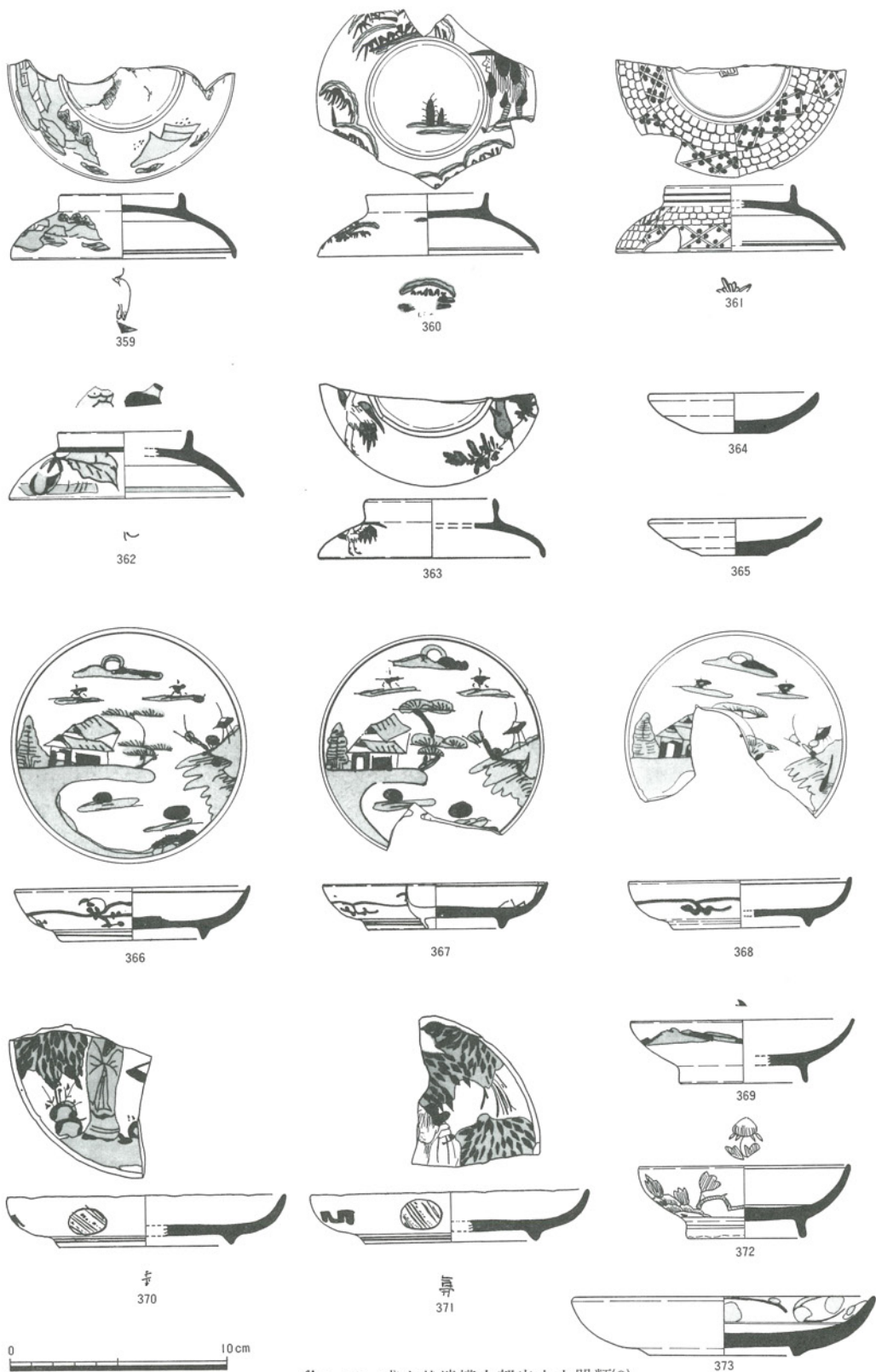


fig. 63 盛土状遺構上部出土土器類(2)

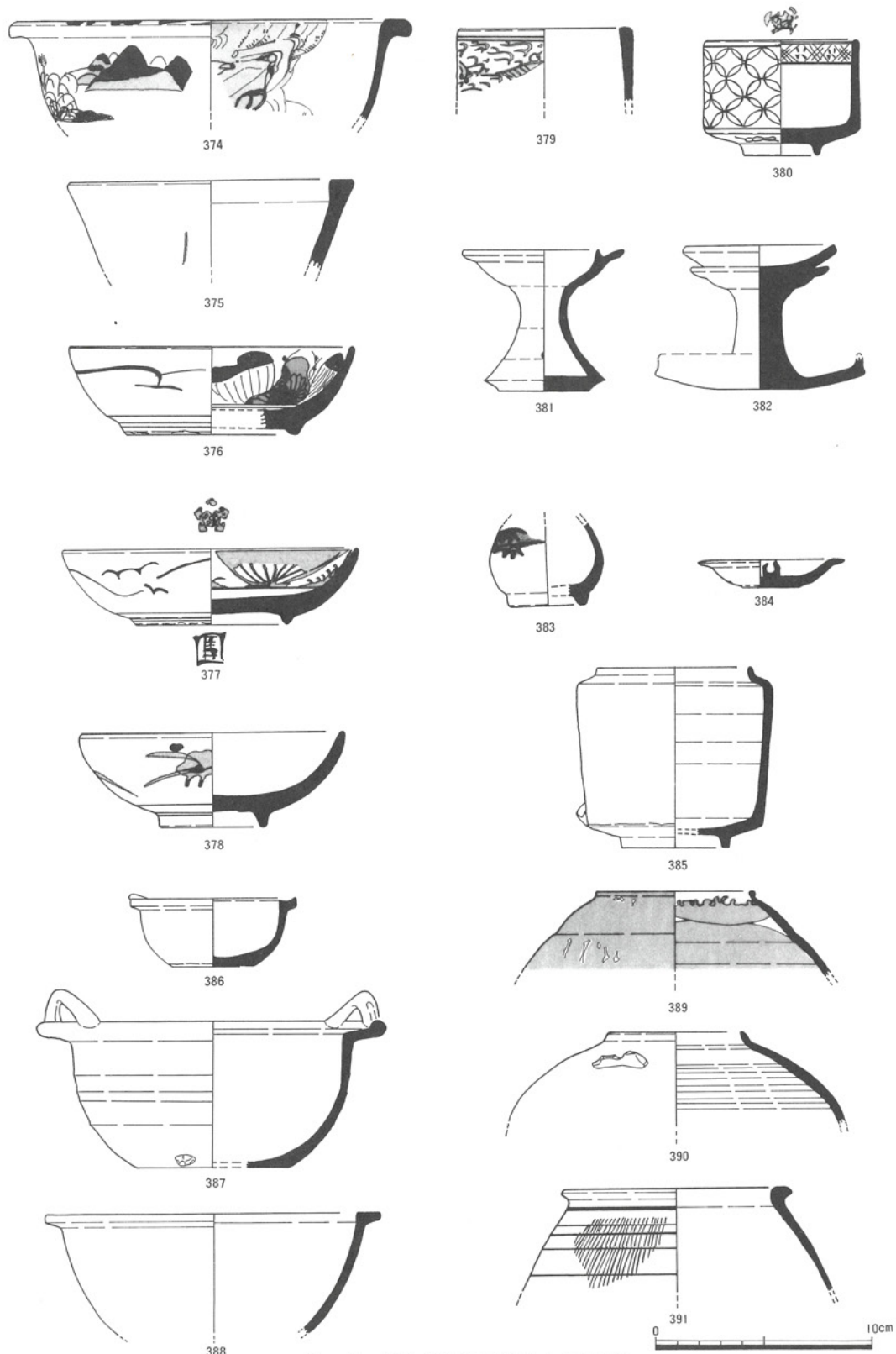


fig. 64 盛土状遺構上部出土土器類(3)

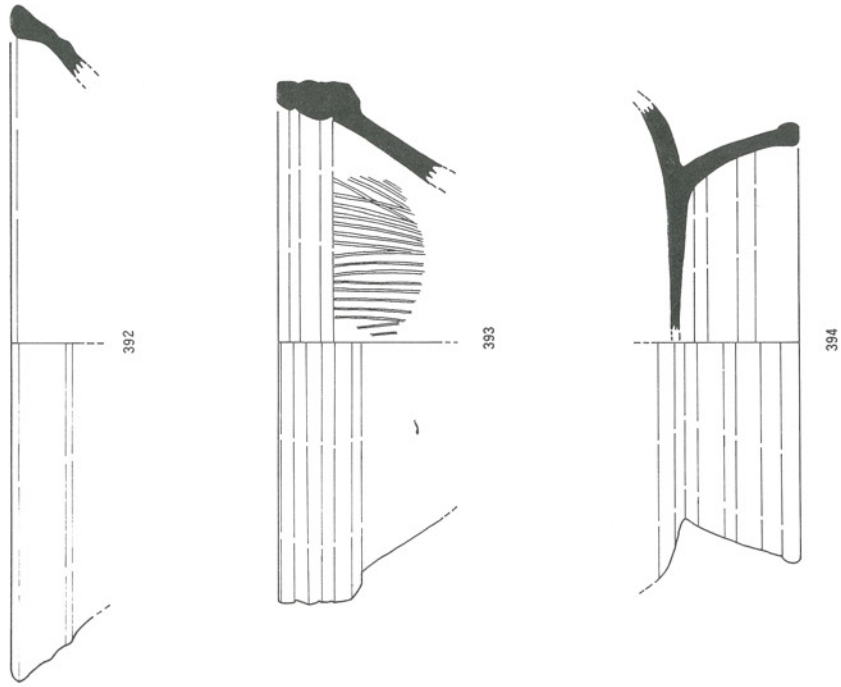
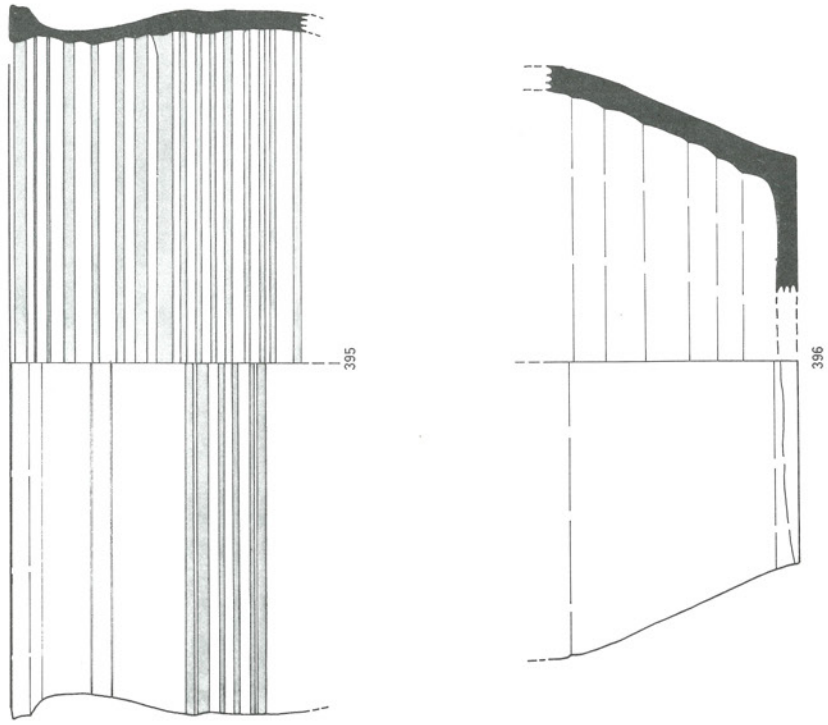


fig. 65 盛土状遺構上部出土土器類(4)

(347), (354) は腰部を形成し、口縁部が外反する。(347) には胴部に草花図を描く。(354) は施釉陶器であり、ロクロ目と指頭圧により、胴部に凹凸をみせる。貫入を認める。高台脇に素地をみせる。

猪口

猪口は5個体を図示した。磁器と陶器があり、筒形の磁器(379, 380)、口縁部が外反する陶器(355~357)の2つに分けられる。

(379), (380) は小さい高台を有する筒形の磁器である。呉須により、(379) には胴部に流水文、(380) には胴部に七宝文、口縁部内側に四ッ割花卉連続文、見込中央に五弁花を描く。

(355) ~ (357) は小さい高台を有し、口縁部が外反する施釉陶器である。貫入を認める。高台脇から高台に素地をみせる。(357) の高台内に「一」の墨書を認める。

皿

皿は10個体を図示した。(364), (365) が陶器であり、他は磁器である。磁器には呉須による絵付が施されている。高台を有し、器高の低いもの(366~368, 370, 371, 373)、高い高台を有し、器高の高いもの(369, 372)、平底の陶器(364, 365)の3つに分けられる。

(366) ~ (368), (370), (371), (373) は広くて低い高台を有し、口縁部を丸くおさめる器高の低い皿である。(366) ~ (368) は器形、法量、絵付けに類似性を示す。体部に唐草文、内面に山水図を描くが、筆致が異なることから、それぞれ違う絵付師の手によるものとみられる。(373) は高台が低く、高台脇に段をめぐらす。口縁部内側に花文を描く。内底面にドーナツ状に素地をみせる。(370), (371) は口縁端に凹凸をみせて花状に仕上げる菊皿である。体部に丸文、内面に唐人図を描き、高台内に「富」銘を入れる。丸文の筆法が異なることから、違う絵付師の手によるものとみられる。

(369), (372) は大きくて高い高台を有し、器高の高い皿である。(369) には体部に遠山図、(372) には体部と内底面に牡丹図を描く。

(364), (365) は施釉陶器である。糸切りの小さい平底であり、体部は内わん気味に外方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。体部と底部に素地をみせる。(382) の燭台の皿部にみられる形状とほぼ同一であり、燈明皿とみられる。

鉢

鉢は12個体を図示した。磁器5、陶器7であり、形状から次の6つに分けられる。低い高台を有し、体部が内わんして外に立ち上がる磁器の浅鉢(376, 377)。体部が内わんして外に立ち上がる磁器の深鉢(350, 353)。口縁部が外に拡張する磁器の深鉢(374)。口縁部を肥厚させて、広い端面をつくり出す陶器の深鉢(375, 392, 412, 413)。口縁部が外に拡張する陶器の深鉢(337, 388)。播鉢(393)。

(376), (377) は低い高台を有し、体部が内わんして外に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる磁器の浅鉢である。呉須により、体部に唐草文、内面に扇図を描く。(376) は内底面を欠失しているため不明であるが、(377) には内底面に五弁花を描く。

(350) は口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、端部を平坦につくり出す磁器の深鉢である。体部に鉄釉をかける。(353) は口縁部をやや内傾させて端部を丸くおさめ、口縁直下に浅い凹線をめぐらす磁器の深鉢である。貫入を認める。

(374) は口縁部を外に拡張させて広い端面をつくり出す磁器の深鉢である。コバルトブルー色の釉により、内外面に遠山図を描く。

(375), (392), (412), (413) は口縁部を外に肥厚させて、広い端面をつくり出す施釉陶器の深鉢である。(375) は内面に素地をみせる。(392) は口縁直下に浅い凹線をめぐらす。貫入を認める。瀬戸焼とみられる。(412) と(413) は同一個体とみられる。高台畳付は幅広く、腰部に明瞭な稜を形成する。体部はやや胴締めである。口縁部を内側に拡張し、くぼみをもたせた広い端面を形成する。口縁部内側に段をつくり出す。内底面にトチ痕を認める。体部にはヘラ状工具によって様々な文様を彫り、その上に茶褐色、暗緑色、コバルトブルー色の釉を斑にかける。東海系とみられる。

(337), (388) は口縁部を外に拡張させて広い端面をつくり出す施釉陶器の深鉢である。端面に浅いくぼみを形成する。

(393) は施釉陶器の播鉢である。口縁部を外に折り返して肥厚させ、内外にそれぞれ2条の凹線をめぐらす。内面に9条を単位とする播目を入れる。内面に素地をみせる。

蓋

蓋は6個体を図示した。(384) が陶器であり、他は磁器である。磁器には呉須による絵付けが施される。形状から山蓋(359~363)、落蓋(384)の2つに分けられる。

(359)~(363) は高台状のつまみを有し、口縁端部を丸くおさめる磁器の山蓋である。(359) には天井部に山水図、内面中央に白鷺図、(360) には天井部に雪中荀掘り図、内面中央に雪中笹図、(361) には天井部に花文、内面中央に菊花文、(362) には天井部に茄子図、(363) には天井部に藤に鶴飛翔図、内面に藤図を描く。

(384) は施釉陶器の落蓋であり、中央につまみを貼り付ける。底部は小さく、糸切りであり、素地をみせる。

燭台

施釉陶器の燭台である。(381) は脚部と杯部から形成される。脚部は末広がりであり、裾を内側に切り込み、小さい糸切りの底部をつくり出す。脚部を中空として油溜めとする。杯部は内側に断面三角形の突帯をめぐらす。脚部内側と底部に素地をみせる。(382) は脚部と杯部と

皿部とからなる。脚部は末広がりであり、裾に受け皿をつける。杯部に(364)、(365)にみられる皿を貼り付けて燈明皿とする。底部をやや上げ底とし、素地をみせる。

徳利

(383)は磁器の神酒徳利である。小さい高台を有し、高台畳付と内面に素地をみせる。体部に笹図を描く。

土鍋

施釉陶器の土鍋である。(386)は小形の土鍋である。糸切りの平底から体部は内わん気味に外方に立ち上がる。口縁部を外に拡張して、広い端面をつくり出す。端部をつまみ上げて端面に浅いくぼみをめぐらす。端面の1箇所直径0.9~1.0cmの円形浮文を貼りつける。口縁部分の3分の1を欠失しているため、円形浮文が複数であるかどうか不明である。底部に素地をみせる。(387)はやや上げ底の土鍋である。口縁部を外に拡張して、広い端面をつくり出す。端部を上方につまみ上げ、ここに紐状の取手を貼り付ける。底部に素地をみせる。

壺

壺は施釉陶器5個体を図示した。(385)は筒状の小形壺である。高台を有し、高台脇と肩部に明瞭な稜を形成する。口縁部はわずかに上方に引き上げて、端部を丸くおさめる。体部の上下に貼り付け痕が残り、紐状の取手を貼り付けたとみられる。高台脇と高台に素地をみせる。(389)は内傾して立ち上がる体部に、わずかに上方につまみ上げた口縁部がつく。(390)の形状は(389)に類似する。肩部に耳を貼り付けており、二耳壺とみられる。内面に素地をみせる。(391)は口縁部を外に折り返して平坦な端面をつくり出す。体部に櫛目状の文様を入れる。内面に素地をみせる。(265)は肩部に明瞭な稜を形成し、口縁部を玉縁状につくる。内面肩部下半へう削り調整。内面に素地をみせる。

甕

甕は施釉陶器を2個体図示した。(395)は口縁部を外に折り返して、端部を平坦につくり出す。内外に鉄釉を横縞状にかける。体部に貫入を認める。(396)は大きい平底をつくり出す。底部に素地をみせる。

盛土状遺構下部 (fig. 66)

盛土状遺構下部では、磁器、陶器、土師質土器、瓦質土器が多数出土している。器形別に碗4、皿2、燈明皿1、仏飴具1、徳利2、土瓶1、火舎1、花生1、壺1の14個体を図示した。

碗

碗4個体のうち(398)は陶器であり、他は磁器である。高台脇からわずかに腰部を形成して、胴部は内わん気味に外方に立ち上がり、口縁端部をそのまま丸くおさめるという共通性をもつ。磁器には呉須による絵付けが施される。

(397)には胴部に山水図，(399)，(400)には胴部に丸文，見込中央に五弁花を描く。(399)と(400)は類似するが，(399)に丸文へのダミ手法や筆致に鋭さがみられ，胎土，釉掛けにも差異が指摘される。

(398)は瀬戸焼とみられる。口縁部を外にやや肥厚させ，高台内に兜巾をみせる。見込および口縁部外側に緑色，胴部と高台内外に黄褐色の釉をかける。全面に貫入を認める。

皿

(401)は磁器の皿である。高台はやや外に開き，口縁端部を丸くおさめる。呉須により，口縁部内側に四ッ割花弁連続文，内底面に五弁花を描く。摺絵手法とみられる。

(405)は施釉陶器の皿であるが，口縁部の内外に煤の付着が認められ，燈明皿として用いられたとみられる。やや平底に近く，口縁部をわずかに外に肥厚させ，端部を丸くおさめる。外面に素地をみせる。

燈明皿

(406)は施釉陶器の燈明皿である。体部は大きく外に開き，口縁部をやや肥厚させて端部を丸くおさめる。内面に低い断面三角形の突帯をめぐらし，1箇所半月形の切り込みを入れる。外面に素地をみせる。

仏餉具

(402)は脚部を欠失する磁器の仏餉具である。碗部は内わんして外に立ち上がり，口縁端部を丸くおさめる。碗部の胴に赤・緑・薄紫色の釉により，鶴飛翔図を描く。

徳利

(403)，(404)は同一個体とみられる磁器の神酒徳利である。(403)は口頸部が細長い。口縁部はやや外反し，端部を丸くおさめる。(404)は大きい高台を有し，体部は球形状に立ち上がる。両者とも内面に素地をみせ，外面に呉須で草花図を描く。

土瓶

(407)は口縁部と肩部を遺存する瓦質土器の土瓶である。肩部に段をめぐらし，三角形の1対の取手を貼り付ける。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，端部を丸くおさめる。胎土はやや粗い。焼成は良好で堅緻。色調は灰黒色を呈する。粘土紐巻き上げ成形。

火舎

(409)は体部の一部を遺存する瓦質土器の火舎である。押印により草花図を浮出させている。胎土は密，焼成は良好である。色調は灰黒色を呈する。

花生

(408)は口縁部を遺存する施釉陶器の花生である。体部は直立し，内外面に凹凸をもって変化に富んだ趣きをかもし出している。口縁部は内側に折り返して肥厚し，端部を丸くおさめる。

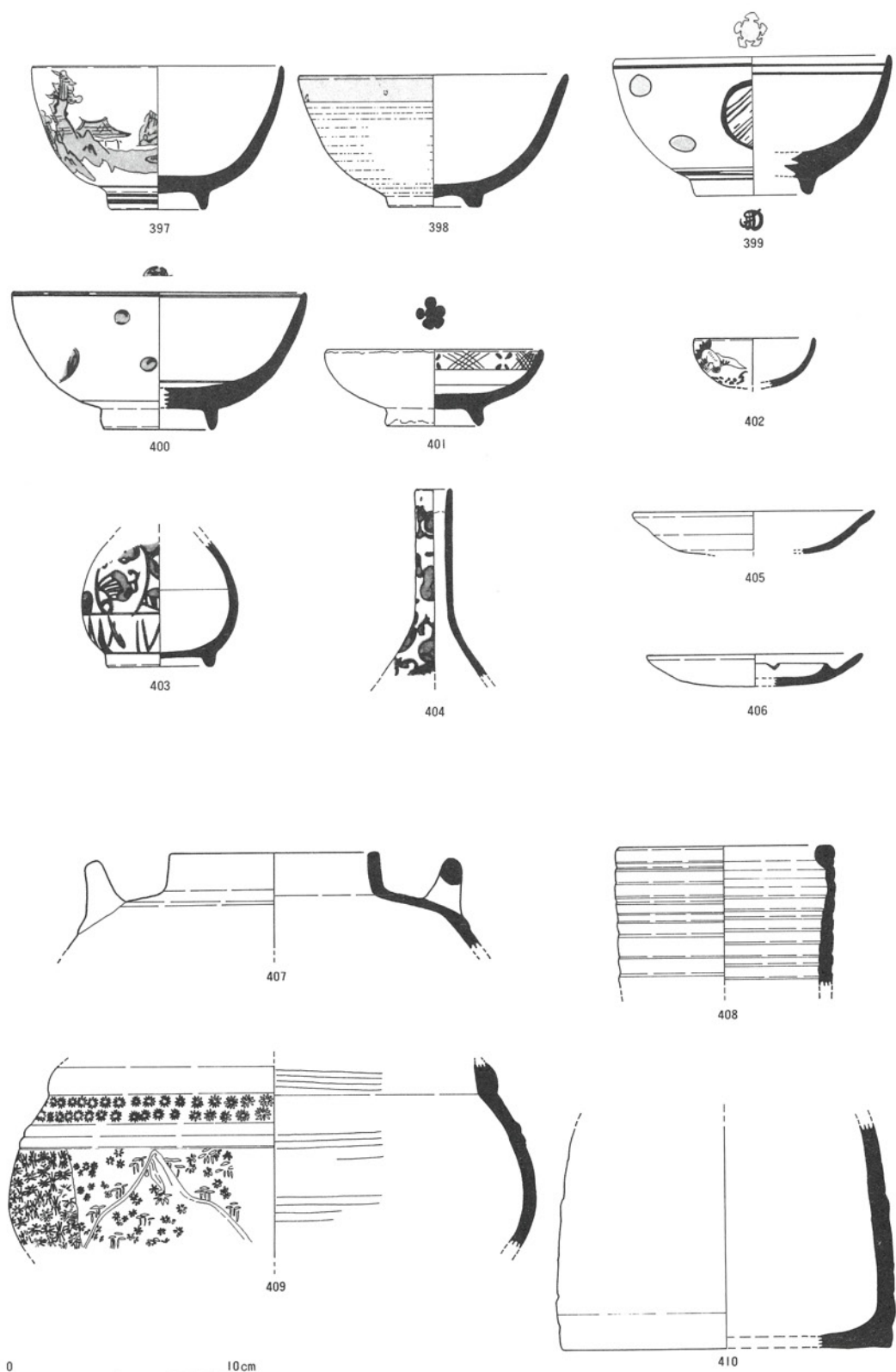


fig. 66 盛土状遺構上部出土土器類

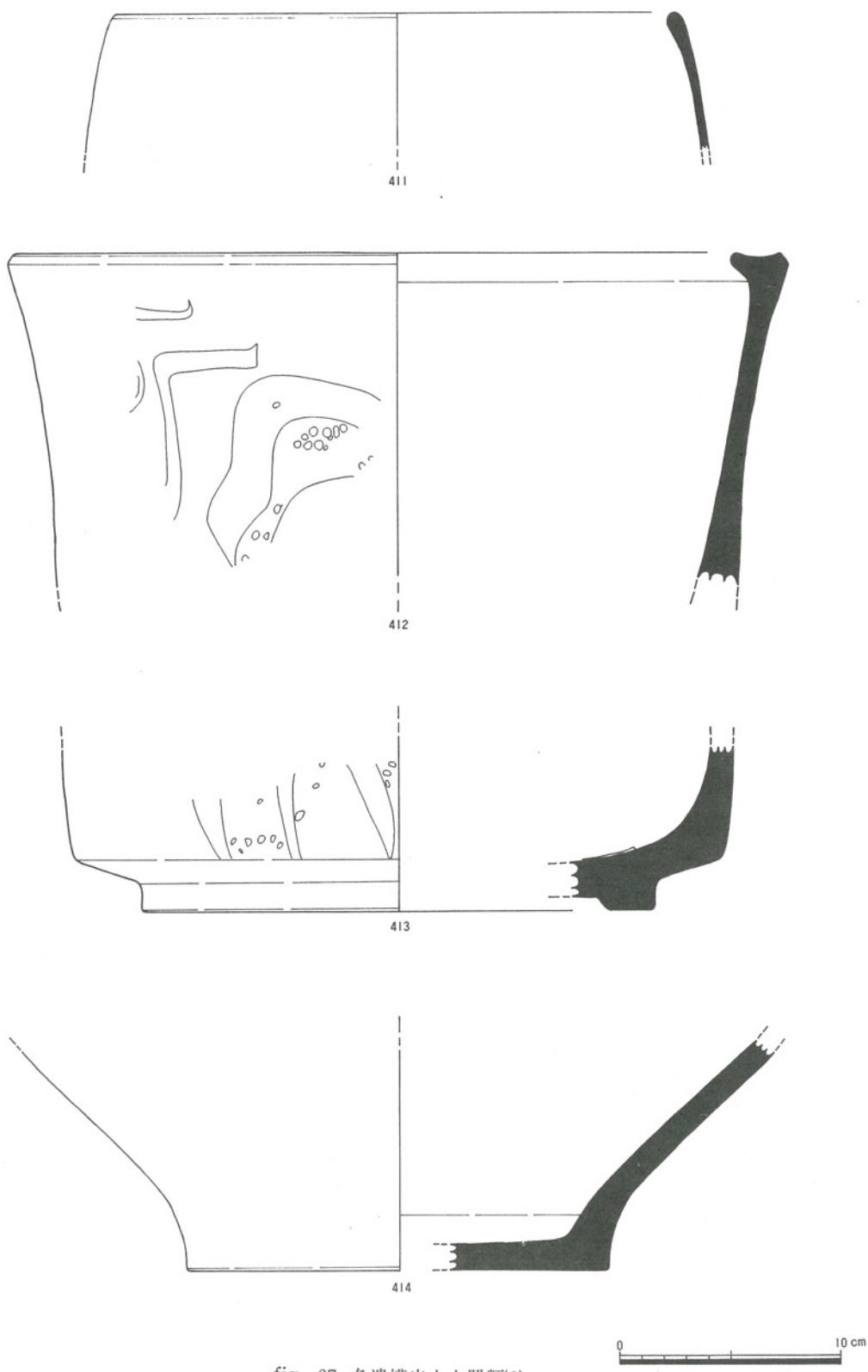


fig. 67 各遺構出土土器類(6)

内面に素地をみせる。

壺

(410) は体部下半を遺存する無釉陶器の壺である。平底であり、体部はやや内傾気味に直立する。胎土は粗く、焼成は良好で堅緻である。

(中西俊治)

k. 池状遺構 (fig. 67)


池状遺構出土の土器類は少なく、磁器の猪口1個体を図示した。(313) は低い高台を有する筒形であり、胴部はやや内傾する。呉須により、胴部に網目文、見込中央に五弁花を描く。

池状遺構の東岸から5個体の磁器が出土した。碗3、鉢1、皿1であり、呉須による絵付が施されている。(321)、(322) は腰部を形成して口縁部がやや内傾する碗である。(321) には胴部に花図、見込中央に轡文を描く。(322) は撥高台を有する。胴部に蝦図、口縁部内側に四ッ割花卉連続文、見込中央に蝦図を描く。(320) は口縁部がわずかに外反する碗である。胴部に唐草文を描く。(308) は上げ底気味の低い高台を有し、口縁部を外に折り返して玉縁状の口縁をつくりだす鉢である。内面に圏線と草文を描く。(325) はやや外に開く高い高台を有する皿である。口縁部内側に四ッ割花卉連続文、内底面に五弁花、高台内に渦福銘を描く。

(河野雄次)

1. 陶器製徳利の刻字 (fig. 68, 69) (P L. 54, 55)

ヘラ状工具による刻字が陶器製の徳利に多くみられる。特に、A-2, A-3, A'-3, B-2, B-3 グリッドの第1層と包含層からの出土がその大部分を占める。

刻字は体部の最大径部分あるいはその上位に陰刻されている。「黒」、「林」、「鳴」、「酒」、「高・ノ亥」、、「秋」、「八五」、「九」、「高」、「高鳴・酒」、「富士」、「南・酒」、「塩・酒」、「柳・酒・大」、「堂」、「佐泊」、「屋」、「八幡屋」、「田」、「恵」、「銀」、「國」、「綿」、「才・申ハル・安・㊦」等の文字を認める。この文字については後論によりたい。

(松永雅行)



fig. 68 德利刻字拓影(1)

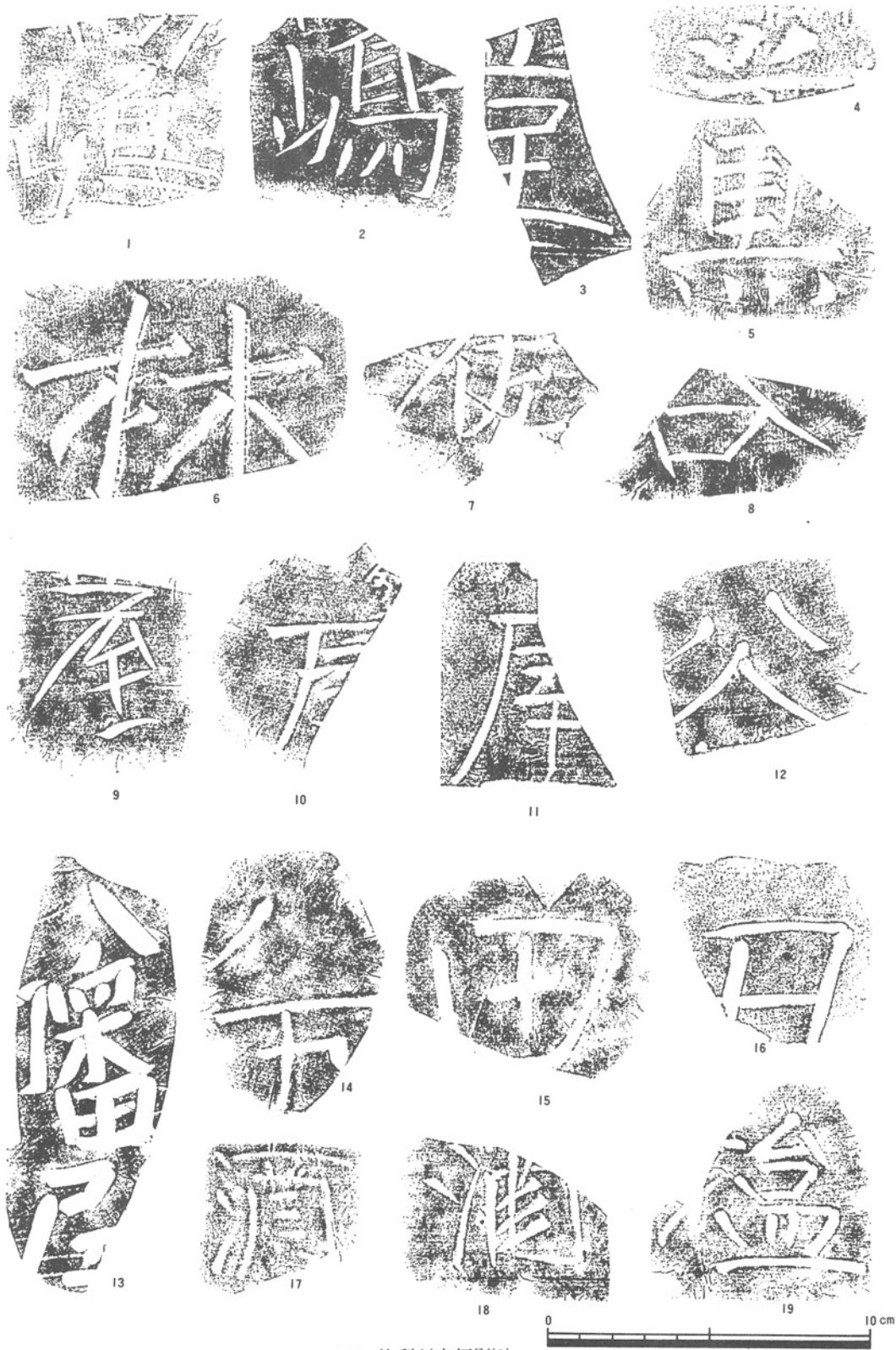


fig. 69 德利刻字拓影(2)

② 瓦 (fig. 70) (P L. 57)

瓦は調査区内各地点から出土しているが、遺構に伴うものは少なく、大山祇神社跡の本殿と拝殿、小祠跡、礎石建物跡S B-01の石組遺構、礎石建物跡S B-04、土塁S A-01、井戸S E-02の脇溝状遺構S D-05の7箇所である。平瓦がその大部分を占め、軒丸瓦は2個体にすぎない。ここでは、軒丸瓦を図示するに止めた。

(1)は土塁S A-01の裏込め中から出土した三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当文様は左巻三ッ巴文と連珠文の組み合わせであり、巴文の頭部は大きく、尾部も太く短い。珠文は直径1.2cmと大きく、16~17個とみられる。周縁は幅2.1cm、高さ0.6cmと広くて高い。瓦当と体部の接合は、内面では指でなでつけている。瓦当裏面のくぼみは約0.3cmと浅い。体部外面はへら状工具により磨き込まれている。内面には細かい布目と横筋が残り、縦にへら削りがみられる。側面には切り離しの後、軽くナデ調整を施す。瓦当下半と体部下半が欠失しているが、体部に直径1.3cmの釘穴を穿つ。外部穿孔であり、穿孔後の内面調整は施されない。胎土はやや粗く、直径0.3cm以下の礫を含む。焼成は堅緻であり、色調は灰黒色を呈する。

(2)は井戸S E-02の脇から出土した三ッ巴文軒丸瓦である。瓦当文様は左巻三ッ巴文と連珠文の組み合わせであり、巴文の頭部は大きく、尾部も太く短い。珠文は直径1.2cmと大きく、(1)に較べてその間隔が広く、13~14個とみられる。周縁は幅2.1cm、高さ0.7cmと広くて高い。瓦当裏面のくぼみはほとんどない。瓦当と体部の接合位置は、先端からやや下り、上端に反りがみられる。内面では指でなでつけている。体部外面はへら状工具により磨き込まれている。内面には細かい布目と横筋が残り、縦にへら削りがみられる。側面には切り離しの後、軽くナ

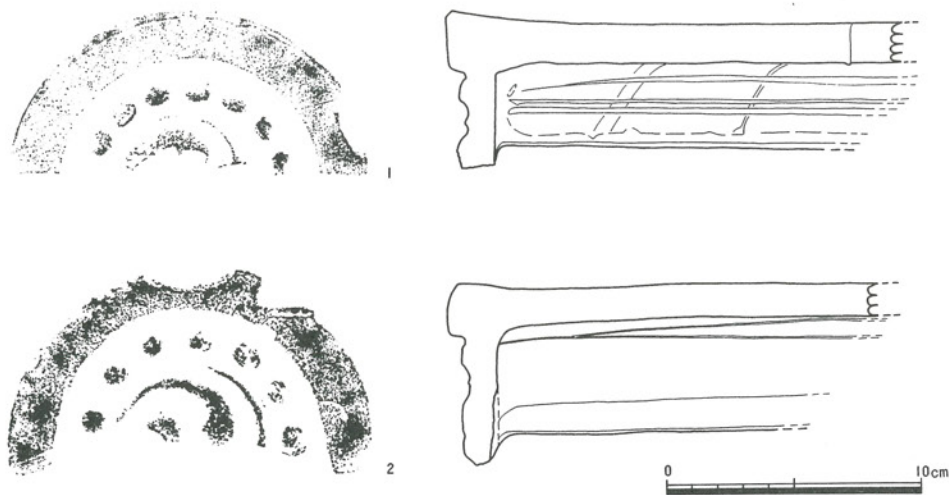


fig. 70 軒丸瓦

デ調整を施す。瓦当下半と体部下半を欠失しているため、釘穴は不明である。胎土は粗く0.2 cm以下の砂粒を多く含む。焼成は良好であり、色調は黒灰色を呈する。

(河野雄次)

③土錘 (fig. 71, 72 Tab. 5) (P.L. 58)

土錘は26個体出土し、管状土錘と有溝土錘が認められる。

管状土錘は23個体であり、第1層(1~3), 包含層(4~10, 13, 15~21), 盛土状遺構(11), 第1トレンチ最下層(22, 23), 土壘S A-02(12, 14)から出土している。(2)~(4), (8), (9), (14)が大谷焼の

陶器, (22), (23)が陶器であり, 他は土師質土器である。その形状から, 次の3つに分けられる。円筒形であって, 中央部に膨みをもつもの(1~16)。

円筒形であって, 膨みをもたないもの(22, 23)。

細長い円筒形で, 管の直径が小さいもの(17~21)。

有溝土錘(24~26)は第1トレンチ最下層から, 3個体出土した。土師質土器であり, 胎土はやや粗く, 2mm以下の砂粒を含む。焼成はあまく, 色調は淡赤褐色を呈する。全体として卵形であり, 溝は両側面から棒状工具による押圧技法により成形され, 他の両側面は

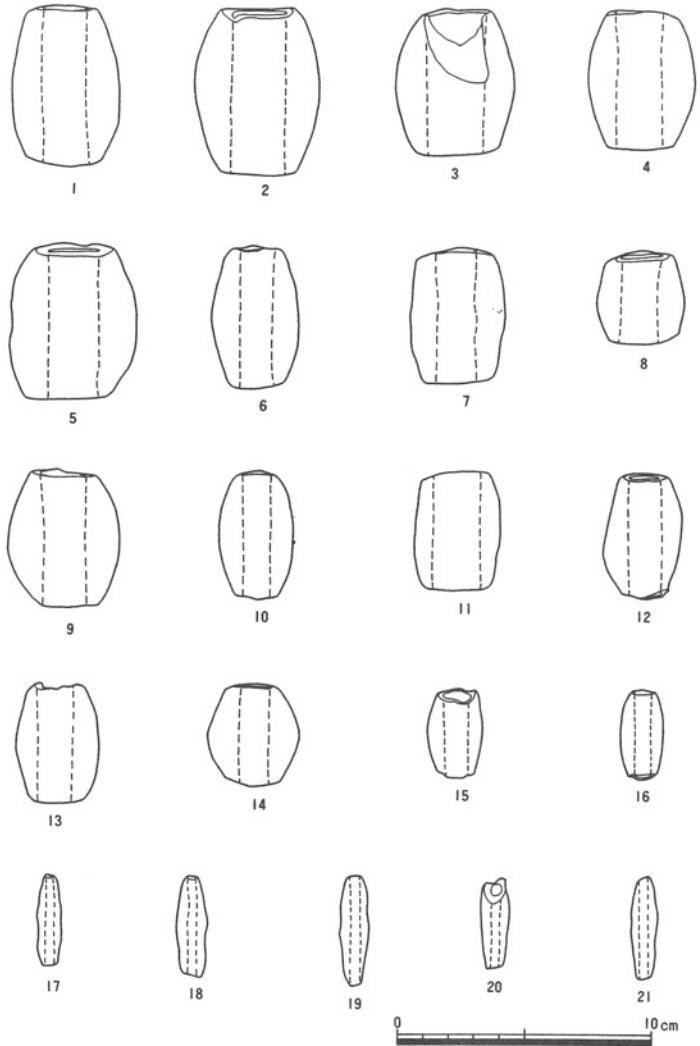


fig. 71 管状土錘

長軸にそってくぼみをみせるという共通性が認められる。短軸上の断面は「エ」字形である。

有溝土錘は徳島県では他に鳴門市日出遺跡(森・白石編 1968), 小松島市市営グラウンド遺跡(小林 1974), 鳴門市中内遺跡(菅原編 1981), 徳島市庄遺跡徳島西警察署地区(河野 1981)・旧あさひ学園地区, 大毛島39区遺跡などの臨海地域に類例がみられる。

(西谷俊則, 河野雄次)

参考文献

河野雄次 1981 「庄遺跡 徳島西警察署地区発掘調査」『徳島県文化財調査概報 昭和54年度』徳島県教育委員会

小林勝美 1974 「古墳時代の小松島 漁具」『小松島市史』上巻

菅原康夫編 1981 『中内遺跡』徳島県教育委員会

森 浩一・白石太一郎編 1968 『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』同志社大学文学部考古学調査報告第2集

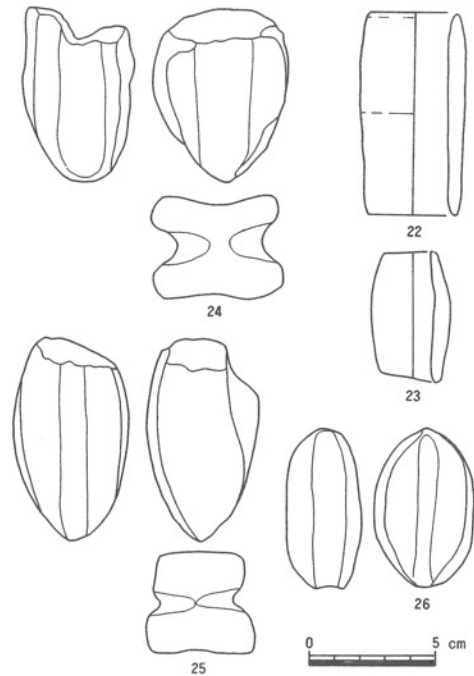


fig. 72 管状土錘, 有溝土錘

④ 土製品 (fig. 73) (P L. 59)

土製品は土壘 S A -02 の南の包含層中から 3 個体出土した。絵付けはされていない。

(1) は立灯籠の形を模したものである。空輪は欠損しているが、笠、火袋、受台で構成されている。現存高 4.1cm, 笠の高さ 1.5cm, 幅 2.3cm, 火袋の高さ 1.5cm, 幅 1.8cm, 受台の高さ 1.1cm, 幅 2.2cm である。笠は寄せ棟の形態をとり、四方の傾斜面には中央に 1, その周囲に 5 の珠文が型敲きされている。火袋は 4 面からなり、隔面に鳥居と円の型敲文が配されている。受台の下面には、対角線上に型痕が認められる。型起し、接合後の整形は認められなく、粗雑なつくりである。底部穿孔はない。

(2) は虚無僧の姿を模したものである。天蓋, 尺八, 衣, 袈裟, 偈箱で構成され, 偈箱から下は欠損している。現存高 3.5cm, 最大幅 2.3cm である。衣の袂から肩, 天蓋の側面から頂部にかけて型痕が認められる。型起し, 接合後の整形は認められなく, 粗雑なつくりである。底部

に直径約0.1cmの孔が穿たれている。

(3)は人の頭部を模したものである。目、鼻、口が型敲され、耳は表現されていない。完形品であり、高さ3.2cm、側頭部の幅2.1cm、鼻から後頭部の幅2.3cmである。首の部分に長径0.6cm、短径0.5cmの不整円形に穿孔されている。頭部は中空である。頭頂から側頭さらに首と顎の間にかけての部分に型痕が認められる。型起し後、丁寧に整形され、端正なつくりである。

土壘S A-02の南からの出土であり、大山祇神社跡、小祠跡などに献納された土製品とみられる。徳島県では他に徳島市慈光寺蜂須賀家墓(山川 1974, 豊田 1978), 徳島市徳島城御花島遺跡にも類例があり、いずれも江戸時代の所産である。

(西谷俊則, 河野雄次)

参考文献

山川浩実 1974 「蜂須賀家・藩士墓出土品について」『徳島県博物館紀要』第5集

豊田瓠庵 1978 「慈光寺出土の陶磁器」

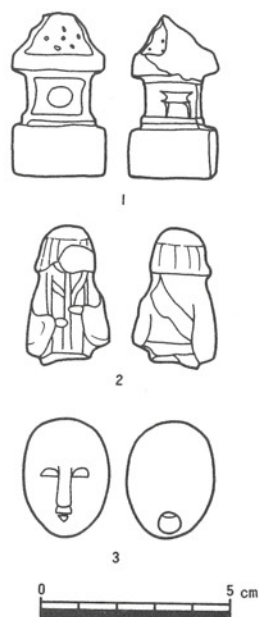


fig. 73 土製品

⑤ 砥石 (fig. 74) (P L. 60)

天然砥は鉋掘量に限りがあるため、掘り尽すと同精度の岩石を探して供給されている。そのため、種類が多く、細かい分類は困難である。現在、人工砥が多く作られ、粒度はサンドペーパーと同じ番数字で表わされている。粒度が小さいほど番数字が大きくなる。3000#以上の砥石は天然砥だけである。ここでは、8個体の天然砥を図示した。

(1)は青砥であり、粒度は600~800#である。一般には刃物を研ぐのに最適とされ、最も多く使用されている。片岩製である。欠損していて、約半分を遺存するにすぎない。現存長11.1cm、幅5.1cm、最大部の厚さ2.3cmである。砥面は表、裏、側面の1面の3面である。表面には緩やかな凹みがあり、裏面には一部使用痕がみられる。長軸上の一部が欠損し、端部に向うにつれて厚みを増している。使用痕からみて、現存する端部を手前にして用いられたとみられる。盛土状遺構下部出土。

(2), (5)は(1)に類似していて、粒度もほぼ同じである。(2)は泥岩製である。欠損していて、約半分を遺存するにすぎない。現存長9.5cm、幅3.6cm、最大部の厚さ1.2cmである。砥面は表の1面である。ほぼ平坦であるが、一部に使用痕としての凹みがみられる。使用痕からみ



fig. 74 砥 石

て、長軸上の現存する端部を手前にして用いたとみられる。盛土状遺構中出土。(5)は片岩製である。欠損している。現存長6.5cm、幅3.2cm、最大部の厚さ2.2cmである。砥面は4面である。4面とも現存する端部付近はほぼ平坦であるが、欠損している部分に向けてやや凹んでいる。裏面には、長軸方向に沿って一部自然面がみられる。盛土状遺構中出土。

(3)は粘板岩製の備水砥^{びんすい}であり、粒度は400#と粗く、荒砥である。長軸上の両端部が欠損している。現存長9.6cm、幅5.6cm、最大部の厚さ2.1cmである。砥面は表と側面の2面の3面である。3面とも使用痕としての凹みが中央にみられる。左側面中央に溝状の研磨痕がある。裏面は全面に剝離痕がみられる。盛土状遺構出土。備水砥は地層に直交する面を砥面として使用される。

(6)は(3)に類似していて、備水砥あるいは白砥とみられる。粘板岩製の荒砥である。長軸上の両端部が欠損している。現存長4.8cm、幅2.9cm、最大部の厚さ1.4cmである。短軸上の両側面も一部欠損しているため、砥面は表・裏の2面が確認される。2面ともに細い溝状の研磨痕がある。包含層出土。

(4)は砂岩製である。長軸上の両端部が欠損している。現存長5.3cm、幅5.6cm、最大部の厚さ2.1cmである。砥面は表、裏、両側面の4面である。4面とも緩やかな凹みがみられる。裏面には長軸上に沿った剝離痕が4ヶ所確認される。SD-01出土。

(7)、(8)は粒度3000#以上と非常に細かい粘板岩製の仕上げ砥である。長軸上の両端部の一部が欠損している。現存長9.9cm、幅5.6cm、最大部の厚さ2.7cmである。砥面は5面とみられる。表面の左中央部から左下部にかけて、研磨痕としての大きな凹みが認められる。研磨痕からみて、図示した表面の上端部を手前にして使用したとみられる。土壘中より出土。(8)は長軸上の一端が欠損している。現存長6.6cm、幅5.8cm、最大部の厚さ1.2cmである。砥面は5面である。表面と裏面に研磨痕としての凹みが認められる。破損後、接合のために用いたとみられる漆が、長軸上の欠損部分に遺存している。盛土状遺構下部出土。

(益岡秀樹)

参考文献

大野 正 1980 『技法と作品 研磨彫刻編』青雲書院

⑥ 石器 (fig. 75) (P.L. 61)

石鏃6、二次調整痕のある剝片1点の7点が出土している。いずれも遺構には伴わず、単独出土である。(9)がチャート製であり、他はすべてサヌカイト製である。

Tab. 5 土 錘 計 測 表

番号	形状	出土地区	現 長 (mm)	最大幅 (mm)	A 孔径 (mm)	重 量 (g)	溝 幅 (mm)	溝 深 (mm)	備 考	
1	管	第 1 層	63.5	41	A 18	98.5			土師質土器	
2		"	60.5	49	A 21	137.1			陶器 (大谷焼)	
3		"	58	46.5	A 21	114.1			陶器 (大谷焼) 欠損	
4		包含層	54.5	42	A 19	88.8			陶器 (大谷焼)	
5		"	61.5	49.5	A 21	165.2			土師質土器	
6		"	57	34.5	A 17	51			土師質土器	
7		"	53.5	37.5	A 17	71.5			土師質土器	
8		"	37	34.5	A 17	47.3			陶器大谷焼)	
9		状	"	54.5	44	A 17.5	92.9			陶器 (大谷焼)
10			"	51	29	A 9	33.7			土師質土器
11	盛土状遺構下部		46	33.5	A 18	42.7			土師質土器	
12	土	SA-02	49.5	29.5	A 12	38			土師質土器	
13		包含層	47.5	32.5	A 15				土師質土器, 欠損	
14		SA-02	40	36	A 13.5	45.3			陶器 (大谷焼)	
15		包含層	35	21.5	A 9.5	11.1			土師質土器, 欠損	
16		"	36	11.5	A 6	7.4			土師質土器	
17		錘	"	36	9	A 3	2.8			土師質土器
18			"	39	12	A 3.5	4.3			土師質土器, 欠損
19			"	43	11.5	A 3.5	4.5			土師質土器
20			"	34.5	11	A 4				土師質土器, 欠損
21			"	39.5	10.5	A 3.5	3.3			土師質土器
22	"		第1トレンチ最下層	80	42				陶器, 欠損	
23	"		"	51.5	31				陶器, 欠損	
24	有溝土錘	"	68	53.5		121.7	24	10.5	土師質土器, 欠損	
25		"	80	44		144.1	25	6	土師質土器, 欠損	
26		"	62.5	39		58.6	13	6.5	土師質土器	

Tab. 6 砥石計測表

挿図番号	番号	器種	石材	現長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)
fig. 74	1	砥石	片岩	111	51	23
	2	"	泥岩	95	36	12
	3	"	粘板岩	96	56	21
	4	"	砂岩	52.5	56	21
	5	"	片岩	65	32	22
	6	"	粘板岩	48	29	13.5
	7	"	粘板岩	99	56	26.5
	8	"	粘板岩	66	57.5	11.5

石鏃（3～8）

（3）～（5），（8）は入念な整形剥離が施される。（6），（7）はやや粗い整形剥離が施される。（6）の左面にはポジティブな剥離面が残存する。この剥離面の剥離方向は、石器の長軸に対してほぼ直交する。すべての資料は風化していて、（3）以外には転磨の痕跡が認められる。

二次調整痕のある剥片（9）

背面側上縁に、腹面側より角度の浅い調整剥離が施されている。打面は調整剥離が施された際に除去された可能性が高い。断面は三角形状を呈する。

（高橋正則）

⑦ 大山祇神社跡出土石製品（fig. 76～78）（P L. 62）

大山祇神社跡からは、鳥居額、狛犬、水受などの石製品が出土している。

鳥居額の大きさは、縦52cm、横40cmで、石材は砂岩である。二重縁の中に「大山祇神社」と陰刻し、文字には朱の痕跡が見られる。

狛犬の大きさは、（上図）高さ約59cm、胴張約30cm、胸張約30cm、（下図）高さ約55cm、胴張約25cm、胸張約27cmで、石材は花崗岩である。雌雄一対で風化が激しく残りは良くない。

水受の大きさは、高さ60cm、刻銘部分上幅46cm、下幅33cm、上部水受部分内法30cm、深さ15cmで、石材は砂岩である。「文政四巳九月吉日 奉献 願主 吉田治太良 佐代松」と陰刻されている。

（松永雅行）

⑧ 鉄製品（P L. 63）

鍋（fig. 79）

盛土状遺構上部から出土した鉄製鍋である。口径は26.0cm、厚さは上端が0.4cmで底に近づく

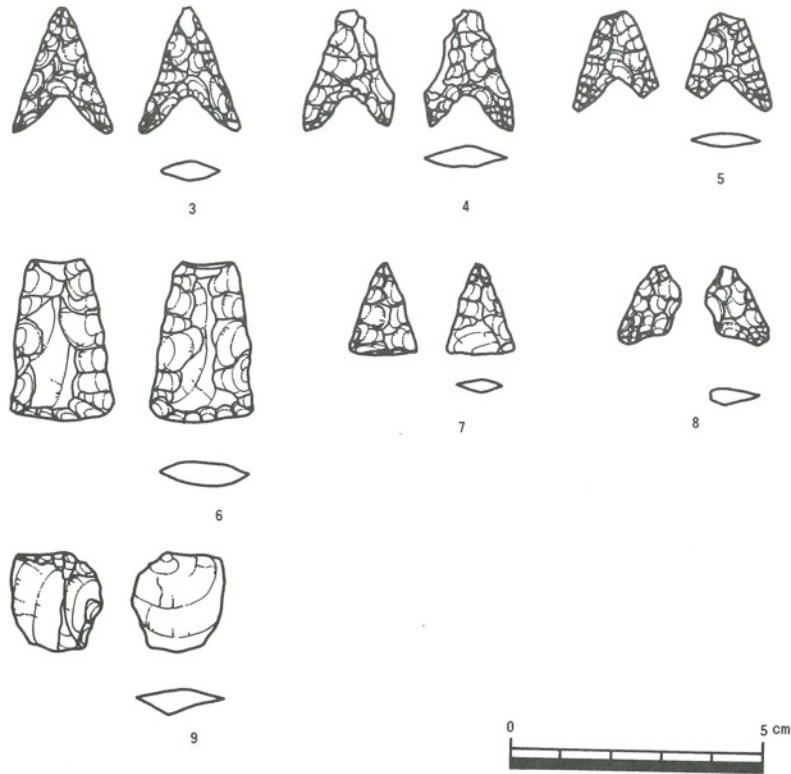


fig. 75 石鏃・剥片

ほど薄くなっている。上部には、蓋の受け口と思われる段があり、口の大きく開いた底の浅い鍋である。底部は欠損し、腐蝕がかなり進んでいる。

容器 (fig. 80)

盛土状遺構上部から出土した底の浅い鉄製の容器である。立ち上がりはほぼ垂直で、高さ1.5 cm、厚みは全体的に薄く、最も厚い所でも0.2cm弱である。腐蝕がかなり進んでいる。

庖丁 (fig. 81-1)

A-4 グリッドから出土した刃部先端の欠損した庖丁である。現存長23.1cm。刃部は現長16.6 cm、最大幅は3.9cmで、先端にいくにつれ細くなっている。棟の厚さは0.3cmである。茎の長さは6.5cm、最大幅1.0cmである。腐蝕がかなり進んでいる。

小柄 (fig. 81-2)

刀の鞘に差し添える小刀である小柄が1点出土した。刃部先端が欠失し、現存長16.3cmである。柄は銅製で、長さ9.7cm、最大幅1.4cmである。厚さは、棟側で0.4cm、刃側で0.2cmである。断面は丸味をおびた三角形を呈している。1枚の銅板を巻いて造っており、欠損部がないの

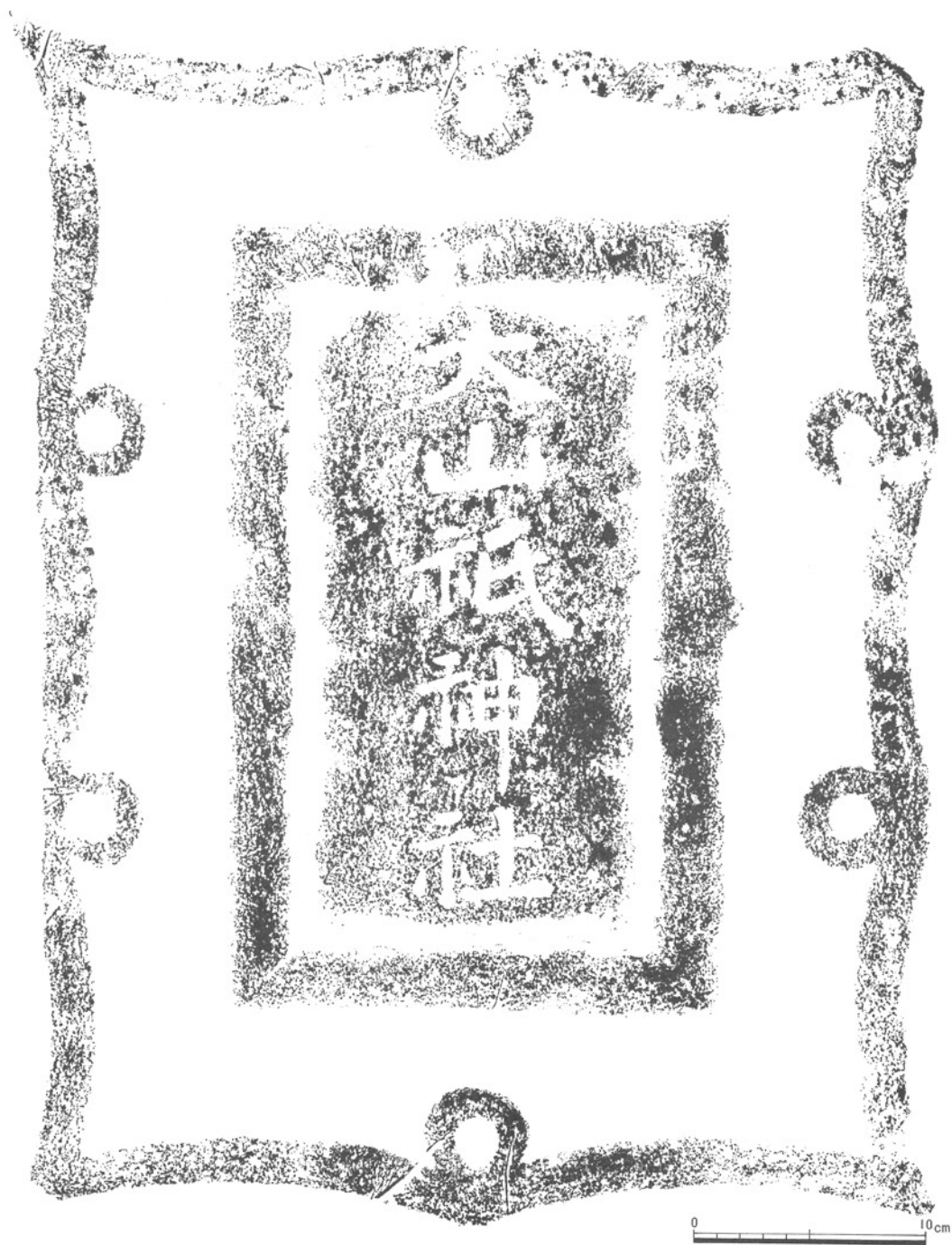


fig. 76 鳥居額拓影

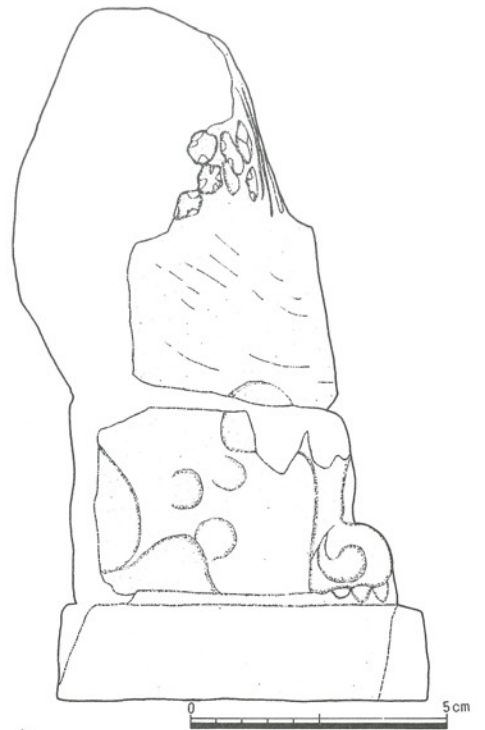
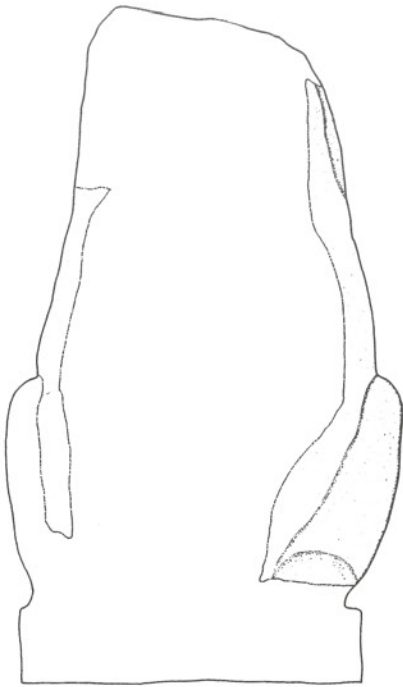
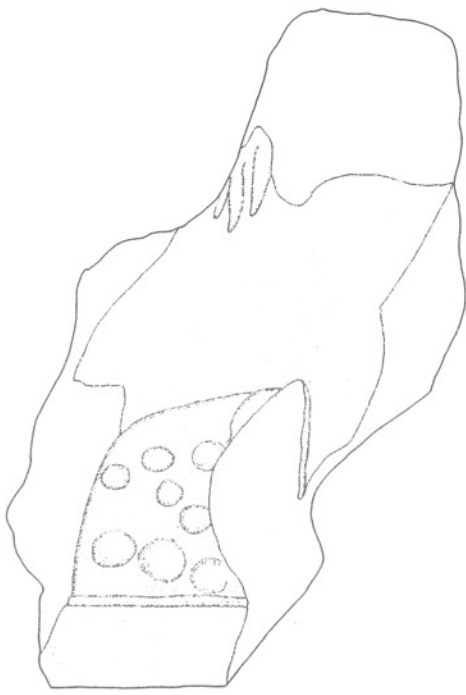


fig. 77 狗 犬



fig. 78 水受刻字拓影

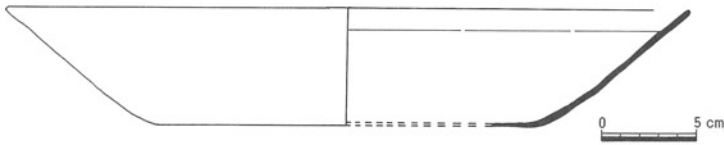


fig. 79 鉄製鍋

でわからないが、おそらく中空であろう。表面には、牛と御所車の牛車を浮出した細工があり、金箔が施されている。刃部は鉄製で、先端に向けて幅を減じている。現存長6.6cm、最大幅1.0cmである。厚さは棟0.15cm、刃0.1cmである。断面は三角形状を呈している。腐蝕がかなり進んでいる。盛土状遺構上部から出土した。

鉄釘

図示していないが、盛土上部から鉄釘が出土している。いずれも釘頭が一方に折り曲げられ、長方形の上面を呈し、ほぼ平頭である。銅釘部の断面は四角形である。銅製の角釘 (fig. 82-10) とほぼ同じ形状を呈している。また、巨大な舟釘も出土している。

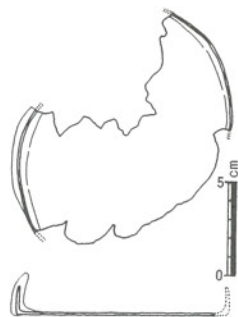


fig. 80 鉄製容器

(中西俊治)

⑨ 銅製品 (fig. 82) (PL. 63)

銅製品は土壘、盛土状遺構上部、包含層から14個体出土している。錆化が著しいため、11個体を図示した。

(1)~(4)は煙管の雁首である。銅板を叩き延して造形され、火皿と雁首の接点、雁首の側面に一条の接合痕がある。(1)は火皿の上端が欠損し、竹製の羅宇が一部遺存している。火皿はほぼ円形で碗形とみられる。火皿との接合部から羅宇を挿入する部分にかけて口径が大きくなる。現存長4.8cm、羅宇との接合部の口径1cmである。銅板の厚さは、火皿0.05cm、



fig. 81 庖丁・小柄

羅宇との接合部では銅板が折り込まれて厚くなり、0.1~0.2cmである。錆化が進み、淡緑青色を呈している。羅宇の現存長2.1cm、内径0.3cmである。盛土遺構上部出土。(2)は火皿が一部欠損しているが、ほぼ完形であり、竹製の羅宇が一部遺存している。火皿は口径1.4cm、内径1.2cmの円形であ

り、塊形を呈している。(1)と同じく火皿との接合部から羅宇を挿入する部分にかけてに口径が大きくなるが、二次的な作用のため羅宇との接点が扁平になっている。現存長4.8cm、羅宇との接合部の復元推定口径約1.1cmである。銅板の厚さは、火皿0.1cm、羅宇との接合部0.1cmである。錆化が進み、淡緑青色を呈している。羅宇の現認長は1.1cmである。土壘出土。(3)は火皿が欠損し、竹製の羅宇が一部遺存している。火皿との接合部から羅宇を挿入する部分にかけてに口径が大きくなり、端部に約2cmの隆帯を形成する。火皿との接合部から隆帯にかけて、平坦な面を形成する。現存長5.1cm、火皿との接合部の口径0.7cm、羅宇との接合部の口径1.0cmである。銅板の厚さは、火皿との接合部で0.05cm、羅宇との接合部では銅板が折り込まれて厚くなり、0.1~0.15cmである。錆化が進み、淡緑色を呈している。羅宇の長さは不明であるが、内径0.3cmである。(4)は火皿と竹製の羅宇が一部遺存している。火皿との接合部から羅宇を挿入する部分にかけてに口径が大きくなり端部に約2cmの隆帯を形成する。しかし、二次的な作用により、ややくぼみをみせる。現存長3.5cm、火皿との接合部の口径0.6cm、羅宇との接合部の口径0.9cmである。銅板の厚さは、火皿との接合部で0.05cm、羅宇との接合部では銅板が折り込まれて厚くなり、0.1cmである。錆化が進み、淡緑青色を呈している。羅宇の長さは不明であるが、内径0.4cmである。

(5)、(6)は煙管の吸口である。雁首と同じく銅板を叩き延して造形され、側面に一条の接合痕がある。(5)は吸口部が一部欠損している。形状は円錐形に近いが、吸口部の約0.5cmは円筒形を呈する。現存長4.4cm、羅宇との接合部の口径0.9cm、吸口部口径0.3cmである。銅板の厚さは0.05cmである。錆化が進み、淡緑青色を呈している。盛土状遺構上部からの出土で、その地点が近接していることもあり、(1)と同一個体となる可能性を残している。(6)は吸口部が欠損している。形状は円錐形で、吸口部に向けて細くなっている。現存長3.7cm、羅宇との接合部の口径1.0cmである。羅宇との接合部は銅板が折り返されて厚くなって0.1cmであるが、欠損部分の厚さは0.05cmである。錆化が進み、淡緑色を呈している。盛土状遺構上部出土。

(7)は「つ」の字状を呈する薄い銅板であるが、用途は不詳である。全長13.1cm、幅0.45cm、厚さ0.1cmである。土壘から出土している。

(8)は銅製の蝶番である。蝶番の片側の一部しか遺存していない。現存長3.5cm、現存幅1.8cm、厚さ0.05cmである。可動のための合わせ目の口径0.6cm、取り付けのための孔が2箇所あり、孔径0.2cmである。錆化が進み明緑青色を呈している。包含層出土。

(9)は庖丁などの利器のなかごと柄を固定するための銅製金具とみられる。二次作用により変形し、一部欠損している。復元推定口径約1.5cm、現存幅0.7cm、厚さ0.15cmである。錆化が進み、暗緑色を呈している。包含層出土。

(10)は木質が付着した銅製の角釘である。脚は方柱状であり、先端へ向ってその幅を減じ、

先端は丸い。頭部も方柱状であり、脚との角度は直角に近い鋭角である。全長2.9cm、脚の最大部の幅0.35cm、最大部の幅0.3cmである。頭部は断面長方形である。長さ0.9cm、長辺の幅0.45cm、短辺の幅0.3cm、脚と頭部先端までの長さ0.5cmである。錆化が進み、淡緑青色を呈している。包含層出土。当該調査区からは、鉄製の角釘が多量に出土している。

(11)は銅製の火箸である。一対のうちの片方しか出土していない。頭は直径0.9cmの球である。芯は断面円形の棒状であるが、二次作用により、先端近くが変形している。頭との接合部から、火箸を用いる時に指をそえる部分にかけて徐々に太さを増し、指をそえる部分から先端にかけてはしだいに太さを減じている。先端は丸い。全長26.2cm、芯の最大部の直径0.45cm、最小部の直径0.2cmである。(11)はその形態と法量から、火鉢用の火箸とみられる。錆化が進み、淡緑灰色を呈している。包含層出土。

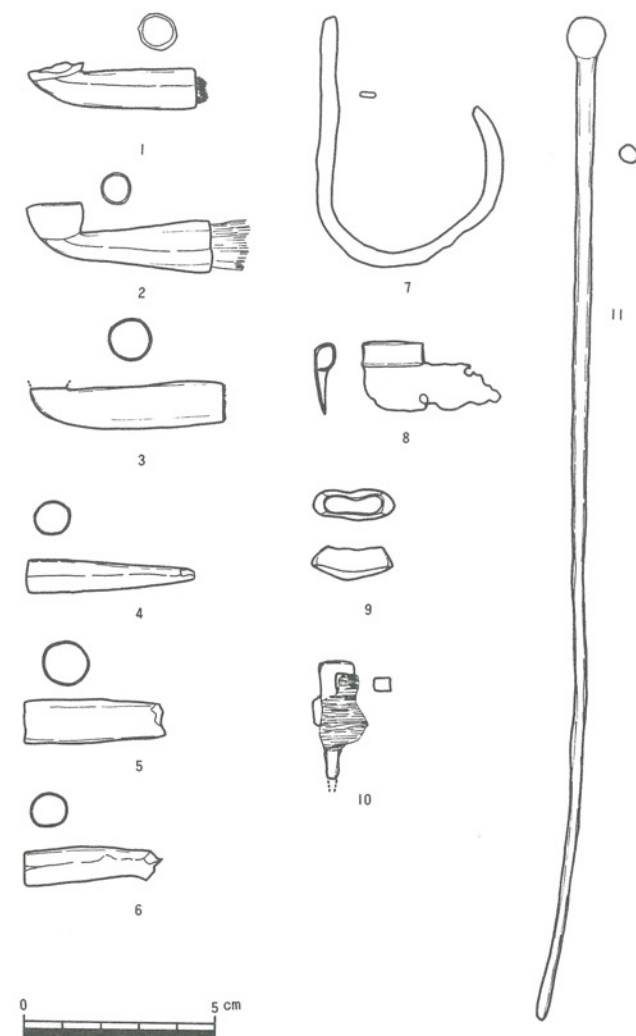


fig. 82 銅製品

(益岡秀樹)

⑩ 古 銭 (fig. 83) (P L. 65)

出土した古銭は63枚である。53枚が銅銭であり、判読できるものは、寛永通寶40枚、元豊通寶1枚、聖宋通寶1枚の計42枚である。残りの11枚は腐蝕、錆化が著しく、判読できない。鉄

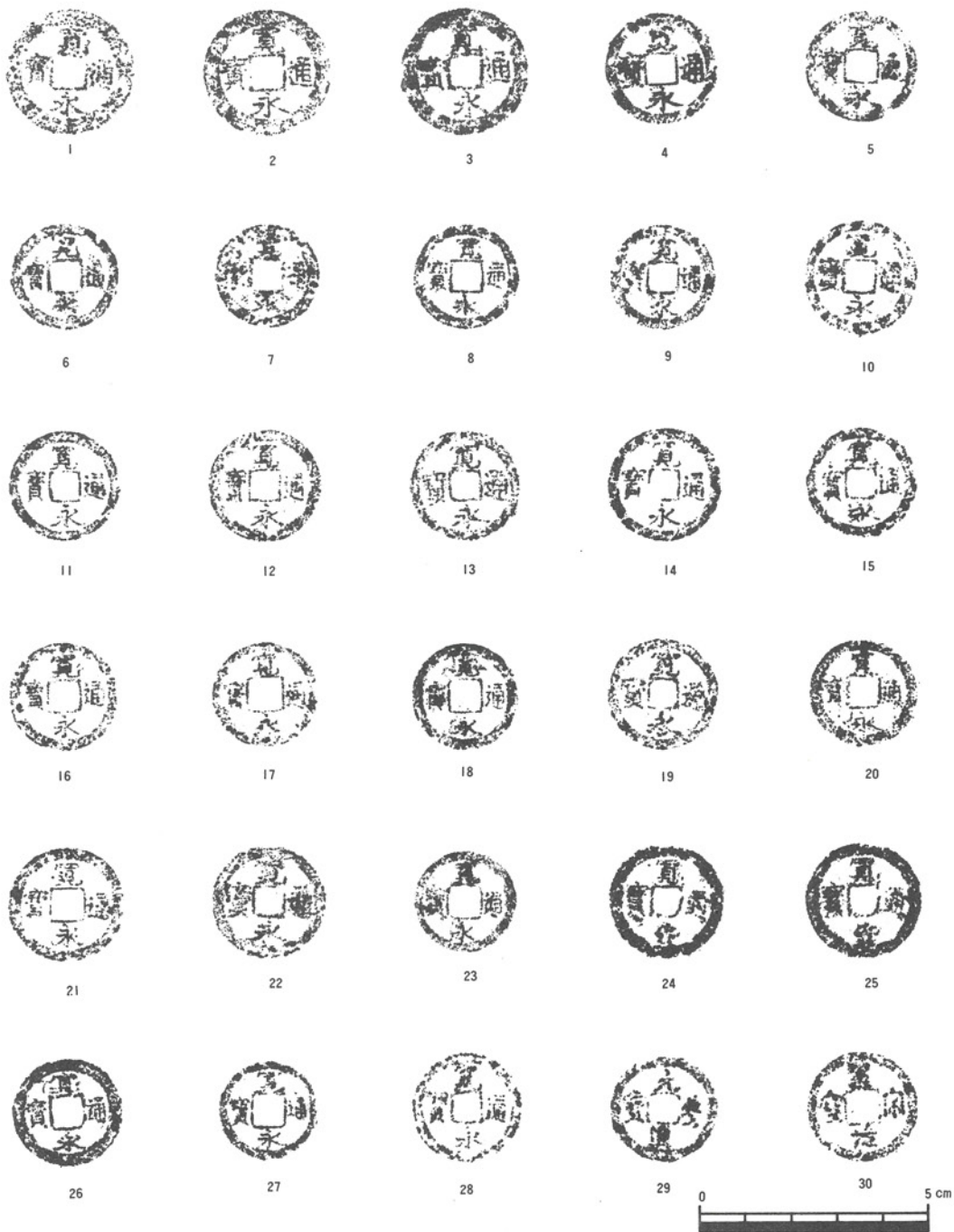


fig. 83 銅錢拓影

銭は10枚出土したが、腐蝕、錆化が著しく、いずれも判読できない。判読できる銅銭の中で、比較的保存度の良好なもの30枚を図示した。

(1)～(3)は、大山祇神社跡の拝殿および本殿から出土した背波のある四文銭で、直径が2.7cmと他より大きい。(2)は保存度が良いが、(1)と(3)は判読しづらい。

(4)～(11)は大山祇神社跡の拝殿および本殿、(12)～(21)は小祠跡、(22)は第4トレンチ第2層下部、(23)は盛土状遺構下部、(24)～(26)はA'－4グリッドの地山直上、(27)、(28)はSB－01からの出土である。

(4)～(28)は直径2.1cmから2.5cmであり、一文銭と思われる。これらを「通」字の頭で分類すると、「コ」になっているのは、(9)、(14)、(23)、(28)の4枚である。「ユ」になっているのは、(4)、(8)、(11)～(13)、(16)～(19)、(21)、(22)、(25)～(27)の14枚である。「マ」となっているのは、(5)、(15)、(20)の3枚であり、(1)～(3)の四文銭もこれに入る。(6)、(7)、(10)、(24)の4枚は字が磨滅していてわからない。字の太さで分けてみると、太字であるのは、(4)、(10)、(13)、(19)、(22)の5枚で、字に丸味がある。細字なのは、(5)、(6)、(8)、(9)、(11)、(12)、(14)～(18)、(20)、(21)、(23)～(28)の19枚で、伸び伸びとした字体である。(19)はかなりの細字である。(7)は不明である。(14)の裏には「文」の字の背文がある。保存度のよいものは、(11)～(15)、(26)である。他は錆化が進んでいる。

(29)はA－4グリッド包含層から出土した元豊通寶である。(30)はSB－01から出土した聖宋元寶である。長崎貿易銭として使用された(矢部 1973)。両方とも太字で丸味を帯びた字体である。(29)はくずし字である。(30)は錆化がかなり進んでいる。

出土した古銭は寛永通寶、元豊通寶、聖宋元寶の三種類であり、江戸時代に通用した貨幣である。

(中西俊治)

参考文献

矢部倉吉 1973 『古銭と紙幣』金園社

⑪ 木製品 (P.L. 66)

当該調査区の各地点から木製品が出土しているが、製品としての機能を遺存するものは少ない。ここでは池状遺構出土の木製品を取りあげる。池状遺構からは板材、竹なども出土しているが、下駄と曲物を図示した。

下駄 (fig. 84)

前後を丸く整形した丸下駄であり、高い歯を装着しているため、高下駄の範疇に属するとみられる。材質は不詳である。表の長さ23.7cm、現存する最大長24.2cm、表の幅7.2cm、現存する

Tab. 7 銅銭貨計測表

番号		出土遺構	径(cm)	備考
1			2.7	背波
2			2.7	背波
3			2.7	背波
4			2.4	
5		大山祇神社跡	2.4	
6			2.3	
7			2.2	
8			2.3	
9			2.3	
10			2.4	
11			2.4	
12	寛永通寶		2.4	
13			2.4	
14			2.5	背上に「文」
15			2.4	
16		小祠跡小円磔中	2.3	
17			2.3	
18			2.3	
19			2.4	
20			2.3	
21			2.5	
22		第4トレンチ第2層下部	2.4	
23		盛土状遺構下部	2.2	
24			2.4	
25		池状遺構東岸	2.5	
26			2.3	
27			2.1	
28		SB - 01	2.4	
29	元豊通寶	A' - 4	2.3	
30	聖宋元寶	SB - 01	2.4	

最大幅8.7cmであり、下駄本体の厚さ4.0cm、歯を含めた高さ9.4cmである。歯の高さは8.0cm、装着部上端の幅8.2cm、下端の土踏みの幅13.9cmと台形を呈し、厚さは1.5cmとほぼ均一である。前歯の前に一箇所、後歯の前に2箇所の直径0.9~1.2cmの孔を穿ち、ここに鼻緒をすげる。鼻

緒にはシュロの毛を用いる。束にしたものを3本撚り合わせて、その両端を後歯の前の2孔に
すげ、内側で結ぶ。他に1束を用いて先の3本撚り合せた紐に結び、その端部を前歯の前の1
孔にすげる。柾目材を用いるも、面取りも粗く、粗製品とみられる。

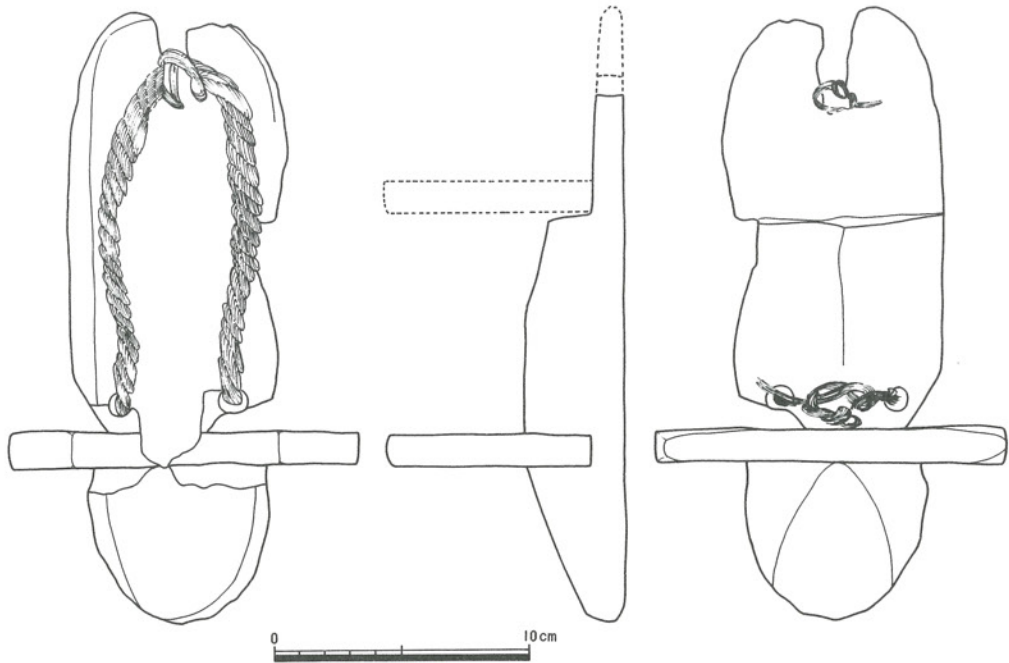


fig. 84 下 駄

曲物 (fig. 85)

曲物は1枚の柾目材を輪にして、サクラの木の皮で綴じたものである。材質、用途とも不明である。長さ約29cm、幅約2.1cm、厚さ約0.05~0.40cmの細長い板材を用い、内径6.9~7.9cmにつくる。約3.8cmを重複させ、外側の端部と重複部分を1箇所綴じる。綴じた部分の上端に切り込みを入れる。上端を厚くし、下端を厚さ約0.1cmと薄く作り出す。面取りはみられない。底板の有無については不詳である。

(河野雄次)

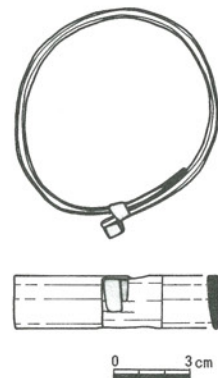


fig. 85 曲物

(5) 小 結

先に述べたように、当該調査区では弥生土器、須恵器、土師器、石鏃なども出土しているが、遺構を伴わない。第2遺構面の遺構が江戸時代中頃から末頃として捉えられるため、調査区内における土地利用の開始は江戸時代中頃以降と考えられ

る。

当該調査区は、東西に伸びる土塁S A-01・03・04の北と南に大別される。すなわち、北は日常生活に伴なう遺構・遺物の集中する私的な生活空間であり、南は祭祀に関する遺構・遺物のみられる非日常的な公共空間として把握される。また、南は土佐泊浦から第28・29・30調査の間の切り通しを通過して、亀浦、大鳴門海峡に向う街道とも考えられる。古地図などの分析、井戸S E-02の南および東の地形測量図にも道の痕跡があらわれ、街道は大山祇神社跡と土塁との間に想定される。この土地利用状況については、後の本報告によりたい。

(河野雄次)

3. 第27・28調査区

(1) 位置と環境 (fig. 5, 86, 87) (P L. 18)

第27・28調査区は、鳴門市鳴門町土佐泊浦字黒山に所在する。大毛島山系のほぼ中央にあり第27調査区は標高約58mで山の尾根に、第28調査区は標高約32mで山の傾斜面に位置する。ウチノ海と紀伊水道が一望できる。地目は山林である。

(松永雅行)

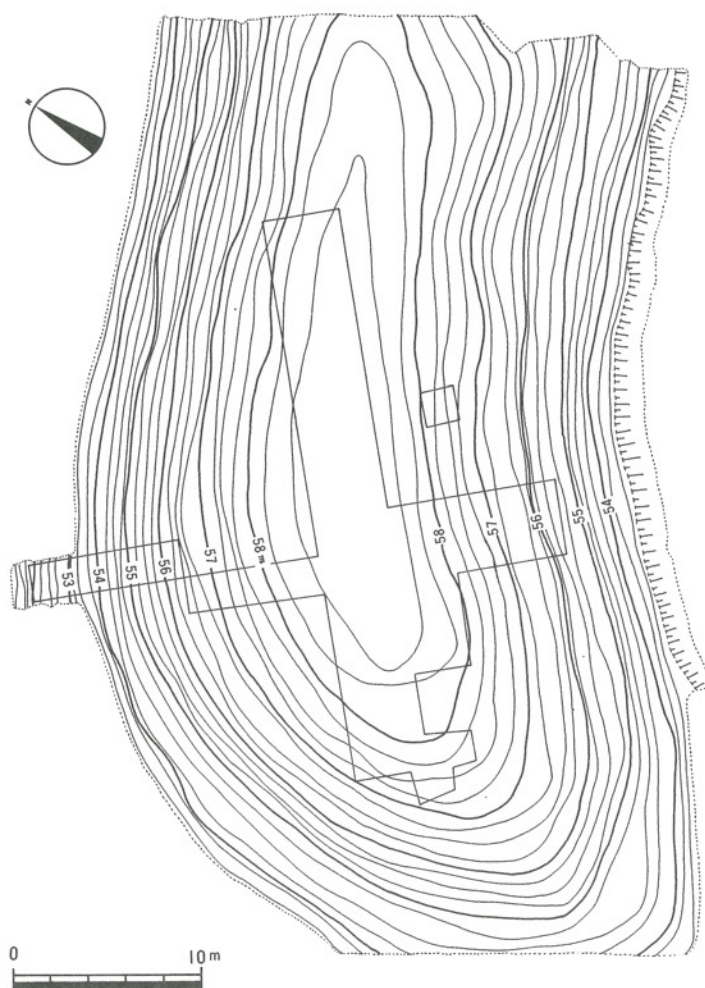


fig. 86 第27調査区地形図

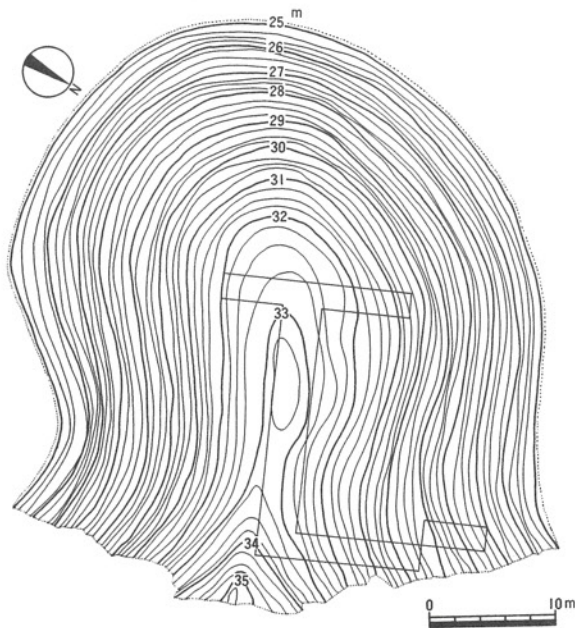


fig. 87 第28調査区地形図

(2) 層序 (P L. 19)

第27・28調査区の土層は、比較的単純な堆積状況を示す。第27調査区では基本的に3層に分けられる。(1)表土層, (2)黄褐色土層, (3)明黄褐色土層となる (fig. 88)。検出されたピット, 土壌などは、いずれも第2層上面より掘り込まれている。第28調査区は基本的に4層に分層され(1)表土層, (2)にふい黄褐色土層, (3)明黄褐色土層, (4)にふい黄褐色土層となる (fig. 89)。第1トレンチでは、表土直下で地山面に達する部分もあり、安定した遺物包含層の拡がり, 遺構などを確認するには至らなかった。第3・4トレンチでは、やや厚い堆積層が認められたが、安定した遺物包含層を欠いている。

(高橋正則)

(3) 遺構と遺物 (P L. 17)

① 遺構

第27調査区で検出された遺構には、土壌6, ピット3などがある (fig. 90)。その内、遺物を包含するものは土壌SK-03に限定される (fig. 91)。その他、無遺物であるが、焼土の堆積が認められる土壌SK-05・06がある。第28調査区では、先述の層序がよく示すように、良好な遺構は検出されなかった。表土層直下の地山 (和泉層群の砂岩露頭面) に火熱によると考えられる赤色化した部分が数箇所見られるが、明確な遺構として把握できない。

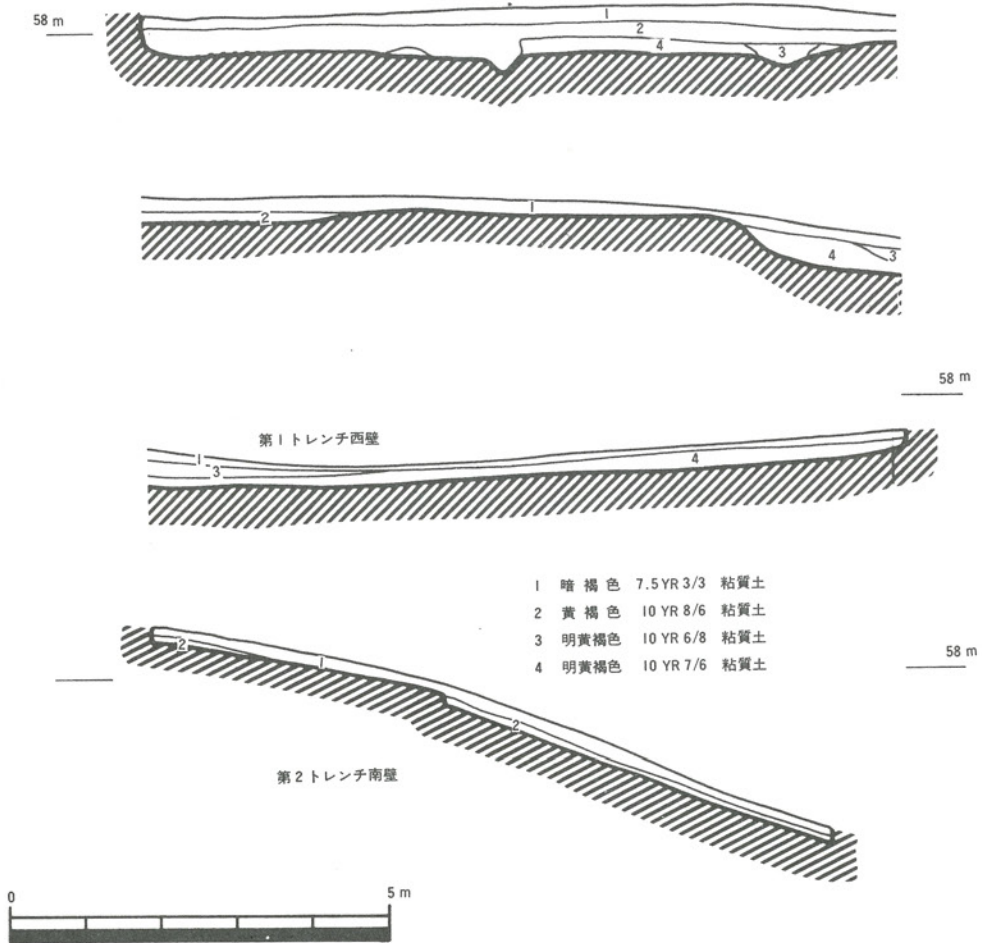


fig. 88 第27調査区トレンチ層序

② 第27調査区出土遺物

第27調査区から出土した遺物には、壺形土器、サヌカイト製剥片などがある。いずれもSK-03からの出土である。

壺形土器 (fig. 92)

口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部を丸くおさめる。遺存状態は極めて悪く、磨滅が著しい。器面調整は明瞭ではなく、若干の指頭圧痕を観察するにとどまる。

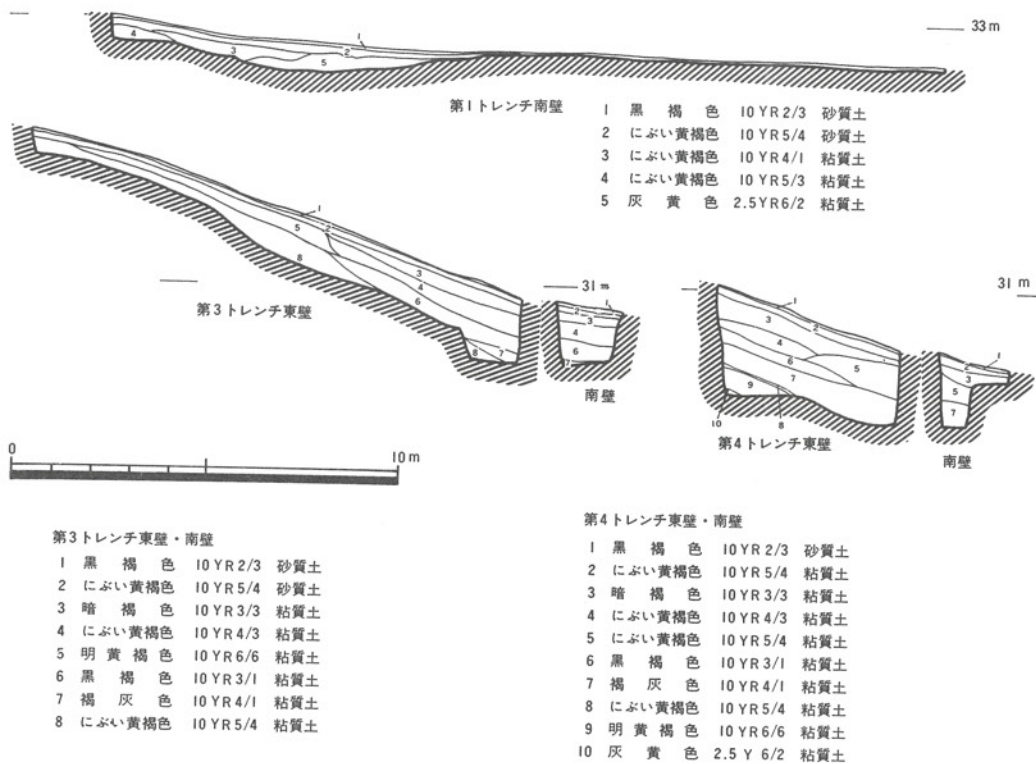


fig. 89 第28調査区トレンチ層序

サヌカイト製剥片 (fig.93-10)

主要剥離面の剥離方向は石器長軸に直交する。いわゆる横長状の形態をとる剥片である。背面側には先行する剥離面が3枚認められる。いずれもネガティブな剥離面であり、剥離方向は一定していない。

③ 第28調査区出土遺物

第28調査区から検出された遺物には、石鏃、砥石、近世陶磁器などがある。石鏃のみ図示した。近世陶磁器、砥石は表土層中より、石鏃は第2～3層中よりそれぞれ出土した。

石鏃 (fig. 94-11~13)

(11), (12)は無茎であるが、(13)については遺存状態が悪くいかなる形態をとるか明らかでない。(13)以外はすべて風化しており、転摩の痕跡が認められる。

(高橋正則)

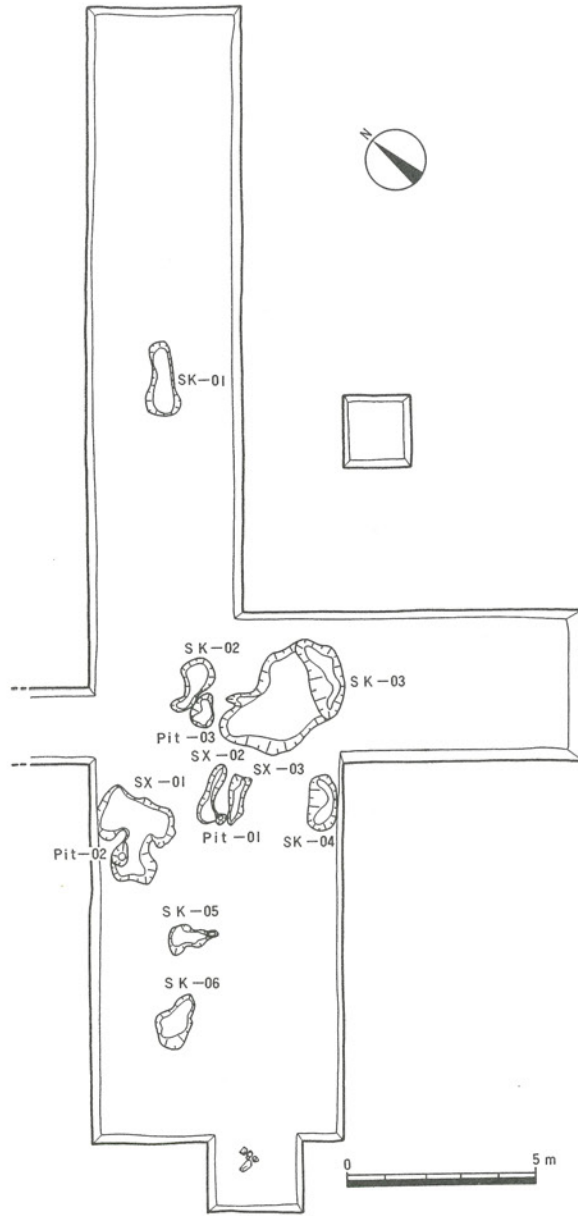


fig. 90 第27調査区遺構配置図

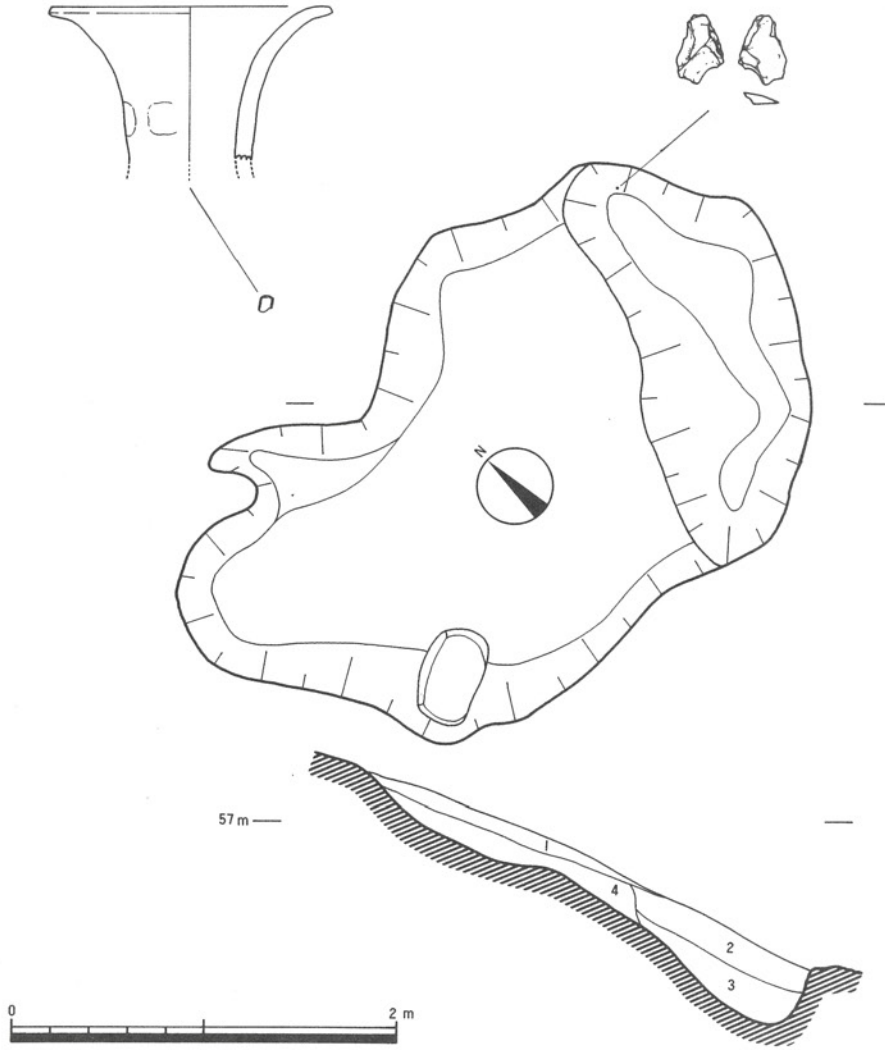


fig. 91 第27調査区 SK-03実測図

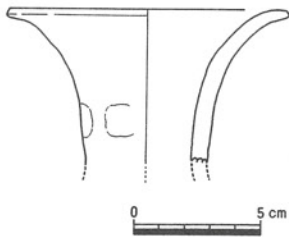


fig. 92 第27調査区出土弥生土器

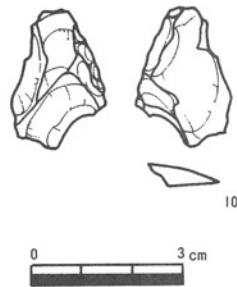


fig. 93 第27調査区出土石器

(4) 小 結

両調査区をととして、良好な遺物包含層、遺構等を検出するには至らなかった。第27調査区のS K-03より出土した壺形土器は、その形態から畿内第V様式に並行する時期の所産であると考えられる。

(高橋正則)

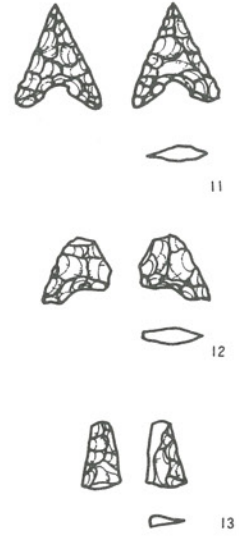


fig. 94 第28調査区出土石器



fig. 95 第29調査区地形図

4. 第29調査区

(1) 位置と環境

本調査区は、鳴門市鳴門町土佐泊浦字黒山に所在する。大毛島東海岸から深くはいりこんだ地点にある。東は紀伊水道に面し、西は急傾斜の大毛島山系となっている。南側は切通しとなりウチノ海への道となっている。地目は荒地である。

(松永雅行)

(2) 層序 (fig. 96, 97)

基本層位は、(1)表土層、(2)オリーブ褐色粘質土、(3)暗灰黄色砂質土、(4)褐灰色砂礫土、(5)灰黄褐色石礫、(6)にぶい黄橙色粘質土、(7)地山(和泉層群)の7層である。褐灰色砂礫土、灰黄褐色砂礫土層中より弥生土器、石器が出土している。

(高橋正則)

(3) 遺構と遺特

① 遺構

集石状遺構(仮称)が褐灰色砂礫土、灰黄褐色砂礫土より検出された(fig. 98, 99)。拳大から人頭大の砂岩礫を主体に構成される。礫には火熱の痕跡をとどめるものも認められる。人為的に構築されたといった状況は殆んど認められず、遺構の性格を今ひとつ明確にしがたい。

(高橋正則)

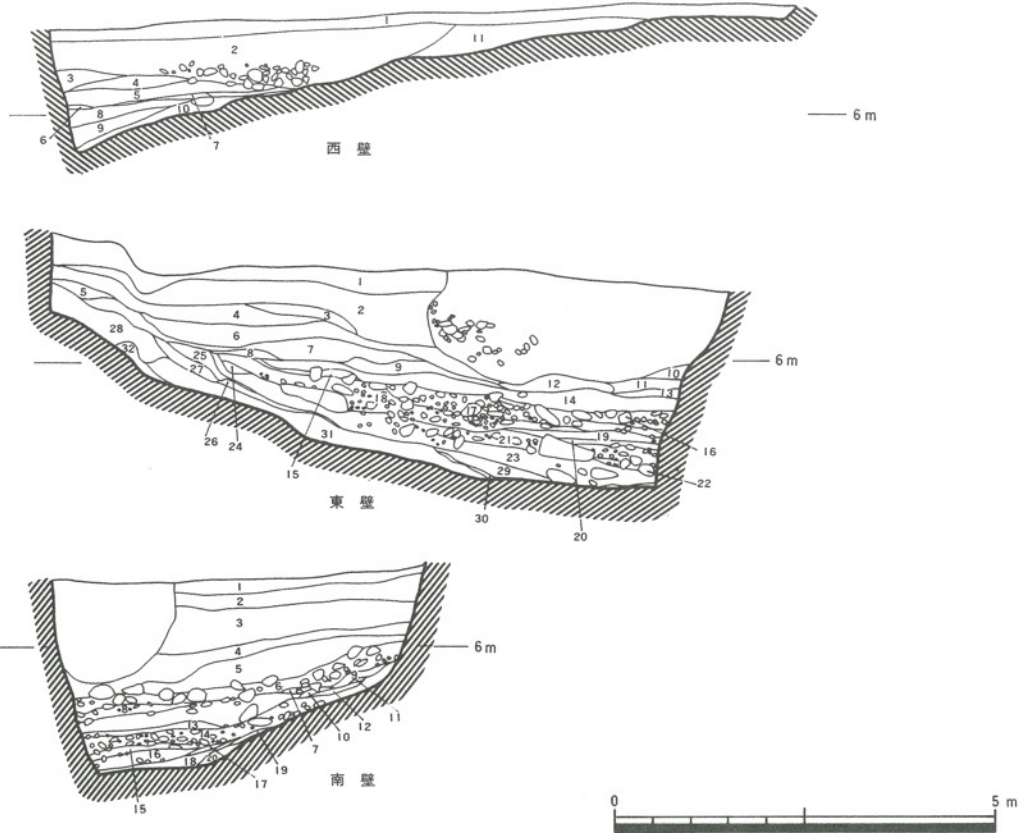
② 遺物

a. 土器類 (fig. 100, 101 P L. 53)

第29調査区出土の土器類は、弥生土器6、須恵器1、土師質土器3、瓦質土器1、陶器2、磁器9の22個体と少ない。磁器、陶器に関しては、第21・31調査区との類似性が認められる。器種、器形別に甕3、皿1、蓋1、碗2、土鍋2、土釜1の10個体を図示した。

弥生土器 (fig. 100) (P L. 21)

弥生土器は6個体出土しているが、すべて弥生時代後期に比定される甕形土器とみられる。(415)は球形の体部に「く」の字状の口縁部がつく。口縁端部をやや肥厚させ、下端を外方につまみ出す。体部には、右上がりのタタキを施した後、縦方向に7条/cm単位のハケ目調整を加える。口縁部にはナデ調整。内面には全面ヘラ削りの後、下部に斜方向のハケ目調整を加える。粘土紐マキアゲ成形。(416)は口縁部を欠失するが、球形の胴部に「く」の字状の口縁部がつくとみられる。体部には右上がりのタタキを施した後、縦方向に7条/cm単位のハケ目調



- 西壁
- | | | | |
|----|--------|-----------|-----|
| 1 | オリーブ褐色 | 2.5 Y 4/4 | 砂質土 |
| 2 | 黄褐色 | 10 YR5/6 | 砂質土 |
| 3 | 黒褐色 | 2.5 Y 3/2 | 砂質土 |
| 4 | 灰オリーブ色 | 5 Y 5/2 | 砂質土 |
| 5 | 黒褐色 | 10 YR2/2 | 砂質土 |
| 6 | にぶい黄褐色 | 10 YR5/4 | 砂質土 |
| 7 | にぶい黄褐色 | 10 YR4/3 | 砂質土 |
| 8 | 灰黄色 | 7.5 Y 5/1 | 砂 |
| 9 | 灰黄褐色 | 10 YR4/2 | 砂質土 |
| 10 | にぶい黄褐色 | 10 YR6/4 | 砂質土 |
| 11 | にぶい黄褐色 | 10 YR6/4 | 粘質土 |

- 南壁
- | | | | |
|----|--------|-----------|-----|
| 1 | オリーブ褐色 | 2.5 Y 4/4 | 砂質土 |
| 2 | オリーブ褐色 | 2.5 Y 4/6 | 砂質土 |
| 3 | オリーブ褐色 | 2.5 Y 4/3 | 粘質土 |
| 4 | 暗灰黄色 | 2.5 Y 5/2 | 砂質土 |
| 5 | 黄灰色 | 2.5 Y 5/1 | 砂質土 |
| 6 | 灰黄色 | 7.5 Y 5/1 | 砂礫土 |
| 7 | 灰黄褐色 | 10 YR5/2 | 砂礫土 |
| 8 | 褐灰色 | 10 YR4/1 | 砂質土 |
| 9 | にぶい黄褐色 | 10 YR5/3 | 砂質土 |
| 10 | 暗褐色 | 10 YR3/4 | 砂質土 |
| 11 | 灰黄褐色 | 10 YR5/2 | 砂質土 |
| 12 | 褐灰色 | 10 YR4/1 | 砂質土 |
| 13 | 赤褐色 | 10 YR5/4 | 砂質土 |
| 14 | 灰黄褐色 | 10 YR4/2 | 砂礫土 |
| 15 | 暗褐色 | 7.5 YR3/3 | 砂礫土 |
| 16 | 褐褐色 | 7.5 YR4/4 | 砂礫土 |
| 17 | 灰黄褐色 | 10 YR4/2 | 粘質土 |
| 18 | にぶい黄褐色 | 10 YR6/4 | 砂質土 |
| 19 | 明黄褐色 | 10 YR6/6 | 粘質土 |
| 20 | にぶい黄褐色 | 10 YR5/4 | 粘質土 |

- 東壁
- | | | | |
|----|--------|-----------|-----|
| 1 | オリーブ褐色 | 2.5 Y 4/4 | 砂質土 |
| 2 | オリーブ褐色 | 2.5 Y 4/3 | 粘質土 |
| 3 | 黒褐色 | 2.5 Y 3/1 | 粘質土 |
| 4 | 黄褐色 | 2.5 Y 5/4 | 粘質土 |
| 5 | 褐灰色 | 10 YR4/1 | 粘質土 |
| 6 | 暗灰黄色 | 2.5 Y 4/2 | 粘質土 |
| 7 | 黒褐色 | 10 YR3/1 | 粘質土 |
| 8 | にぶい黄褐色 | 10 YR6/4 | 砂質土 |
| 9 | 黒褐色 | 10 YR3/1 | 粘質土 |
| 10 | 暗灰黄色 | 2.5 Y 5/2 | 砂質土 |
| 11 | 暗灰黄色 | 2.5 Y 4/2 | 砂質土 |
| 12 | 暗褐色 | 10 YR3/3 | 粘質土 |
| 13 | 暗褐色 | 10 YR3/4 | 粘質土 |
| 14 | 黄灰色 | 2.5 Y 5/1 | 砂質土 |
| 15 | 黄灰色 | 2.5 Y 4/1 | 砂質土 |
| 16 | 灰黄色 | 7.5 Y 5/1 | 砂質土 |
| 17 | 暗褐色 | 10 YR3/3 | 砂質土 |
| 18 | 褐灰色 | 10 YR4/1 | 砂質土 |
| 19 | にぶい黄褐色 | 10 YR4/3 | 砂質土 |
| 20 | 赤褐色 | 10 YR5/4 | 砂質土 |
| 21 | 灰黄褐色 | 10 YR4/2 | 粘質土 |
| 22 | 暗褐色 | 7.5 YR3/3 | 粘質土 |
| 23 | 褐褐色 | 7.5 YR4/4 | 砂質土 |
| 24 | 褐灰色 | 10 YR4/1 | 粘質土 |
| 25 | 明黄褐色 | 10 YR6/6 | 粘質土 |
| 26 | にぶい黄褐色 | 10 YR6/4 | 粘質土 |
| 27 | にぶい黄褐色 | 10 YR6/6 | 粘質土 |
| 28 | 黄褐色 | 10 YR5/6 | 粘質土 |
| 29 | 暗緑灰色 | 10 G 4/1 | 粘質土 |
| 30 | にぶい黄褐色 | 10 YR6/4 | 粘質土 |
| 31 | にぶい黄褐色 | 10 YR5/4 | 粘質土 |
| 32 | にぶい黄褐色 | 10 YR6/4 | 粘質土 |

fig. 96 第29調査区トレンチ層序

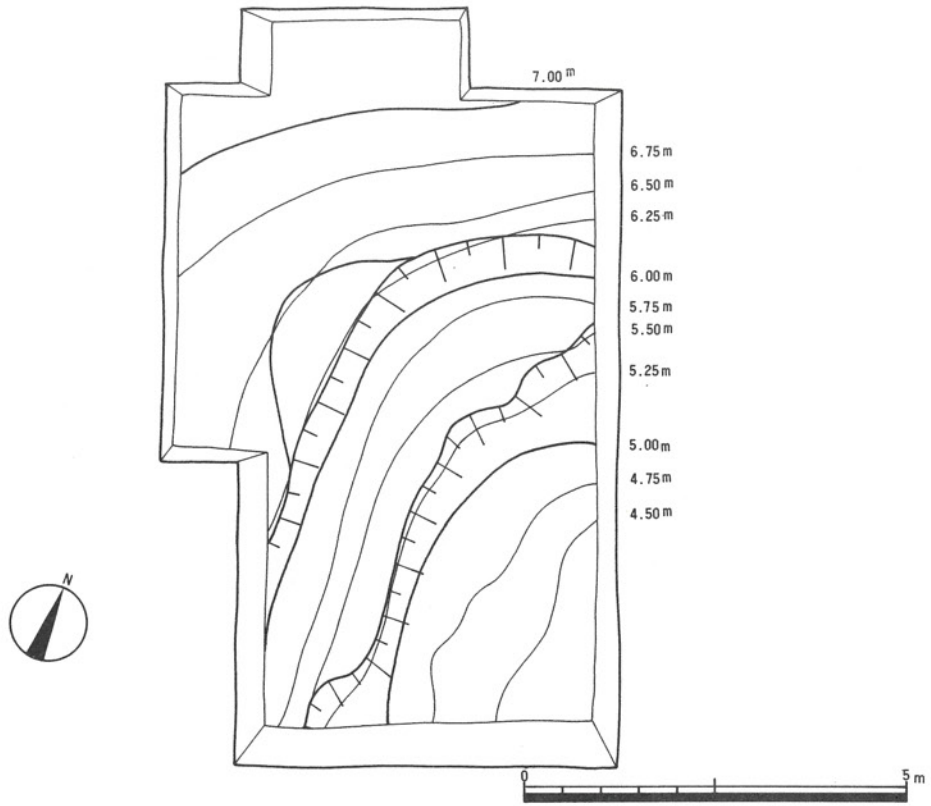


fig. 97 第29調査区地山復原図

整を加える。口頸部には内外ともナデ調整。内面には全面にハケ目調整を施す。粘土紐マキアゲ成形。(417)は底部を遺存する。平底であり、底部と体部の境に指頭圧痕を認める。

皿

(418)は口縁部が外反する磁器の皿であり、第31調査区出土の(437)に類似する。低い高台を有し、内底面にトチ痕を認める。内底面に呉須による帆船航海図を描く。

蓋

(419)は高台状のつまみを有する磁器の蓋である。口縁端部を丸くおさめる。呉須により、天井部に鶴飛翔図、つまみ内に稲束図を描く。

碗

(420)は胴部が内わん気味に外方に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる磁器の碗である。呉須により、胴部に松図、見込中央に五弁花を描く。見込底面にドーナツ状に素地をみせる。

(421)は口縁部がわずかに外反する磁器の碗である。胴部に呉須によるよろけ縞文を描く。

土鍋

(422)は口縁部を外に拡張し、端部を上方につまみ上げて内側に受部を形成する施釉陶器の



fig. 98 第29調査区集石状遺構上部集石実測図

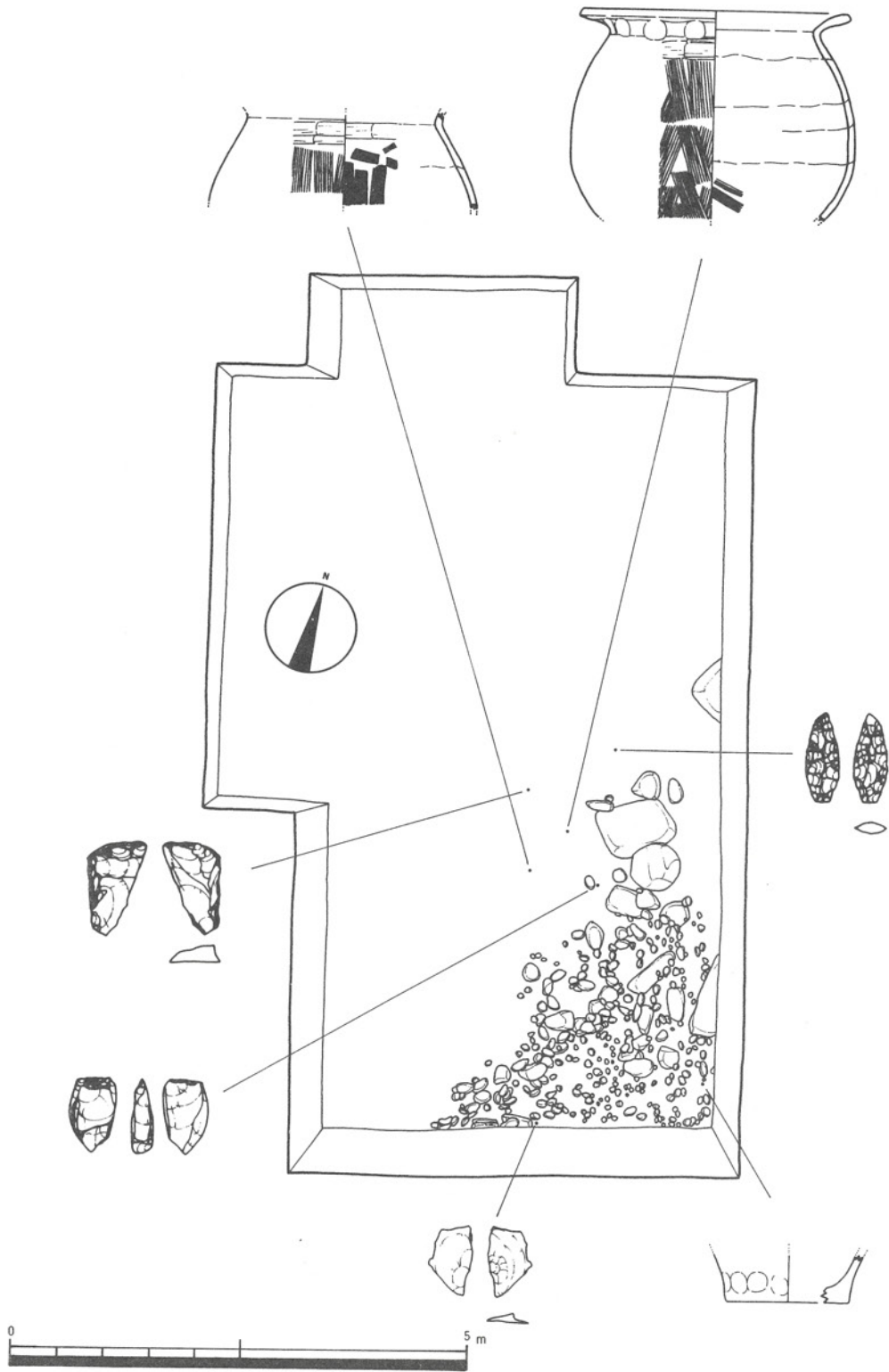


fig. 99 第29調査区集石状遺構最下部集石実測図

土鍋である。口縁部直下に、4条/cm単位の櫛描文を少くとも3帯めぐらす。体部内側には暗緑色の釉をかける。第21調査区出土の(318)にも類例があり、片口ともみられる。(423)は「く」の字状の口縁部をつくり出して肥厚させる土師質土器の土鍋である。外面に煤の付着を認める。外面に横方向のハケ目調整を施す。

土釜

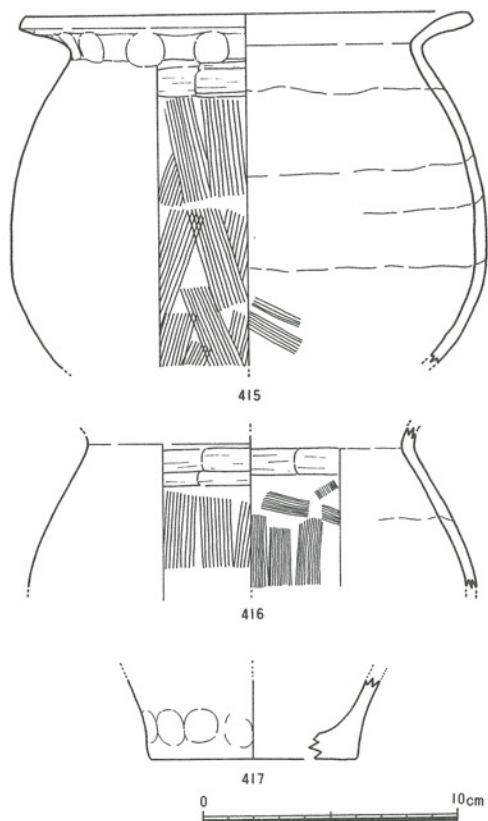
(424)は鋳部を遺存する瓦質土器の土釜である。幅広い鋳を有し、端部を上方につまみ上げる。外面ナデ調整。内面へラ磨き調整。内面は漆黒色を呈する。

(河野雄次)

b. 石器 (fig. 102)

石鏃、楔状石器とその削片、搔器などがある。すべてサヌカイト製であり、(24)以外は殆んど同一。風化色をみせる。

(高橋正則)



(4) 小結

第29調査区では、円礫の集中が認められた以外は良好な遺構の検出もなく、遺物の出土量も僅少である。褐灰色砂礫土、灰黄褐色砂礫土より検出された集石状遺構(仮称)については、旧地形に沿って自然堆積した可能性を残している。所属時期は、共伴資料から弥生時代後期に比定される。この種の遺構については、今後類例をふまえた十分な再考を要する。

(高橋正則)

fig. 100 第29調査区出土弥生土器

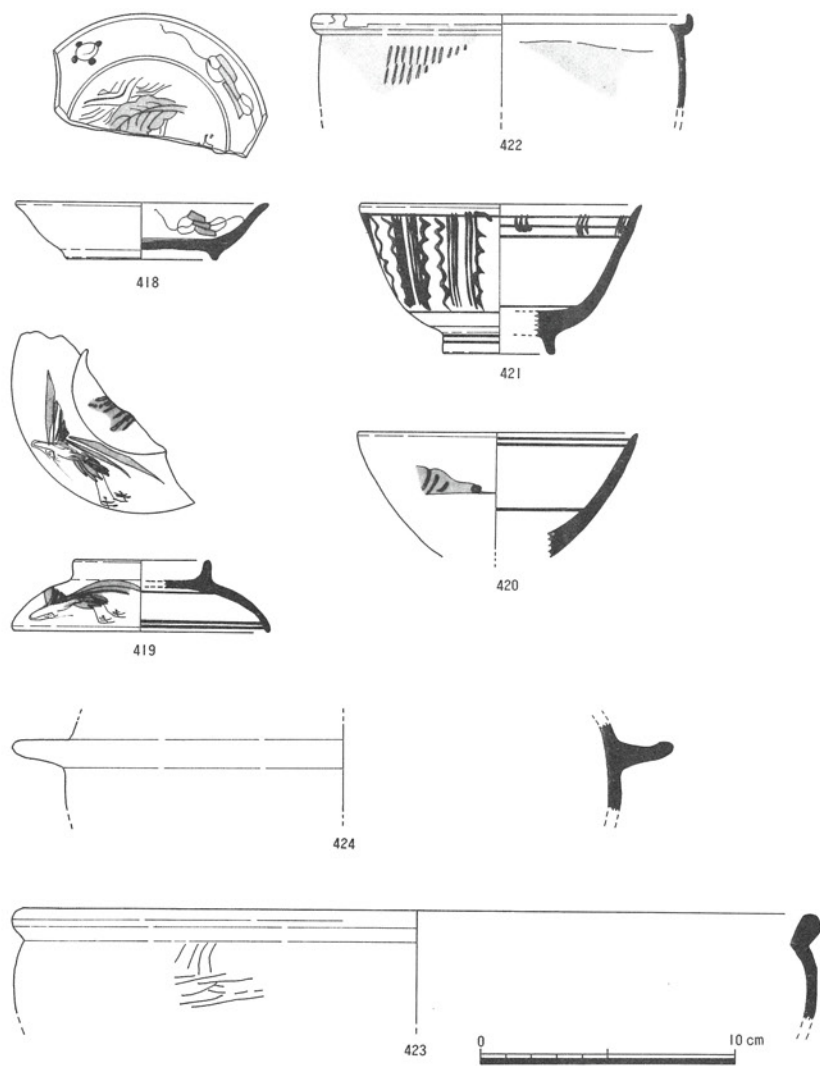


fig. 101 第29調査区出土土器類

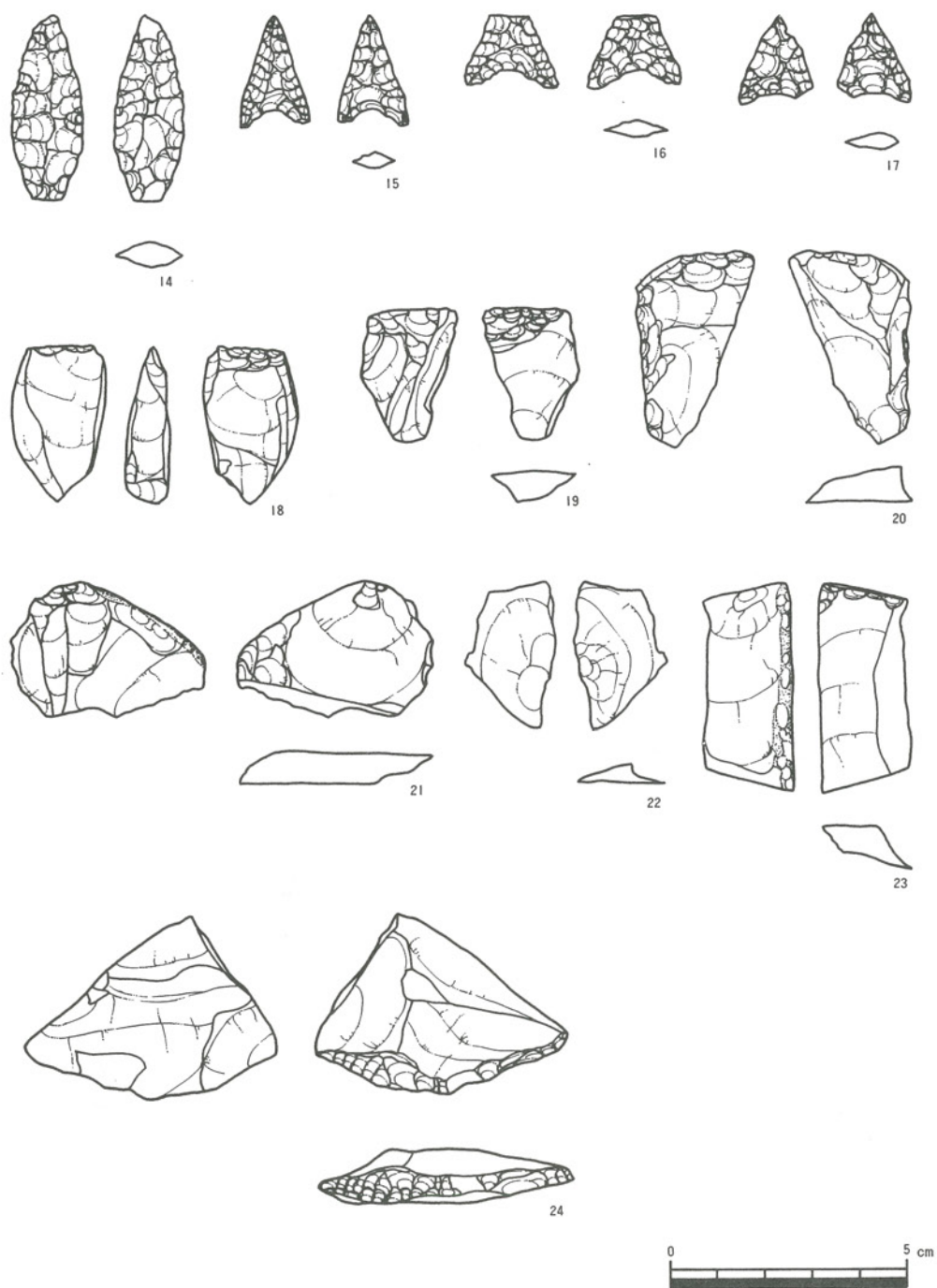


fig. 102 第29調査区出土石器

5 第30・31調査区

(1) 位置と環境 (fig. 5, 103)(P L, 21, 22)

第30・31調査区は、鳴門市鳴門町土佐泊浦字大谷に所在する。大毛島山系の中央にあり、第30調査区は標高約30mで、東西に延びた山の尾根に、第31調査区は標高約4mで、西海岸が大きく入江状に入りこんだ海岸線より少し入った地点にある。30区からは、ウチノ海と紀井水道が望め、31区の海岸はウチノ海の漁港となり、対岸には島田島が望める。地目は30区は山林、31区は荒地となっている。

(松永 雅行)

(2) 層序 (P L, 22, 24)

第30調査区は尾根状の地形上に設定されているため、雑木の根による攪乱で安定した遺物包含層は確認されなかった。基本的層序は3層からなっている (fig.104)。第一層は薄

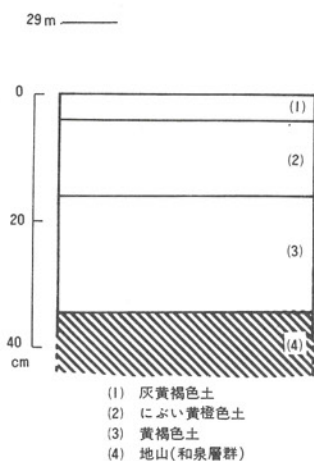


fig. 104 第30調査区層序柱状図

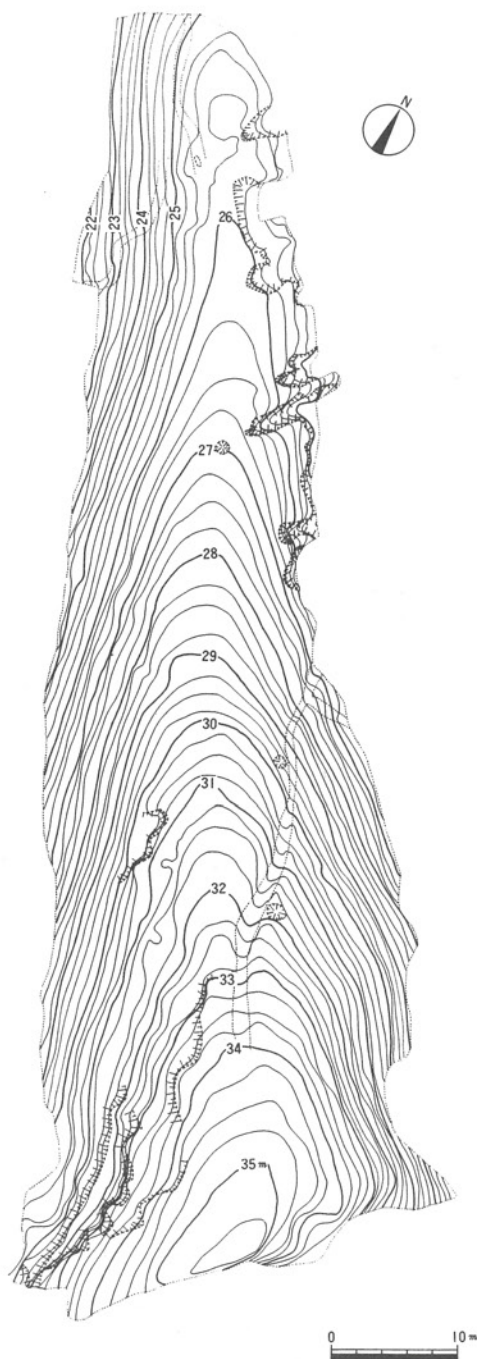
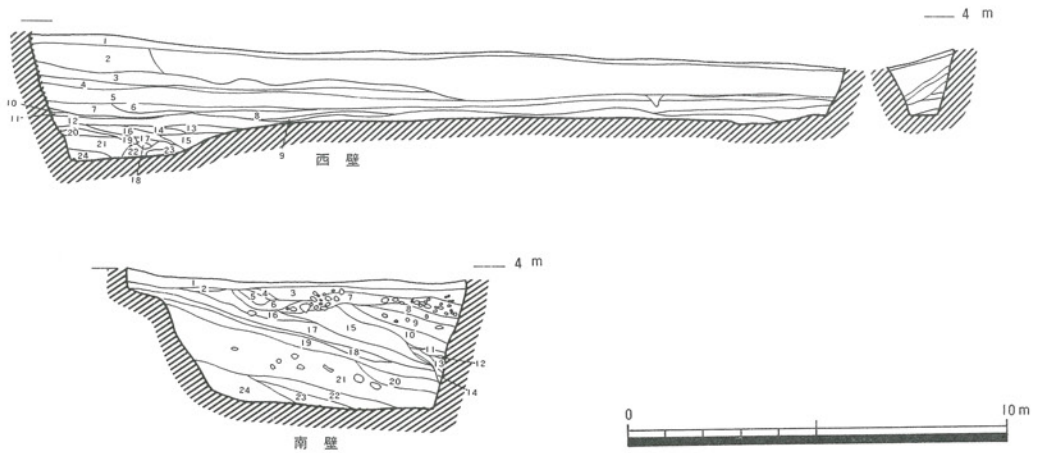


fig. 103 第30調査区地形図

い表土で、灰黄褐色土。石鏝3点、小柄1点、円礫、焼石等が包含されていた。第2層は、にぶい黄橙色土。石鏝1点が包含されていた。第3層は、黄褐色土。サヌカイト片が包含されていた。(中西 俊治)

第31調査区の土層は基本的に9層に分層される (fig.105)。第24層 (黄褐色砂質土) より下層の土層堆積状況は不明である。遺物の包含は、第3層 (にぶい黄橙色砂質土)、第5層 (褐灰)



西 壁			
1	黒 褐 色	2.5 Y 3/2	砂質土
2	にぶい黄褐色	10 YR 5/4	砂質土
3	にぶい黄橙色	10 YR 6/3	砂質土
4	にぶい黄褐色	10 YR 5/3	砂質土
5	褐 灰 色	10 YR 4/1	砂質土
6	褐 色	10 YR 4/4	粘質土
7	にぶい黄橙色	10 YR 6/4	砂質土
8	明 黄 褐 色	10 YR 6/8	砂質土
9	にぶい黄橙色	10 YR 6/3	砂質土
10	灰 黄 褐 色	10 YR 5/2	砂質土
11	にぶい赤褐色	5 YR 5/3	砂質土
12	にぶい黄褐色	10 YR 5/4	砂質土
13	灰 黄 褐 色	10 YR 6/2	粘質土
14	オリーブ褐色	2.5 Y 4/4	粘質土
15	灰オリーブ色	5 Y 6/2	粘質土
16	にぶい黄褐色	10 YR 5/4	粘質土
17	灰 白 色	10 Y 7/1	粘質土
18	黄 橙 色	10 YR 7/8	粘質土
19	明 青 灰 色	5 BG 7/1	粘 土
20	にぶい黄橙色	10 YR 6/3	粘質土
21	明 黄 褐 色	10 YR 6/8	砂質土
22	黄 灰 色	2.5 Y 5/1	粘 土
23	黄 色	2.5 Y 7/8	粘質土
24	明 黄 褐 色	10 YR 6/8	砂質土

南 壁			
1	黒 褐 色	2.5 Y 3/2	砂質土
2	黄 橙 色	10 YR 7/8	粘質土
3	にぶい黄褐色	10 YR 5/4	砂質土
4	黄 褐 色	2.5 Y 5/4	砂質土
5	にぶい黄色	2.5 Y 6/4	粘質土
6	橙 色	7.5 YR 6/6	砂質土
7	にぶい黄褐色	10 YR 6/3	砂質土
8	にぶい黄褐色	10 YR 5/3	砂質土
9	褐 灰 色	10 YR 4/1	砂質土
10	にぶい黄褐色	10 YR 6/4	砂質土
11	灰 黄 褐 色	10 YR 5/2	砂質土
12	にぶい赤褐色	5 YR 5/3	砂質土
13	にぶい黄褐色	10 YR 5/4	砂質土
14	明 青 灰 色	5 BG 7/1	粘 土
15	にぶい褐色	7.5 YR 5/4	粘質土
16	明 黄 褐 色	10 YR 6/8	砂質土
17	黄 褐 色	10 YR 5/8	砂質土
18	明 黄 褐 色	10 YR 6/6	砂質土
19	にぶい黄褐色	10 YR 6/3	粘質土
20	明 黄 褐 色	10 YR 6/8	砂質土
21	明 黄 褐 色	10 YR 6/8	砂質土
22	にぶい褐色	7.5 YR 5/3	砂質土
23	黄 褐 色	10 YR 5/6	砂質土
24	黄 褐 色	10 YR 5/6	砂質土

fig. 105 第31調査区層序

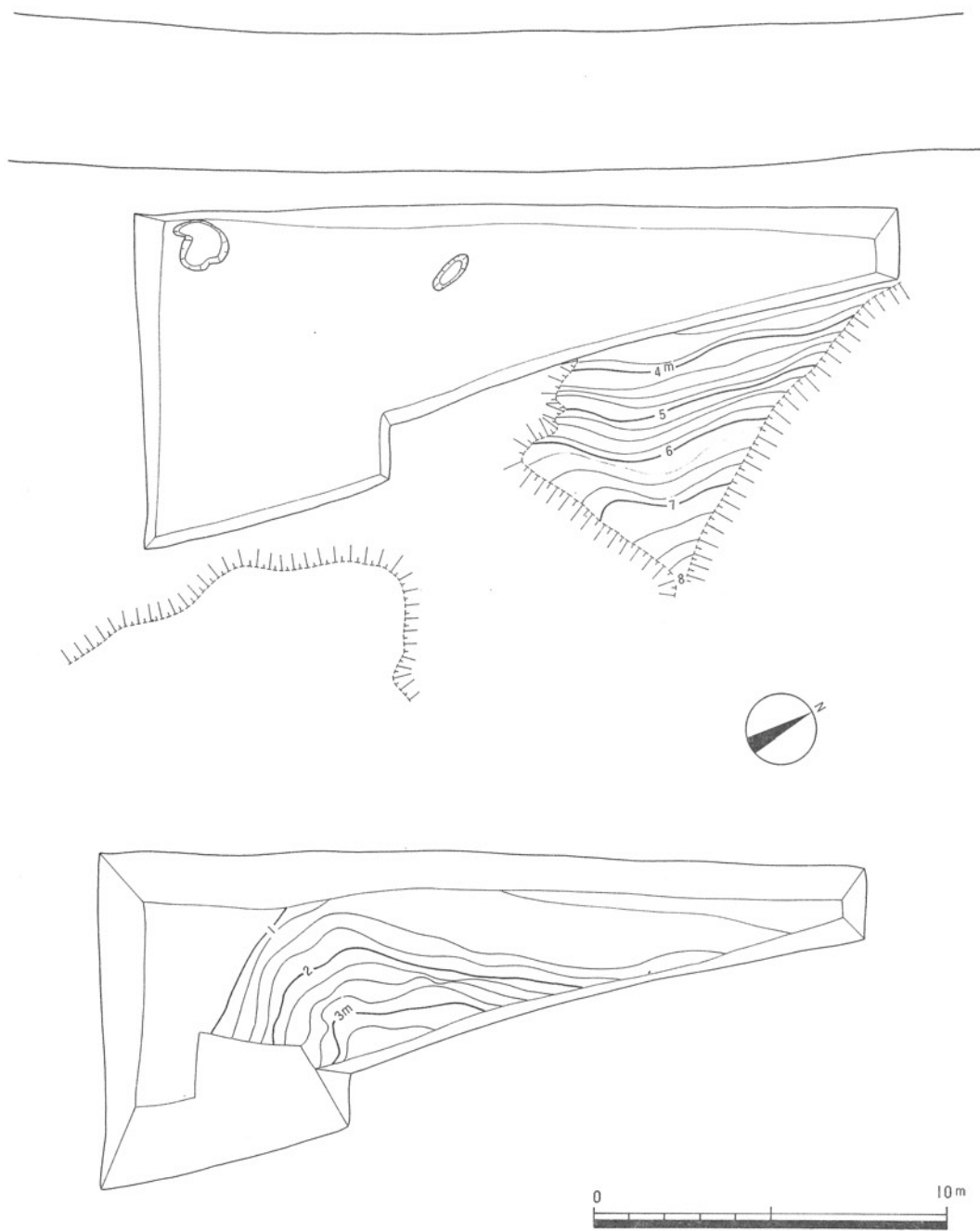


fig. 106 第31調査区遺構配置図，岩盤復原図

色砂質土)に認められた。第3層からは近世陶磁器が出土し、第5層は土師質土器を包含する。

(高橋 正則)

(3) 遺構と遺物

① 遺構

第30調査区では安定した遺物包含層を欠き、良好な遺構は検出されなかった。策31調査区では、土壌2基が認められた (fig.106)。いずれも第5層からの掘り込みであるが、出土遺物は皆無である。

② 遺物

第30調査区から出土した遺物には、小柄、サヌカイト製石鏃・剥片などがある。小柄は表土層より、石鏃・剥片は、表土層から第3層にかけて出土した。

a. 石器 (fig. 107)

石鏃

すべての資料は風化しており、転摩の痕跡が認められる。(25)~(27)は無茎である。(25)は

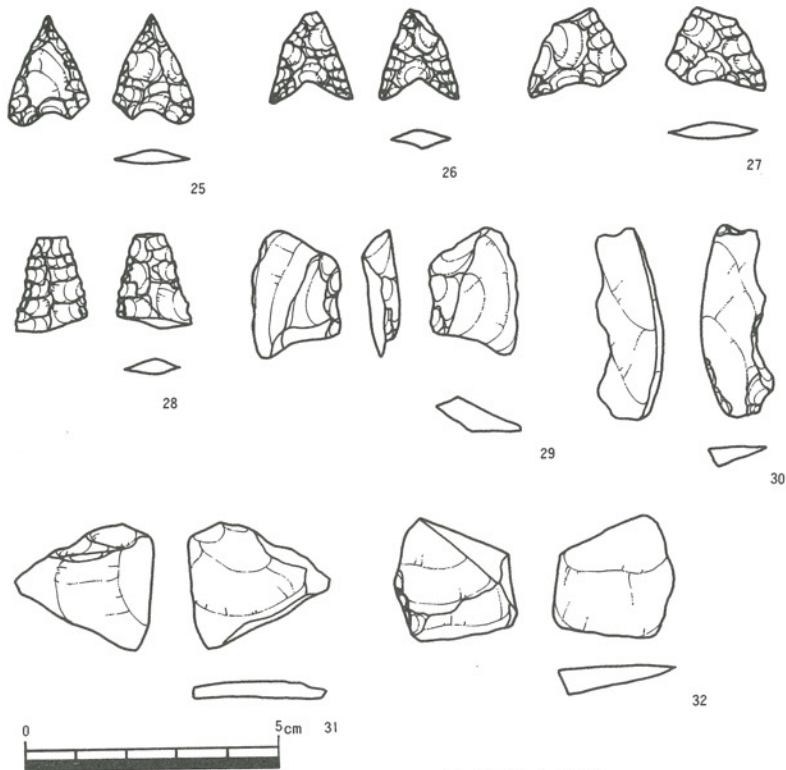


fig. 107 第30調査区出土石器

は右面に主要剥離面が残存する。(28)は縁辺をジグザグ状に整形される。

剥片

すべての資料は風化しており、転摩の痕跡が認められる。29は横長の形態をとる。背面は2枚の剥離面により構成される。打面を有する。(30)~(32)は縁辺に微細な剥離痕が観察される。

(高橋 正則)

b. 銅製品 (fig. 108)

小柄

第30調査区の表土中から小柄が1点出土している。刃部の大部分が欠失し、現在長10.6cmである。刃部鉄製。柄は銅製であり、長さ9.6cm、最大幅1.2cm、棟側の厚さ0.4cm、刃側の厚さ0.1cmである。断面は丸味のある三角形状を呈する。1枚の銅板を巻いて造り、棟側で接合して中空とする。第21調査区出土資料に較べてやや小さく、無施文である。

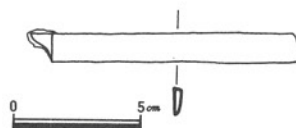


fig. 108 第30調査区出土小柄

(中西 俊治・河野 雄次)

c. 土器類 (fig. 109) (P L. 52)

第31調査区出土の土器類は、磁器11, 陶器19, 瓦質土器1, 土師質土器20の51個体である。第21・29調査区出土の土器類との類似がみられるため、磁器8, 陶器5, 土師質土器3の16個体を図示するに留めた。器形別には、碗2, 猪口8, 皿1, 鉢2, 甕1, 土釜2個体である。

碗

(425), (426)は磁器の碗である。腰部を形成し、口縁部をわずかに外反させる。呉須により、(425)には胴部に花図、(426)には胴部に稲束図を描く。両者とも高台畳付に素地をみせ、(425)の見込にトチ痕を認める。

猪口

猪口は形状により、次の4つに分けられる。口縁部を外反させるもの(428~431, 433)。胴部が内わんして外方に立ち上がり、口縁端部をそのまま丸くおさめるもの(434)。口縁部を内傾させるもの(432)。筒形(435)。

(428)~(431), (433)は小さくて低い高台を有し、口縁部が外反する。(428), (429)は磁器である。(428)の高台はわずかに外に開く。ともに図案は異なるが、胴部に呉須で草花図を描く。(430)は施釉陶器であり、口縁部がわずかに外反する。暗茶褐色の釉掛けの上に、青味乳白色の釉掛けを縦縞状に施す。(431), (433)は施釉陶器であり、前者は高台脇から高台、後

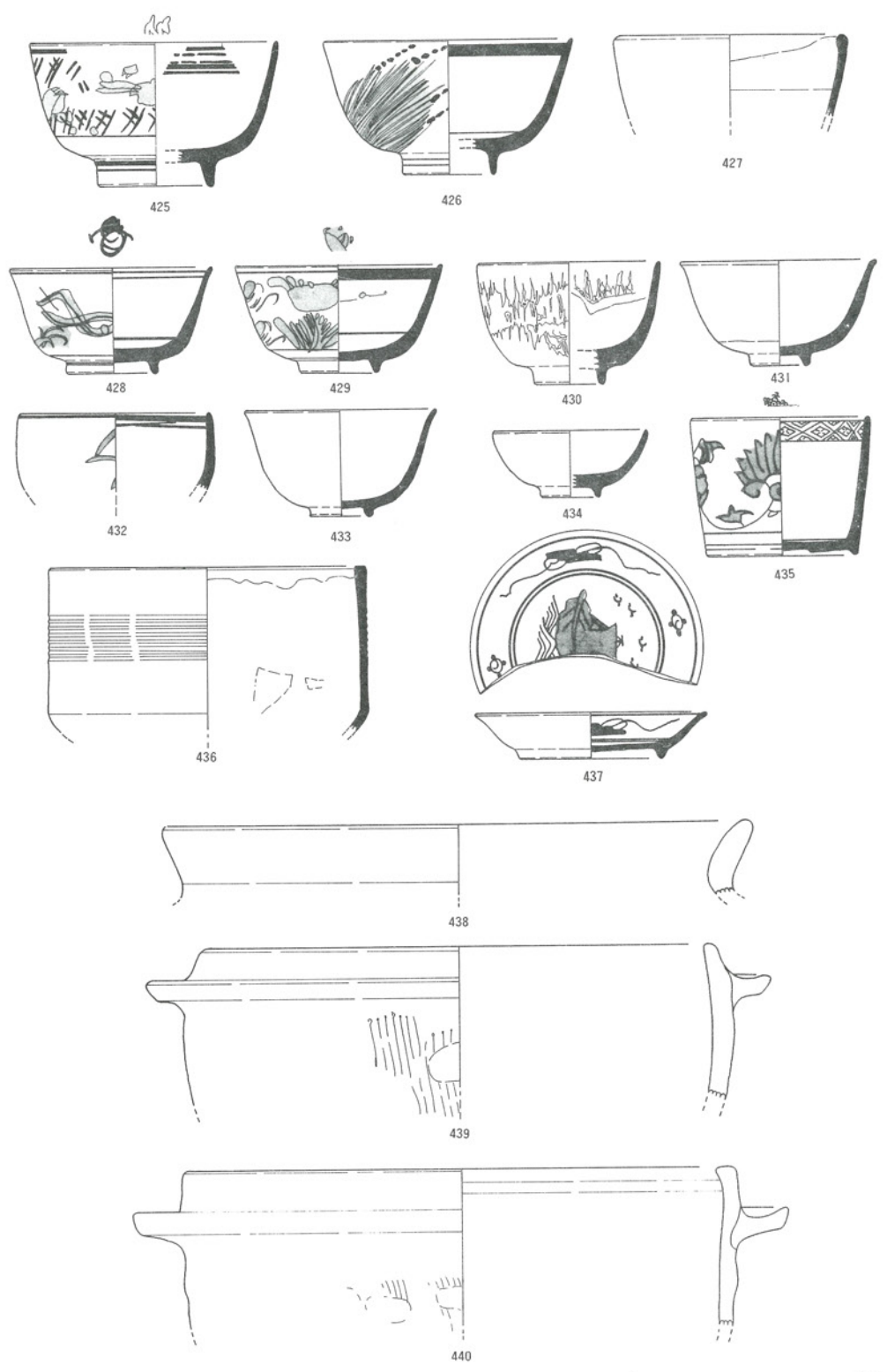


fig. 109 第31調査区出土土器類

者は高台に素地をみせる。施釉部分に貫入を認める。

(434) は小さくて低い高台を有し、胴部が内わんして立ち上がり、口縁端部をそのまま丸くおさめる磁器の盃形猪口である。高台畳付に素地をみせる。

(432) は口縁部をわずかに内傾させる磁器である。胴部に呉須で草花図を描く。

(435) は筒形の磁器猪口である。蛇の目底とする。呉須により、胴部に草花図、口縁部内側に四ツ割花卉連続文、見込中央に五弁花を描く。

皿

(437) は低い高台を有し、口縁部を外反させる磁器皿である。内底面にトチ痕を認める。内底面に呉須による帆船航海図を描く。第29調査区にも類似した皿の出土例がある。

鉢

(427)、(436) は施釉陶器の深鉢である。(427) は体部が内傾し、口縁部を内側にわずかに肥厚させ、端部を丸くおさめる。内面に素地をみせ、施釉部分に細貫入を認める。(436) は体部がわずかに内傾する筒形であり、腰部に稜を形成する。口縁部をわずかに肥厚させて端部を平坦につくり、内側に弱い段をつくり出す。体部に浅い凹線を累旋形に9条めぐらす。内面に素地を斑にみせる。

甕

(438) は土師質土器の甕であり、口縁部を遺存する。口縁部は外に開き、端部を丸くおさめる。粘土紐巻き上げ成形。胎土は粗く、焼成は良好である。色調は赤褐色を呈する。

土釜

(439)、(440) は土師質土器の土釜である。体部は内わん気味に内傾して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。口縁部直下に幅広い鏝を貼り付ける。体部外面に4条/cm単位の粗いハケ目調整を縦方向に施す。口縁部、鏝はヨコナデ調整。粘土紐巻き上げ成形。胎土は粗い。焼成は良好で堅緻。色調は赤褐色を呈する。
(河野 雄次)

(4) 小 結

両調査区をとおして、良好な遺物包含層、遺構等を検出するには至らなかった。第30調査区より出土した剥片の中には、他の資料より風化が進み、より古い剥片の形態をとるものが含まれている。(29)については今後十分な検討が必要であろう。

(高橋 正則)

附 載

第21調査区出土の徳利刻字と文献に見える造酒屋との関係について

第21調査区出土の陶器徳利には、ヘラ状工具による刻字が認められる。体部の最大径部分あるいはその上位に陰刻され、その文字には、地名、屋号、商品名などを示す例が多い。屋号、商品名には「酒」を示唆する「塩」、「三」、「銀」、「酒」、「柳」などの文字がみられる。そこで、文献に見える造酒屋との関わりについて考えてみたい。

『鳴門市史』（上巻）掲載の『戸辺集』寛政7年（1795）によると、撫養地方には、

- 「土佐泊浦 塩屋 茂吉」
- 「林崎浦 三原屋 吉左衛門」
- 「林崎浦 当銀屋 民次」
- 「才田村 瀬戸屋 忠兵衛」
- 「南浜村 坂田屋 久右衛門」
- 「黒崎村 江戸屋 五兵衛」
- 「大桑嶋 志摩屋 九郎作」
- 「高嶋村 酒井屋 九郎左衛門」
- 「明神村 酒屋 五兵衛」
- 「堂ノ浦 酒屋 高次」

等の造酒屋があった。

また、『天保四巳年十月 板野郡中酒株仮元帳』（1833）によると、撫養地方には、

- 「一 壺株 大代村 加免
但株札板野郡明神村五兵衛名前天明年中 御改米貳百三拾石」
- 「一 壺株 吉永村 以登
但株札板野郡林崎浦民次名前天明年中 御改米四百五拾石」
- 「一 壺株 松村 松浦勇助
但株札板野郡黒崎村幸助名前天明年中 御改米百八拾石」
- 「一 壺株 姫田村 せん
但株札板野郡齋田村忠兵衛名前天明年中 御改米百八拾九石貳斗」
- 「一 壺株 津慈村 浅五郎
但株札板野郡大桑嶋村源九郎名前天明年中 御改米百七拾石」
- 「一 壺株 三俣村 逸平
但株札板野郡林崎浦記内名前天明年中 御改米百八拾石」

「一 壺株 林崎浦 益井吉左衛門

但株札板野郡林崎浦吉左衛門名前天明年中 御改米貳百八拾七石」

「一 壺株 齋田村 徳右衛門

但株札板野郡高嶋村記助名前天明年中 御改米百八拾石」

「一 壺株 高嶋村 九郎左衛門

但株札板野郡高嶋村九郎左衛門名前天明年中 御改米貳百七拾八石三斗壺升」

「一 壺株 南浜村 里見平兵衛

但株札板野郡小桑嶋村平太郎名前天明年中 御改米八拾石」

「一 壺株 林崎浦 岡田政蔵

但株札板野郡林崎浦記内名前
天明年中 御改米百八拾石」

Tab. 8 造酒屋一覧表（撫養地方）

地名	天明年中	寛政7年	天保4年
土佐泊浦		塩屋茂吉	
林崎浦	吉左衛門	三原屋吉左衛門	益井吉左衛門
	民次	当銀屋民次	
	記内	瀬戸屋記内	
			岡田政蔵
才田村 (齋田村)	齋田村忠兵衛	瀬戸屋忠兵衛(才田村)	
			徳右衛門
南浜村		坂田屋久右衛門	
			里見平兵衛
黒崎村		江戸屋五兵衛	
	幸助		
大桑嶋村		志摩屋九郎作	
	源九郎		
小桑嶋村		ふじや藤蔵	
高嶋村	九郎左衛門	酒井屋九郎左衛門	九郎左衛門
	記助		
明神村	五兵衛	酒屋五兵衛	
堂ノ浦		酒屋高次	

等の酒造家があった。

以上の資料をもとに撫養地方の造酒屋を年代別、地名別に一覧表としてまとめてみた。天明年中から天保4年までの造酒屋は、土佐泊浦1、林崎浦4、才田村（齋田村）2、南浜村2、黒崎村2、大桑嶋村2、小桑嶋村1、高嶋村2、明神村1、堂ノ浦1の少なくとも18軒あったとみられる。このうち、徳利刻字との関わりを示す造酒屋は土佐泊浦1、林崎浦2、小桑嶋村1、高嶋村1、堂ノ浦1の6軒であり、以下のとおりである。

土佐泊浦塩屋

林崎浦三原屋

林崎浦当銀屋

小桑嶋村ふじや

高嶋村酒井屋

堂ノ浦酒屋

(註)・印は、徳利の刻字に相当すると考えられる文字。

限られた出土資料の中からではあるが、江戸時代末頃の商品流通経路の一端をここに示した。すなわち、今の鳴門市大麻町大谷およびその周辺の窯で造られたとみられる徳利が、撫養地域の造酒屋に運ばれ、さらに大毛島の西條に搬入されたという事実である。しかし、扱った文献資料には年代幅が狭いという制約があり、また、徳利の年代の決め手にも欠けている。そこで、さらに文献資料の整理、徳利および他の陶磁器類の編年などを課題としたい。

(松永雅行)

参考文献

福井好行 1976 「近世 林業・牧畜・鉱工業」『鳴門市史』上巻 鳴門市史編纂委員会

Tab. 9 石器計測表

挿図番号	番号	出土地区	器種	石材	重量 (g)	現長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)
fig. 16	1	8 区	石 鎌	サヌカイト	3.9	44	15	7
fig. 17	2	10 区	剥 片	安 山 岩	3	29.5	15	6
fig. 75	3	21 区	石 鎌	サヌカイト	1.05	26	19.5	4
	4		”	”	1.1	25	17	4
	5		”	”	0.8	22	16	3
	6		”	”	3.4	34	21	5
	7		”	”	0.5	18.5	14	3
	8		”	”	0.55	17	10	4
	9		二次加工の ある剥片	チャート	1.45	22.5	18	5
fig. 93	10	27 区	剥 片	サヌカイト	1.7	27.5	19	4
fig. 94	11	28 区	石 鎌	サヌカイト	0.65	23	17	3.5
	12		”	”	0.4	16	12	4
	13		”	”	0.3	14	8	2
fig. 102	14	29 区	石 鎌	サヌカイト	3.1	39	14.5	5
	15		”	”	0.8	24.5	14	4
	16		”	”	0.8	20	19	4
	17		”	”	0.7	20	15	4
	18		楔形石器	”	6.5	34	20	9
	19		”	”	3.2	29.5	19	7
	20		”	”	7.5	44	24.5	7
	21		”	”	10.2	42	41	7
	22		剥 片	”	1.8	31	19	4
	23		”	”	8.15	44	19	7.5
	24		搔 器	”	19	54	37	11
fig. 107	25	30 区	石 鎌	サヌカイト	0.7	22.5	16	3
	26		”	”	0.65	20	16	4
	27		”	”	0.8	20	18	3
	28		”	”	0.9	21	15	3
	29		剥 片	”	2.4	25	17	5
	30		”	”	2.25	38	12	4
	31		”	”	2.7	28	27	3
	32		”	”	3.05	28	23	5

Tab. 10 第21調査区出土土器類観察表(磁器以外は器種を記した)

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
1	碗	第1層	口径 16.0 器高 7.0 高台径 7.4 高台高 1.0	薄手 口縁部外反	素地・暗赤色 釉・乳黄色		陶器
2	碗	第1層	口径 11.4 器高 5.5 高台径 4.2 高台高 1.0	薄手	素地・灰黄色 釉・灰白色	遠山図	
3	碗	第1層	口径 12.1 器高 4.8 高台径 4.5 高台高 0.8	薄手 口縁部外反	素地・灰色 釉・灰褐色	見込中央に扇文 口縁部内側に連続 格子文	重ね焼の痕跡
4	碗	第1層	口径 11.6	薄手 口縁部外反	素地・灰色 釉・淡緑灰色	押印鋸歯連続文	底部欠損
5	碗	第1層	口径 9.1 器高 4.6 高台径 3.6 高台高 0.8	薄手 口縁部外反	素地・灰白色 釉・乳濁色	「寿」の文字文	
6	碗	第1層	口径 8.7 器高 4.0 高台径 3.2 高台高 0.6	薄手 口縁部外反	素地・灰白色 釉・乳濁色	蕨図 見込中央に渦文	
7	碗	第1層	口径 10.1 器高 5.2 高台径 3.4 高台高 0.6	薄手	素地・白色 釉・透明	二葉図 見込中央に文様	
8	碗	第1層	口径 9.1 器高 4.0 高台径 3.0	薄手	素地・灰白色 釉・灰濁色	赤絵松葉図 見込中央に文様	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
			高台高 0.6				
9	猪口 (盃)	第1層	口径 6.4 器高 2.7 高台径 2.7 高台高 0.6	薄手	素地・白色 釉・乳濁色	内面に「凱旋」, 「露」の文字と日 の丸の旗 高台内に「原」銘	
10	猪口 (盃)	第1層	口径 6.2 器高 3.8 高台径 2.7 高台高 0.6	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・半透明	「口間是四」の文 字	
11	仏餉具	第1層	口径 7.5	薄手	素地・灰白色 釉・半透明	蛸唐草図	脚部欠失
12	皿	第1層	口径 11.4 器高 2.1 高台径 6.4 高台高 0.5	薄手	素地・白色 釉・乳濁色	内面に朝顔図	印判手
13	皿	第1層	口径 9.9 器高 2.7 高台径 5.6 高台高 0.5	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・半透明	内面に「寿」の文 字文を押印	
14	皿	第1層	高台径 4.5 高台高 0.5	薄手 口縁部外反	素地・灰色 釉・半透明	内面に「寿」の文 字文を押印	口縁部欠失
15	皿	第1層	口径 7.4 器高 0.9	厚手	素地・赤褐色 釉・淡赤褐色		陶器 糸切り底
16	皿	第1層	高台径 11.9 高台高 0.4	薄手	素地・白色 釉・半透明	内面にハッ手図 高台内に「尻」銘	高台部のみ残存
17	蓋	第1層	口径 10.3 器高 3.2	薄手	素地・白色 釉・透明	山間庵図	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
			高台径 4.3 高台高 1.1				
18	蓋	第1層	口径 10.3 器高 2.3 つまみ径 4.4 つまみ高 1.2	薄手	素地・白色 釉・半透明	月に薊図 つまみ内に「竹泉」 銘	
19	蓋	第1層	口径 10.4 器高 2.7 つまみ径 5.9 つまみ高 1.1	薄手	素地・白色 釉・半透明	花鳥図 内面にも図あり	
20	蓋	第1層	口径 6.3 器高 2.0	薄手	素地・灰黄色 釉・黄褐色	連結文	陶器
21	蓋	第1層	口径 6.0 器高 1.2	薄手 方形	素地・灰白色 釉・透明	松に折鶴図	印盒蓋
22	蓋	第1層	口径 10.6 器高 1.5	薄手 つまみを貼り付け			瓦質土器
23	蓋	第1層	口径 11.1 器高 2.8	薄手	素地・灰白色 釉・灰褐色	丸文	
24	蓋	第1層	口径 7.8 器高 2.7	薄手	素地・赤褐色 釉・明赤褐色	天井部に押印文様	陶器
25	皿	第1層	口径 8.2 器高 2.4 高台径 3.3 高台高 0.4	薄手 方形で角切 四方高台	素地・白色 釉・灰白色	印花文	
26	皿	第1層	口径 10.9 器高 2.3 高台径 6.2 高台高 0.7	薄手 八角形	素地・灰色 釉・灰褐色	花図	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
27	徳利	第1層		薄手 体部を方形につくる	素地・灰色 釉・暗赤褐色	「大神宮」の刻字	陶器 神酒徳利
28	徳利	第1層	口径 2.5	薄手	素地・灰色 釉・半透明	梅花図	神酒徳利 底部欠失
29	碗	第1層	口径 13.9 器高 6.4 高台径 7.6 高台高 1.1	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・乳白色	八卦文，梅図 見込中央に大極図 高台内に渦福銘	
30	猪口	第1層	口径 9.4 器高 6.6 高台径 7.0 高台高 0.3	やや厚手 竹節状 筒形 口縁部やや外反	素地・淡黄色 釉・濃緑色		陶器
31	猪口	第1層	口径 7.3 器高 5.8 高台径 6.1 高台高 0.2	薄手 筒形 蛇の目底	素地・白色 釉・灰濁色	山水図 口縁部内側に雷文	
32	鉢	第1層	口径 14.7 器高 4.3 高台径 9.1 高台高 0.9	薄手 菊鉢 蛇の目高台	素地・白色 釉・半透明	唐草文 内面に松図 内底面に松竹梅図	印判手
33	鉢	第1層	口径 14.9 器高 4.4 高台径 9.1 高台高 0.7	薄手 菊鉢 蛇の目高台	素地・白色 釉・灰濁色	山水図	口縁端部に鉄釉
34	鉢	第1層	口径 15.0 器高 4.1 高台径 8.5 高台高 0.7	薄手 菊鉢 蛇の目高台	素地・白色 釉・灰濁色	山水図	口縁端部に鉄釉

番号	器形	出土層位・遺構	法量(m)	形状	素地と釉	染付文様	備考
35	鉢	第1層	口径 15.0 器高 4.2 高台径 8.5 高台高 0.9	薄手 菊鉢 蛇の目高台	素地・白色 釉・灰濁色	山水図	口縁端部に鉄釉
36	鉢	第1層	口径 26.3	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・半透明	梅図 内面に草花図	底部欠失
37	皿	第1層	口径 12.3 器高 3.0 高台径 7.1 高台高 0.6	やや厚手 口縁部外反 玉縁状口縁 蛇の目高台	素地・白色 釉・乳濁色	内面に草文 見込中央に文様	
38	燭台	第1層	口径 6.8 器高 7.6	厚手	素地・暗赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼
39	燭台	第1層	口径 7.2 器高 7.1	厚手	素地・暗赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼
40	燭台	第1層	口径 6.6 器高 6.3	薄手	素地・暗赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼
41	蓋	第1層	口径 14.1	薄手	素地・灰色 釉・淡緑色		陶器 つまみ部分欠失
42	壺	第1層	高台径 6.5 高台高 0.6	やや厚手 高台	素地・淡黄色 釉・淡黄濁色		陶器 貫入 底部のみ残存
43	壺	第1層	口径 5.8	薄手	素地・にぶい赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼 口縁部のみ残存
44	壺	第1層	口径 14.8	薄手 口縁部外反	素地・赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼 口縁部のみ残存
45	壺	第1層	口径 15.2	薄手 耳付	素地・灰色 釉・淡緑色		陶器 口縁部のみ残存

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
46	徳利	第1層	高台径 7.3 高台高 1.5	薄手 高台	素地・灰赤色 釉・極暗赤褐色	肩部に刻字あり	陶器 口頸部欠失
47	播鉢	第1層	口径 25.3 器高 9.3	薄片口	素地・淡黄色 釉・暗赤褐色		陶器 7条/cm単位の播目
48	碗	A-3 包含層	口径 12.5 器高 6.0 高台径 4.8 高台高 1.0	厚手	素地・灰黄色 釉・灰濁色	丸文 口縁内側に四ツ割 花卉連続文	くらわんか手
49	碗	A-3 包含層	口径 11.2 器高 5.6 高台径 4.5 高台高 0.6	薄手	素地・白色 釉・乳白色	水裂菊花文	くらわんか手
50	碗	B-3 包含層	口径 10.3 器高 5.0 高台径 4.2 高台高 0.8	やや厚手	素地・白色 釉・灰濁色	網目文	くらわんか手
51	碗	B-4 包含層	口径 12.0 器高 6.4 高台径 5.0 高台高 1.4	薄手	素地・暗赤色 釉・極暗赤褐色		大谷焼
52	碗	B-4 包含層	口径 11.2 器高 5.7 高台径 4.1 高台高 0.8	やや厚手	素地・灰白色 釉・淡緑色	見込中央に五弁花	見込に重ね焼の痕跡
53	碗	B-4 包含層	口径 10.8	薄手 口縁部やや外反	素地・白色 釉・灰濁色	花 口縁内側に雷文	底部欠損
54	碗	B-3 包含層	口径 10.1 器高 6.8	やや厚手	素地・暗黄灰色 釉・灰黄色	四ツ割花卉連続文 風景図	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
			高台径 4.2 高台高 0.8				
55	碗	C-3 包含層	口径 10.1	薄手 口縁部外反	素地・灰白色 釉・半透明	松 図	底部欠損
56	碗	B-4 包含層	口径 11.8 器高 5.7 高台径 4.6 高台高 0.7	薄手 撥高台	素地・白色 釉・灰濁色	萬 図 口縁内側に四ツ割 花卉連続文	
57	碗	B-2 包含層	高台径 3.3 高台高 0.6	薄手 撥高台	素地・灰白色 釉・淡黄色	菊花 図	重ね焼の痕跡 底部のみ残存
58	碗	A-3 包含層	口径 11.1 器高 6.1 高台径 5.1 高台高 0.9	薄手 口縁部外反 撥高台	素地・白色 釉・乳白色	花・楼閣 図 口縁内部に帆船図 見込中央に花文	
59	碗	A-3 包含層	口径 10.9 器高 6.0 高台径 4.0 高台高 1.0	薄手 口縁部外反	素地・灰黄色 釉・灰白色	瓔珞文 口縁内側に山形の 連続文 見込中央に「大化 年制」の銘	
60	碗	A-3 包含層	高台径 3.9 高台高 0.6	薄手	素地・白色 釉・灰濁色	草花 図 見込中央に源氏香	底部のみ残存
61	碗	B-2 包含層	口径 9.5 器高 4.3 高台径 3.1 高台高 0.7	やや厚手	素地・灰白色 釉・半透明	赤絵松葉文	
62	碗	B-4 包含層	口径 10.9	薄手 口縁部やや外反	素地・灰白色 釉・乳濁色	斜格子・松 図 口縁内側に葉形の 連続文	底部欠損

番号	器形	出土層位・遺構	法量(m)	形状	素地と釉	染付文様	備考
63	碗	C - 3 包含層	口径 10.3 器高 5.4 高台径 4.3 高台高 0.8	薄手 口縁部外反	素地・灰白色 釉・灰濁色	草花図 見込中央に「文」の文字銘	ロクロ目を残す
64	碗	A' - 5 包含層	口径 11.5 器高 5.4 高台径 4.4 高台高 0.8	やや厚手	素地・灰白色 釉・淡緑色	見込中央に五弁花	見込に重ね焼の痕跡
65	碗	B - 4 包含層	高台径 4.0 高台高 1.0	薄手	素地・白色 釉・乳濁色	草花図 見込中央に花図	口縁部欠損
66	碗	A - 3 包含層	口径 11.9	厚手	素地・灰白色 釉・灰濁色	桃図 口縁内側に四ツ割 花卉連続文	ロクロ目を残す 口縁部のみ残存
67	碗	A' - 3 包含層	口径 12.0	薄手	素地・白色 釉・半透明	山水遠山図	底部欠損
68	碗	A - 3 包含層	口径 10.4 口縁部やや外反	薄手	素地・灰色 釉・乳濁色	鳥・雲図 口縁内側に雷文	底部欠損
69	碗	A - 3 包含層	口径 11.0	薄手	素地・白色 釉・半透明	竜・花図 口縁内側に雷文	底部欠損
70	碗	A - 4 包含層	口径 11.1 器高 5.6 高台径 5.1 高台高 0.5	薄手 口縁部外反	素地・灰白色 釉・半透明	花図	
71	碗	A - 3 包含層	口径 10.1 器高 5.9 高台径 3.6 高台高 0.7	薄手 口縁部外反	素地・灰濁色 釉・半透明	秋草図 見込中央に文様	
72	碗	A - 3	高台径 4.7	薄手	素地・白色	葉繋ぎ文・菊花図	口縁部欠損

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
		包含層	高台高 0.9	撥高台	釉・灰白色	高台内に斜格子文 見込中央に菊花図	
73	碗	A-3 包含層	口径 10.2	薄手	素地・白色 釉・半透明	松 図	底部欠損
74	碗	C-3 包含層	口径 12.7	薄手 口縁部外反 玉緑状口縁	素地・白色 釉・乳濁色	薦 図 見込に葉図	底部欠損
75	碗	C-3 包含層	口径 11.6	薄手 口縁部外反	素地・灰白色 釉・灰濁色		底部欠損 ロクロ目を残す
76	碗	A-3 包含層	高台径 4.5 高台高 0.9	やや厚手	素地・灰色 釉・灰濁色	見込中央に五弁花	底部のみ残存 重ね焼の痕跡 ロクロ目を残す
77	碗	B-3 包含層	高台径 4.1 高台高 0.7	薄手	素地・灰白色 釉・半透明	高台内に銘	底部のみ残存 重ね焼の痕跡
78	碗	B-3 包含層	口径 10.9 器高 6.4 高台径 5.2 高台高 0.9	やや厚手	素地・灰色 釉・乳灰色	よろけ縞文 見込中央に芝文	
79	碗	A-3 包含層	口径 11.5 器高 6.3 高台径 6.0 高台高 1.2	薄手	素地・白色 釉・灰濁色	撫子文 見込に文様	
80	碗	A-3 包含層	口径 10.8 器高 5.3 高台径 3.8 高台高 0.6	薄手	素地・灰白色 釉・半透明	粹絵羊歯図 見込中央に花文	
81	碗	B-3 包含層	口径 9.8	薄手	素地・灰黄色 釉・灰濁色	縞 文	口縁部のみ残存

番号	器形	出土層位・遺構	法量(m)	形状	素地と釉	染付文様	備考
82	碗	A-3 包含層	口径 11.3	薄手 口縁部やや外反	素地・灰白色 釉・半透明	丸文	口縁部のみ残存
83	碗	A-3 包含層	口径 9.6	薄手 口縁部わずかに肥厚	素地・白色 釉・半透明	草花図	底部欠損 ロクロ目を残す
84	花生	A-3 包含層	口径 10.4	薄手 筒形	素地・白色 釉・半透明	遠景図	
85	鉢	B-4 包含層	口径 8.1	薄手 筒形	素地・白色 釉・灰濁色	鉄線花図 口縁内側に雷文	底部欠損
86	花生	A-3 包含層	口径 9.5	薄手 筒形	素地・黄色 釉・乳濁色	「白□□香□・・・」 「黄金□・・・」の銘	陶器
87	花生	A-5 包含層	口径 9.9	薄手 筒形	素地・黄色 釉・濃緑色	花文を押印 渦文	瀬戸焼
88	碗	A-3 包含層	口径 9.0	薄手	素地・白色 釉・半透明	草文	口縁部のみ残存
89	花生	B-4 包含層	口径 9.2	薄手 筒形	素地・黄色 釉・淡灰黄色		陶器
90	花生	A-3 包含層	口径 9.8	薄手 筒形	素地・灰白色 釉・淡緑灰色		青磁
91	碗 (猪口)	A'-3 包含層	口径 9.6 器高 4.6 高台径 4.3 高台高 0.3	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・半透明	内外面に文様	印判手
92	碗 (猪口)	A-3 包含層	口径 9.0	薄手 口縁部外反	素地・淡黄白色 釉・黄灰色		瀬戸焼 内外面に貫入 底部欠損

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
93	碗	A' - 4 包含層	口径 9.0	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・半透明	よろけ縞文	底部欠損
94	碗	A - 3 包含層	口径 8.6	薄手 口縁部がわずかに肥厚	素地・白色 釉・半透明	山水図 口縁内側に雷文	底部欠損
95	蓋	B - 2 包含層	口径 8.1	薄手 口縁部やや外反	素地・灰色 釉・半透明	雷文	底部欠損
96	碗 (猪口)	A - 2 包含層	口径 8.8 器高 4.0 高台径 3.0 高台高 0.5	やや厚手 口縁部外反	素地・灰白色 釉・灰濁色	紐文 見込に文様	愛知県 かみた窯? ロクロ目を残す
97	猪口 (盃)	A - 3 包含層	口径 6.3 器高 3.0 高台径 3.0 高台高 0.4	薄手 口縁部外反 胴部に竹節状の突帯	素地・灰白色 釉・半透明	見込に「合」の屋号	
98	猪口 (盃)	A' - 3 包含層	口径 6.6 器高 2.6 高台径 2.3 高台高 0.4	極めて薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・半透明	見込に山水図 口縁内側に連続文	
99	猪口 (盃)	C - 3 包含層	口径 6.6 器高 2.7 高台径 2.1 高台高 0.5	薄手	素地・白色 釉・灰濁色	花文	
100	猪口 (盃)	A - 3 包含層	口径 5.7 器高 2.4 高台径 2.8 高台高 0.4	薄手	素地・灰白色 釉・乳濁色		
101	猪口	C - 3	口径 5.6	厚手	素地・灰色		陶器

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
	(盃)	包含層	器高 2.9 高台径 2.6 高台高 0.4		釉・半透明		ロクロ目を残す
102	猪口 (盃)	A-3 包含層	口径 5.5 器高 2.9 高台径 3.3 高台高 0.4	厚手	素地・灰色 釉・半透明		陶器 ロクロ目を残す
103	猪口 (盃)	A-3 包含層	口径 5.2 器高 2.4 高台径 3.2 高台高 0.5	厚手	素地・灰色 釉・半透明		陶器 ロクロ目を残す
104	猪口 (盃)	B-4 包含層	口径 4.8 器高 3.1 高台径 3.8 高台高 0.2	薄筒形	素地・白色 釉・灰濁色	花に稲束図の赤絵	重ね焼の痕跡
105	紅皿	B-1 包含層	口径 4.0 器高 0.6 高台径 2.1 高台高 0.3	厚手	素地・白色 釉・乳白色		
106	皿	C-3 包含層	口径 23.0 器高 3.1 高台径 15.0 高台高 0.3	薄手 口縁部外反 高台断面が三角形状	素地・灰白色 釉・灰濁色	内面に花図	ロクロ目を残す 菊皿？
107	皿	B-3 包含層	口径 25.3 器高 3.7 高台径 16.7 高台高 0.3	薄手 外面にへら削り	素地・淡黄色 釉・半透明	内面に鼠浮出図	陶器
108	皿	A-3 包含層	口径 10.3 器高 2.8	薄手 撥高台	素地・灰白色 釉・灰濁色	磯馴松図 口縁内側に四ツ割	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形 状	素地と釉	染付文様	備 考
			高台径 4.1 高台高 0.5	口縁部内側に段		花卉連続文 見込中央に文様	
109	皿	A - 3 包含層	口径 9.1 器高 2.5 高台径 3.0 高台高 0.7	薄 手	素地・白 色 釉・半透明	蛸唐草文 口縁内側に四ツ割 花卉連続文 見込中央に松竹梅	
110	皿	A - 3 包含層	口径 8.9 器高 2.7 高台径 3.2 高台高 0.8	薄 手 口縁部外反	素地・白 色 釉・半透明	鶴飛翔図 口縁内側に雷文 見込中央に文様	
111	皿	A - 3 包含層	口径 9.6 器高 3.2 高台径 4.3 高台高 0.8	薄 手 口縁部外反	素地・灰白 色 釉・乳濁 色	遠山図 口縁内側に連続文 見込に文様	
112	皿	A - 3 包含層	口径 9.3 器高 3.2 高台径 4.2 高台高 0.8	薄 手 口縁部外反	素地・白 色 釉・乳濁 色	網目文 口縁内側に格子連 続文 見込中央に柳文	
113	皿	A - 3 包含層	口径 10.2 器高 2.8 高台径 4.6 高台高 0.7	薄 手 撥高台	素地・灰白 色 釉・淡緑 色	口縁内側に四ツ割 花卉連続文 見込中央に花文 高台内に「堇」銘	
114	皿	A - 3 包含層	口径 8.8 器高 2.4 高台径 5.2 高台高 0.7	薄 手	素地・白 色 釉・灰濁 色	松にハツ手図 見込中央に「寿」銘	
115	皿	A - 3 包含層	口径 9.7 器高 2.7 高台径 5.4	薄 手 口縁部外反	素地・白 色 釉・半透明	見込に「寿」字文 を押印	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
			高台高 0.5				
116	皿	A - 3 包含層	口径 9.8 器高 2.0 高台径 5.3 高台高 0.2	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・半透明	見込に「寿」字文 を押印	
117	皿	A - 2 包含層	口径 10.6 器高 2.9 高台径 5.7 高台高 0.8	薄手 撥高台	素地・灰白色 釉・半透明	暦手文 見込中央に「寿」	
118	皿	A' - 3 包含層	口径 10.3 器高 2.4 高台径 5.0 高台高 0.7	薄手	素地・黄白色 釉・灰濁色	見込に松・帆船図 瓢箪・花生・「寿」 「寶」などの押印	口縁端部に鉄釉
119	皿	B - 2 包含層	口径 10.3 器高 2.9 高台径 4.2 高台高 0.6	薄手 撥高台	素地・白色 釉・灰白色	秋草・文字文 口縁内側に四ツ割 花卉連続文 見込中央に文字文	
120	皿	B - 4 包含層	口径 10.8 器高 3.1 高台径 4.7 高台高 0.7	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・灰黄濁色	体部・見込中央に 文様	
121	皿	C - 3 包含層	口径 11.9 器高 3.0 高台径 4.9 高台高 0.8	厚手 高台脇に段	素地・白色 釉・灰濁色	口縁部内側に斜格 子文	ロクロ目を残す
122	皿	B - 4 包含層	口径 14.6 器高 3.7 高台径 6.6 高台高 0.7	厚手	素地・白色 釉・灰濁色	口縁部内側に斜格 子文	ロクロ目を残す

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
123	皿	A - 3 包含層	口径 14.6 器高 3.7 高台径 6.6 高台高 0.7	厚手	素地・白色 釉・灰濁色	口縁部内側に斜格子文	
124	鉢	B - 4 包含層	口径 17.6	薄手 口縁部外反 玉縁状口縁	素地・白色 釉・半透明	内面に笹図	底部欠損
125	鉢	B - 4 包含層	口径 14.8 器高 3.8 高台径 10.8 高台高 0.2	薄手 口縁部外反 玉縁状口縁	素地・白色 釉・半透明	内面に花図	
126	鉢	B - 4 包含層	口径 13.9 器高 4.1 高台径 8.1 高台高 1.0	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・灰濁色	内外面に遠山図	
127	鉢	A - 2 包含層	口径 14.6	薄手 口縁部外反 玉縁状口縁	素地・白色 釉・灰濁色	内面に瓔珞文	底部欠損
128	鉢 (皿)	C - 3 包含層	口径 14.0	薄手	素地・白色 釉・半透明	内外面に文様	底部欠損
129	鉢	A - 3 包含層	高台径 8.2 高台高 0.6	薄手 蛇の目高台	素地・淡黄色 釉・淡黄灰色	内面に築山図	高台部分のみ残存
130	皿 (燈明皿)	C - 3 包含層	口径 6.3 器高 1.6	厚手	素地・暗赤褐色 釉・暗茶褐色		大谷焼 ロクロ目を残す
131	皿 (燈明皿)	B - 4 包含層	口径 7.7	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着
132	皿	A - 3	口径 8.0	薄手	素地・赤褐色		陶器

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
	(燈明皿)	包含層	器高 1.2		釉・暗赤褐色		ロクロ目を残す 煤付着
133	皿 (燈明皿)	A-2 包含層	口径 8.0 器高 1.0	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着
134	皿 (燈明皿)	B-2 包含層	口径 6.8 器高 0.9	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す
135	皿	A-3 包含層	口径 6.8	厚手			土師質土器
136	皿 (燈明皿)	A-3 包含層	口径 7.3 器高 1.9	厚手	素地・赤褐色 釉・黒褐色		大谷焼 底部に糸切の痕跡 ロクロ目を残す
137	皿 (燈明皿)	A'-3 包含層	口径 7.9	薄手	素地・暗赤褐色 釉・暗茶褐色		陶器 ロクロ目を残す
138	皿 (燈明皿)	A-1 包含層	口径 7.9 器高 1.4	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着
139	皿 (燈明皿)	A-2 包含層	口径 9.9 器高 1.3	薄手	素地・赤褐色 釉・暗茶褐色		陶器 ロクロ目を残す
140	皿 (燈明皿)	A-2 包含層	口径 8.4 器高 1.8	やや厚手 碁筭底	素地・淡黄色 釉・淡黄灰色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着 貫入 重ね焼の痕跡
141	皿 (燈明皿)	A-3 包含層	口径 9.1 器高 1.7	やや厚手 碁筭底	素地・淡黄色 釉・淡黄灰色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着 貫入 重ね焼の痕跡

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
142	皿 (燈明皿)	A - 2 包含層	口径 7.9 器高 1.2	薄手	素地・赤褐色 釉・暗茶褐色		陶器 ロクロ目を残す
143	皿 (燈明皿)	A - 3 包含層	口径 8.3 器高 1.9	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着 底部に糸切の痕跡
144	皿	A - 3 包含層	口径 9.1 器高 1.7	やや厚手	素地・淡黄色 釉・淡黄灰色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着 貫入 重ね焼の痕跡
145	皿 (燈明皿)	A - 2 包含層	口径 8.5 器高 1.9	やや厚手	素地・淡黄色 釉・におい褐色		陶器 ロクロ目を残す 重ね焼の痕跡
146	皿 (燈明皿)	B - 2 包含層	口径 10.5 器高 1.9	薄手	素地・暗赤褐色 釉・暗茶褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着
147	皿 (燈明皿)	A - 2 包含層	口径 10.1 器高 2.1	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着 底部に糸切の痕跡
148	皿 (燈明皿)	A - 1 包含層	口径 10.8 器高 2.0	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着
149	皿	A - 2 包含層	口径 10.7 器高 2.0	薄手 碁筒底	素地・淡黄色 釉・淡黄灰色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着 貫入 重ね焼の痕跡 内面に3条を単位とする3帯施す

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
							平行沈線
150	皿	A - 1 包含層	口径 9.5	薄手	素地・赤褐色		陶器 ロクロ目を残す
151	燈明皿	A - 5 包含層	口径 7.7 器高 1.2	やや厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着
152	燈明皿	B - 3 包含層	口径 8.1	やや厚手	素地・青灰色 釉・暗茶褐色		陶器 ロクロ目を残す
153	燈明皿	B - 3 包含層	口径 9.4 器高 1.5	薄手	素地・淡黄色 釉・淡黄灰白色		陶器 ロクロ目を残す 貫入
154	燈明皿	A - 2 包含層	口径 9.7 器高 1.6	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す
155	燈明皿	B - 4 包含層	口径 9.7 器高 1.5	薄手	素地・にぶい赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 ロクロ目を残す
156	燈明皿	A - 3 包含層	口径 10.1 器高 1.5	厚手	素地・淡黄色 釉・淡黄灰色		陶器 ロクロ目を残す 貫入
157	燈明皿	B - 3 包含層	口径 10.2 器高 1.8	厚手	素地・褐色 釉・淡赤褐色		陶器 ロクロ目を残す 煤付着
158	播鉢	A' - 3 包含層	口径 14.6 器高 6.9 高台径 5.3 高台高 1.1	薄片口	素地・暗赤褐色 釉・赤黒色		陶器 口縁部に凹線 内面に15条を単位とする 櫛描きの播目
159	鉢 (捏鉢)	A - 3 包含層	高台径 14.2 高台高 0.4	薄手	素地・赤灰白色 釉・赤褐色		陶器 重ね焼の痕跡

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
160	播鉢	A - 3 包含層		薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 内面に3条/cmの 櫛描きの播目 内底面に8条単位 の櫛描きの播目
161	播鉢	A - 4 包含層		厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤灰色		陶器 内面に3条/cmの 櫛描きの播目 内底面に7条単位 の櫛描きの播目
162	徳利	B - 3 包含層		やや厚手	素地・暗赤灰色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
163	徳利	A - 3 包含層		やや厚手	素地・暗赤灰色 釉・にじみ赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
164	徳利	A - 3 包含層		やや厚手	素地・赤褐色 釉・灰赤色		大谷焼 底部のみ残存
165	徳利	A - 3 包含層		薄手	素地・赤灰白色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
166	徳利	A - 3 包含層		薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
167	徳利	B - 4 包含層		やや厚手	素地・褐灰白色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
168	茶入	B - 3 包含層		やや厚手	素地・にじみ赤褐色 釉・赤黒色		陶器 底部に糸切の痕跡 底部のみ残存
169	茶入	A - 2 包含層		薄手	素地・赤褐色 釉・暗褐色		陶器 底部に糸切の痕跡 底部のみ残存

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
170	壺	B - 1 包含層		やや厚手		底部に「三」の文字を墨書	陶器 底部に糸切の痕跡 底部のみ残存
171	茶入	A - 3 包含層	口径 7.3	薄手 肩衝	素地・赤灰白色 釉・極暗赤褐色		陶器 口縁部のみ残存
172	茶入	A - 2 包含層	口径 5.2	やや厚手 肩衝	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 口縁部のみ残存
173	壺	B - 4 包含層	高台径 6.0 高台高 0.4	薄手 筒形 高台を有する	素地・淡黄色 釉・暗赤褐色		陶器 底部のみ残存
174	鉢	B - 3 包含層	口径 12.6 器高 6.9	厚手 筒形 平底	素地・赤褐色 釉・赤褐色		大谷焼 ロクロ目を残す
175	鉢	A - 3 包含層	口径 10.4 器高 5.2	厚手 筒形 平底	素地・暗赤色 釉・暗赤褐色		大谷焼 ロクロ目を残す
176	燭台	A - 3 包含層		厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 糸切の痕
177	鉢	B - 3 包含層	口径 17.4	やや厚手	素地・暗赤褐色 釉・暗褐色		陶器 底部欠損
178	燭台	B - 3 包含層	口径 6.5 器高 5.6	厚手	素地・暗赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼
179	燭台	A - 3 包含層	口径 7.3 器高 7.5	やや厚手	素地・暗赤褐色 釉・赤黒色		大谷焼 糸切り痕跡
180	甕	A - 3 包含層	口径 11.5	やや厚手 口縁部肥厚			陶器 口縁部のみ残存
181	甕	C - 3	口径 14.0	薄手	素地・黄濁色		陶器

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
		包含層		口縁部を外に折り返す	釉・暗黄褐色		貫入 口縁部のみ残存
182	甕	A-3 包含層	口径 19.3	厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 口縁部のみ残存
183	甕	A-5 包含層	口径 20.2	やや厚手			陶器 口縁部のみ残存
184	火舎	C-3 包含層	口径 22.3	やや厚手		押印菊花・泉 図	瓦質土器 口縁内側に指頭圧痕 口縁部のみ残存
185	鉢 (片口鉢)	B-4 包含層	口径 23.5	やや厚手 玉縁状口縁	素地・黄色 釉・半透明		瀬戸焼 ロクロ目を残す 口縁部のみ残存
186	不明	A-3 包含層		厚手			土師質土器 脚部のみ残存
187	花生	A-3 包含層	口径 10.3 器高 7.8 高台径 5.2 高台高 0.3	やや厚手 筒形	素地・灰色 釉・灰黄濁色		陶器
188	花生	A-3 包含層	口径 11.0 器高 8.4 高台径 11.6 高台高 0.5	薄手 筒形	素地・淡黄色 釉・淡黄濁色	赤紫・薄緑色の釉による松 図	陶器 高台部に半月形の切り込み 貫入
189	花生	A-3 包含層	口径 11.1 器高 9.1 高台径 11.1 高台高 0.6	薄手 筒形	素地・暗赤色 釉・灰白色		陶器 貫入
190		A-3	口径 2.6	やや厚手	素地・黄色	暗緑色の釉で文様	陶器

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
		包含層	器高 3.2		釉・乳濁色	を描く	貫入
191	香炉	A-3 包含層	口径 8.8	やや厚手	素地・灰黄色 釉・青灰色		底部欠損 貫入
192	香炉	A-3 包含層	口径 7.1	やや厚手	素地・白色 釉・淡灰緑色	内面に墨書あり	底部欠損
193	德利 (神酒德利)	A-3 包含層	口径 1.3	薄手	素地・白色 釉・半透明	草花図	底部欠損
194	德利	A-3 包含層	高台径 4.5 高台高 0.8	薄手	素地・灰白色 釉・灰濁白色	草花図	口縁部欠損
195	德利 (神酒德利)	B-4 包含層		やや厚手	素地・灰白色 釉・半透明	梅図	胴部のみ残存
196	德利 (神酒德利)	A-3 包含層	口径 1.1.0 器高 3.8 高台径 2.7 高台高 0.8	薄手	素地・白色 釉・乳白色	松竹梅図	
197	德利 (神酒德利)	A-3 包含層		やや薄手	素地・白色 釉・乳濁色	蛸唐草文	両端欠損
198	德利 (神酒德利)	A-2 包含層	高台径 3.7 高台高 0.4	やや薄手	素地・白色 釉・乳濁色	蛸唐草文	貫入 底部のみ残存
199	德利 (神酒德利)	A-3 包含層	高台径 3.0 高台高 0.5	薄手	素地・灰色 釉・半透明	草花図 ?	底部のみ残存
200	德利	B-4 包含層		薄手	素地・赤褐色 釉・明赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
201	德利 (神酒德利)	B-4 包含層	口径 2.4	やや薄手 口縁部外反	素地・灰色 釉・半透明		口縁部のみ残存 貫入

番号	器形	出土層位・遺構	法量(m)	形状	素地と釉	染付文様	備考
202	徳利	B-2 包含層	口径 3.7	薄手 口縁部外反	素地・灰色 釉・乳濁色		口縁部のみ残存
203	徳利	A-3 包含層	口径 2.6 器高 16.5	薄手	素地・灰色 釉・茶褐色		陶器
204	仏納具	A'-3 包含層	口径 6.8 器高 6.6	厚手	素地・黄白色 釉・乳白色	水裂菊花文	
205	仏納具	A-3 包含層	口径 5.9	やや厚手	素地・灰色 釉・半透明	赤絵付の文様	碗部のみ残存
206	土瓶	A-3 包含層	口径 7.9	薄手	素地・黄色 釉・乳白色	菊花図	陶器 底部欠損
207	土瓶	A-3 包含層	口径 11.5	薄手			瓦質土器 口縁部のみ残存
208	花生	A'-3 包含層	高台径 8.8 高台高 1.0	薄手	素地・黄灰色 釉・半透明	草花図	口縁部欠損
209	徳利	B-3 包含層	高台径 8.1 高台高 1.8	薄手	素地・褐灰色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
210	徳利	A-3 包含層	高台径 7.8 高台高 1.2	薄手	素地・明赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
211	徳利	A-3 包含層	高台高 8.1 高台高 1.7	やや厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色	高台外側に刻字 「州」	大谷焼 底部のみ残存
212	鉢	A-3 包含層	高台径 9.1 高台高 1.8	厚手	素地・赤色 釉・にぶい黄橙色 暗赤色		陶器 底部のみ残存
213	徳利	A-3 包含層		薄手	素地・黄褐色 釉・赤褐色		大谷焼 底部のみ残存

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
214	徳利	A - 3 包含層		薄手	素地・赤褐色 釉・黒褐色	肩部に刻字 「大」「柳」「酒」	大谷焼 口縁部欠損
215	徳利	A - 3 包含層	口径 3.6	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 口縁部のみ残存
216	徳利	A - 3 包含層	口径 5.4	厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色	肩部に刻字 「堂」「口」「林」	大谷焼 下半部欠損
217	徳利	A - 3 包含層	口径 4.0	薄手	素地・明赤褐色 釉・にぶい赤褐色	肩部に刻字 「酒」「高」「口」	大谷焼 下半部欠損
218	徳利	A - 3 包含層	高台径 8.2 高台高 1.1	厚手	素地・にぶい赤褐色 釉・暗赤色	胴部に刻字	大谷焼 胴部より上欠損
219	徳利	A - 3 包含層		やや厚手	素地・暗赤色 釉・褐色	胴部に5条の凹線を螺旋形にめぐらす 肩部に刻字	大谷焼 胴部より上欠損
220	徳利	A - 3 包含層	高台径 7.8 高台高 1.7	やや厚手	素地・暗赤色 釉・暗赤褐色	肩部に刻字「塩」	大谷焼 肩部より上欠損
221	徳利	A - 3 包含層	高台径 8.6 高台高 1.5	やや厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色	肩部に刻字「高」	大谷焼 肩部より上欠損
222	徳利	B - 3 包含層	高台径 10.0 高台高 1.2	やや厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色	肩部に刻字 「申」「口」「玉」	大谷焼 肩部より上欠損
223	徳利	A - 3 包含層	高台径 8.8 高台高 1.3	やや厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色	胴部に刻字	大谷焼 胴部より上欠損
224	蓋	A - 3 包含層	口径 9.5 器高 2.5 つまみ径 3.6 つまみ高 0.4	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・灰白色	鳥・雲図 口縁内側に雷文 内面に文様あり	
225	蓋	A - 3	口径 9.1	薄手	素地・白色	鳥・雲図	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
		包含層	器高 2.8 つまみ径 3.5 つまみ高 0.7	口縁部外反	釉・灰白色	口縁内側に雷文 内面に文様あり	
226	蓋	A-3 包含層	口径 9.1 器高 2.8 つまみ径 3.5 つまみ高 0.7	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・灰白色	鳥・雲図 口縁内部に雷文 内面に文様あり	
227	蓋	A-3 包含層	口径 8.8 器高 2.4 つまみ径 5.2 つまみ高 0.6	薄手	素地・灰黄色 釉・灰濁色	花・柳図 内面に白鷺図	内外面に貫入
228	蓋	A-4 包含層	口径 9.2 器高 2.4 つまみ径 3.3 つまみ高 0.8	薄手 口縁部外反 つまみは撥形 に開く	素地・白色 釉・灰白色	秋草図 内面中央に「寿」 の文字文様 口縁部内側に葉文 つまみ内に角福銘	
229	蓋	A-3 包含層	口径 9.4 器高 3.1 つまみ径 5.3 つまみ高 0.8	薄手 つまみは撥形 に開く	素地・灰白色 釉・乳白色	撫子文	
230	蓋	A-3 包含層	口径 9.0 器高 3.1 つまみ径 3.7 つまみ高 0.8	薄手 口縁部外反	素地・灰白色 釉・灰濁色	花図 口縁内側に雷文	
231	蓋	A-3 包含層	口径 12.4 器高 3.2 つまみ径 5.2 つまみ高 0.6	薄手	素地・暗赤褐色 釉・極暗赤褐色	天井部に6~7条の 凹線を螺旋形 にめぐらす	大谷焼
232	蓋	A-3 包含層	口径 13.5 器高 3.4	薄手	素地・暗赤褐色 釉・極暗赤褐色	天井部に6~7条の 凹線を螺旋形	大谷焼

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
			つまみ径 5.3 つまみ高 0.5			にめぐらす	
233	蓋	A - 3 包含層	口径 9.9 器高 2.2	薄手 亀形の取手付	素地・黄灰色 釉・黄緑色		陶器 糸切の痕跡
234	蓋	A - 3 包含層	口径 10.5 器高 2.6	薄手	素地・淡黄色 釉・黄色		陶器 糸切の痕跡
235	蓋	A - 3 包含層	口径 11.2 器高 1.7	やや厚手 つまみを貼り つけている			瓦質土器
236	蓋	B - 3 包含層	口径 13.4 器高 3.1 つまみ径 3.1 つまみ高 0.9	薄手 つまみは撥形 に開く	素地・灰色 釉・淡緑色	天井部に3~4条の 凹線を螺旋形 にめぐらす	陶器 貫入
237	蓋	A - 2 包含層	口径 5.0 器高 1.3	厚手	素地・淡黄色 釉・淡黄灰色		陶器 茶入の蓋
238	蓋	B - 4 包含層	口径 4.9 器高 1.3	薄手	素地・白色 釉・灰濁色	朝顔図	印盒の蓋
239	蓋	A - 3 包含層	口径 8.2 器高 2.8	薄手	素地・暗灰色 釉・オリーブ褐色		陶器 重ね焼の痕跡
240	蓋	A - 3 包含層	口径 7.8 器高 2.3	厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器
241	蓋	A' - 4 包含層		薄手	素地・淡黄色 釉・浅黄色		陶器 つまみ部分のみ残存
258	鉢	SD - 05	口径 15.2 器高 4.6 高台径 8.1 高台高 0.9	薄手	素地・灰白色 釉・乳灰色	菊花文 口縁内側に八掛文 内底面に唐人図	菊鉢

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
259	下皿	SB-01 かまど	口径 8.1 器高 1.3	厚手	素地・暗灰色 釉・褐色		陶器 底部に布目痕あり 内面に下目あり
260	皿 (燈明皿)	大山祇神社 跡	口径 8.7 器高 1.6	やや厚手 上げ底	素地・淡黄色 釉・淡黄灰色		陶器 貫入 ロクロ目あり 重ね焼の痕跡あり
261	皿 (燈明皿)	SD-03	口径 8.4	薄手	素地・赤褐色 釉・半透明		陶器 ロクロ目あり 底部欠損
262	壺	SD-02		薄手 上げ底			土師質土器 底部のみ残存
263	鉢	SE-03 掘り肩	口径 14.0	やや厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部欠損
264	碗	SD-02	口径 12.2	薄手	素地・灰色 釉・灰濁色	内外面に雲図	口縁部のみ残存
265	壺	盛土状 遺構上部	口径 23.2	厚手	素地・明茶褐色 釉・半透明		陶器 口縁部のみ残存
266	播鉢	SB-01 かまど	口径 33.4	薄手	素地・赤褐色 釉・赤黒色		陶器 4条/cm単位の 播目
267	土釜	A-3 包含層	口径 31.8	薄手			瓦質土器 内面にハケ目あり 底部欠損
270	蓋	SB-01 床面直上	口径 40.6	薄手			瓦質土器 口縁部のみ残存
271	甕	SD-03		薄手	素地・灰黄色		陶器

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
					釉・暗灰色		底部のみ残存
272	甕	第1層	口径 49.6	薄手	素地・灰黄色		陶器 底部欠失
273	碗	SB-03	口径 14.6	厚手 口縁部やや外反	素地・白色 釉・半透明	楼閣図 口縁内側に花文	口縁部のみ残存
274	碗	SB-03	口径 12.2	薄手 口縁部やや外反	素地・白色 釉・半透明	遠景図 口縁内側に連続孤状文	口縁部のみ残存
275	碗	SB-03	口径 11.2	薄手	素地・白色 釉・半透明	蝶図 口縁内側に四ツ割花卉連続文	底部欠損
276	碗	SB-03	口径 11.6 器高 6.9 高台径 4.1 高台高 0.7	厚手	素地・灰白色 釉・淡緑色	口縁部内側に四ツ割花卉連続文	
277	猪口	SB-03	高台径 3.2 高台高 0.5	厚手 小碗形 撥高台	素地・黄色 釉・灰乳濁色		陶器 内外面に貫入口縁部欠損
278	碗	SB-03	高台径 3.8 高台高 0.7	薄手	素地・白色 釉・半透明	笹図 見込中央に笹文	底部のみ残存
279	花生	SB-03	高台径 4.7 高台高 0.3	薄手	素地・灰色 釉・淡緑濁色		底部のみ残存
280	香炉	SB-03 床面直上	口径 6.9	やや厚手 口縁部外に拡張	素地・赤褐色 釉・黒色		陶器 底部欠損
281	徳利	SB-03	口径 1.8	やや厚手 頸部は筒状	素地・白色 釉・半透明	蛸唐草・草花図	底部欠損 神酒徳利

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
282	徳利	SB-03	口径 1.7	厚手 頸部は筒状	素地・白色 釉・灰濁色	蛸唐草図	口縁部のみ残存 神酒徳利
283	徳利	SB-03	高台径 4.6 高台高 0.4	やや厚手	素地・灰色 釉・半透明	草花図	口縁部欠損 神酒徳利
284	鉢	SB-03	口径 1.75 器高 8.4 高台径 5.0 高台高 1.4	薄手 口縁部外に拡張	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器
285	花生	SB-03	高台径 5.1 高台高 0.8	厚手	素地・灰色 釉・乳濁色		底部のみ残存
286	燈明皿	SB-03	口径 8.0 器高 1.2	薄手 平底	素地・暗灰色 釉・暗赤褐色		陶器
287	皿	SB-03	口径 1.12 器高 2.7	薄手 上げ底	素地・灰色 釉・灰黄濁色		陶器 内面に貫入
288	徳利	SB-03	高台径 7.4 高台高 1.3	やや厚手	素地・暗灰色 釉・暗赤褐色		大谷焼 口縁部欠損
289	土釜	SB-03	口径 2.14	薄手 広い鈎			瓦質土器 口縁内部に指頭圧痕
290	碗	SA-02	口径 1.15 器高 6.4 高台径 4.2 高台高 0.9	やや厚手 撥高台	素地・灰白色 釉・淡緑色	口縁部内側に四ツ割花卉連続文 見込中央に五弁花 高台内に渦福銘	内外面に貫入
291	碗	SA-02	口径 1.10 器高 6.8 高台径 4.7 高台高 1.2	薄手 口縁部外反撥高台	素地・灰色 釉・乳濁色	朝顔図 内面に葉図 見込中央に花文	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
292	碗	SA-02	口径 1.1.4 器高 6.8 高台径 5.2 高台高 0.6	薄手 撥高台	素地・灰色 釉・半透明	丸文・笹 口縁内側に四ツ割 花卉連続文 見込中央に葉文	
293	碗	SA-02	口径 1.1.5 器高 7.2 高台径 5.0 高台高 0.7	厚手	素地・暗黄灰色 釉・灰黄色	松・柳 口縁外側に四ツ割 花卉連続文	内外面に貫入
294	碗	SA-02	高台径 4.0 高台高 0.7	やや厚手	素地・暗灰色 釉・半透明	見込中央に文様	底部のみ残存
295	碗	SA-02	口径 1.1.5 器高 5.4 高台径 4.7 高台高 0.6	やや薄手	素地・白色 釉・乳白色	氷裂菊花文 見込中央に「寿」 の文字文	くらわんか手
296	碗	SA-02	口径 1.1.1 器高 5.4 高台径 4.3 高台高 0.8	厚手	素地・灰色 釉・乳灰色	草花 高台内に文様	くらわんか手
297	碗	SA-02	口径 1.0.0 器高 5.0 高台径 4.3 高台高 0.7	厚手 撥高台	素地・灰白色 釉・灰濁色	草花 高台内に銘	くらわんか手
298	鉢	SA-02	口径 9.5	やや厚手 口縁部外反	素地・灰色 釉・緑色		底部欠損
299	猪口	SA-02	口径 8.8 器高 4.6 高台径 2.8 高台高 0.5	薄手 碗形 口縁部外反	素地・灰白色 釉・淡緑色	高台内に墨書あり	内外面に貫入
300	猪口	SA-02	口径 7.3	薄手	素地・白色	笹	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
			器高 3.8 高台径 3.3 高台高 0.6	碗形	釉・半透明		
301	火舎	SA-02	口径 22.3	薄手 体部内傾			瓦質土器 口縁部のみ残存
302	皿	SA-02	口径 13.5 器高 3.3 高台径 7.5 高台高 0.5	薄手	素地・白色 釉・乳濁色	内面に網目文 見込中央に五弁花 高台内に文字文様 体部に唐草文	
303	皿	SA-02	口径 14.0 器高 4.2 高台径 7.7 高台高 0.5	厚手	素地・白色 釉・乳濁色	内面に扇図 見込中央に五弁花 高台内に文字模様 体部に唐草文	
304	蓋	SA-02	口径 9.1 器高 2.7 つまみ径 3.7 つまみ高 0.8	薄手	素地・白色 釉・乳白色	椿図 「寿」の文字文	
305	蓋	SA-03	口径 9.0 器高 2.6 つまみ径 4.1 つまみ高 0.7	やや厚手 口縁部外反	素地・灰色 釉・半透明	柳・格子図 見込中央に文字文様	
306	皿	SA-03	口径 9.5 器高 2.0 高台径 4.6 高台高 0.3	薄手 口縁部外反	素地・灰色 釉・灰濁色	内面に波図 内底面に「寿」の 文字文を押印	口縁端部に鉄釉
307	皿	SA-03	口径 10.2 器高 2.1 高台径 5.6 高台高 0.4	やや厚手 口縁部外反	素地・灰色 釉・灰濁色	内底面に葉・波図	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
308	鉢	池状遺構 東岸	口径 9.7 器高 3.3 高台径 5.1 高台高 0.1	薄手 口縁部外反 玉縁状口縁	素地・白色 釉・乳濁色	内面に草文	重ね焼の痕跡あり
309	鉢	SA-02	高台径 8.9 高台高 0.7	薄手 蛇の目高台	素地・白色 釉・灰濁色	山水図	底部のみ残存
310	鉢	SA-03	口径 15.2 器高 4.0 高台径 9.3 高台高 0.5	厚手	素地・灰濁色 釉・乳灰濁色	唐草文	
311	鉢	SA-02	高台径 6.3 高台高 1.6	厚手	素地・灰黄色 釉・濃緑色		重ね焼の痕跡あり 底部のみ残存 内外面に貫入
312	壺	SA-02	高台径 5.3 高台高 0.5	薄手 筒形	素地・灰黄色 釉・褐色		陶器 底部のみ残存
313	猪口	池状遺構	口径 7.4 器高 5.8 高台径 3.6 高台高 0.5	薄手 筒形	素地・白色 釉・乳濁色	網目文 見込中央に五弁花	
314	猪口	SA-02	口径 7.6 器高 5.8 高台径 3.8 高台高 0.5	薄手 筒形	素地・黄灰色 釉・灰濁色	水裂菊花文 見込中央に五弁花	
315	鉢	SA-02	口径 13.5 器高 5.3	厚手 盤状	素地・暗赤色 釉・暗赤褐色		大谷焼
316	壺	SA-02	口径 11.8	筒形	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部欠損
317	徳利	SA-02		薄手	素地・赤褐色		大谷焼

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
				上げ底	釉・暗黄褐色		口縁部欠損
318	鍋	SD-02	口径 16.2	薄手	素地・黄色 釉・暗黄緑色		陶器 底部欠損
319	鍋	SA-03	口径 18.0 器高 10.8	薄片口取手	素地・赤褐色		陶器 行平
320	碗	池状遺構 東岸	口径 12.5	やや厚手 口縁部外反	素地・灰色 釉・灰濁色	唐草文	くらわんか手 底部欠失
321	碗	池状遺構 東岸	口径 8.9 器高 5.4 高台径 3.6 高台高 0.4	薄手	素地・灰白色 釉・灰濁色	花 見込中央に轡文	
322	碗	池状遺構 東岸	口径 10.7 器高 6.0 高台径 4.6 高台高 0.8	厚撥高台	素地・灰色 釉・灰濁色	蝦 口縁内側に四ツ割 花卉連続文 見込に蝦	
323	碗	SD-01	口径 11.0	薄手	素地・赤褐色 釉・赤黒色		大谷焼 底部欠失
324	鉢	SD-01	口径 8.7	薄手	素地・灰白色 釉・灰黄濁色	笹	口縁部のみ残存
325	皿	池状遺構 東岸	口径 10.7 器高 3.1 高台径 4.8 高台高 0.8	厚手	素地・灰白色 釉・淡緑色	口縁内側に四ツ割 花卉連続文 見込中央に五弁花 高台内に渦福銘	
326	皿	SD-01	口径 9.9 器高 2.2	薄手	素地・黄褐色 釉・灰濁色		陶器 外面にロクロ目 重ね焼の痕跡

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
327	油壺	SD-01	口径 1.4 器高 2.6	厚手	素地・明茶褐色 釉・半透明		陶器 糸切り痕
328	燭台	SD-01	口径 7.2 器高 7.1	やや厚手	素地・にじみ赤褐色 釉・乳濁色		大谷焼 糸切り痕
329	蓋	SD-01	口径 9.4 器高 3.0 つまみ径 3.7 つまみ高 0.6	やや薄手	素地・白色 釉・乳濁色	水仙に雲雀図 口縁部内側に雲文 内面に雲雀図	
330	蓋	SD-01	口径 10.8 器高 3.7	厚手	素地・灰黄色 釉・淡黄濁色	鉄釉による文様	陶器
331	徳利	SD-01		薄手	素地・灰色		陶器 口縁部欠失
332	皿	SD-01	高台径 8.8 高台高 0.9	厚手	素地・灰黄色 釉・半透明		瀬戸焼 内外面に貫入 重ね焼の痕跡 底部のみ残存
333	火舎	SD-01	口径 18.0	薄手		口縁部に楠目文	瓦質土器 口縁部のみ残存
334	火舎	B-1 包含層	口径 24.3	薄手		体部に3条の凹線 をめぐらす	瓦質土器 口縁部のみ残存
335	甕	SD-03	口径 17.1	厚手	素地・淡赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 底部欠損
336	甕	SD-03	口径 40.1	厚手	素地・淡赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 底部欠損
337	鉢	盛土状遺構上部	口径 53.0	薄手	素地・赤褐色 釉・黒褐色		大谷焼 口縁部のみ残存

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
338	碗	盛土状遺構上部	口径 10.3 器高 5.3 高台径 5.0 高台高 0.8	厚手	素地・灰褐色 釉・灰濁色	網目文	くらわんか手
339	碗	盛土状遺構上部	口径 12.2	薄手	素地・灰褐色 釉・半透明	丸文	底部欠損
340	碗	盛土状遺構上部	口径 10.1 器高 5.2 高台径 4.0 高台高 0.9	厚手	素地・白色 釉・乳濁色	網目文	くらわんか手
341	碗	盛土状遺構上部	口径 13.0 器高 6.5 高台径 5.0 高台高 0.9	厚手	素地・灰褐色 釉・灰濁色	丸文 見込中央に五弁花	くらわんか手
342	碗	盛土状遺構上部	口径 11.5 器高 5.6 高台径 4.6 高台高 0.7	薄手	素地・白色 釉・乳白色	氷裂菊花文 見込中央に「寿」の文字文	
343	碗	盛土状遺構上部	口径 11.2 器高 6.0 高台径 4.1 高台高 0.7	やや薄手	素地・灰白色 釉・淡緑色	口縁内側に四ツ割 花卉連続文	
344	碗	盛土状遺構上部	口径 11.3	やや薄手	素地・灰白色 釉・淡緑色	口縁内側に四ツ割 花卉連続文	底部欠損
345	碗	盛土状遺構上部	口径 11.0 器高 5.0 高台径 4.2 高台高 0.5	厚手	素地・灰白色 釉・淡緑色	見込中央に五弁花	重ね焼の痕跡あり
346	碗	盛土状遺構	口径 11.4	やや厚手	素地・灰白色	見込中央に五弁花	重ね焼の痕跡あり

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
		構上部	器高 4.9 高台径 4.1 高台高 0.6		釉・淡緑色		
347	碗	盛土状遺構上部	口径 11.1	薄手 口縁部外反	素地・白色 釉・乳濁色	草花図	底部欠損
348	碗	盛土状遺構上部	高台径 4.4 高台高 0.7	やや厚手	素地・灰白色 釉・淡緑色	見込中央に五弁花 高台内に渦福銘	口縁部欠損 貫入
349	碗	盛土状遺構上部	高台径 4.3 高台高 0.9	やや厚手	素地・灰白色 釉・淡緑色	見込中央に五弁花 高台内に渦福銘	口縁部欠損
350	鉢	盛土状遺構上部	口径 10.5	厚手 口縁端部平坦	素地・灰色 釉・オリーブ色		口縁部のみ残存
351	碗	盛土状遺構上部	高台径 3.5 高台高 0.6	やや厚手	素地・灰白色 釉・乳濁色	笹竹・荀図	内外面に貫入 口縁部欠損
352	碗	盛土状遺構上部	口径 9.6 器高 5.7 高台径 3.4 高台高 0.5	薄手	素地・灰濁色 釉・灰黄濁色	竹葉図 見込中央に五弁花	
353	鉢	盛土状遺構上部	口径 11.4	やや厚手	素地・灰濁色 釉・半透明		内外面に貫入 底部欠損
354	碗	盛土状遺構上部	口径 11.3	やや厚手 口縁部外反	素地・灰黄色 釉・半透明		内外面に貫入 底部欠損
355	猪口	盛土状遺構上部	口径 9.0 器高 5.5 高台径 3.3 高台高 0.5	薄手 口縁部外反	素地・黄色 釉・灰白色		陶器 内外面に貫入
356	猪口	盛土状遺構上部	口径 8.0	薄手 口縁部外反	素地・灰黄色 釉・淡緑色		陶器 内外面に貫入 底部欠損

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
357	猪口	盛土状遺構上部	口径 9.4 器高 4.3 高台径 3.2 高台高 0.5	薄手 口縁部外反	素地・灰黄色 釉・半透明	高台内に墨書「一」	陶器 内外面に貫入
358	碗	盛土状遺構上部	高台径 4.7 高台高 0.8	薄手	素地・白色 釉・半透明	草花図	口縁部欠失
359	蓋	盛土状遺構上部	口径 10.4 器高 3.0 つまみ径 5.8 つまみ高 0.7	薄手	素地・白色 釉・灰白色	山水図 内面に白鷺図	
360	蓋	盛土状遺構上部	口径 10.2 器高 2.8 つまみ径 5.7 つまみ高 0.8	薄手	素地・白色 釉・灰濁色	雪中筍掘り図 内面に雪中笹図	
361	蓋	盛土状遺構上部	口径 10.5 器高 3.0 つまみ径 6.0 つまみ高 0.7	薄手	素地・白色 釉・灰白色	花文 内面に菊花文	皿?
362	蓋	盛土状遺構上部	口径 10.8 器高 3.1 つまみ径 6.2 つまみ高 0.9	薄手	素地・白色 釉・灰濁色	茄子図	
363	蓋	盛土状遺構上部	口径 10.5 器高 2.7 つまみ径 6.3 つまみ高 1.1	薄手	素地・乳白色 釉・灰濁色	藤に鶴飛翔図 内面に藤図	
364	皿 (燈明皿)	盛土状遺構上部	口径 7.7 器高 1.8	厚手	素地・にじみ赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼 底部に糸切の痕跡
365	皿	盛土状遺構	口径 7.8	厚手	素地・にじみ赤褐色		大谷焼

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
	(燈明皿)	構上部	器高 1.7		釉・極暗赤褐色		底部に糸切の痕跡
366	皿	盛土状遺構上部	口径 10.8 器高 2.4 高台径 6.7 高台高 0.5	薄手	素地・白色 釉・半透明	唐草文 内面全面に山水図	
367	皿	盛土状遺構上部	口径 10.4 器高 2.1 高台径 6.3 高台高 0.5	薄手	素地・白色 釉・半透明	唐草文 内面全面に山水図	
368	皿	盛土状遺構上部	口径 10.1 器高 2.2 高台径 6.2 高台高 0.5	薄手	素地・白色 釉・半透明	唐草文 内面全面に山水図	
369	皿	盛土状遺構上部	口径 10.2 器高 2.9 高台径 5.8 高台高 0.8	薄手	素地・灰白色 釉・乳濁色	遠山図 見込中央に文様	貫入
370	皿	盛土状遺構上部	口径 12.9 器高 2.4 高台径 8.0 高台高 0.5	やや厚手	素地・白色 釉・乳濁色	丸文 内面に唐人図	菊皿
371	皿	盛土状遺構上部	口径 12.9 器高 2.4 高台径 8.0 高台高 0.5	やや厚手	素地・白色 釉・乳濁色	丸文 内面に唐人図 高台内に「富」銘	菊皿
372	皿	盛土状遺構上部	口径 8.7 器高 3.3 高台径 5.5 高台高 0.8	やや厚手	素地・白色 釉・半透明	牡丹図 見込中央に花文	

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
373	皿	盛土状遺構上部	口径 13.9 器高 2.7 高台径 7.0 高台高 0.4	厚手偏平	素地・灰褐色 釉・灰濁色	花文	重ね焼の痕跡
374	鉢	盛土状遺構上部	口径 18.0	薄手	素地・灰褐色 釉・半透明	遠山図 内面に模様あり	底部欠損
375	鉢	盛土状遺構上部	口径 13.2	やや厚手	素地・淡赤褐色 釉・半透明		陶器 口縁部のみ残存
376	鉢	盛土状遺構上部	口径 13.3 器高 4.2 高台径 8.0 高台高 0.2	厚手	素地・灰白色 釉・灰濁色	唐草文 内面に扇図	
377	鉢	盛土状遺構上部	口径 13.8 器高 3.5 高台径 7.0 高台高 0.5	厚手	素地・灰白色 釉・灰濁色	唐草文 内面に扇図 内底面に五弁花 高台内に文字文様	口縁端部に鉄釉 貫入
378	碗	盛土状遺構上部	口径 12.3 器高 4.3 高台径 5.0 高台高 0.7	厚手やや偏平	素地・灰褐色 釉・灰濁色	笹図	くらわんか手 重ね焼の痕跡
379	猪口	盛土状遺構上部	口径 7.9	やや厚手筒形	素地・白色 釉・乳濁色	流水文	口縁部のみ残存
380	猪口	盛土状遺構上部	口径 7.2 器高 5.4 高台径 3.6 高台高 0.4	薄手筒形	素地・灰褐色 釉・灰濁色	七宝文 口縁内側に四ツ割 花卉連続文 見込中央に五弁花	
381	燭台	盛土状遺構上部	口径 7.4 器高 6.0	厚手	素地・ <u>におい</u> 赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼 底部に糸切りの痕跡

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
382	燭台	盛土状遺構上部	口径 7.0 器高 6.7	厚手	素地・赤黒色 釉・暗赤灰色		大谷焼
383	徳利	盛土状遺構上部	高台径 3.5 高台高 0.4	やや厚手	素地・白色 釉・半透明	笹 囷	神酒徳利 口頸部欠失
384	蓋	盛土状遺構上部	口径 6.8 器高 1.3	やや厚手	素地・にぶい赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼 底部に糸切の痕跡
385	壺	盛土状遺構上部	口径 7.2 器高 8.4 高台径 5.0 高台高 0.6	薄手筒形	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼
386	土鍋	盛土状遺構上部	口径 7.6 器高 3.2	やや厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部に糸切の痕跡
387	土鍋	盛土状遺構上部	口径 16.2 器高 6.8	薄手取手付	素地・暗赤褐色 釉・極暗赤褐色		大谷焼
388	鉢	盛土状遺構上部	口径 15.6	薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部欠失
389	壺	盛土状遺構上部	口径 7.4	薄手	素地・灰黄色 釉・黒色		陶器 口縁部のみ残存
390	壺	盛土状遺構上部	口径 6.2	薄手	素地・灰黄色 釉・乳濁色		陶器 口縁部のみ残存
391	壺	盛土状遺構上部	口径 10.5	やや厚手	素地・灰黄色 釉・赤褐色		陶器 口縁部のみ残存
392	鉢	盛土状遺構上部	口径 25.8	厚手	素地・淡黄色 釉・灰黄色		瀬戸焼 内外面に貫入口縁部のみ残存
393	播鉢	盛土状遺構上部	口径 20.4	厚手	素地・赤褐色 釉・半透明		陶器 9条を単位とする播目 底部欠損

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
394	不明	盛土状遺構上部		やや厚手			瓦質土器 口縁部欠損
395	甃	盛土状遺構上部	口径 2.7.0	薄手	素地・黄色 釉・にぶい赤褐色		陶器 口縁部のみ残存
396	甃	盛土状遺構上部		薄手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		大谷焼 底部のみ残存
397	碗	盛土状遺構下部	口径 1.1.3 器高 6.5 高台径 4.5 高台高 0.8	薄手	素地・灰白色 釉・灰濁色	山水図	
398	碗	盛土状遺構下部	口径 12.1 器高 6.0 高台径 4.1 高台高 0.5	薄手	素地・黄色 釉・緑色・黄褐色		瀬戸焼 貫入
399	碗	盛土状遺構下部	口径 12.6 器高 6.3 高台径 5.2 高台高 0.8	厚手	素地・白色 釉・乳濁色	丸文 見込中央に五弁花 高台内に銘	くらわんか手
400	碗	盛土状遺構下部	口径 13.2 器高 6.3 高台径 4.9 高台高 1.0	やや厚手	素地・灰色 釉・半透明	丸文 見込中央に五弁花	くらわんか手
401	皿	盛土状遺構下部	口径 9.9 器高 3.4 高台径 4.4 高台高 0.8	やや厚手 撥高台	素地・灰白色 釉・淡緑色	口縁部内側に四ツ 割花卉連続文 内底面に五弁花	
402	仏餉具	盛土状遺構下部	口径 5.4	薄手	素地・白色 釉・半透明	赤絵鶴飛翔図	脚部欠失 碗部を残す

番号	器形	出土層位・遺構	法量(m)	形状	素地と釉	染付文様	備考
403	徳利	盛土状遺構下部	高台径 4.6 高台高 0.4	やや厚手	素地・灰白色 釉・半透明	草花 図	神酒徳利 口頸部欠失
404	徳利	盛土状遺構下部	口径 1.6	やや厚手	素地・灰白色 釉・半透明	草花 図	
405	皿 (燈明皿)	盛土状遺構下部	口径 11.0	薄手	素地・黄褐色		陶器 底部欠損 口縁部内外に煤の 付着
406	燈明皿	盛土状遺構下部	口径 9.8 器高 1.5	やや厚手	素地・赤褐色 釉・暗赤褐色		陶器 内面に煤付着
407	土瓶	盛土状遺構下部	口径 9.4	薄手			瓦質土器 口縁部のみ残存
408	花生	盛土状遺構下部	口径 9.6	やや厚手	素地・赤褐色 釉・にぶい赤褐色		大谷焼 底部欠失
409	火舎	盛土状遺構下部		厚手		押印草花 図	瓦質土器 体部のみ残存
410	壺	盛土状遺構下部		やや厚手	素地・淡赤褐色		陶器 口縁部欠失
411	土釜	A - 3 包含層	口径 25.4	薄手			瓦質土器 口縁部のみ残存
412	甕	盛土状遺構上部	口径 34.8	薄手	素地・黄色 釉・半透明		陶器 内外面に貫入 底部欠損
413	甕	盛土状遺構上部	高台径 23.2 高台高 0.6	薄手	素地・黄色 釉・半透明		陶器 内外面に貫入 底部のみ残存
414	甕	第1層		薄手	素地・赤褐色		陶器 底部のみ残存

Tab. 11 第29調査区出土土器類観察表(磁器以外は器種を記した)

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
415	甕	第23層	口径 17.6	球形に近い体部に「く」の字形の口縁部がつく			弥生土器 底部欠失 胎土・粗 焼成・良好 色調・淡赤褐色
416	甕	第23層		球形に近い体部			弥生土器 口縁部, 底部欠失 胎土・密 焼成・良好堅緻 色調・淡褐色
417	甕	第23層	底径 8.0	平底			弥生土器 底部のみ遺存 胎土・やや粗い 焼成・良好堅緻 色調・淡赤褐色
418	皿	第4層	口径 9.9 器高 2.2 高台径 6.0 高台高 0.3	薄手 口縁部外反	素地・乳白色 釉・半透明	内底面に帆船航海図	トチ痕
419	蓋	第4層	口径 10.0 器高 2.8 つまみ径 5.4 つまみ高 0.8	薄手 高台状のつまみ	素地・乳白色 釉・青味白色	鶴飛翔図 つまみ内に稲束図	
420	碗	第4層	口径 11.0	厚手	素地・灰白色 釉・青味灰色	松図 見込中央に五弁花	見込中央に素地
421	碗	第4層	口径 11.0 器高 5.9 高台径 4.4 高台高 0.8	やや厚手 口縁部やや外反	素地・灰白色 釉・青灰色	よろけ縞文	
422	土鍋	第2層	口径 14.9	薄手	素地・灰色 釉・茶褐色		陶器

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
423	土鍋	第3層	口径 31.2	口縁部「く」の字状			土師質土器 胎土・やや粗い 焼成・良好堅緻 色調・黄褐色
424	土釜	第2層					瓦質土器 鐳部のみ遺存 胎土・密 焼成・良好 色調・黄味灰白色

Tab. 12 第31調査区出土土器類観察表(磁器以外は器種を記した)

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
425	碗	第1層	口径 11.0 器高 6.4 高台径 5.0 高台高 1.1	薄手 口縁部やや外反	素地・灰白色 釉・青味灰色	花 図 見込中央に文様	トチ痕
426	碗	第1層	口径 11.0 器高 6.0 高台径 5.0 高台高 0.9	薄手 口縁部やや外反	素地・乳白色 釉・青味白色	稲束 図	
427	鉢	第1層	口径 10.1	薄手 口縁部内側に肥厚	素地・淡褐色 釉・灰味黄色		陶器 貫入
428	猪口	第1層	口径 8.9 器高 4.7 高台径 4.0 高台高 0.5	薄手 口縁部外反 撥高台	素地・白色 釉・青味白色	草花 図 見込中央に文様	
429	猪口	第1層	口径 9.1 器高 4.8 高台径 3.4 高台高 0.5	薄手 口縁部やや外反	素地・白色 釉・青味白色	草花 図 見込中央に文様	
430	猪口	第1層	口径 8.1 器高 5.4 高台径 3.1 高台高 0.7	やや厚手 口縁部やや外反	素地・暗赤褐色 釉・暗茶褐色 青味乳白色		陶器
431	猪口	第1層	口径 8.2 器高 4.7 高台径 2.6 高台高 0.6	薄手 口縁部外反	素地・暗黄灰色 釉・灰白色		陶器 貫入
432	猪口	第1層	口径 8.4	薄手 口縁部やや外反	素地・灰白色 釉・青味灰色	草花 図	
433	猪口	第1層	口径 8.4	薄手	素地・黄灰色		陶器

番号	器形	出土層位・遺構	法量(cm)	形状	素地と釉	染付文様	備考
			器高 4.7 高台径 2.7 高台高 0.3	口縁部外反	釉・淡黄色		貫入
434	猪口 (盃)	第1層	口径 6.8 器高 3.0 高台径 2.6 高台高 0.5	薄手	素地・灰白色 釉・青味白色		
435	猪口	第1層	口径 8.4 器高 6.2 底径 6.7	薄手 筒形 蛇の目底	素地・白色 釉・青味白色	草花図 口縁部内側に四ツ 割花卉連続文 見込中央に五弁花	
436	鉢	第1層	口径 14.1	薄手 筒形	素地・暗赤褐色 釉・極暗赤褐色		陶器
437	皿	第1層	口径 10.4 器高 2.1 高台径 6.3 高台高 0.4	薄手 口縁部外反	素地・乳白色 釉・半透明	内底面に帆船航海 図	トチ痕
438	甕		口径 26.1	口縁部外傾			土師質土器 胎土・粗 焼成・良好 色調・赤褐色
439	土釜		口径 22.3				土師質土器 胎土・粗 焼成・良好 色調・赤褐色
440	土釜		口径 24.4				土師質土器 胎土・粗 焼成・良好 色調・赤褐色

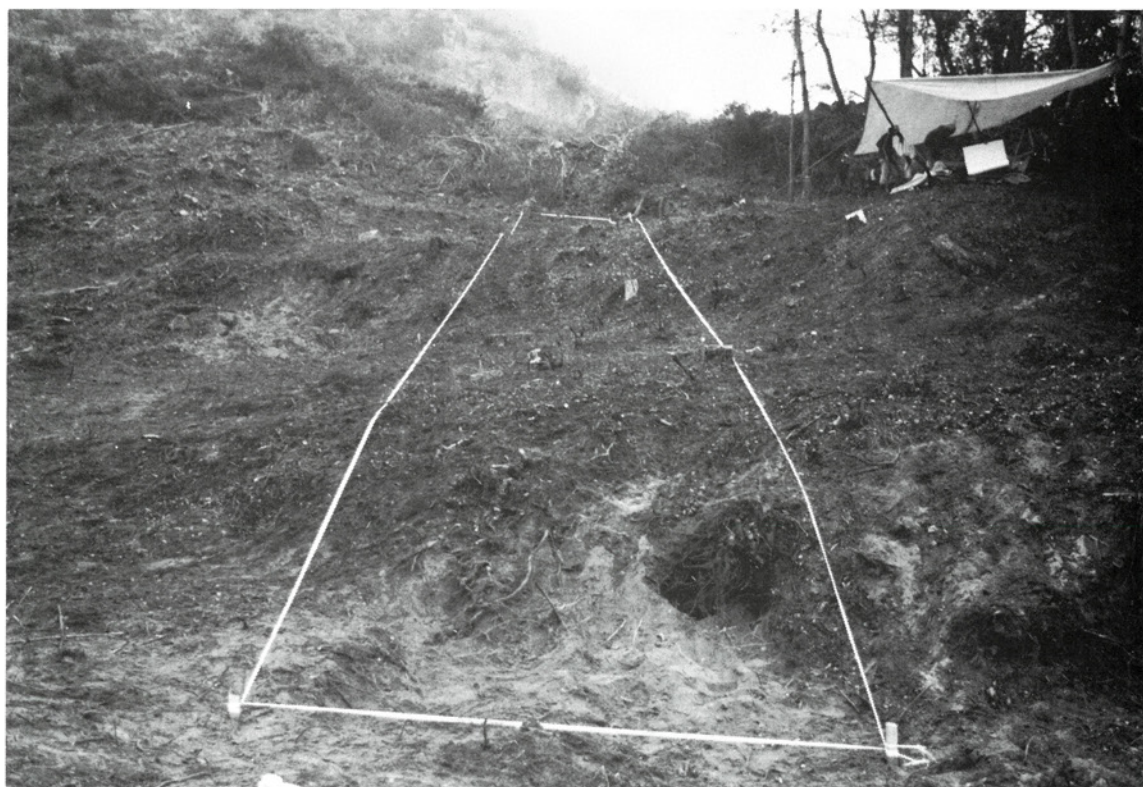
版 圖



第8・9調査区 全景（南から）



第10調査区 石積遺構（上1，下2）（東から）



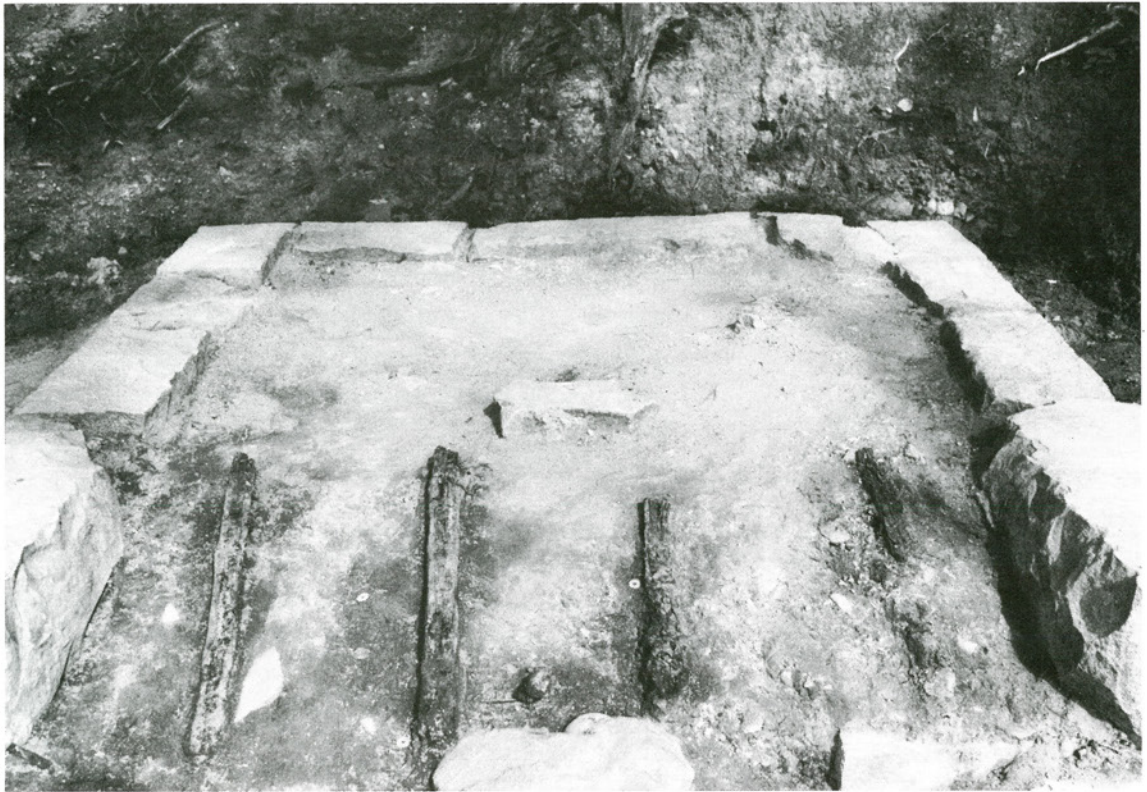
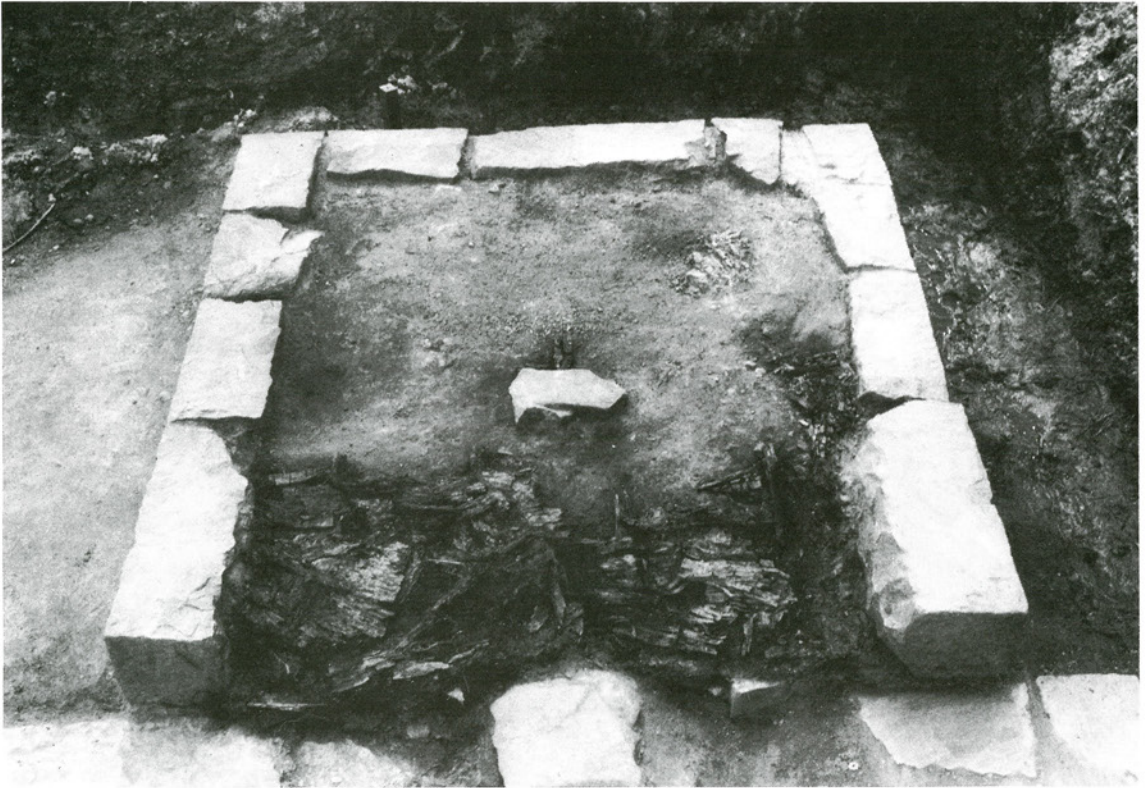
上 第15調査区 調査前全景（南から）
下 第15調査区 トレンチ全景（北から）



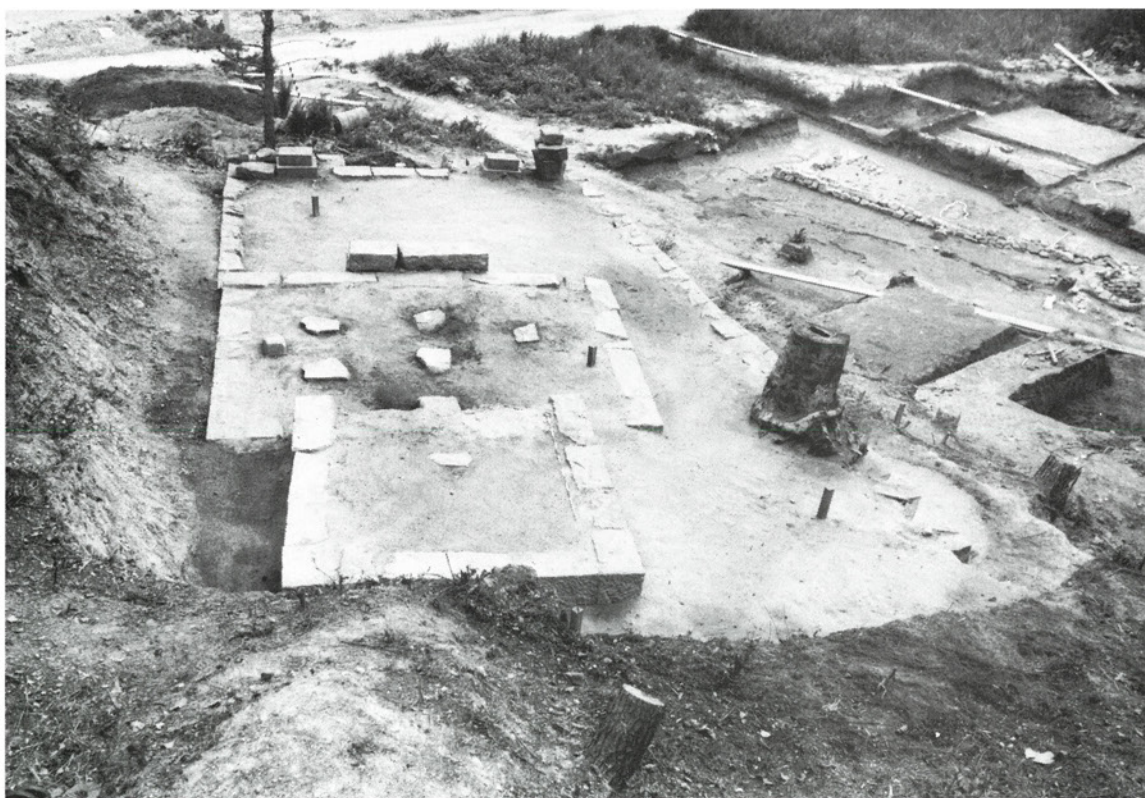
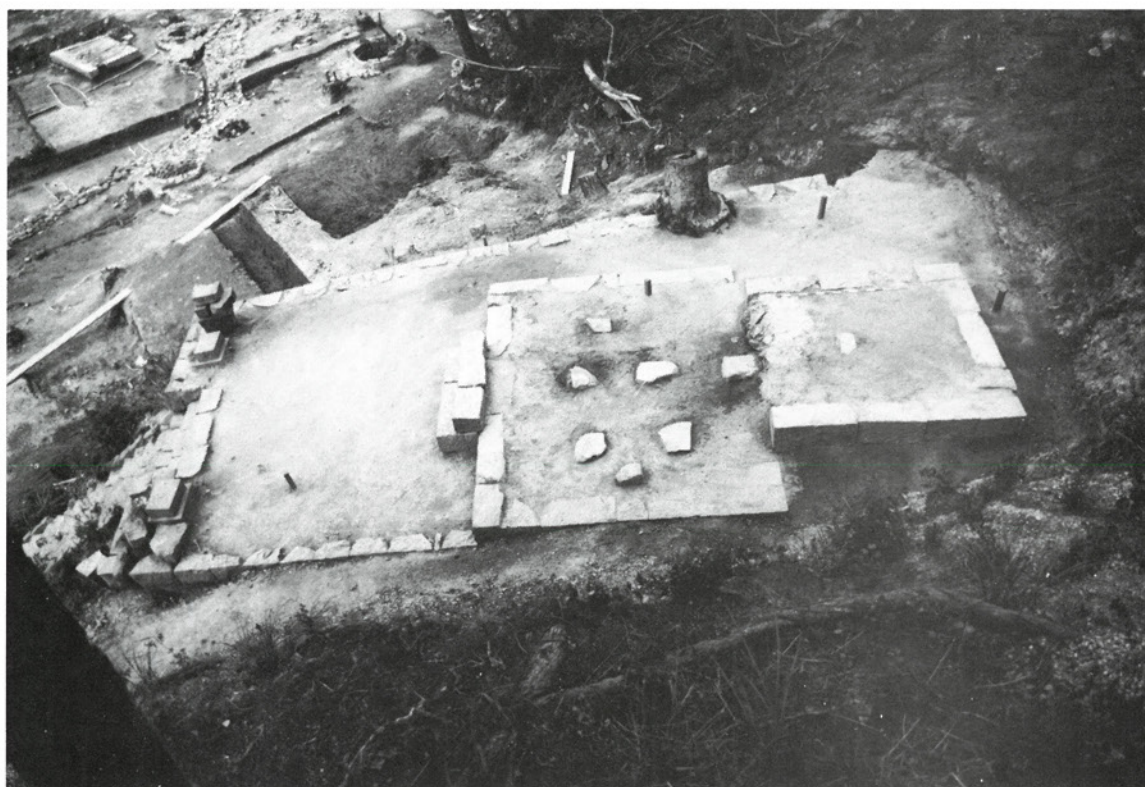
第21調査区 全景（上・東から，下・南から）



第21調査区 大山祇神社跡（上・西から、下・北から）



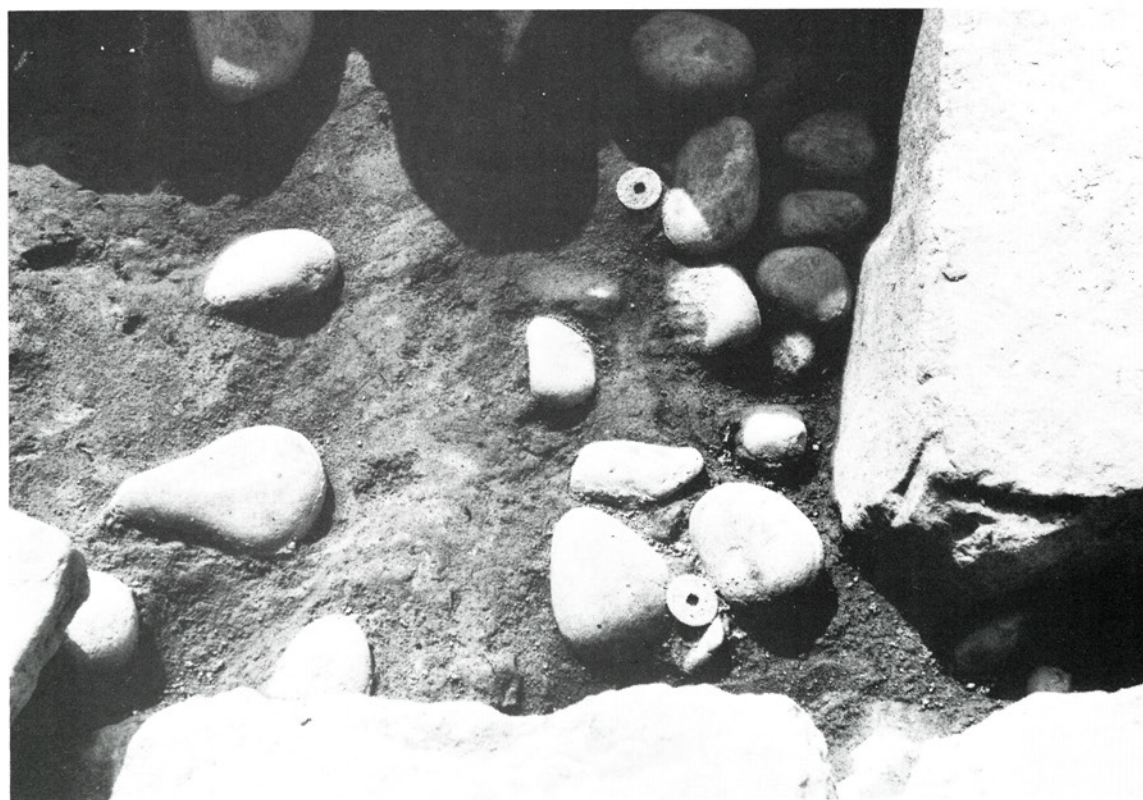
第21調査区 大山祇神社跡本殿（上・下西から）



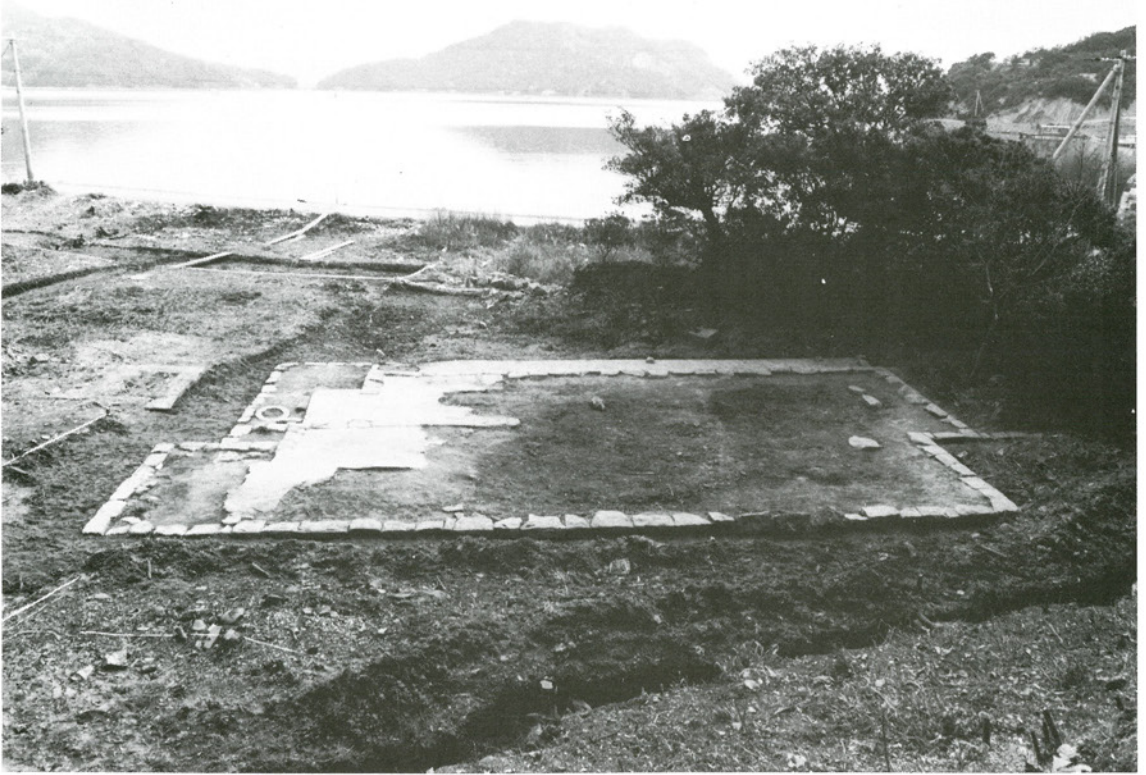
第21調査区 大山祇神社跡（上・南から，下・東から）



第21調査区 小祠跡（上・南東から，下・東から）



上 第21調査区 小祠跡（東から）
 下 第21調査区 小祠跡銅銭出土状況（東から）



上 第21調査区 SB-01 (東から)
下 第21調査区 SB-01 出土石臼 (南から)



第21調査区 SB-01 かまど跡 (上・西から, 下・南から)



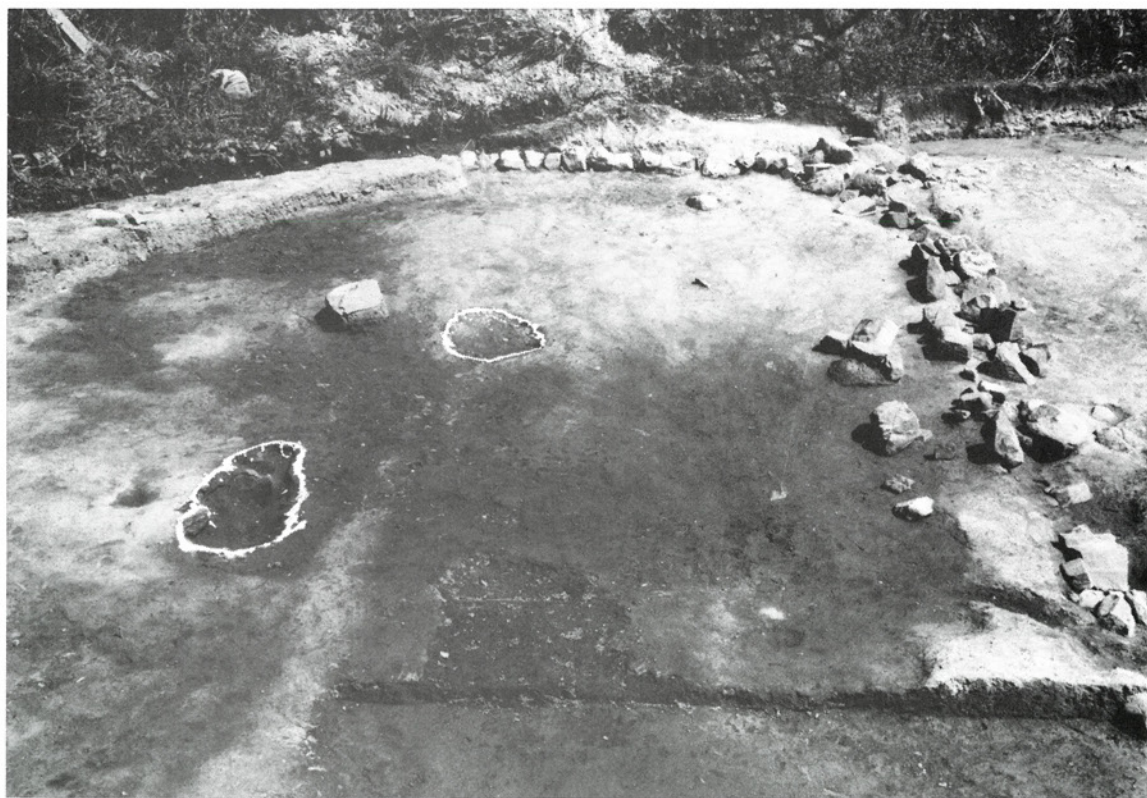
上 第21調査区 石組遺構 (西から)
下 第21調査区 Pit群 (南から)



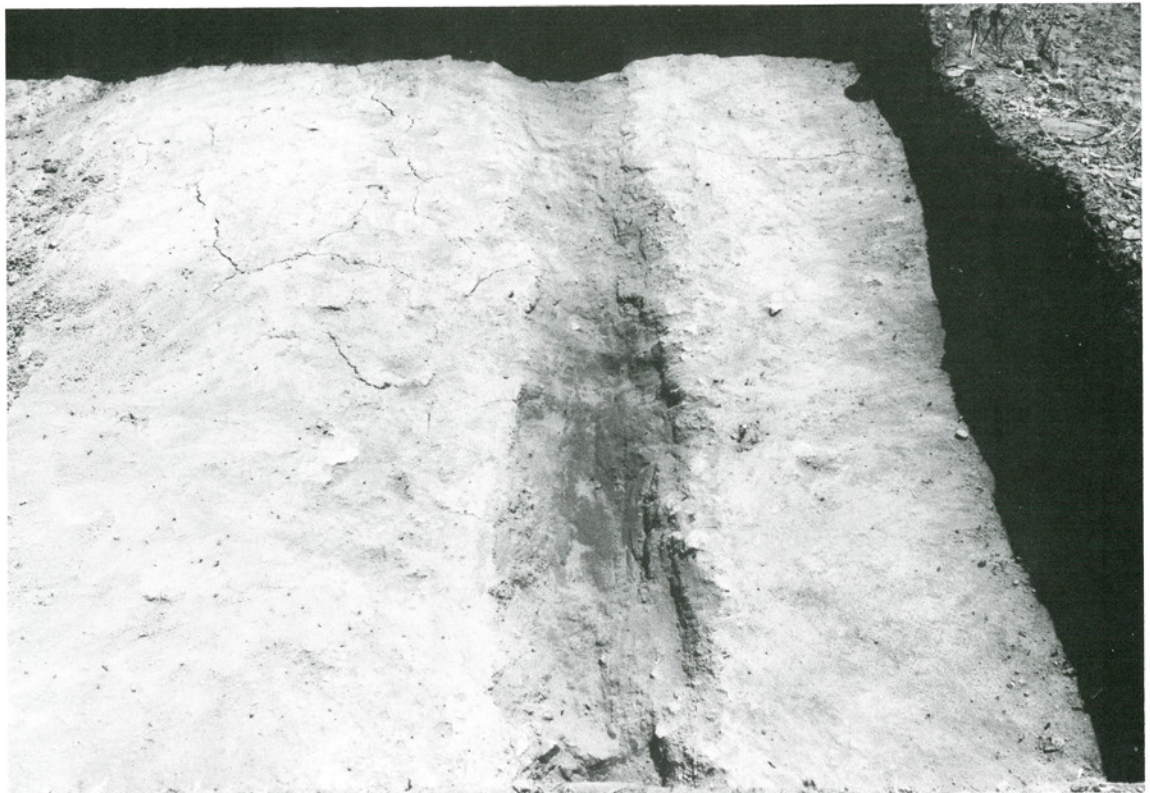
上 第21調査区 S D - 01 (北から)
下 第21調査区 S B - 03 (東から)



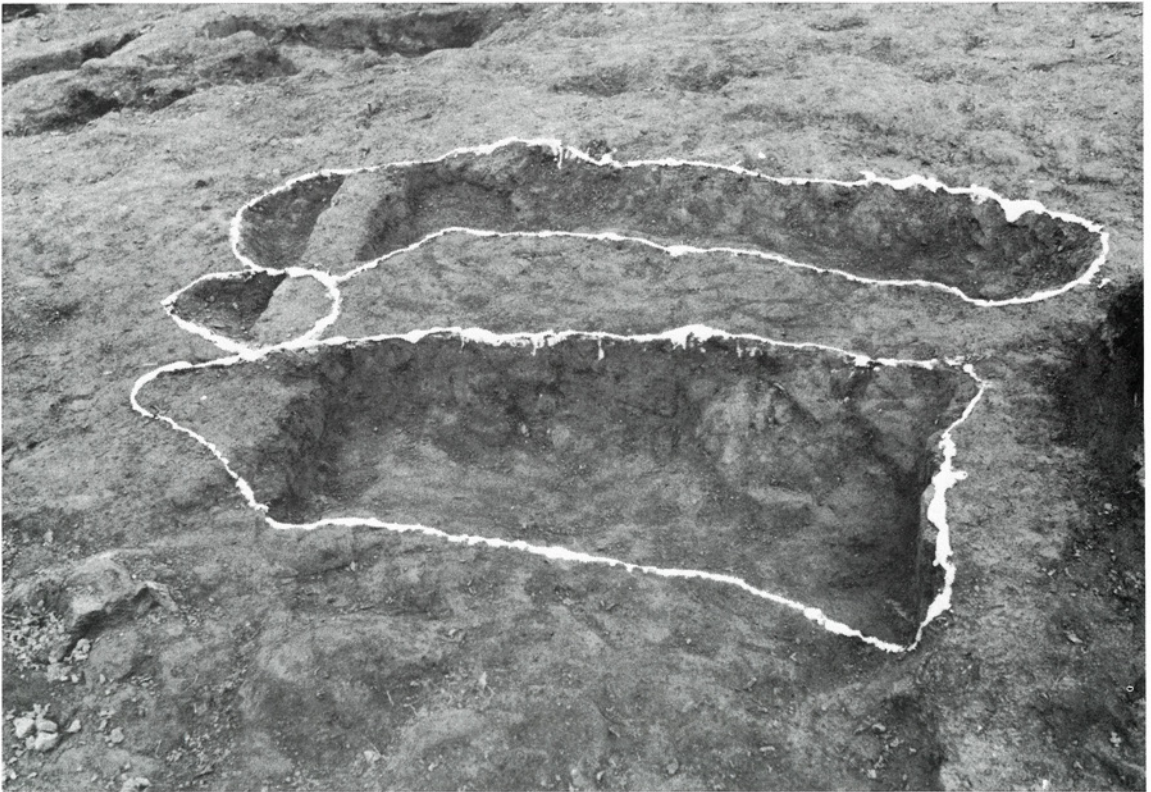
上 第21調査区 SE-01 (西から)
下 第21調査区 SE-03 (南から)



第21調査区 SB-04 (上・東から, 下・西から)



第21調査区 第4トレンチ SD-04 (上・東から, 下・西から)

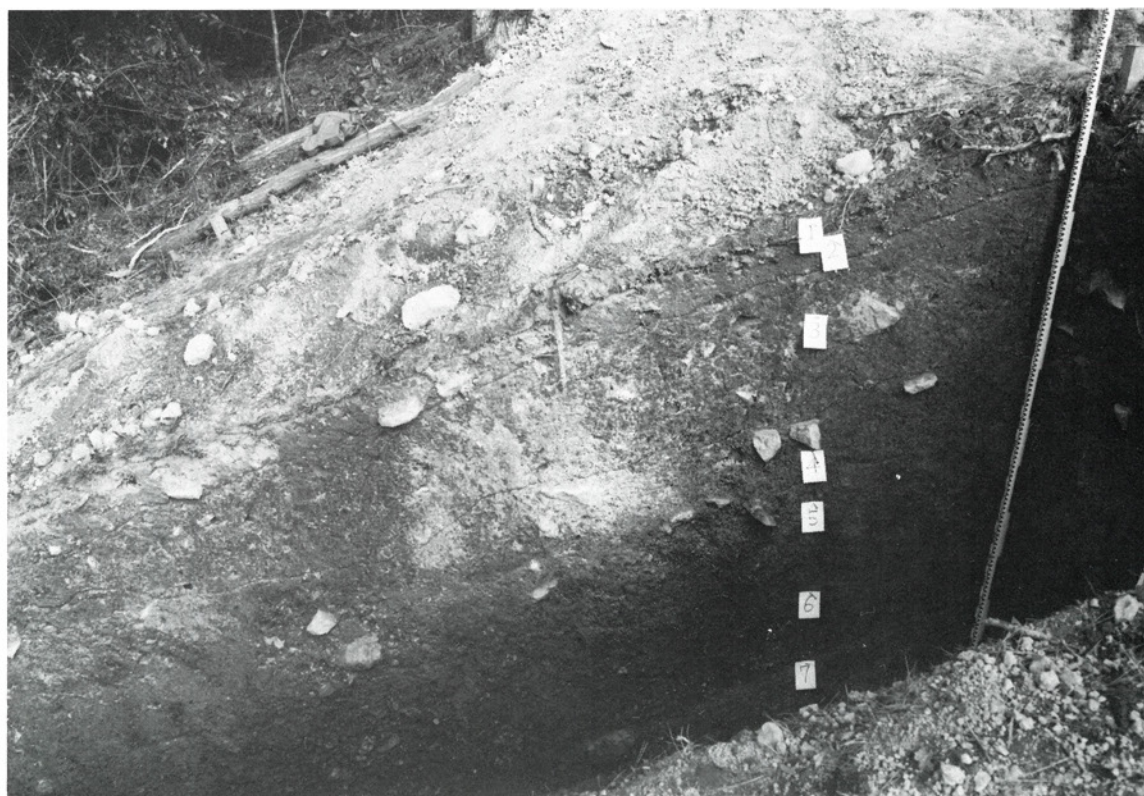


上 第27調査区 全景 (南から)

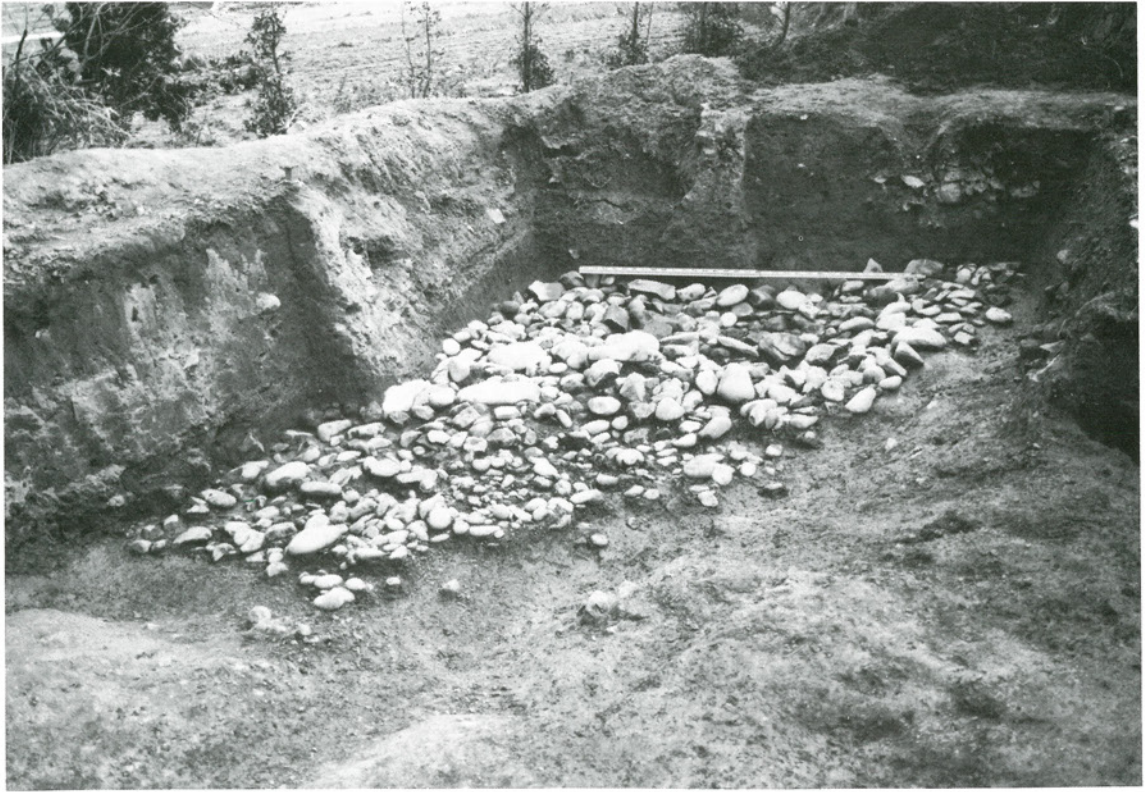
下 第27調査区 土壌 (東から)



上 第28調査区 調査前全景 (北から)
下 第28調査区 全景 (南から)



上 第28調査区 第1トレンチ土層 (西から)
下 第28調査区 第5トレンチ土層 (南から)



上 第29調査区 円礫出土状況 (西から)
下 第29調査区 円礫除去状況 (西から)



上 第29調査区 弥生土器出土状況
下 第30調査区 調査前全景（西から）



上 第30調査区 全景（東から）
下 第30調査区 土層（西から）



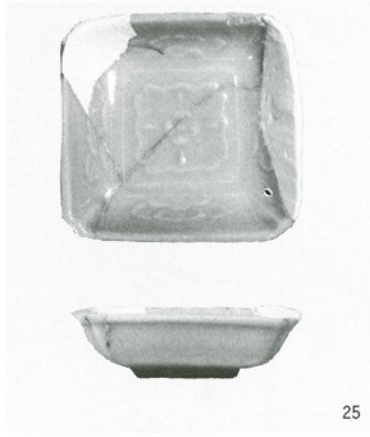
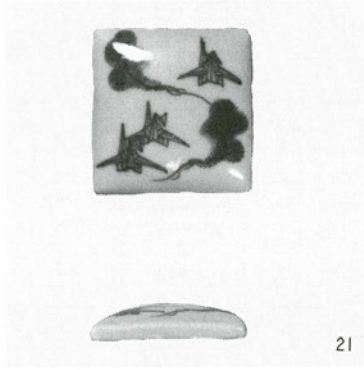
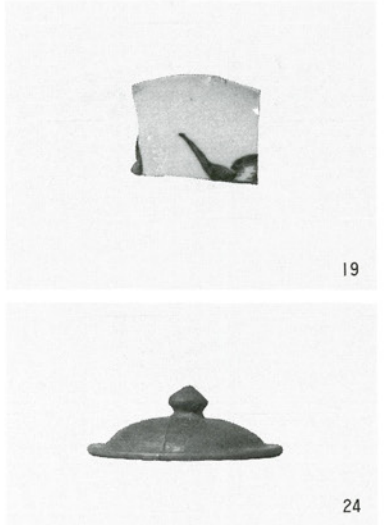
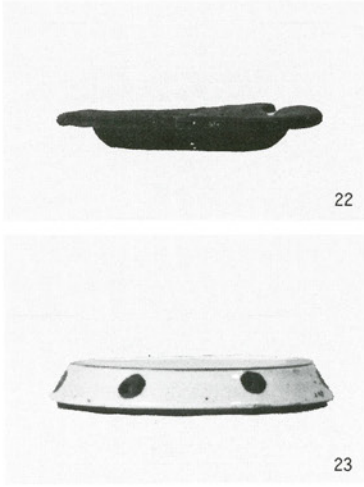
上 第31調査区 全景 (北から)
下 第31調査区 SK-01 (東から)



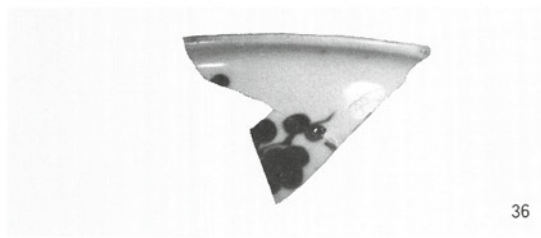
上 第31調査区 土釜出土状況
下 第31調査区 土層 南壁（北から）



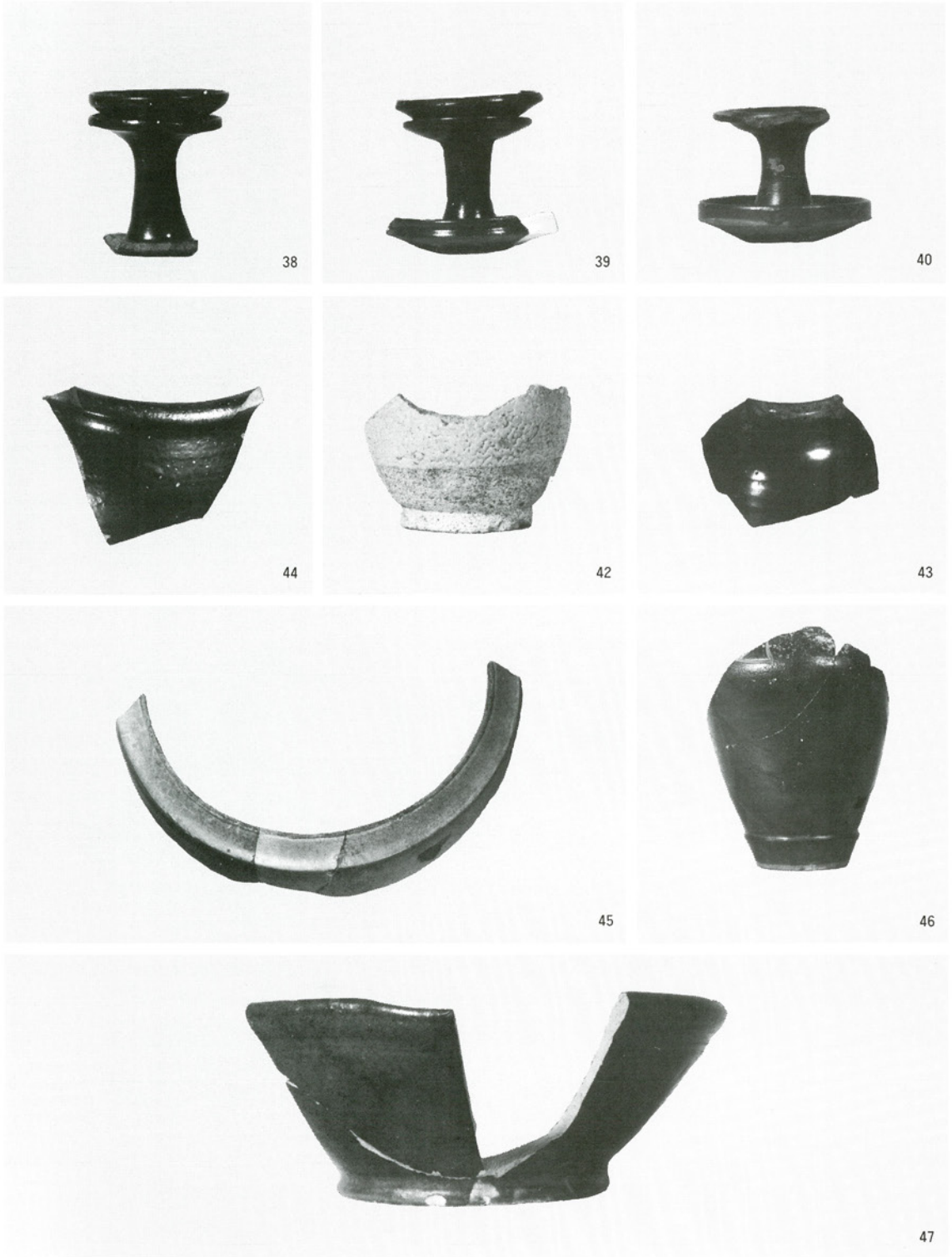
第21調査区 第1層出土土器類(1)



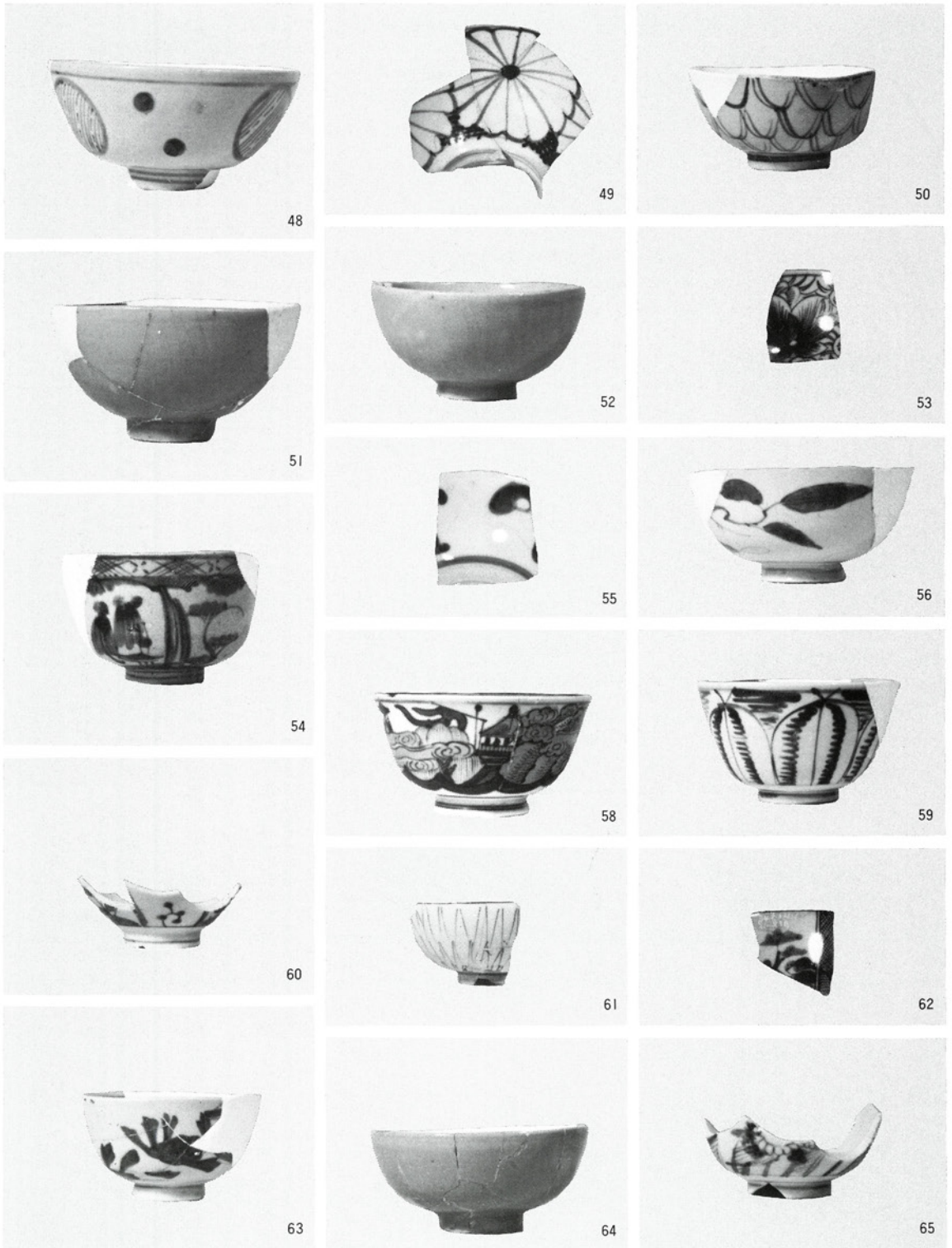
第21調査区第1層出土 土器類(2)



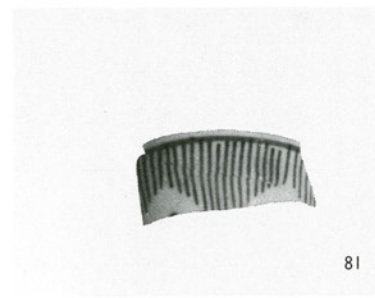
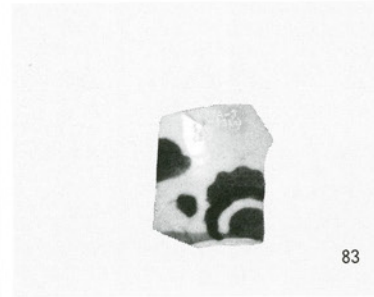
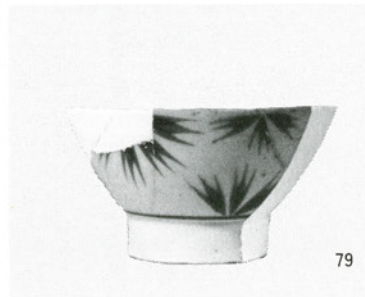
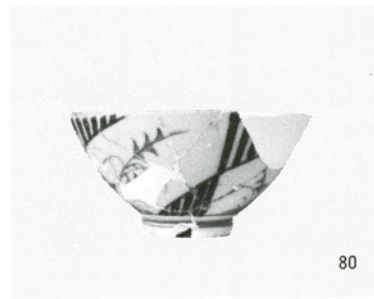
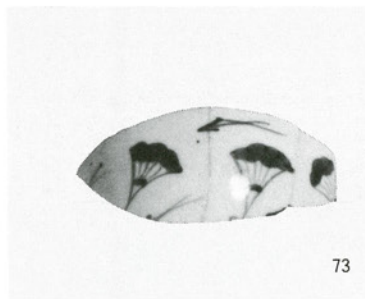
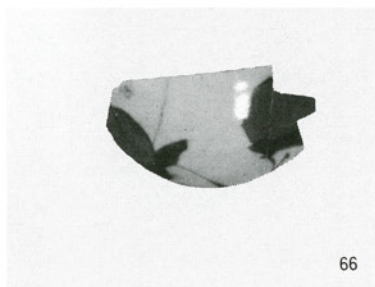
第21調査区第1層出土 土器類(3)



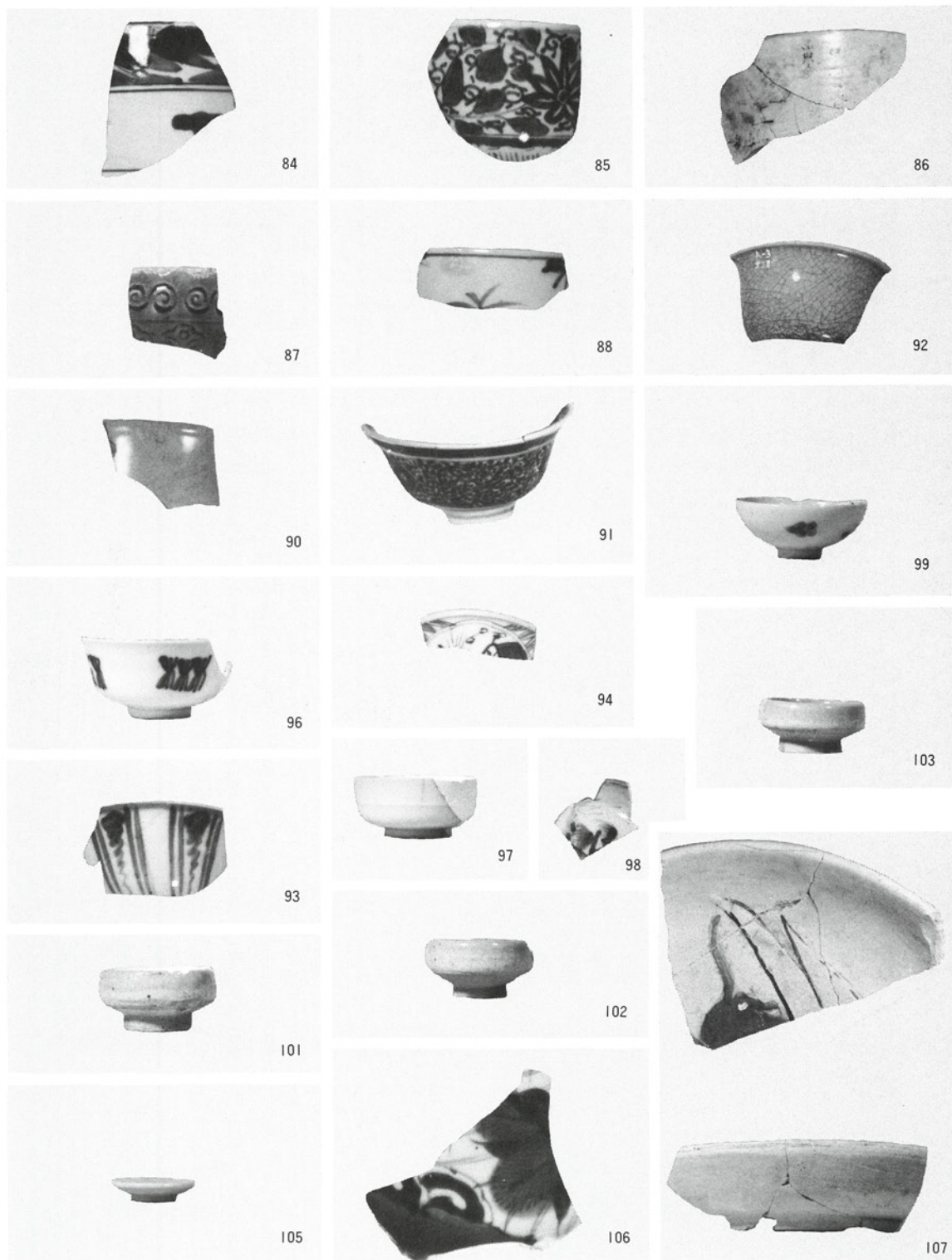
第21調査区 第1層出土土器類(4)



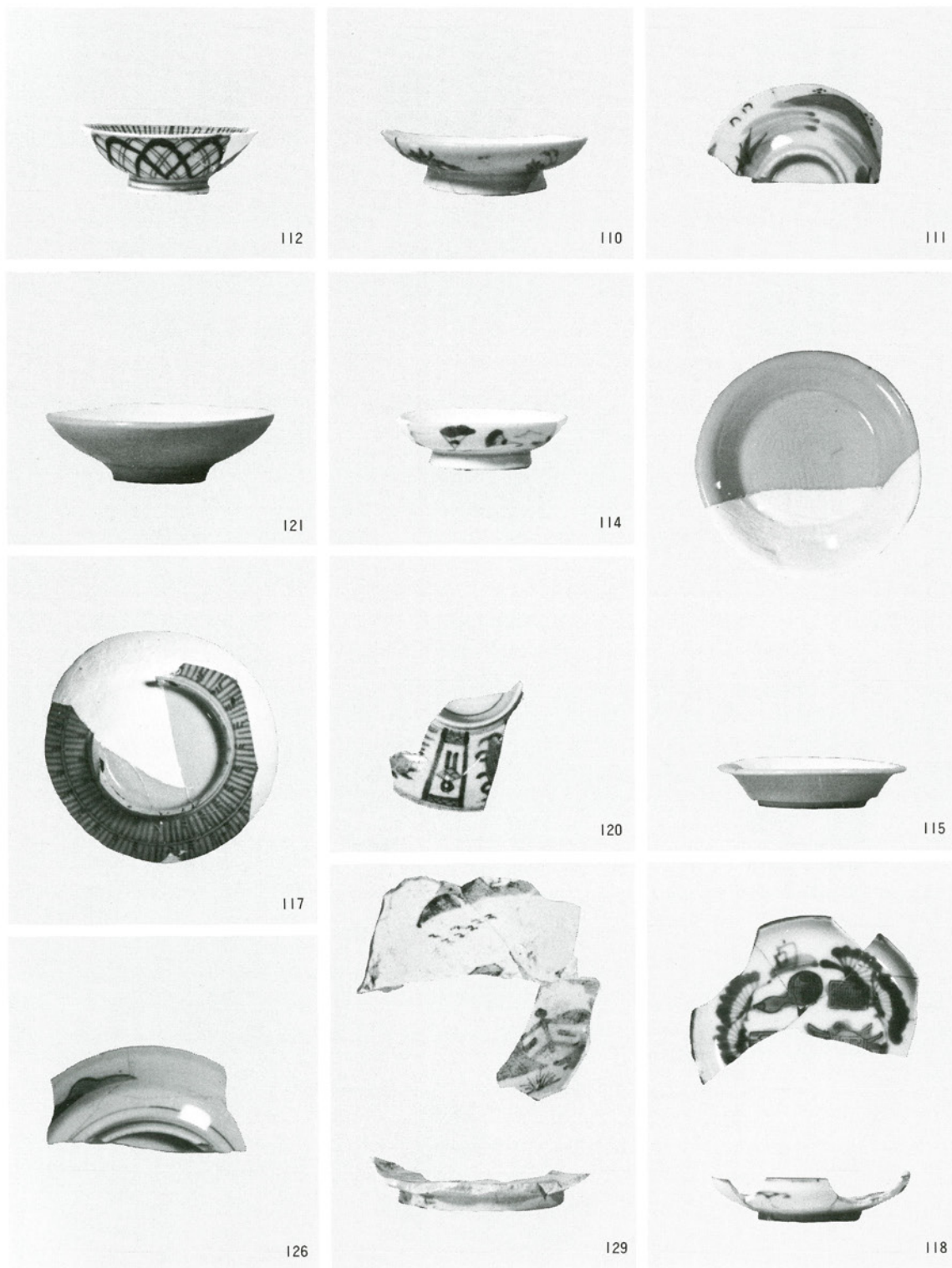
第21調査区包含層出土 土器類(1)



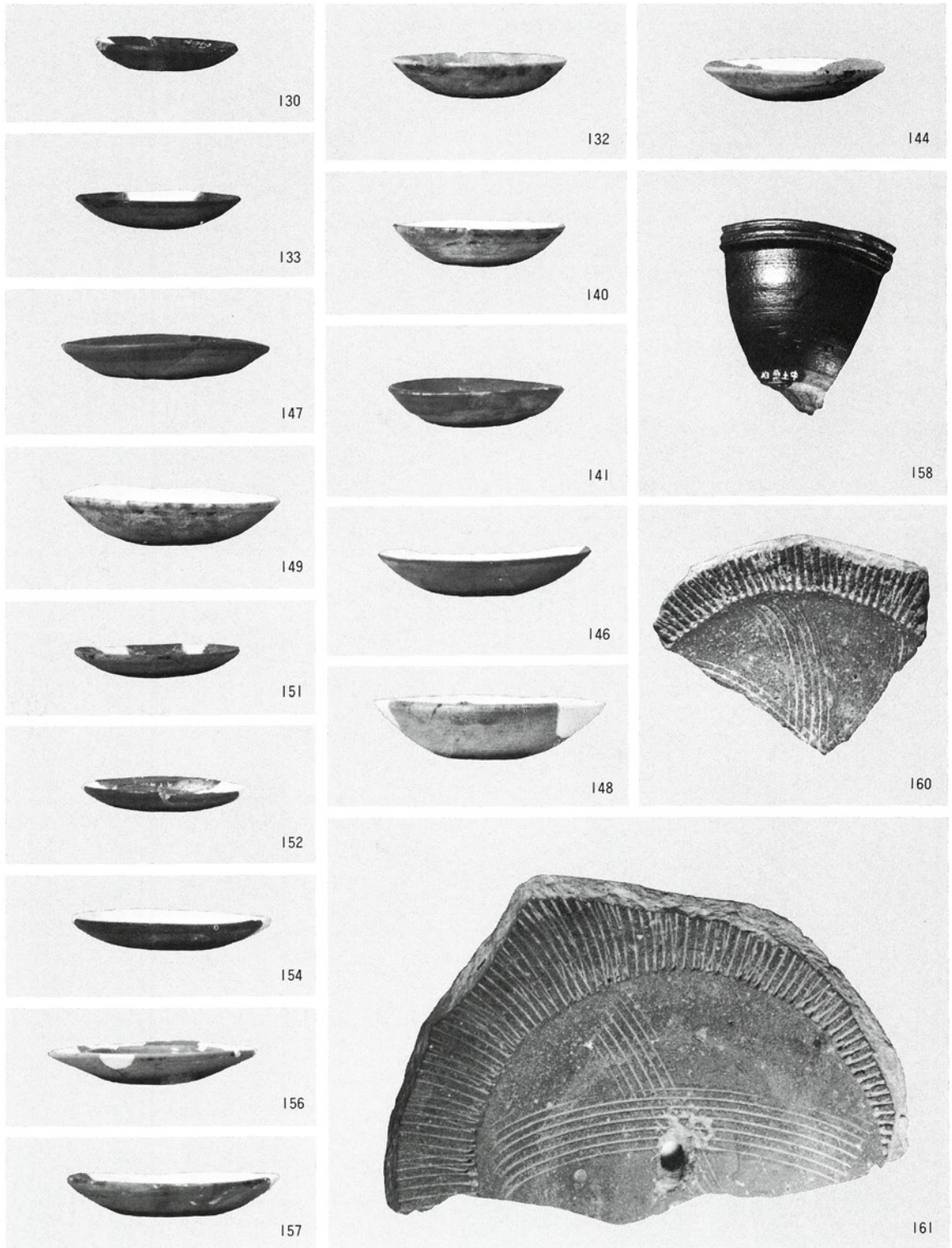
第21調査区包含層出土 土器類(2)



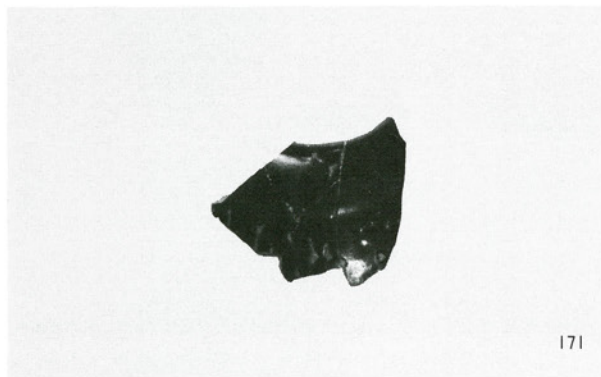
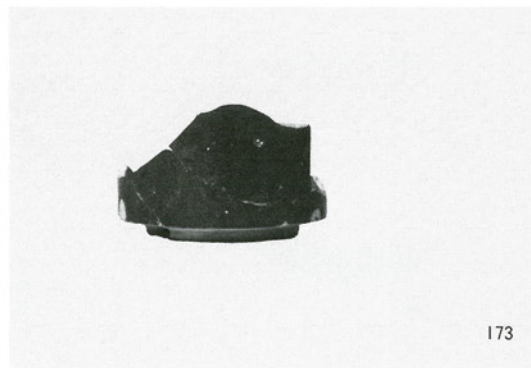
第21調査区包含層出土 土器類(3)



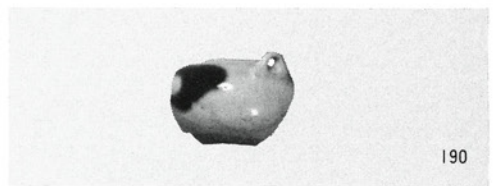
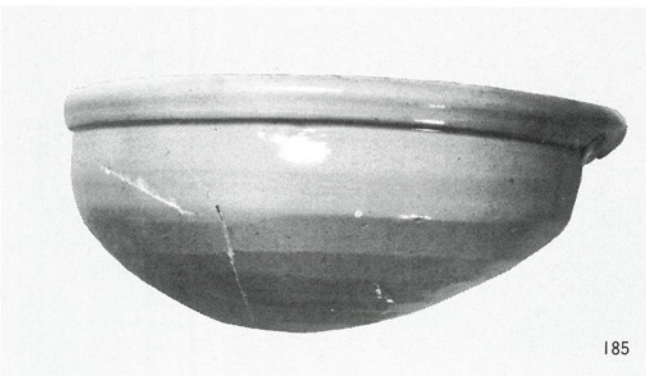
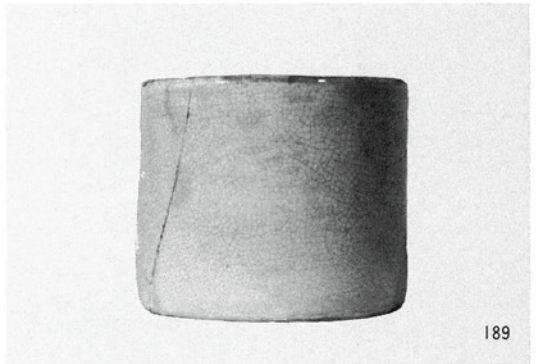
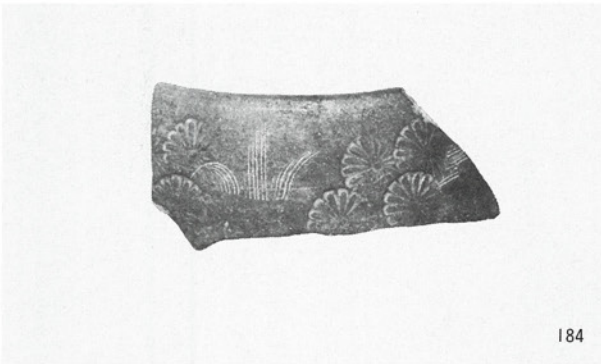
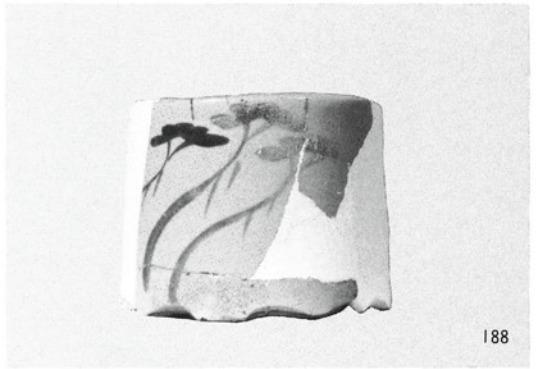
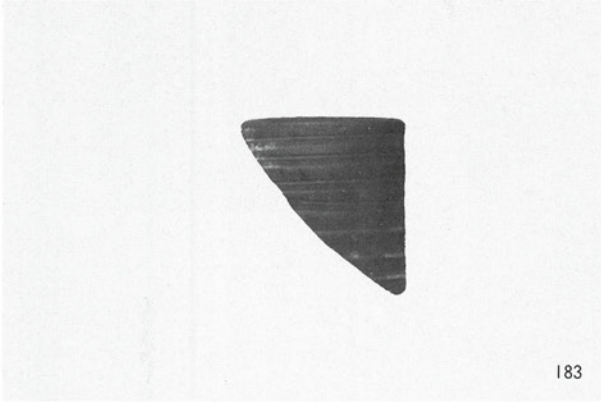
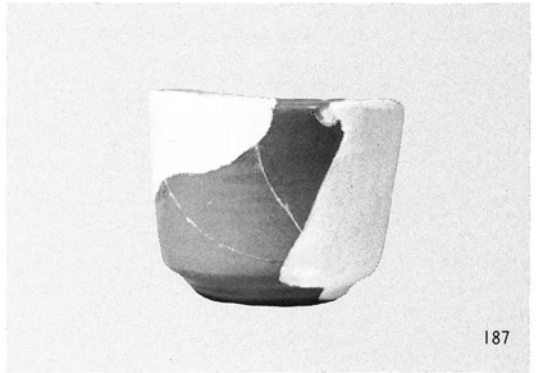
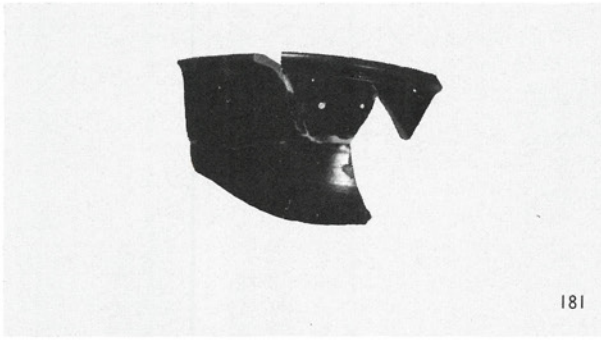
第21調査区包含層出土 土器類(4)



第21調査区包含層出土 土器類(5)



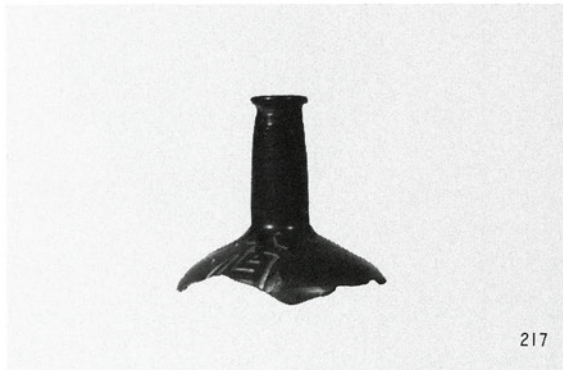
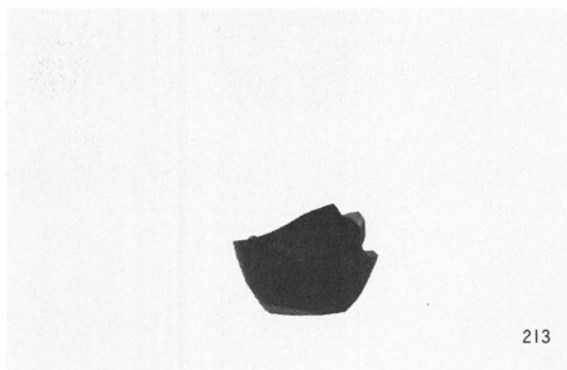
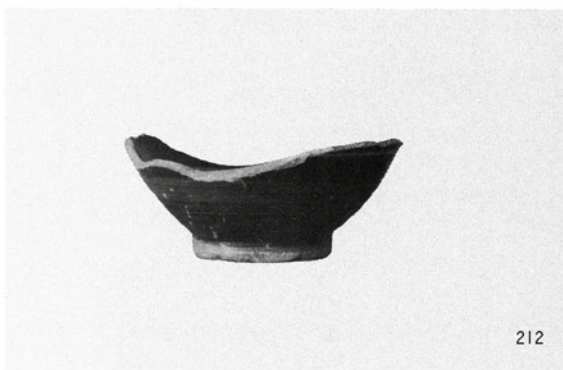
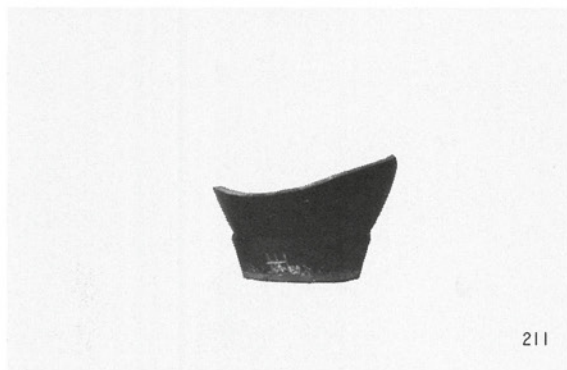
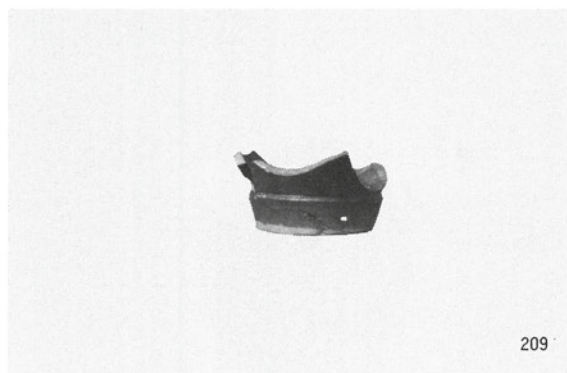
第21調査区 包含層出土 土器類(6)



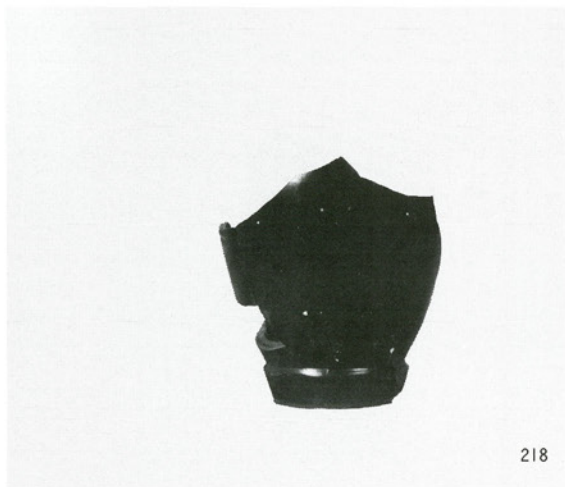
第21調査区包含層出土 土器類(7)



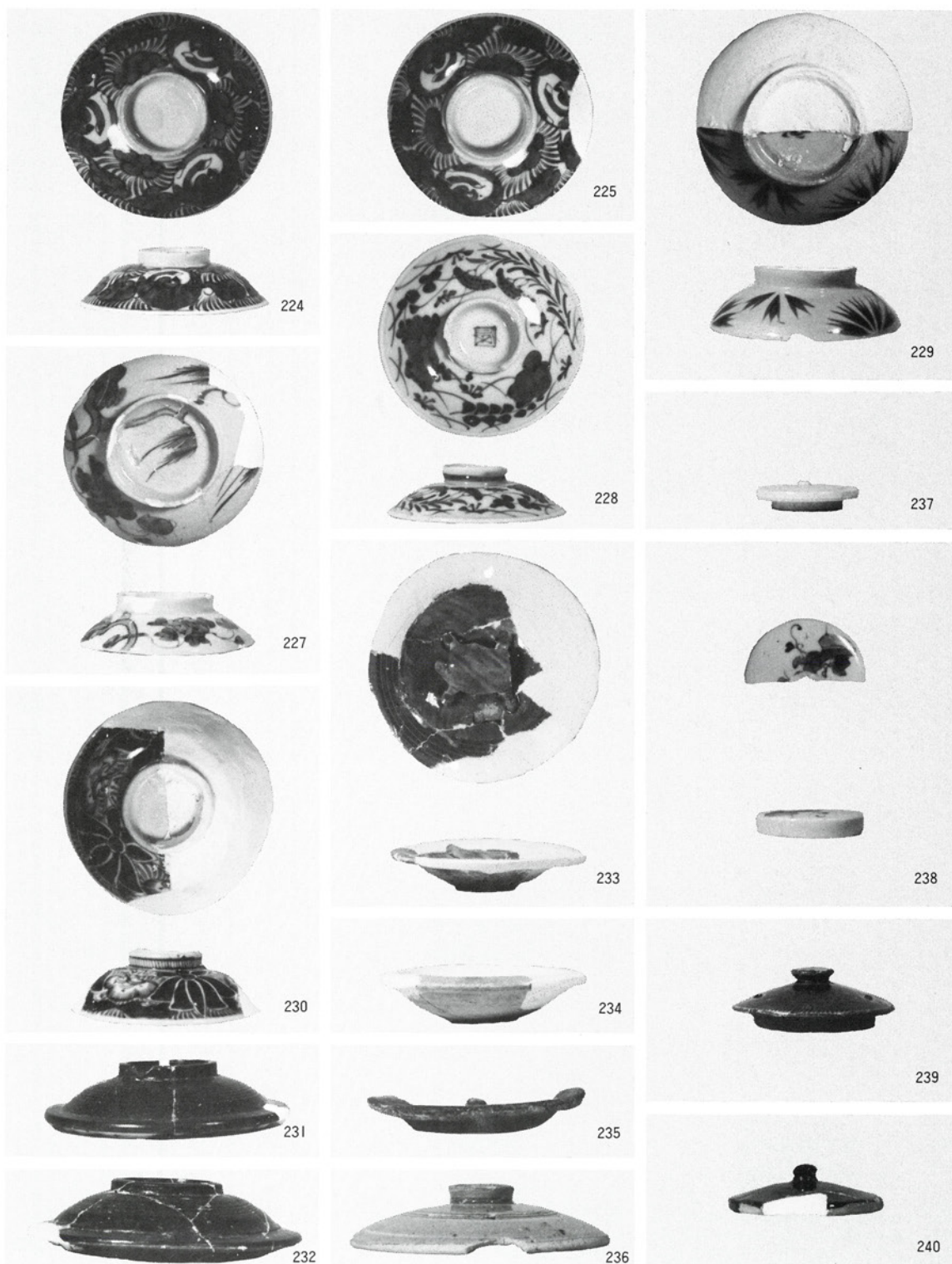
第21調査区包含層出土 土器類(8)



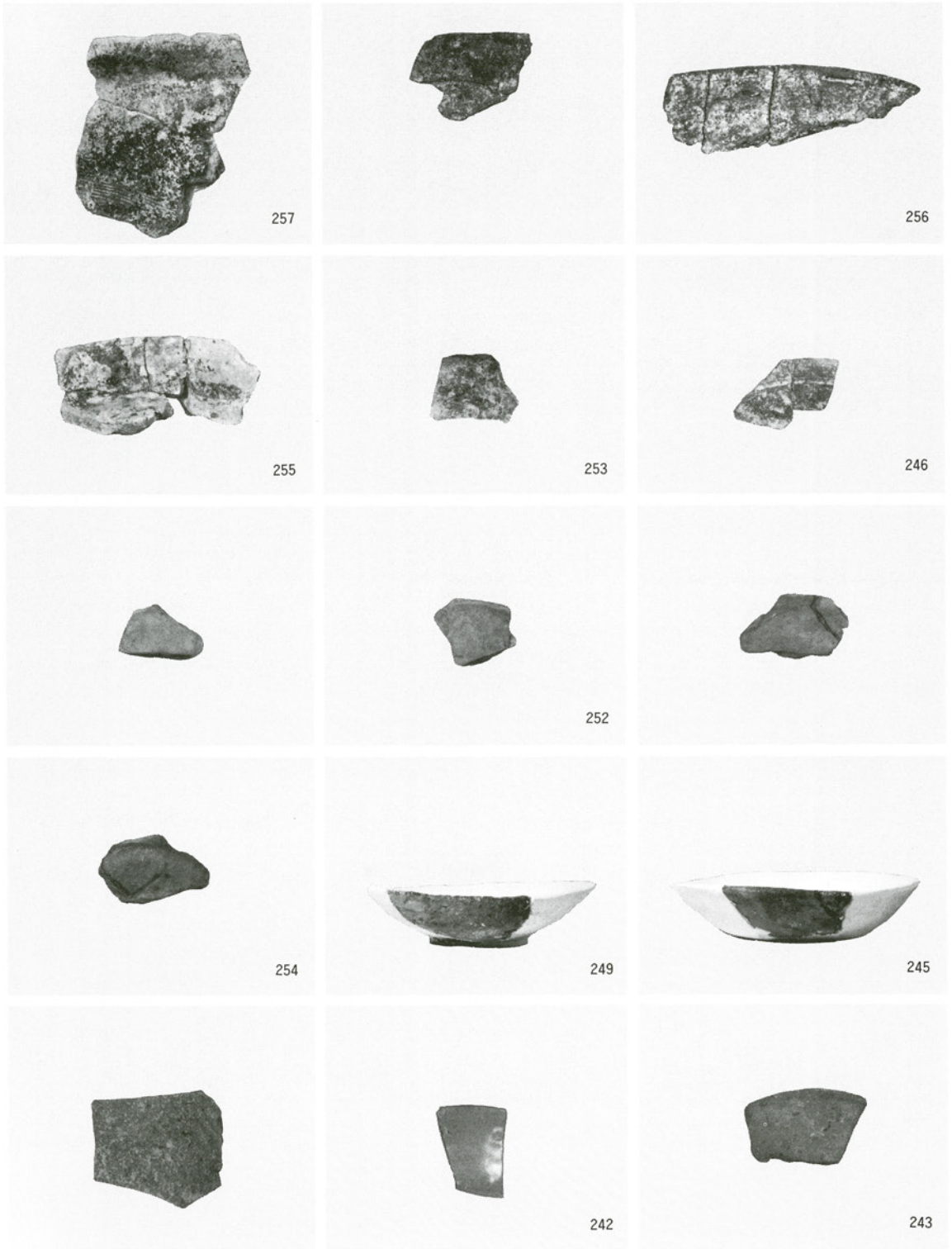
第21調査区包含層出土 土器類(9)



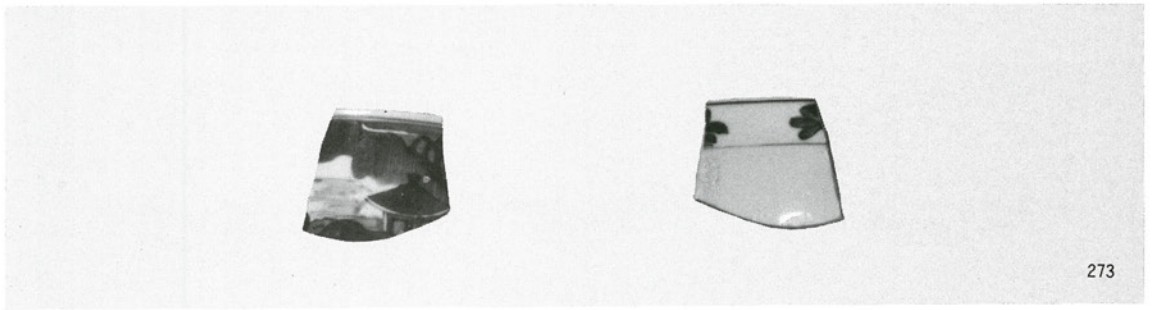
第21調査区包含層出土 土器類(10)



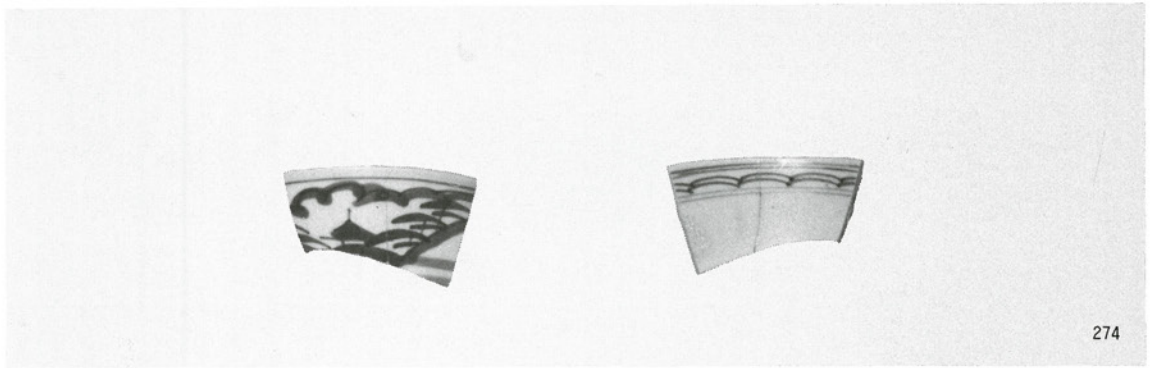
第21調査区包含層出土 土器類(11)



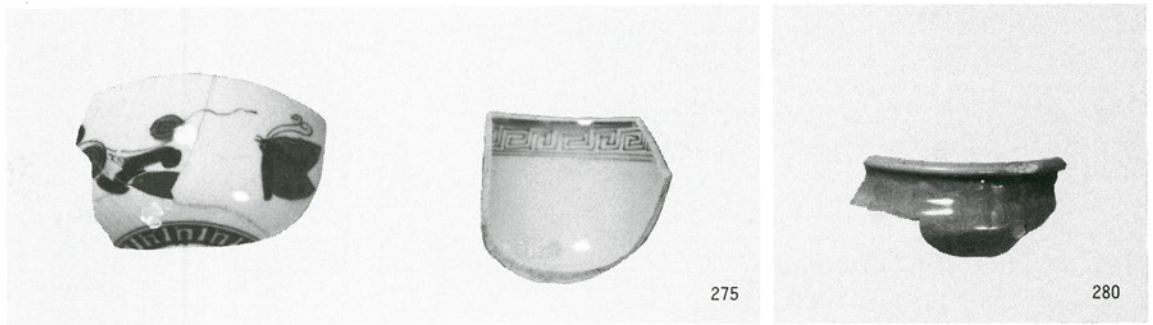
第21調査区第1トレンチ最下層・B-2グリット出土 土器類



273

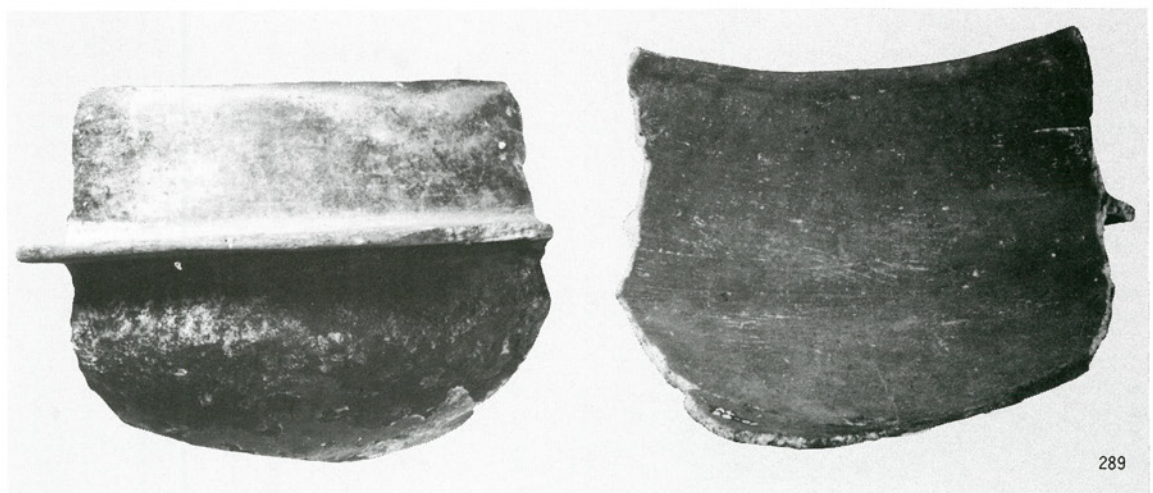


274



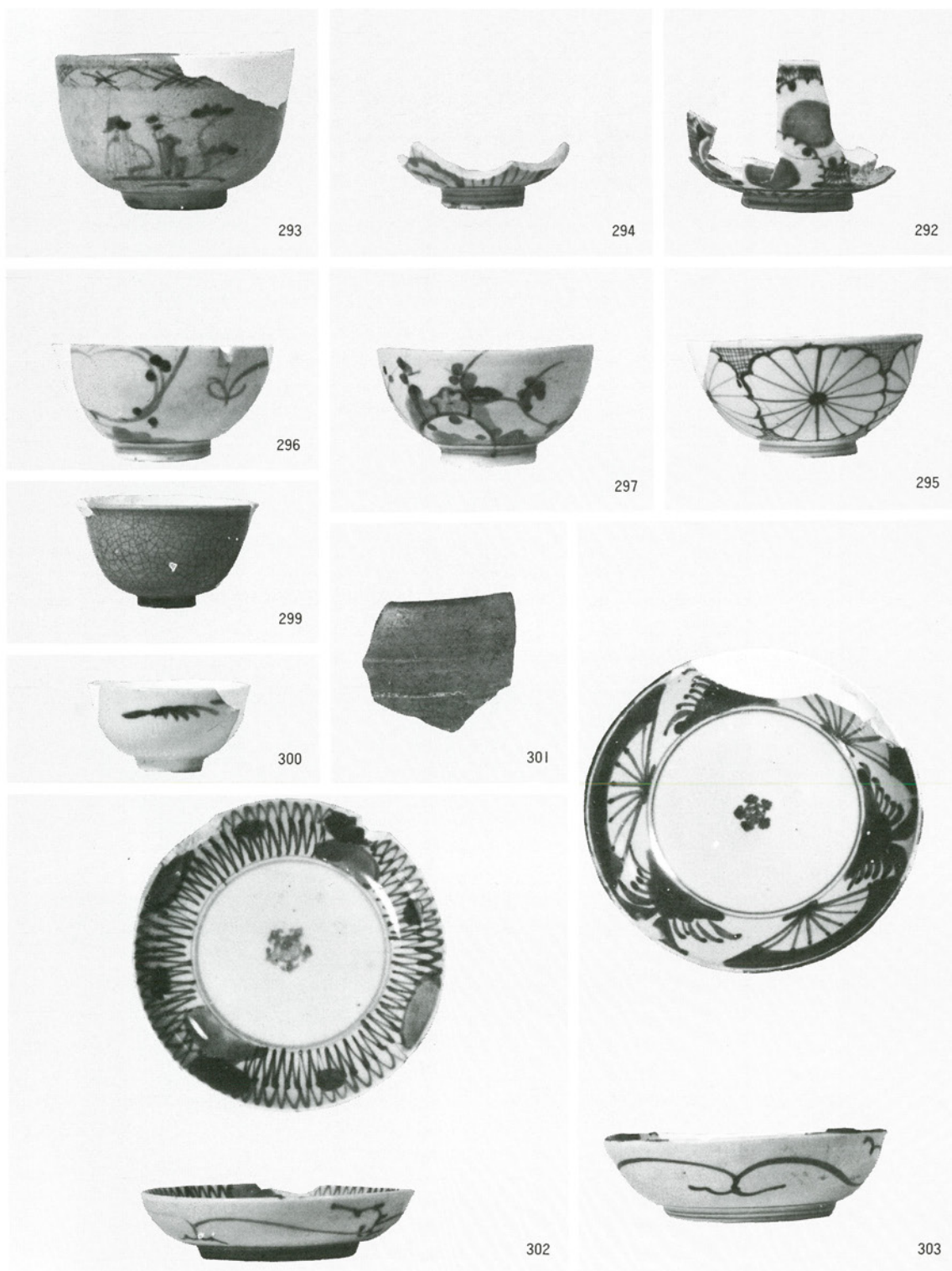
275

280

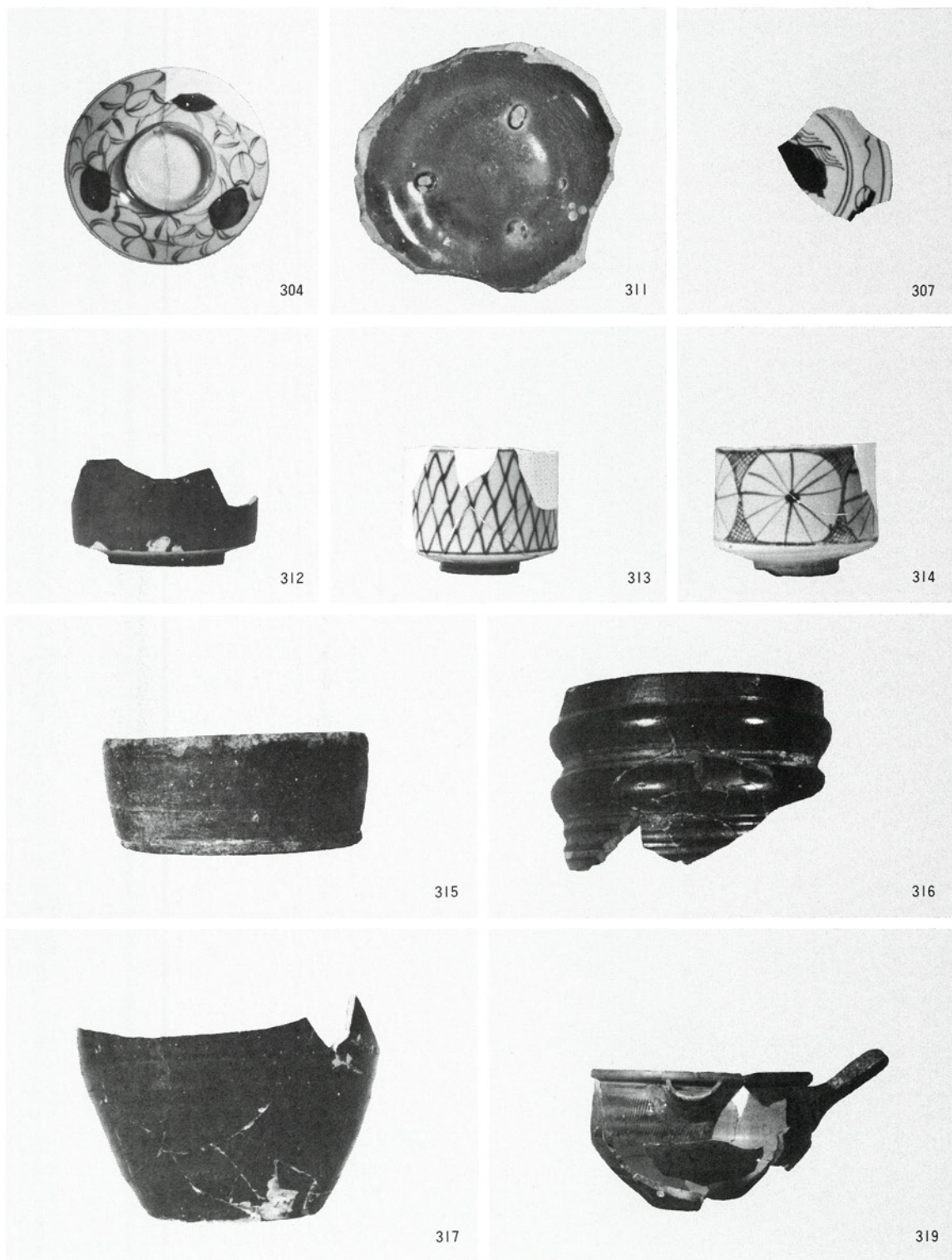


289

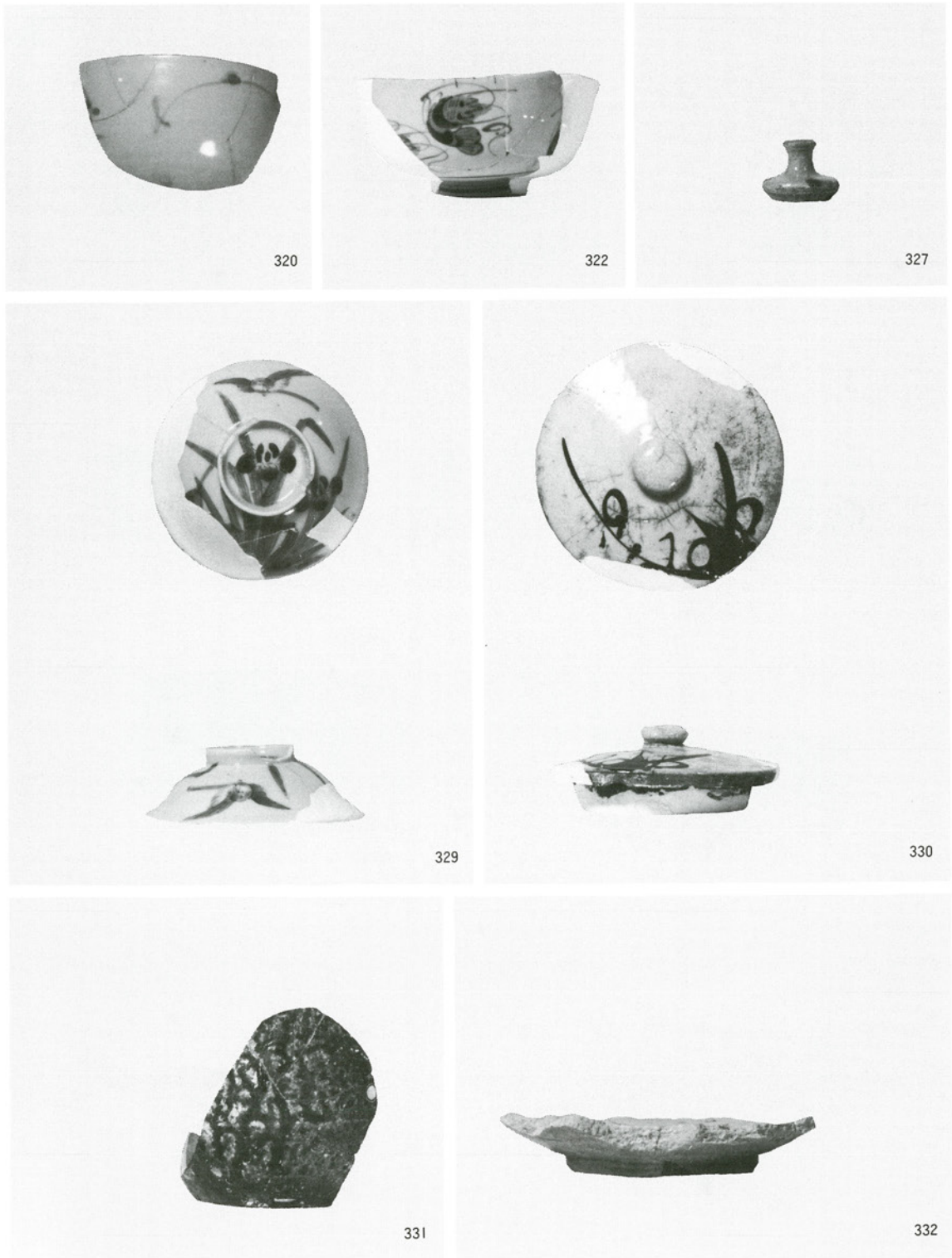
第21調査区各遺構出土 土器類(1)



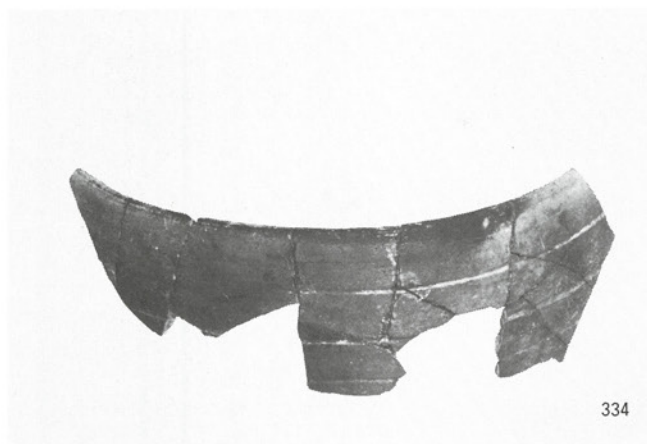
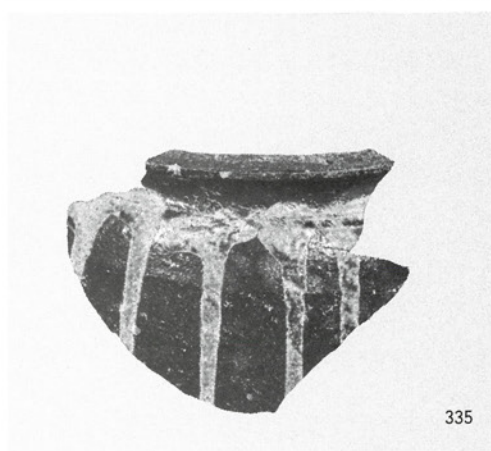
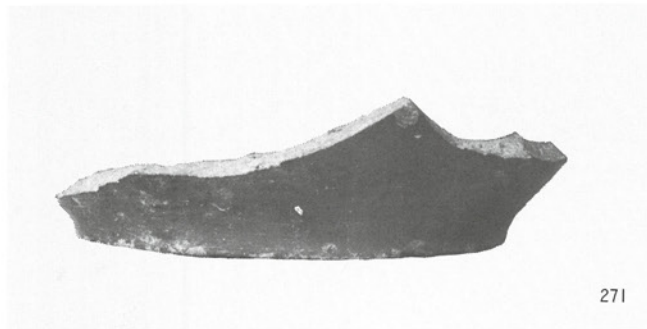
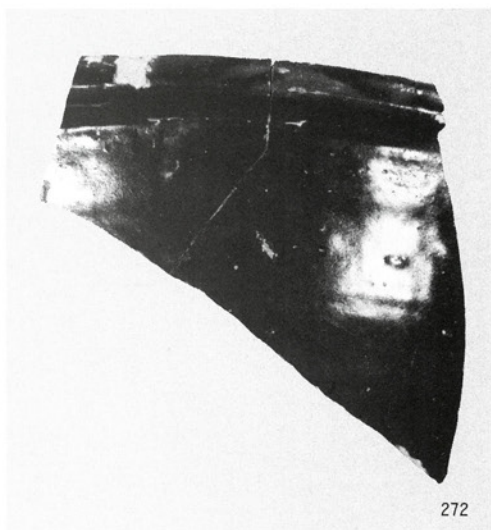
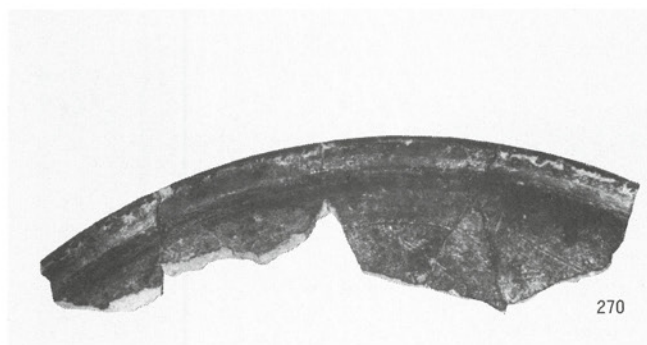
第21調査区 S A - 02 出土 土器類



第21調査区各遺構出土 土器類(3)



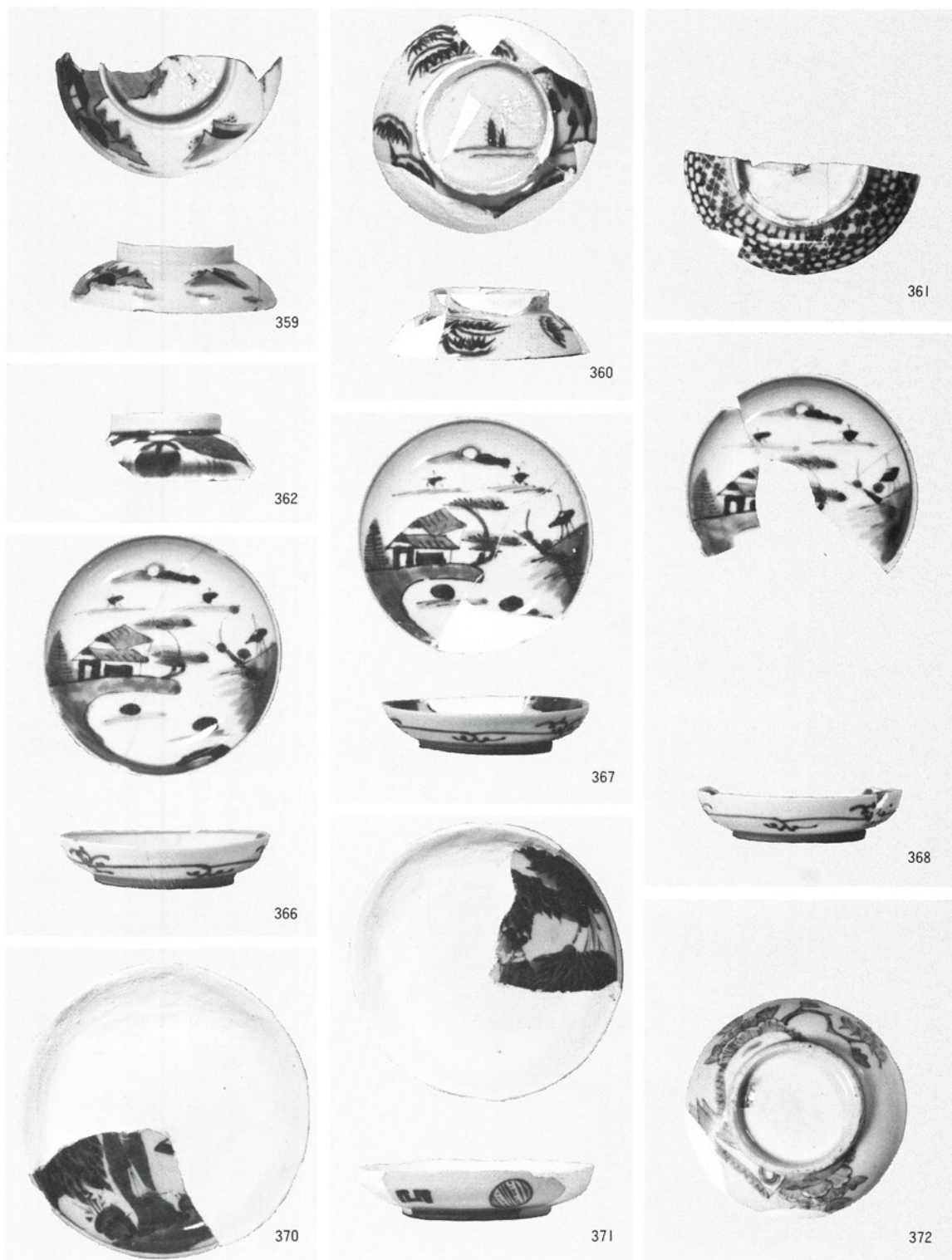
第21調査区各遺構出土 土器類(4)



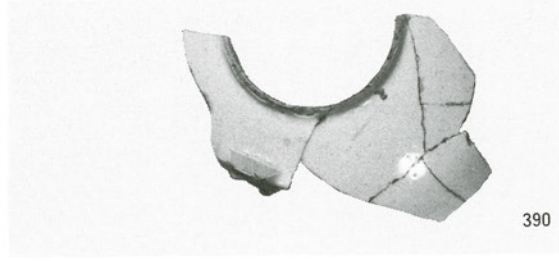
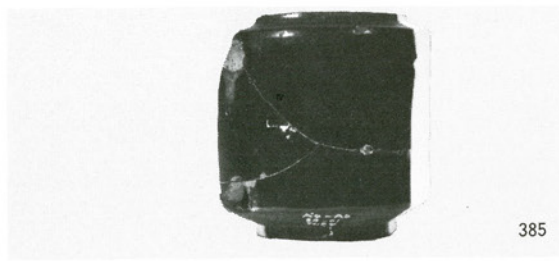
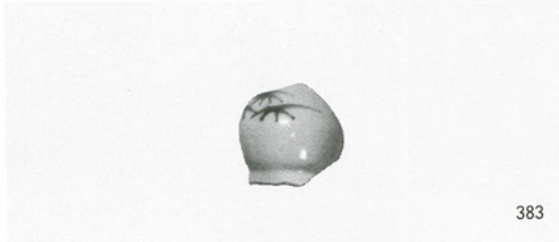
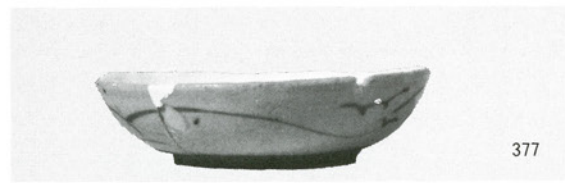
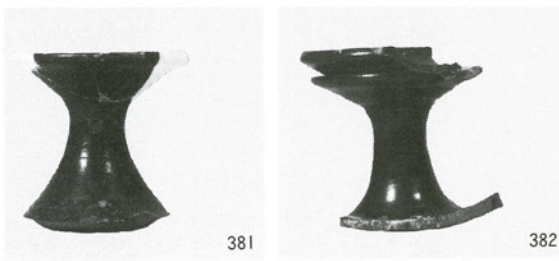
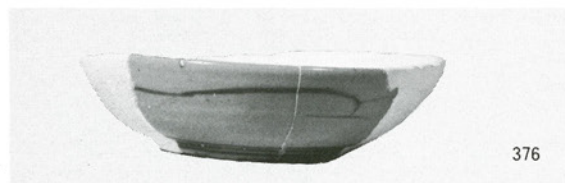
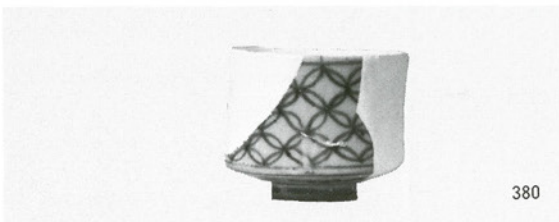
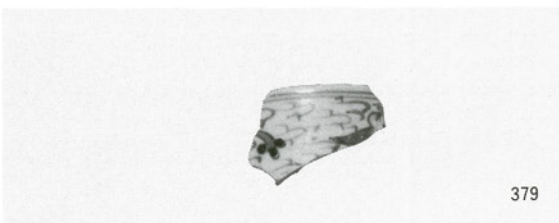
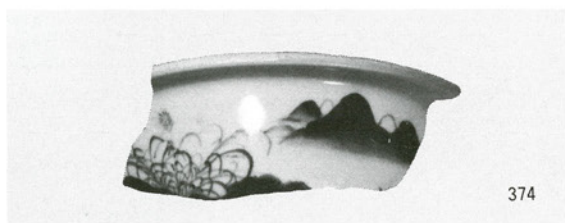
第21調査区各遺構出土 土器類(5)



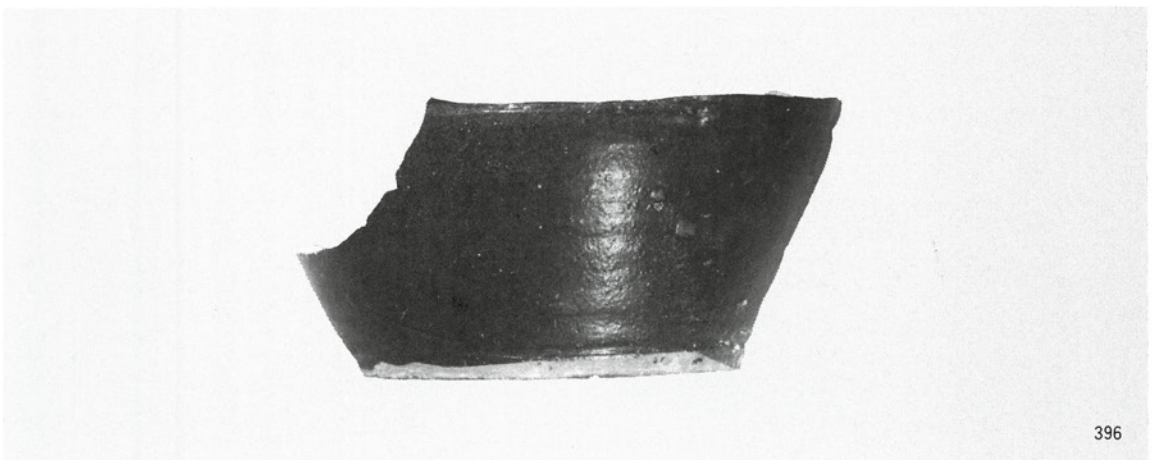
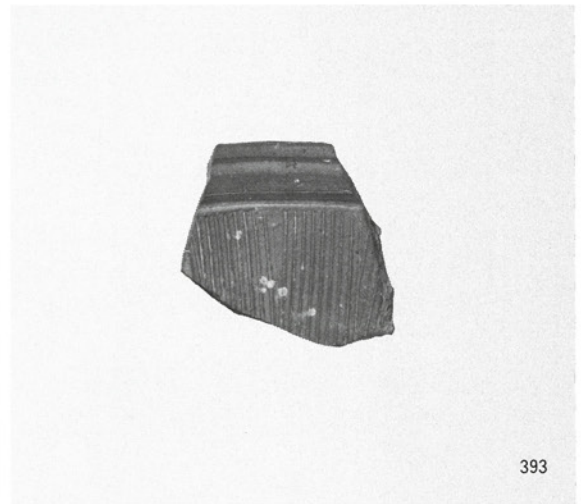
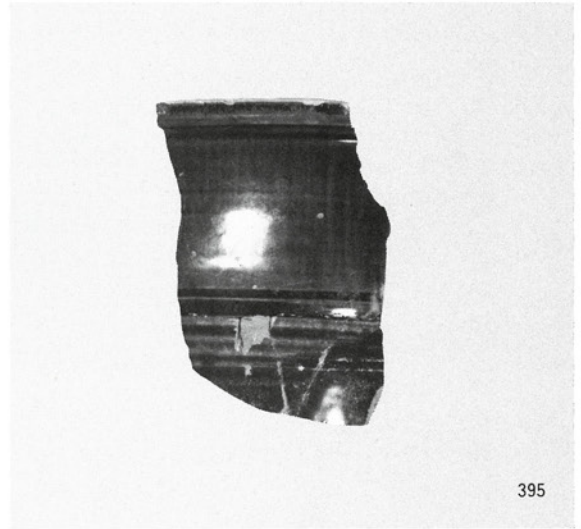
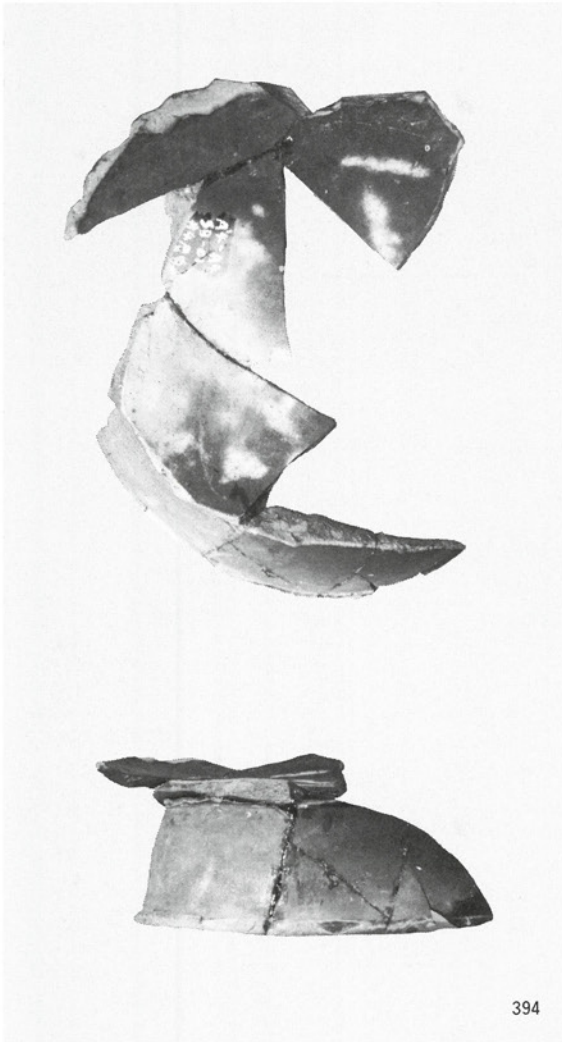
第21調査区盛土状遺構上部出土 土器類(1)



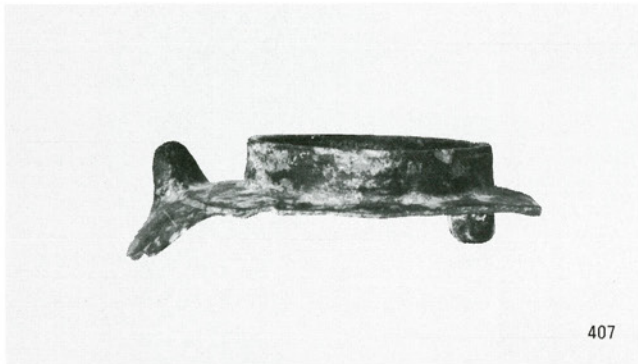
第21調査区盛土状遺構上部出土 土器類(2)



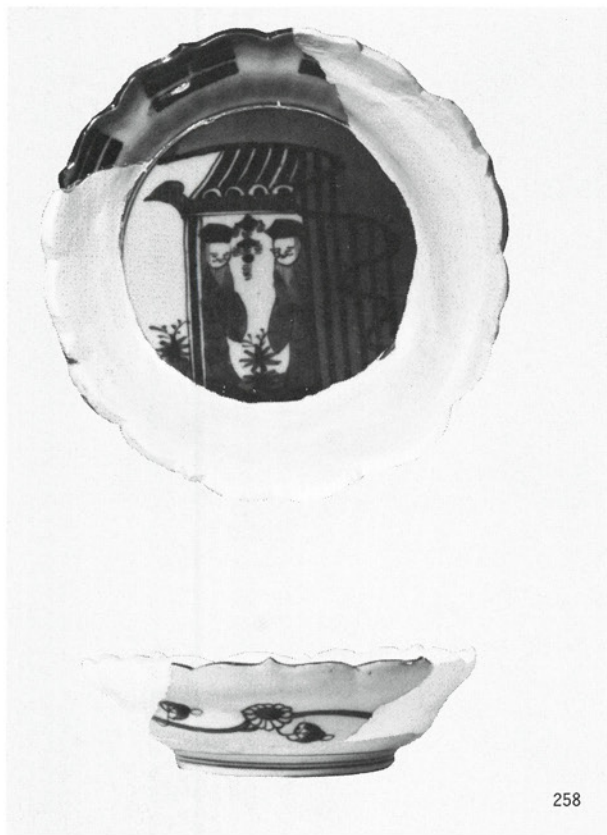
第21調査区'盛土状遺構上部出土 土器類(3)



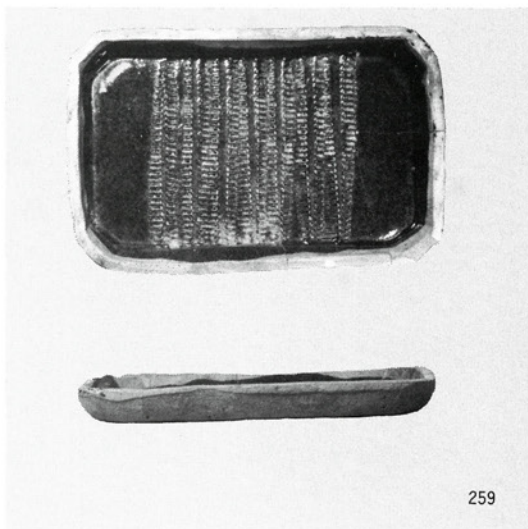
第21調査区盛土状遺構上部出土 土器類(4)



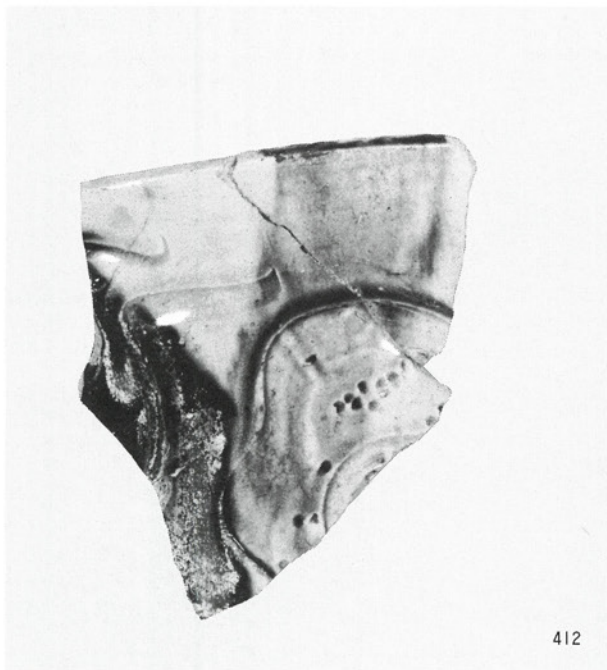
第21調査区盛土状遺構下部出土 土器類



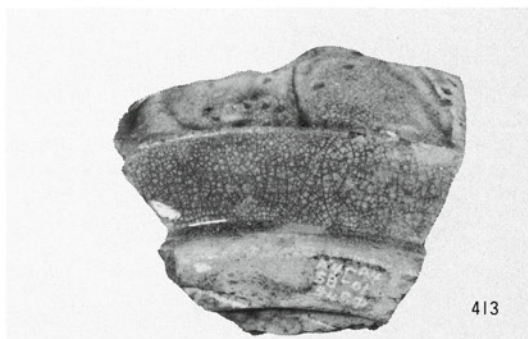
258



259



412

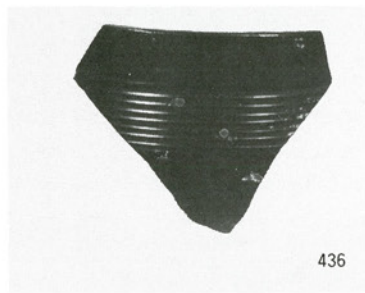
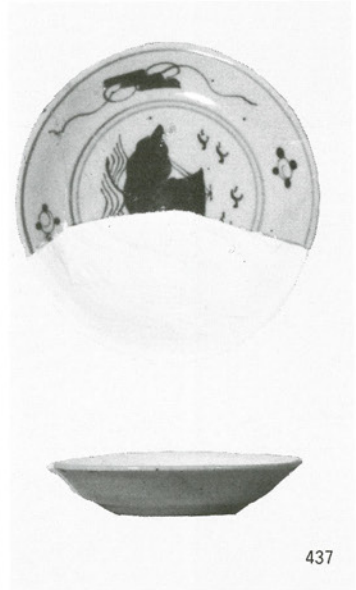


413

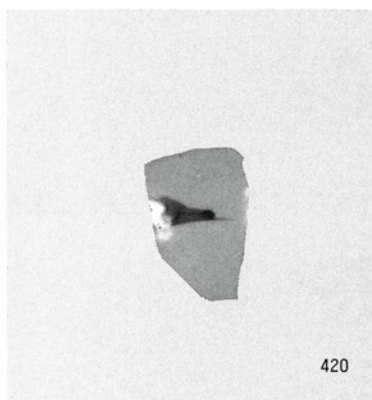
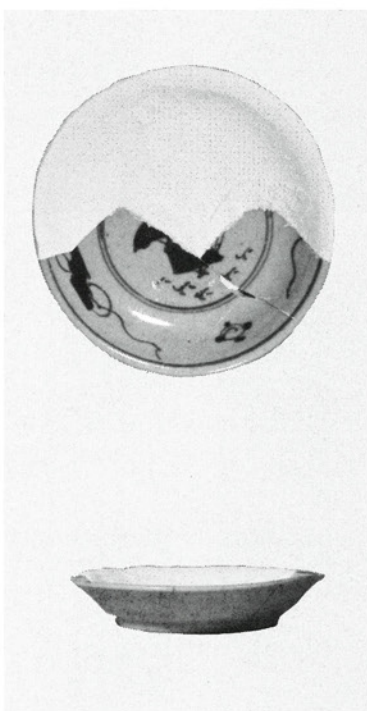
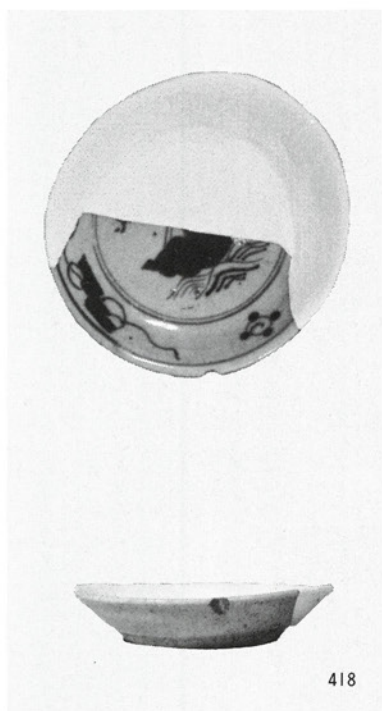
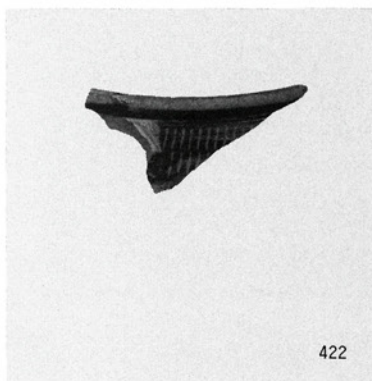
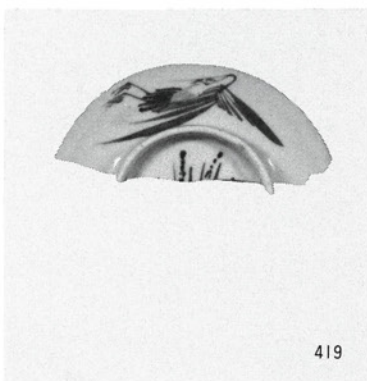


414

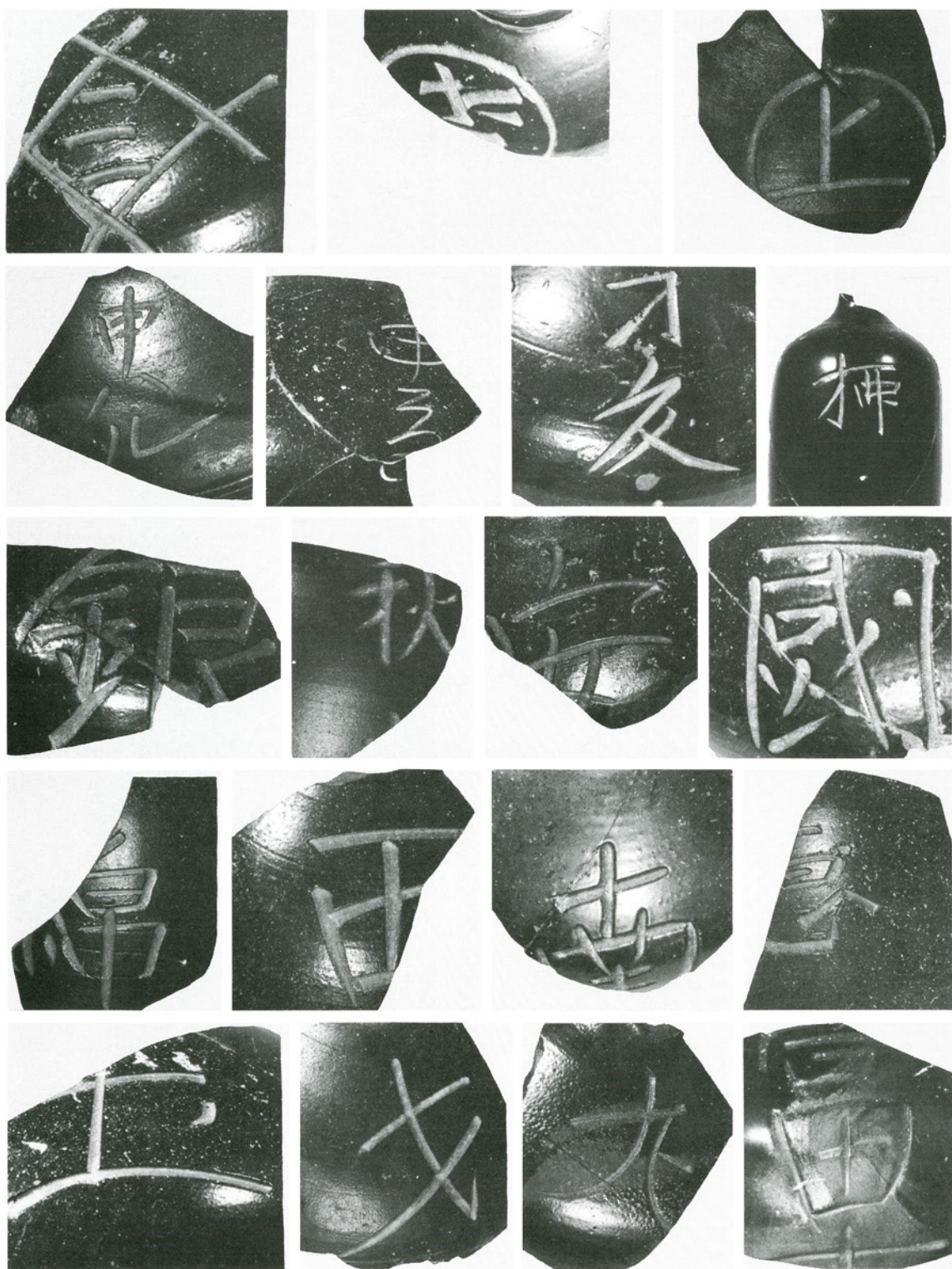
第21調査区各遺構出土 土器類(6)



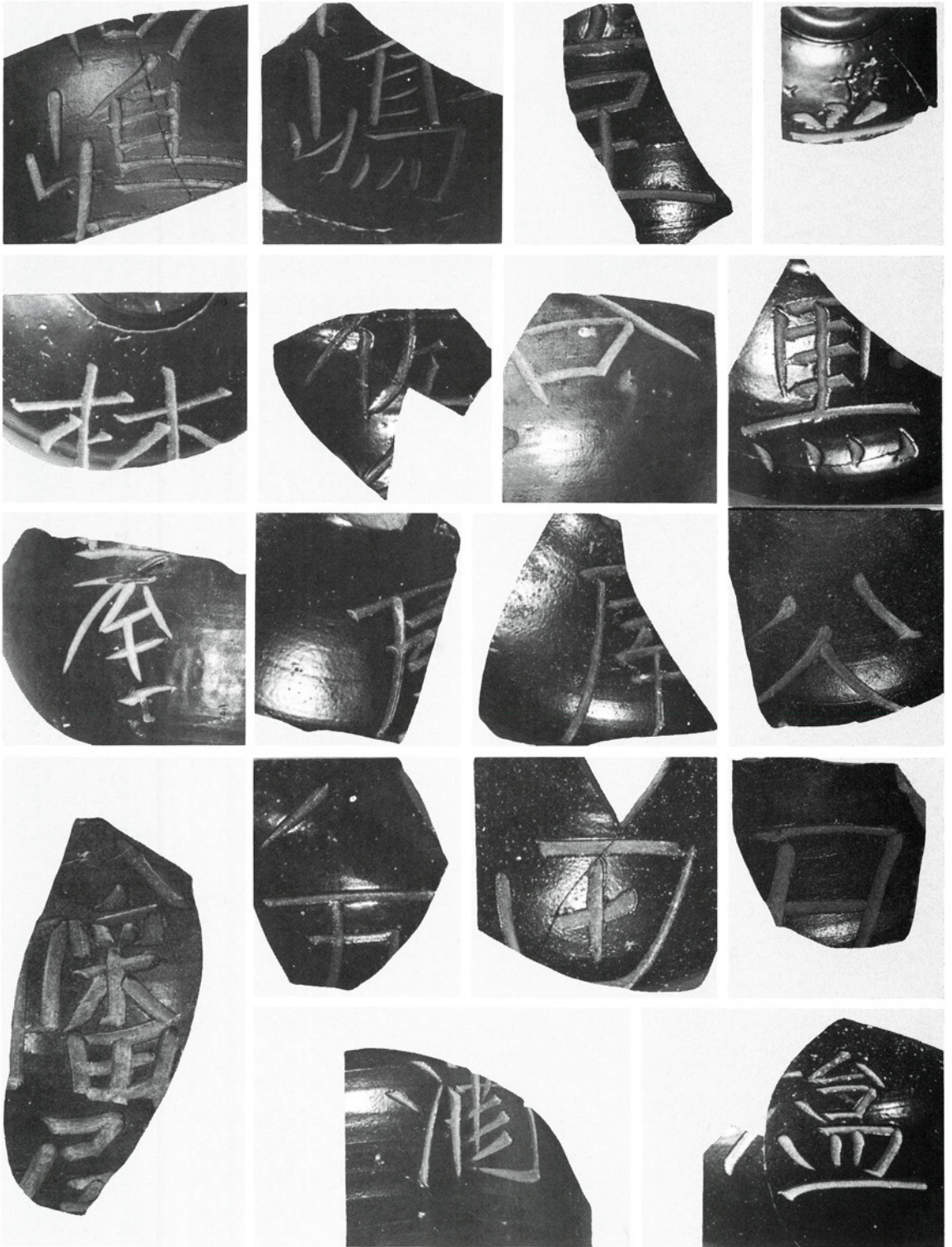
第31調査区出土 土器類



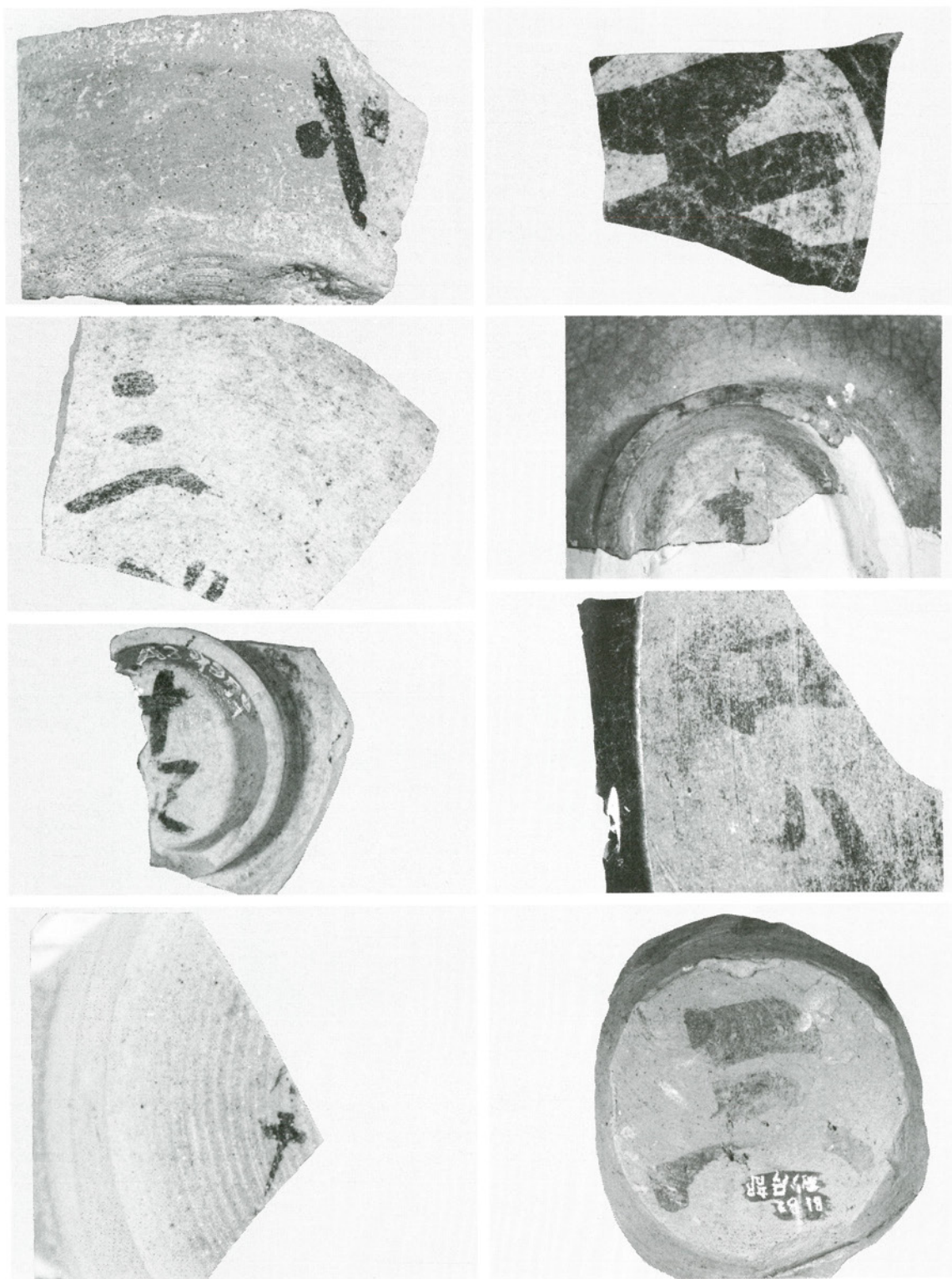
第27・29調査区出土 土器類



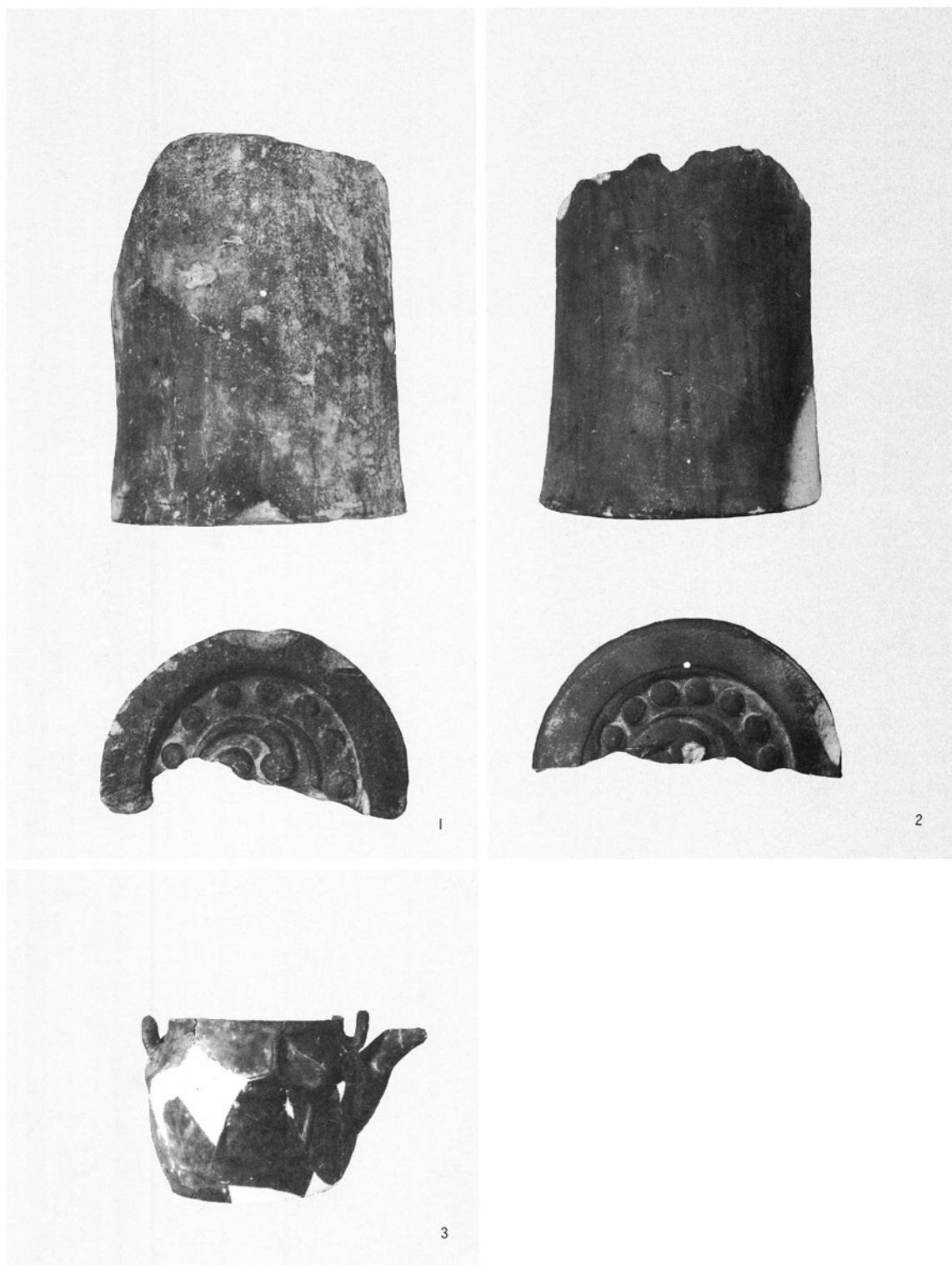
第21調査区出土 德利刻字(1)



第21調査区出土 德利刻字(2)

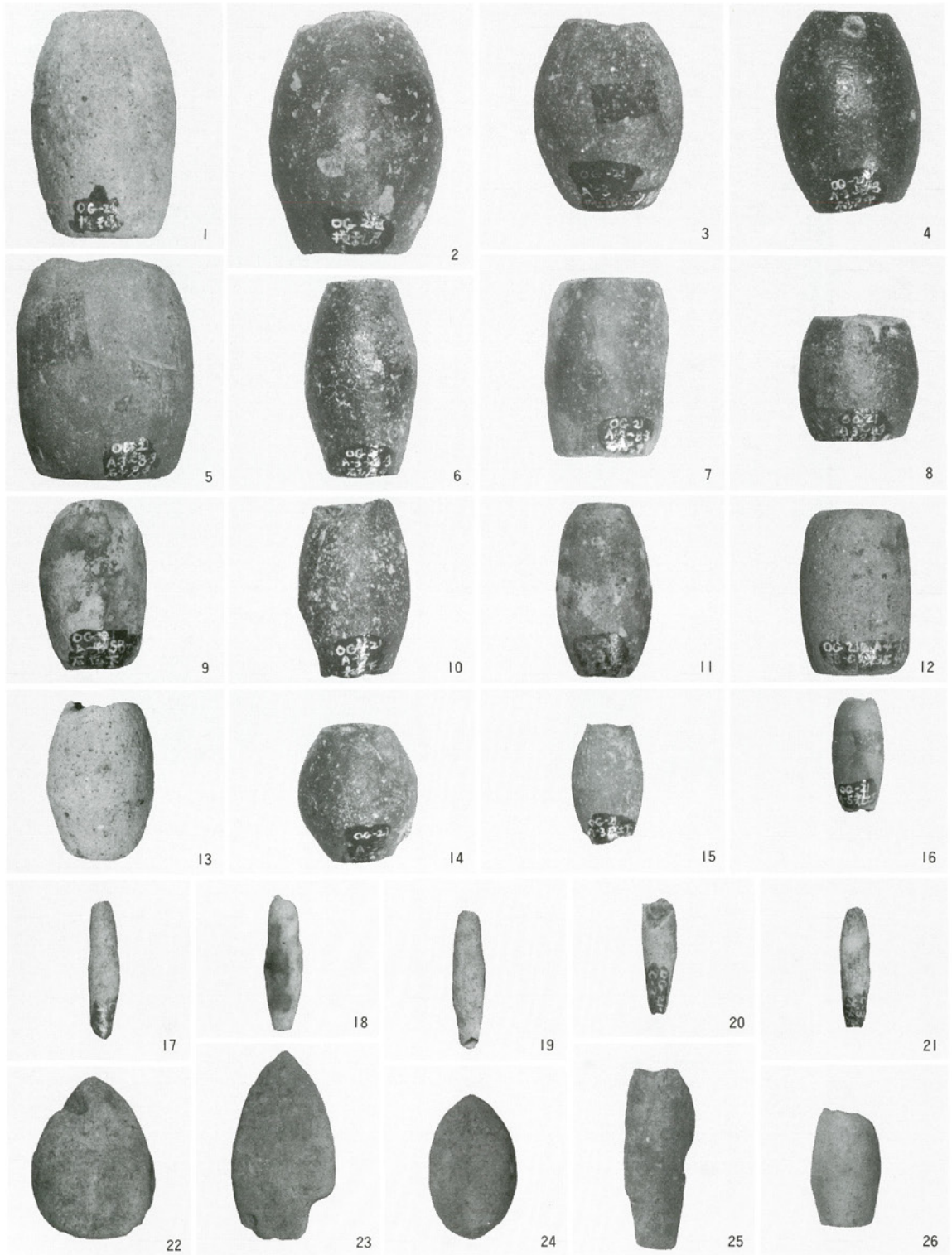


第21調査区出土 墨書土器類

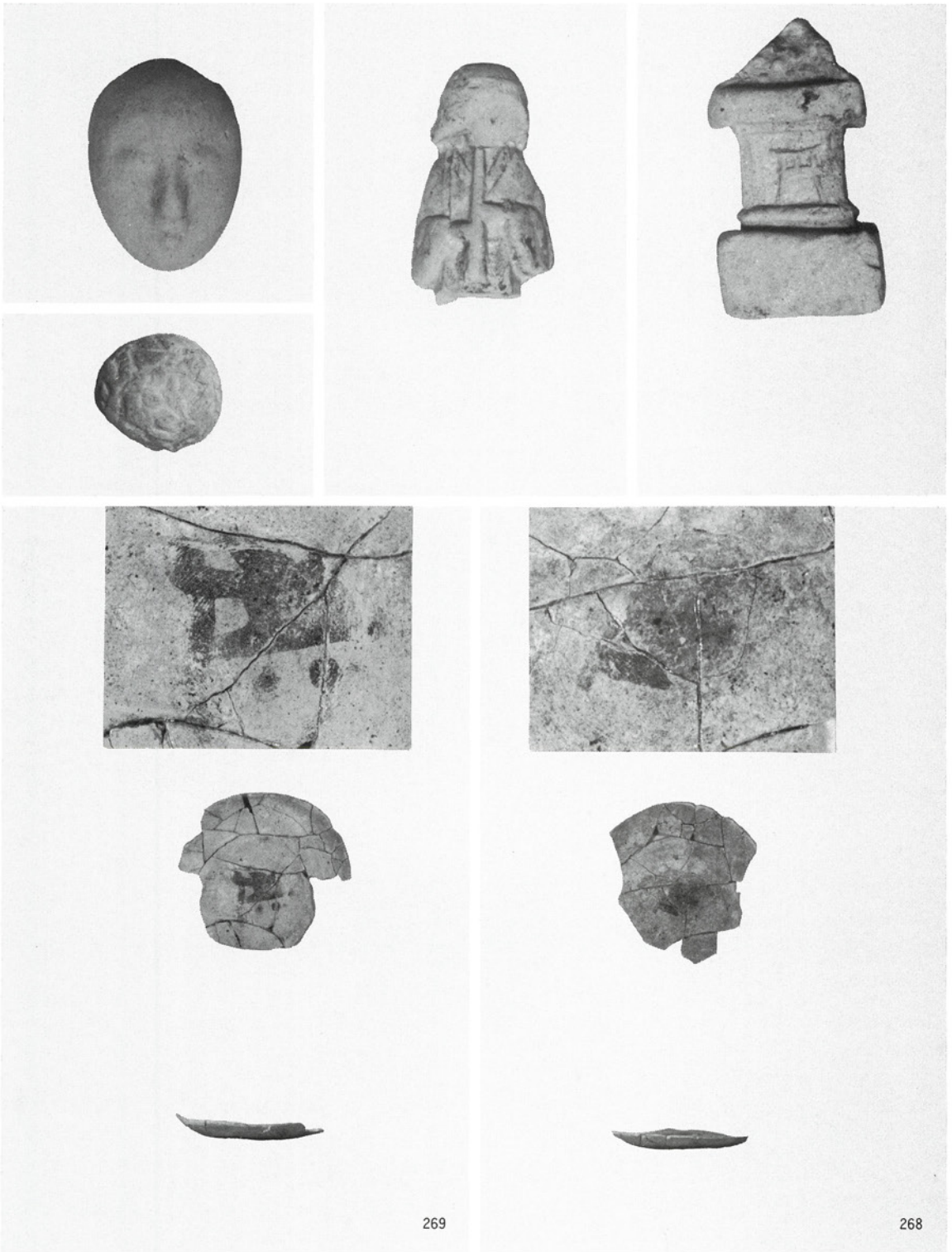


第21調査区出土 瓦 1 ~ 2

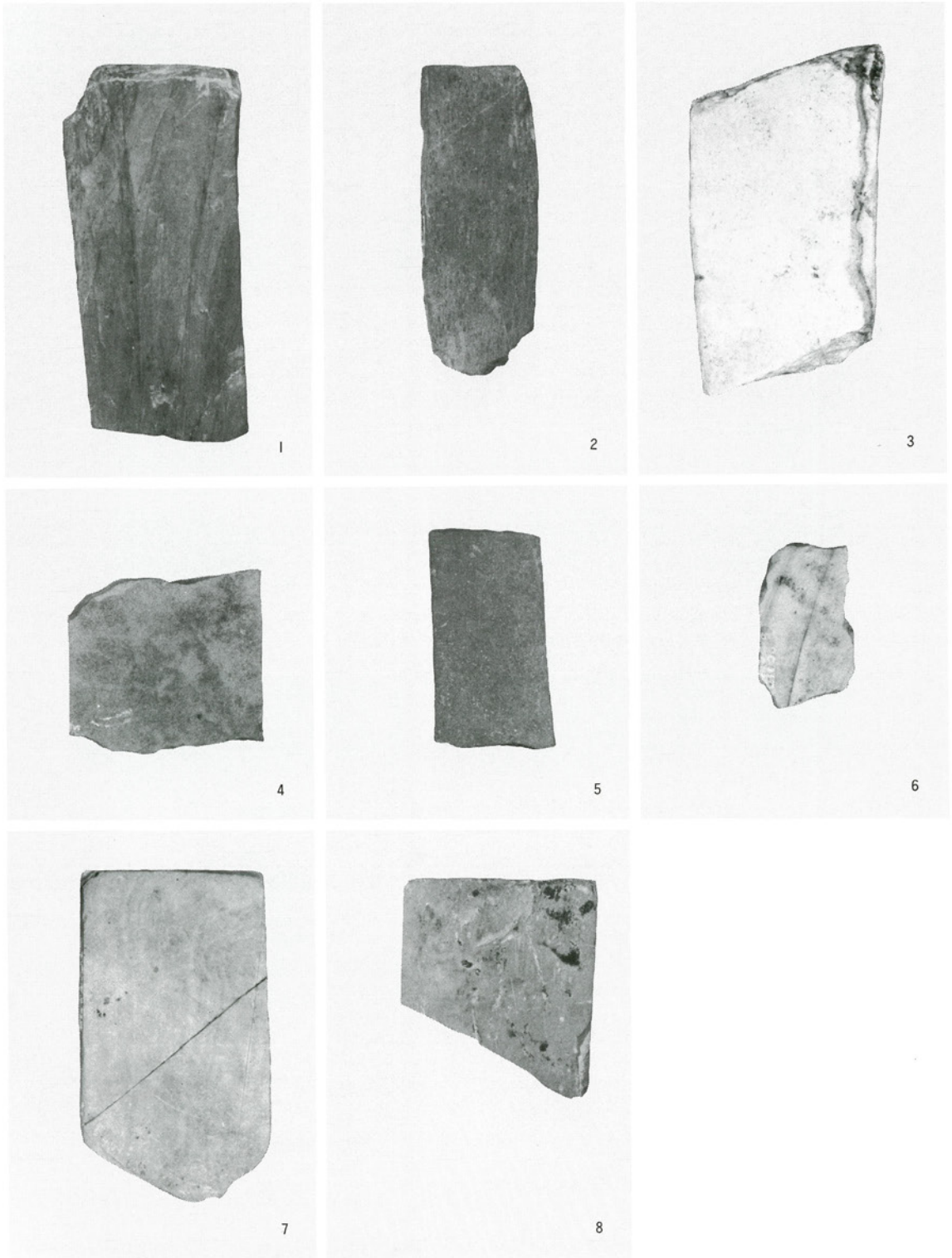
第15調査区出土 土器 3



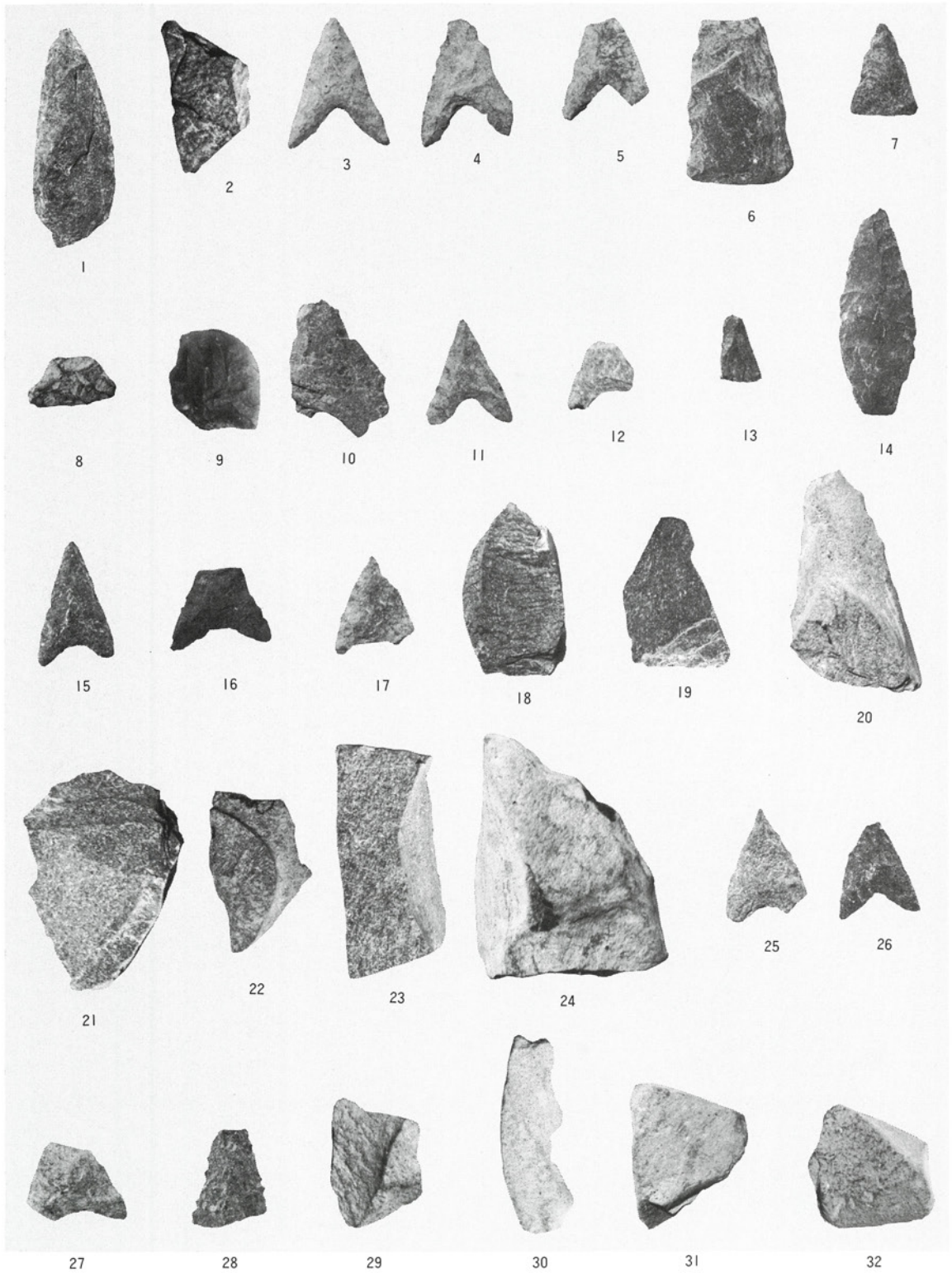
第21調査区出土 土錘



第21調査区出土 土製品，小祠出土墨書土器

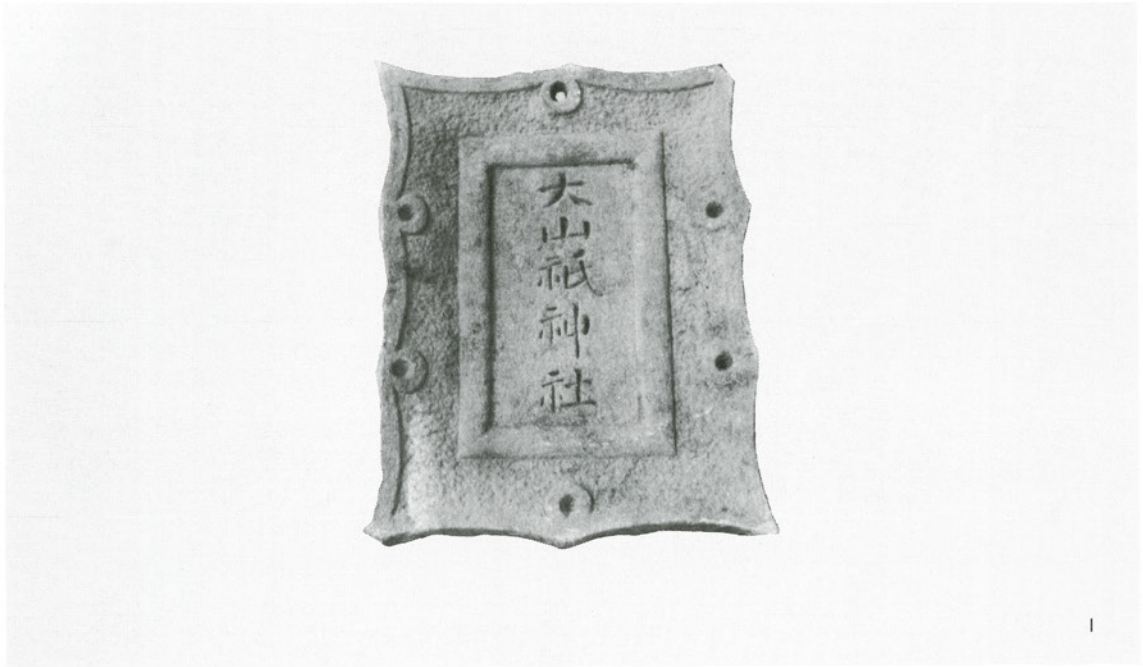


第21調査区出土 砥石

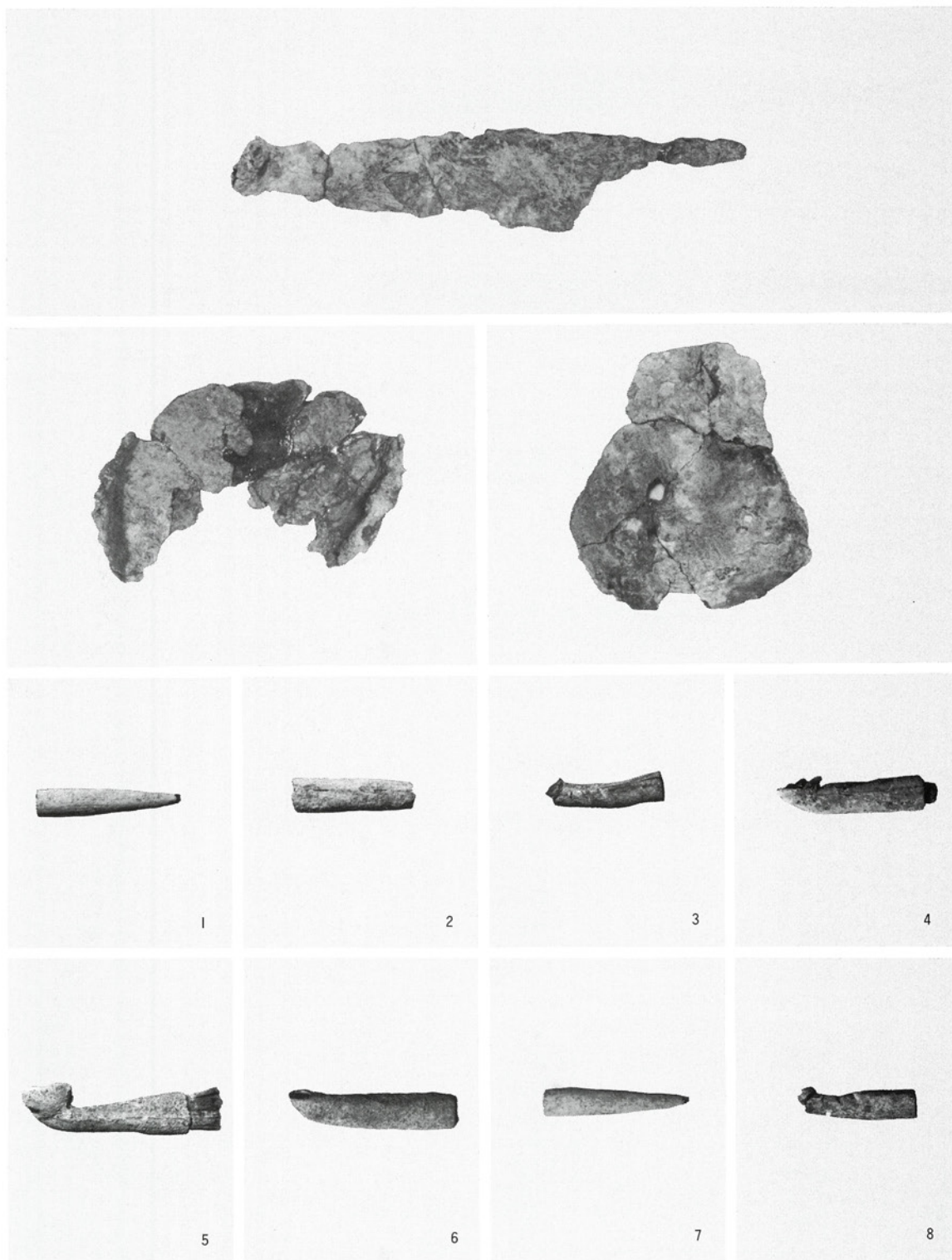


第 8・10・21・27・28・29・30調査区出土 石器

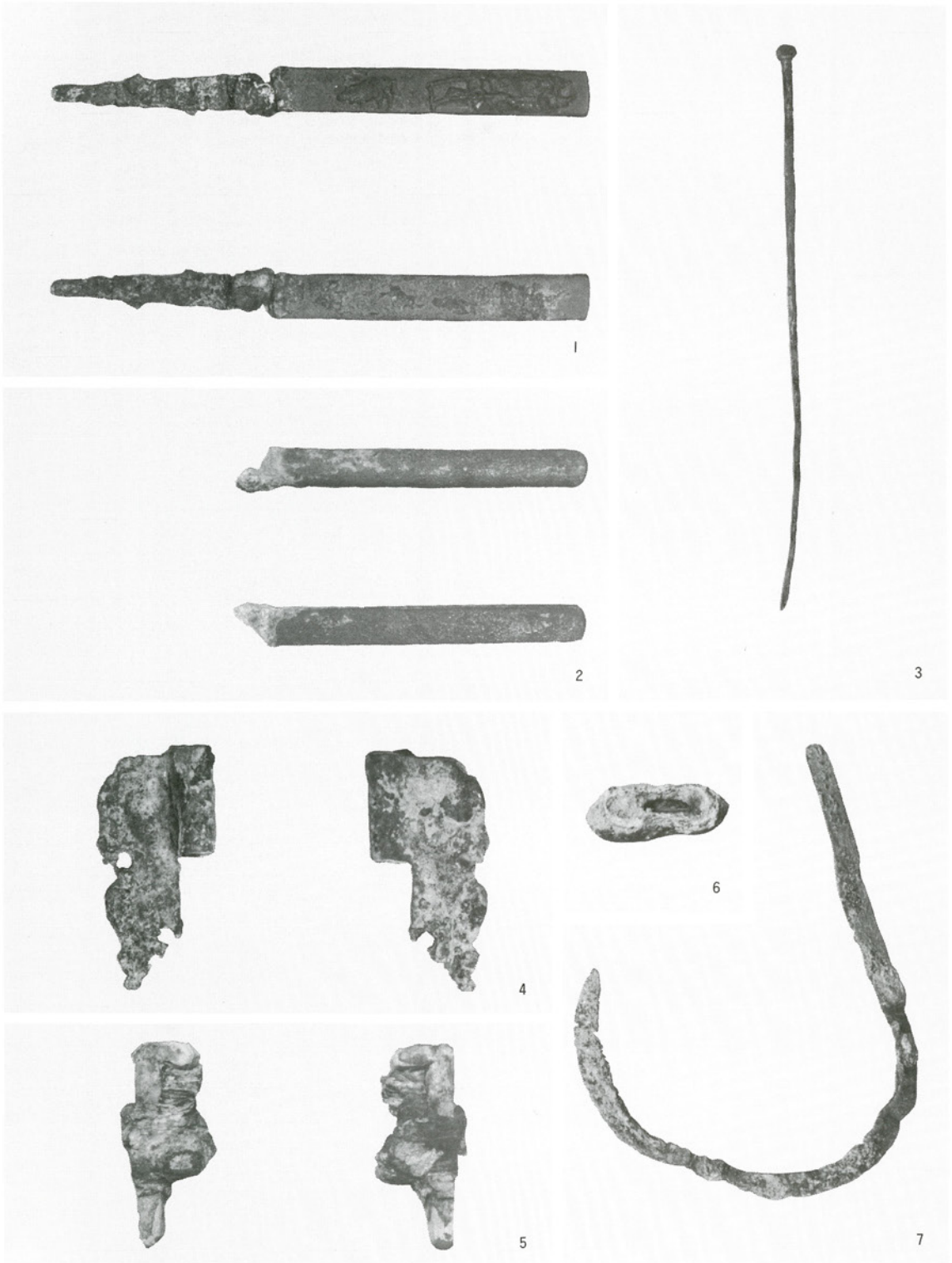
(8区 1, 10区 2, 21区 3~7, 27区10, 28区11~13, 29区14~24, 30区25~32)



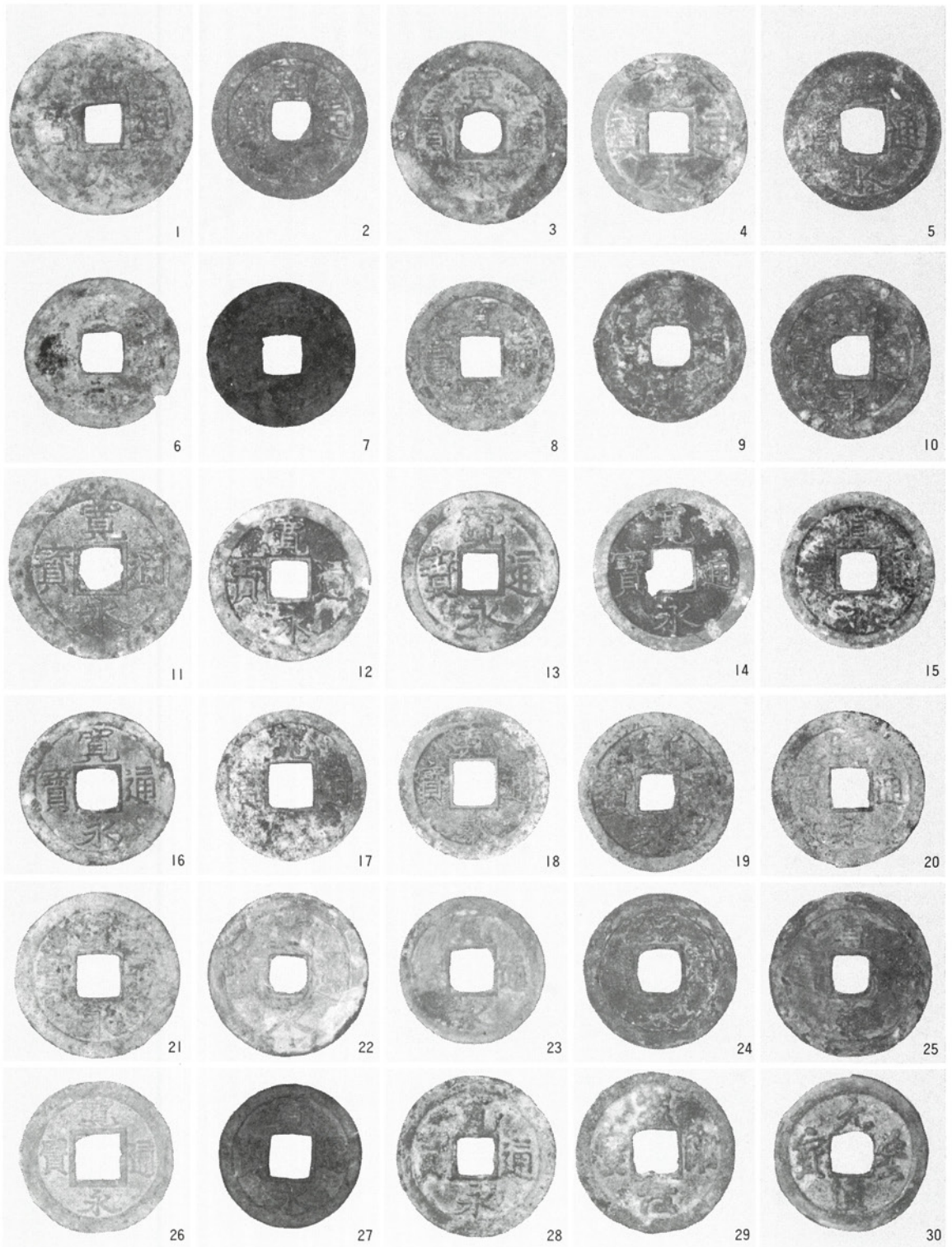
第21調査区大山祇神社出土（鳥居額1，狛犬2・3）



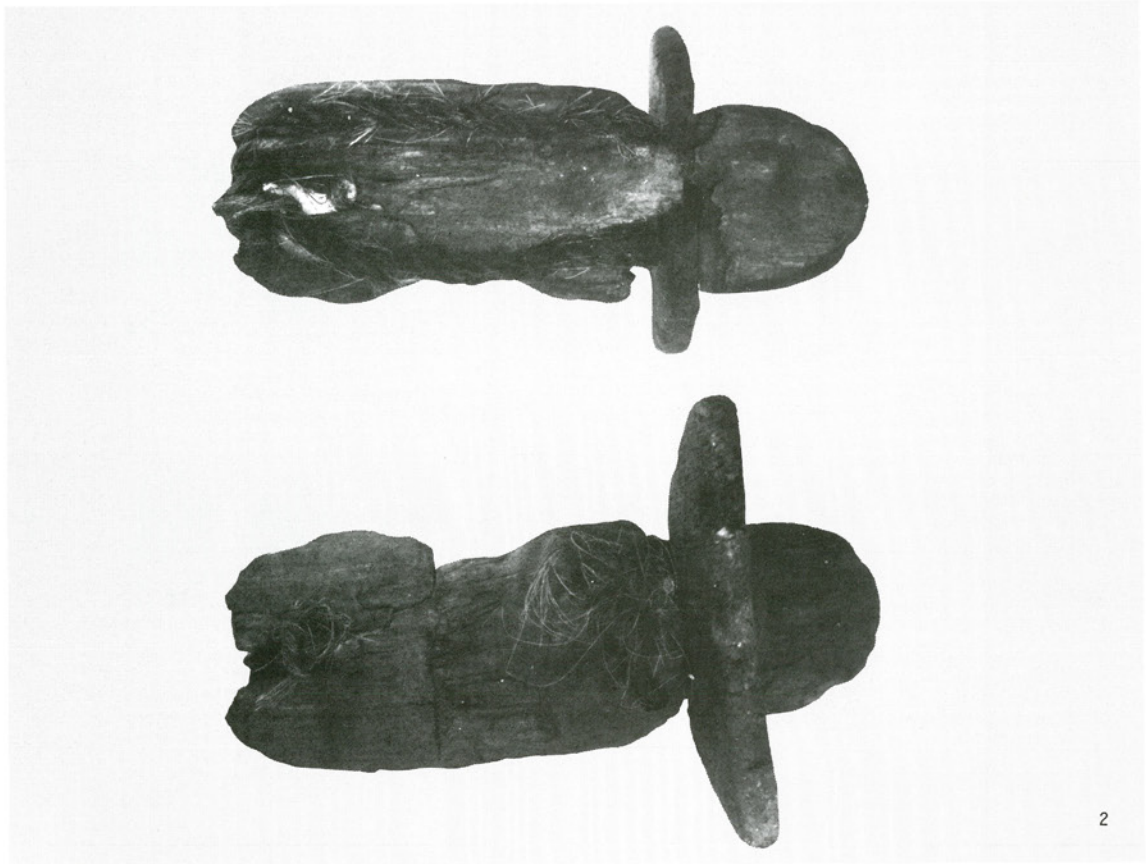
第21調査区出土 鉄製品・銅製品



第21調査区出土 鉄製品・銅製品（小柄1，火箸3，飾金具4，釘5，金具6）
第30調査区出土（小柄2）



第21調査区出土 銅銭



第21調査区出土 木製品（曲物1，下駄2）

徳島県文化財調査概報

昭和 57 年度

(1982)

発行 年月日	昭和 60 年 1 月 10 日
編集	徳島県教育委員会文化課
発行	徳島県教育委員会
印刷	(協) 徳島印刷センター